

茨城県教育財団文化財調査報告第335集

# 宮原前遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成23年3月

国土交通省常総国道事務所  
財団法人茨城県教育財団

みや はら まえ  
宮 原 前 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成23年3月

国土交通省常総国道事務所  
財団法人茨城県教育財団



宮原前遺跡全景(南西方向から)



第8号住居跡未焼成管状土錐出土状況

## 序

茨城県では、県土の均衡ある発展を念頭におきながら、地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めています。

その一環として国土交通省が整備する首都圏中央連絡自動車道は、首都高中央環状線などと一体になって、首都圏の骨格となる3環状9放射の道路ネットワークを形成し、東京都心部への交通の適切な分散導入と首都圏全体の道路交通の円滑化、首都圏の機能の再編成を図る上で極めて重要な役割を果たすものです。しかしながら、その事業予定地内には宮原前遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が国土交通省関東地方整備局常総国道事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成21年8月から平成22年1月までの6か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、宮原前遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化的向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省関東地方整備局常総国道事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、常総市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成23年3月

財團法人茨城県教育財團  
理事長 稲葉節生

## 例　　言

1 本書は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所の委託により、財団法人茨城県教育財團が平成21年度に発掘調査を実施した、茨城県常総市大生郷町香取前5812番地の1ほかに所在する宮原前遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

　　調査 平成21年8月1日～平成22年1月31日

　　整理 平成22年8月1日～平成23年3月31日

3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

　　首席調査員兼班長 成島一也

　　主任調査員 斎藤和浩

　　調査員 江原美奈子

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長樋村宣行のもと、主任調査員斎藤和浩が担当した。

5 土製品（未焼成・焼成の管状土錐）の元素分析は、茨城県工業技術センター窯業指導所に委託し、考察は付章として巻末に掲載した。

## 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = + 8,240 m, Y = + 10,720 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …、西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j、西から東へ 1, 2, 3, … 0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SB - 掘立柱建物跡 SD - 溝跡 SE - 井戸跡 SI - 壑穴住居跡 SK - 土坑

PG - ピット群

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 TP - 拓本記録土器 Q - 石器・石製品

土層 K - 搾乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 600 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・施釉  火床面

 窟部材・粘土範囲・黒色処理  柱痕

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 - - - 硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 現存値は( )を、推定値は〔 〕を付して示した。計測値の単位はcm, gで示した。

(2) 遺物観察表の備考欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 壑穴住居跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N - 10° - E)。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査経過	5
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 繩文時代の遺構と遺物	13
陥し穴	13
2 奈良時代の遺構と遺物	14
(1) 壊穴住居跡	14
(2) 掘立柱建物跡	65
(3) 連続壊穴遺構	70
(4) 土坑	74
3 平安時代の遺構と遺物	78
(1) 壊穴住居跡	78
(2) 掘立柱建物跡	108
(3) 土坑	115
4 中世の遺構と遺物	117
(1) 掘立柱建物跡	117
(2) 方形壊穴遺構	120
(3) 井戸跡	121
(4) 土坑	122
5 その他の遺構と遺物	124
(1) 井戸跡	124
(2) 土坑	126
(3) 溝跡	133
(4) ピット群	135
(5) 遺構外出土遺物	142
第4節 まとめ	147
付 章	
写真図版	PL 1~PL32
抄 錄	

# 宮原前遺跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

宮原前遺跡は、常総市大生郷町の西部、大生郷工業団地の南西約1kmに位置し、鬼怒川と飯沼川に挟まれた標高約20mの台地上に立地しています。今回の調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に先だって行いました。当遺跡が道路予定地内にあることから、遺跡の内容を図や写真に記録するために、茨城県教育財団が発掘調査を実施しました。



## 調査の内容

調査面積は16,216m<sup>2</sup>で、平成21年度に調査を行った結果、縄文時代の陥し穴や奈良時代（約1,300年前）の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、連結堅穴造構、平安時代（約1,000年前）の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、中世の方形堅穴造構や掘立柱建物跡などを確認し、長期間にわたって土地利用していたことが明らかとなりました。主な出土遺物として、土師器（壺・甕・瓶）、須恵器（壺・高台付壺・双耳壺・蓋・盤・鉢・甕・瓶）、土師質土器（小皿）、土製品（紡錘車・支脚・管状土錐・土玉）、石器（砥石・紡錘車）、鉄製品（刀子・鎌・鉤）などがあります。



西側上空から見た宮原前遺跡

## ～奈良時代から平安時代の住居跡～



地面を掘って作った竪穴住居跡

奈良・平安時代の一般的な住居跡です。北壁に竈が設けられ、4本の柱で上屋を支えます。南側には、出入り口に使用されたと考えられる穴が確認できます。床面は、人の生活によって固く締まっています。



奈良・平安時代の人々の台所「竈」

5世紀の終わり頃から、竈が住居の中に導入されました。竈は粘土で丈夫に作られ、甕や瓶を用いて煮炊を行っていました。竈の内側や底面は、火を受けて赤く硬化しています。

## ～特徴的な遺物の出土状況～



未焼成の管状土錘

第8号住居跡の床面から、未焼成の管状土錘が出土しました。管状土錘は、網のおもりとして使用されたと考えられています。この集落では、水田経営の他に、漁撈も重要な仕事として行われていたようです。



「成神」と墨書された壺

第10号住居跡の棚状施設から須恵器壺の底面に「成神」と墨書されたものが伏せられた状態で出土しました。竈に対するマツリが行われた可能性があります。

当遺跡では、土器の他に土製品や石器、金属製品も出土しました。糸を撚るために使用された紡錘車や農作業で使う鎌など、日常生活で使われるものが大半を占めています。

## ～宮原前遺跡の特徴的な建物・構造～



### 第1号連結豊穴遺構

茨城県で初めて確認された遺構です。1条の溝が2基の豊穴遺構を連結しています。豊穴遺構Aは、擂鉢状の構造で、南西コーナー部に粘土でスロープが作られていました。豊穴遺構Bは、底面一面に粘土が貼られており、水をためていたと考えられます。溝は、底面が硬化しており、人の往来が考えられます。建物同士が繋がっているということは、その空間内での移動が必要であったことを示しています。作業場と倉庫が一体になった遺構と思われ、地域環境面から推測すると「氷」を作っていた施設ではないかと考えられます。

### 竈の補強に使われた切石

当遺跡では、奈良・平安時代の住居跡が29軒確認されました。その中で、竈の補強材に切石（砂岩）を使用している住居跡が7軒ありました。一般的に竈の補強材には、土器が使われるが多く、切石の使用は県西地域では珍しいことです。第9・25号住居跡では、竈の焚口を切石で構築しています。切石は、遺跡の東約2kmにある鬼怒川の川底から採取してきた可能性も考えられ、当時の人々の行動範囲も想像することができます。



### 第1号掘立柱建物跡

奈良時代の倉庫と考えられる施設です。規則的に並んだ穴は柱を立てた穴で、集落で収穫した食糧等を保管していたと考えられます。約18畳の広さです。

## ～発掘された遺物～



奈良・平安時代の食器類

当遺跡から出土した遺物は、土師器・須恵器が大半を占めています。特に須恵器は完全な形で残っているものが多く、奈良・平安時代の人々の使用した食器の形がよくわかります。中には、<sup>とうかくとうぎや</sup>灯明皿として使用された須恵器の壊も確認できました。



漁撈に使用された土製品

未焼成の管状土錐をはじめ、焼成された管状土錐や土玉など、漁撈の道具として使用された土製品が数多く出土しました。集落内で土製品が作られた可能性が高く、今回は確認できませんでしたが、原料の粘土も周辺で調達できたものと思われます。

## 調査の成果

当遺跡は、奈良時代初めに計画的に集落が形成され、奈良時代の終わり頃に集落としての最盛期を迎えました。律令体制が崩壊するとともに、集落は衰退していき、当地での集落は終焉を迎えました。谷津田が入り組む地形や出土遺物などから、当集落では、水田経営の他に漁撈も行われていたことがわかりました。集落は5軒ほどで一つのグループを形成し、その中に中心的な役割を果たしたと思われる規模が大きい住居跡が各時期にごとに確認できました。住居の構造で特徴的なことは、竈の補強材に切石（砂岩）が使用されていたことがあげられます。砂岩の切石は鬼怒川の川底から採取されたと考えられ、このことからも川と密着した生活を送っていたことが想像できます。また、県内で初めての確認となる連結竪穴造構は全国的にもほとんど発掘事例がなく、その機能について様々な可能性が考えられますが、当遺跡の地理的環境などを考慮すると、当遺跡では氷製造・貯蔵施設として機能していたのかもしれません。

今回の発掘調査は遺跡の一部の調査で、集落の全容を明らかにすることはできませんでした。今後の調査や研究により、当集落の性格や県西地域における集落の様相がわかることが期待されます。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所は、常総市において一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業を進めている。

平成18年8月21日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成19年1月16・17日に現地踏査を、平成20年11月11～13日に試掘調査を実施し、宮原前遺跡の所在を確認した。

平成21年1月16日、茨城県教育委員会教育長は国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、事業地内に宮原前遺跡が所在すること、及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成21年1月29日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成21年2月24日、茨城県教育委員会教育長は現況保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成21年3月6日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成21年3月16日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、宮原前遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、あわせて調査機関として、財團法人茨城県教育財團を紹介した。

財團法人茨城県教育財團は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成21年8月1日から平成22年1月31日まで発掘調査を実施することになった。

## 第2節 調査経過

宮原前遺跡の調査経過については、その概要を表で記載する。

工程	平成21年					平成22年 1月
	8月	9月	10月	11月	12月	
調査準備 表土除去 遺構確認						
遺構調査						
遺物洗浄 注記 写真整理						
補足調査 撤収						

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

宮原前遺跡は、茨城県常総市大生郷町香取前 5812 番地の 1 ほかに所在している。

常総市は、関東平野のほぼ中央部、茨城県の南西部に位置している。市の東側を小貝川、中央部を鬼怒川、東仁速川、西側を飯沼川が南北に流れおり、またそれらに注ぐ支流が市域を縱横に流れている。市域の地形は、東部に低地が開け、西部に台地が発達している。東部低地は、鬼怒川・小貝川の氾濫原に堆積した標高 12 m 前後の沖積平野で、現在は豊かな水田地帯が広がっている。西部に位置する台地は、結城市から常総市にかけての結城台地と、利根川に平行して古河方面から取手市に伸びる猿島台地に分けられる。結城台地は、鬼怒川と飯沼川により開析された標高 20 ~ 24 m の平坦で比較的起伏の少ない台地で、猿島台地は、飯沼川と菅生沼や鬼怒川が横断している標高 15 ~ 20 m の平坦な台地である。また両台地は、細長く南に伸びており、一部に狹隘な谷頭があり組んでいる。

地質の構成は、沖積低地部と台地部では異なった地質構成を示し、沖積低地部では、河川堆積物である砂礫層が堆積し、小貝川や鬼怒川の氾濫時に形成された厚い泥炭層の堆積が見られる。台地部では洪積層に限られ、武蔵野段丘とみられる成田層群の上部成田層を基盤とし、河川の氾濫原に堆積した龍ヶ崎砂礫層、青灰色粘土の常総粘土層、関東ローム層の順に堆積している。

当遺跡は、常総市大生郷町の西部、大生郷工業団地の南西約 1km に位置し、標高約 20 m の谷津田が縦横に入り組む結城台地の縁辺部に立地している。調査前の現況は畑地である。

### 第2節 歴史的環境

蛇行して南流する鬼怒川と飯沼川に挟まれた標高約 20 m の台地上には、谷津田に面した縁辺部を中心に宮原前遺跡をはじめ多くの遺跡が確認されている。鬼怒川右岸地域は古代下総国岡田郡の中心地と考えられており<sup>1)</sup>。「馬場」「古間木(問木=牧)」など、官衙に関連するような地名も残されている。ここでは、当遺跡に関係する時代の周辺遺跡を中心に概要を述べる。

縄文時代の遺跡は、後期から晩期の遺物や骨角器が出土した大生郷貝塚を包括する飯沼川左岸の金戸遺跡(5)、前期と中期の集落跡が確認された大生郷遺跡<sup>2)</sup>(9)、飯沼川の支谷に面した築地遺跡(15)、鬼怒川右岸の台地に立地する大日遺跡(21)、貝柄山遺跡(31)などが確認されている。貝柄山遺跡は、1941 年に日本古代文化学会によって調査が行われ、前期の貝殻条紋土器やヤマトシジミを中心とする貝類が出土し、小貝塚群として確認されている<sup>3)</sup>。

古墳時代の集落は、縄文時代の遺跡と複合して確認される場合が多く、前・中期は河川にのぞむ沖積地や水田周辺の低台地周縁に多く確認され、後期になると丘陵上や谷津の周縁、台地の深遠部や山間部に分散している。遺跡としては、大生郷遺跡、甫袋遺跡(19)、香取遺跡(35)、大日遺跡などがある。

奈良・平安時代の当地域は、下総国岡田郡に属しており、下総国の国府は、現在の市川市国府台付近に置かれていたと考えられている。周辺の主な遺跡としては、奈良時代中期の集落跡が確認された大生郷遺跡<sup>4)</sup>、在地窯跡と推測される須恵器の使用が確認された上谷田遺跡<sup>5)</sup>。奈良・平安時代の土器が散布する甫袋遺跡、香

取り西遺跡〈7〉、久保遺跡〈16〉、馬場遺跡〈24〉などがあげられる。本跡から北に約4.5kmの国生地区内に国生本屋敷遺跡があり、1986年に旧石下町による発掘調査、1988年には国立歴史民俗博物館による2回の発掘調査歴がある。1986年の調査では、堅穴住居跡28軒のほか、方形に巡る断面箱築研状の大溝を確認し、「介」の墨書き土器や朱書きの土器などが出土している<sup>6)</sup>。1998年の調査では、大溝が古墳時代前期の豪族居館を囲繞する堀であることが確認された。また、7世紀後半の方形に巡る溝跡と掘立柱建物跡が確認され、初期官衙的な性格付けがなされている<sup>7)</sup>。この国生地区内には、下総国司桑原王が創建したとされる延喜式内社の桑原神社もあり、国生本屋敷遺跡の構造や出土遺物、周辺の地名などから岡田郡衛比定地とされている<sup>8)</sup>。10世纪以降は常總平氏を中心に、平将門の一族及び他氏族間の抗争の地となり、数多くの伝説を残している。

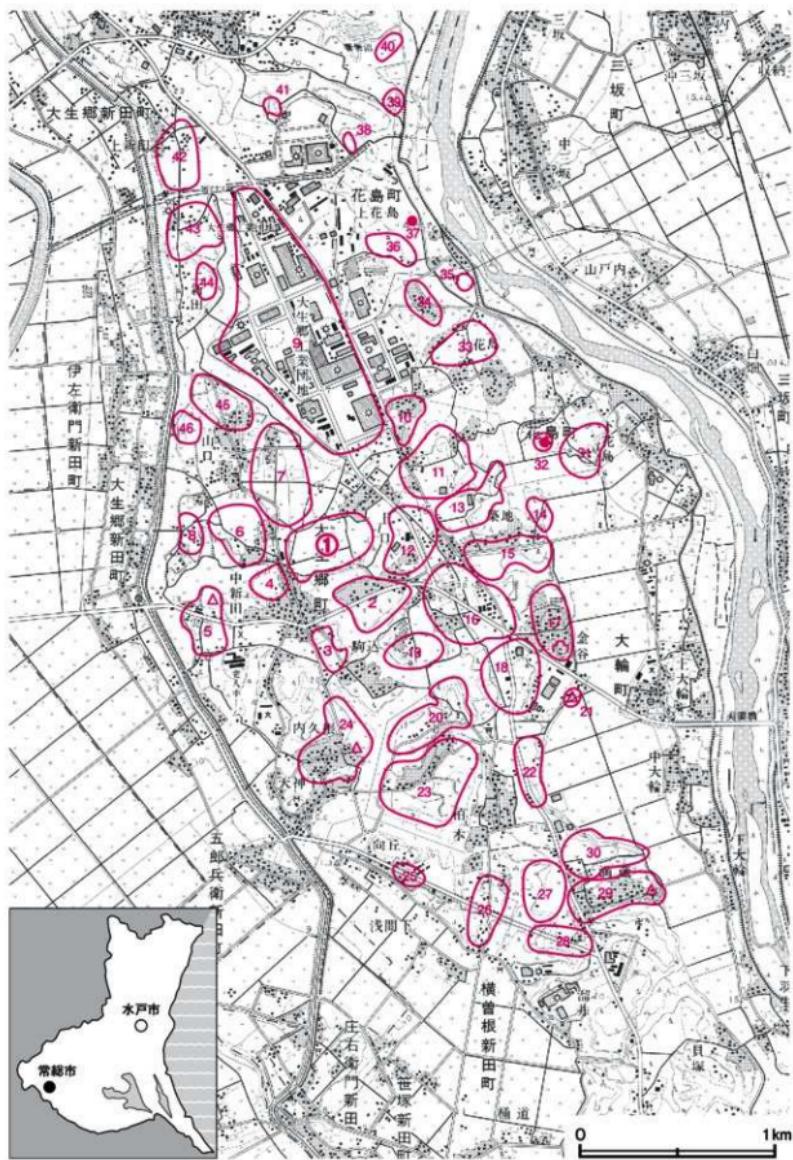
中世になると当地域は豊田荘となり、豊田氏の興亡に大きな影響を受けている。豊田氏は下妻・小栗・東条・鹿島氏等の常陸平氏一族とともに源頼朝の軍勢と抗争を繰り返すが、鎌倉幕府開府後は、御家人として存続している。戦国期には、小貝川西岸の微高地に築かれた豊田城を中心に小田氏と連携して支配を強めるが、その後下妻の多賀谷氏に滅ぼされる。関ヶ原合戦時に豊臣方についた多賀谷氏も領地を没収され、以後当地域は、徳川幕府の直轄地や旗本の領地となる。

#### 註

- 1) 水海道市史編さん委員会『水海道市史 上巻』水海道市 1984年3月
- 2) 板井二郎「大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書－大生郷遺跡－」『茨城県教育財団文化財調査報告書』 1981年9月
- 3) 江坂輝弥「貝柄山貝塚」『茨城県資料 考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年3月
- 4) 註2) 文献に同じ
- 5) 江原美奈子「上谷田遺跡 一般県道高崎坂東線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第319集 2009年3月
- 6) 川井正一他「国生本屋敷遺跡発掘調査報告書」『石下町史資料』第2集 石下町史編さん室 1987年3月
- 7) 阿部義平編「茨城県国生本屋敷遺跡発掘調査報告」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第129集 国立歴史民俗博物館 2006年3月
- 8) 註1) 文献に同じ

#### 参考文献

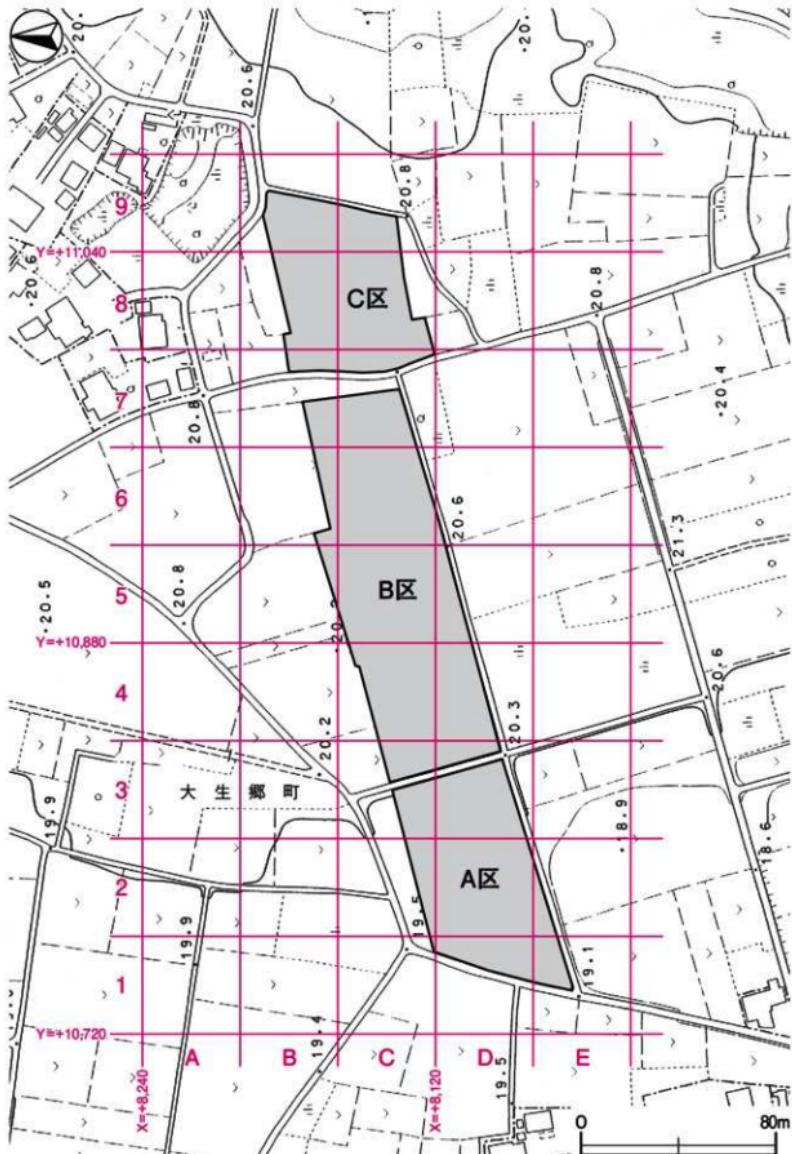
- 水海道市史編さん委員会『水海道市史 上巻』水海道市 1984年3月  
石下町史編さん委員会『石下町史』石下町 1988年3月



第1図 宮原前遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院25万分の1「水海道」「石下」）

表1 宮原前遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	宮原前遺跡	○		○	○	○	○	24	馬場遺跡	○		○	○	○	○	
2	中根遺跡	○		○	○			25	向山遺跡	○		○	○	○		
3	芝崎遺跡	○			○			26	入山遺跡	○		○	○			
4	中新田遺跡	○		○	○			27	安戸東遺跡	○			○			
5	金戸遺跡	○		○	○			28	満倉北遺跡	○		○	○			
6	四ツ谷遺跡	○		○	○			29	満藏遺跡	○		○	○			
7	香取西遺跡	○		○	○			30	古寺家遺跡	○						
8	六方遺跡	○		○	○			31	貝柄山遺跡	○		○	○			
9	大生郷遺跡	○		○	○			32	下花鳥古墳群			○				
10	大橋遺跡	○						33	葉師西遺跡	○		○	○			
11	高野台遺跡			○				34	鶴ヶ島遺跡			○	○			
12	大部堂遺跡	○		○	○			35	香取遺跡	○		○	○			
13	古間木遺跡	○			○			36	雉子尾前遺跡	○		○	○			
14	天神山遺跡	○		○	○			37	雉子尾遺跡	○		○	○			
15	築地遺跡	○	○		○	○		38	霜田向遺跡	○		○				
16	久保遺跡	○		○	○			39	天王原遺跡	○						
17	大輪陣屋跡	○			○		○	40	宮内遺跡	○		○				
18	桜下遺跡			○	○			41	松山向遺跡			○				
19	南袋遺跡	○		○	○			42	古間木前遺跡	○		○	○			
20	小野台遺跡	○		○	○			43	後中丸北遺跡	○		○	○			
21	大日遺跡	○		○				44	後中丸南遺跡	○						
22	大塚遺跡	○		○	○			45	前中丸遺跡	○		○	○			
23	柏木遺跡	○		○	○			46	宮内遺跡	○		○				



第2図 宮原前遺跡調査区設定図（常総市都市計画図 2,500 分の 1 から作成）

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

宮原前遺跡は、標高約20mの結城台地縁辺部に立地している。調査面積は16,216m<sup>2</sup>で、調査前の現況は畠地である。

今回の調査では、縄文時代の陥れ穴2基、奈良時代の竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡3棟、連結竪穴造構1基、土坑6基、平安時代の竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡5棟、土坑3基、中世の掘立柱建物跡2棟、方形竪穴造構1基、井戸跡1基、土坑1基、その他、時期不明の井戸跡3基、土坑45基、溝跡12条、ピット群5か所を確認し、縄文時代から中世までの複合遺跡であることがわかった。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に30箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器(深鉢)、土師器(壺・甕・瓶)、須恵器(壺・高台付壺・双耳壺・蓋・盤・鉢・甕・瓶)、土師質土器(小皿)、陶磁器(碗・皿)、土製品(紡錘車・支脚・管状土錐・土玉)、石器(砥石・紡錘車)、金属製品(刀子・鎌・鉤)などである。

### 第2節 基本層序

調査区の中央部(C4e1区)にテストピットを設定し、地表面から深さ25mまで掘り下げて基本層序の確認を行った(第3図)。土層は9層に分層でき、観察結果は以下のとおりである。

第1層は、暗褐色を呈する現耕作土である。ローム粒子・白色粒子を微量に含み、粘性は弱く、締まりは普通である。層厚は15~25cmである。

第2層は、明褐色を呈するソフトローム層への漸移層である。粘性・締まりともに普通である。層厚は10~18cmである。

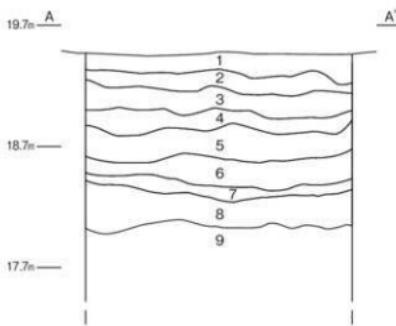
第3層は、明褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通である。層厚は14~22cmである。

第4層は、にぶい褐色を呈するハードローム層への漸移層である。粘性・締まりともに強い。層厚は8~24cmである。

第5層は、にぶい褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強い。層厚は16~28cmである。

第6層は、褐色を呈するハードローム層である。第II黒色帯の上部に相当すると考えられる。粘土粒子を微量に含み、粘性・締まりともに普通である。層厚は10~24cmである。

第7層は、褐色を呈するハードローム層である。第II黒色帯の下部に相当すると考えられる。粘土ブロックを少量含み、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は5~14cmである。



第3図 基本土層図

第8層は、褐色を呈するハードローム層である。白色粒子を微量に含み、粘性・縮まりとともに強い。層厚は23～40cmである。

第9層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・縮まりとともに強い。層厚は56cmまで確認したが、下層は未掘のため不明である。

なお、遺構は第3層の上面で確認できた。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 繩文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、陥し穴2基である。以下、遺構の特徴について記述する。

##### 陥し穴

###### 第1号陥し穴（第4図）

位置 調査区西部のC3g0区、標高19.6mの台地平坦部に位置している。

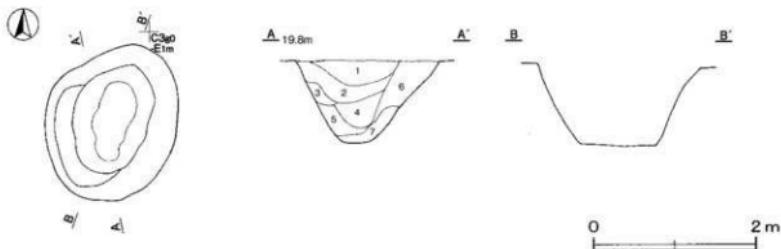
規模と形状 長径2.01m、短径1.65mの楕円形で、長径方向はN-20°-Eである。深さは100cmで、底面は幅が45cmと狭く、ほぼ平坦である。短径側の壁はV字状に立ち上がっている。

覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックを含み、不規則な堆積状況から埋め戻されている。

###### 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	5 暗褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量	6 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量	7 暗褐色 ロームブロック中量
4 暗褐色 ローム粒子少量	

所見 遺物が出土していないことから明確ではないが、規模や形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第4図 第1号陥し穴実測図

###### 第2号陥し穴（第5図）

位置 調査区東部のB8i4区、標高20mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.32m、短径1.33mの楕円形で、長径方向はN-63°-Eである。深さは102cmで、底面は幅が35cmと狭く、ほぼ平坦である。短径側の壁はV字状に立ち上がっている。

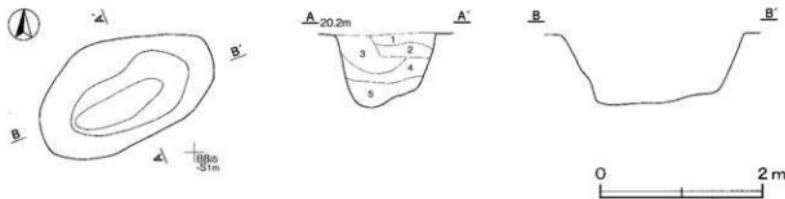
覆土 5層に分層できる。各層にロームブロックを含み、不規則な堆積状況から埋め戻されている。

###### 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量	5 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量	

遺物出土状況 混入した土師器壺片1点が出土しているが、細片のため図示できない。

所見 伴う遺物はないが、規模や形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第5図 第2号陥し穴実測図

表2 繩文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規格		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	C3g0	N-20°-E	椭円形	2.01×1.65	100	平坦	外傾	人骨	-	
2	B8H	N-65°-E	椭円形	2.32×1.33	102	平坦	外傾	人骨	-	

## 2 奈良時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡3棟、連結竪穴遺構1基、土坑6基である。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

### (1) 竪穴住居跡

#### 第1号住居跡(第6・7図)

位置 調査区西部のC3g区、標高19.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 一辺3.30mの方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は55~68cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロック・炭化粒子を含む暗褐色土とローム粒子・焼土粒子含むにぶい黄褐色土を7~20cmほど埋め構築されている。

竪 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで94cmで、燃焼部幅は47cmである。袖部は、床面上に砂質粘土ブロック、白色粘土粒子を主体とする第9・10層を積み上げて構築されている。右袖部は、壁の一部を掘り残し、砂質粘土ブロックを貼り付けている。火床部は床面を6cmほど皿状に掘り込み、ローム粒子・焼土粒子を含んだ第11・12層を埋土して構築されており、火床面は、赤変硬化している。煙道部は壁外に10cm掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。第1~3層は、天井部の崩落土層である。

#### 遺土層解説

1	灰	褐	色	砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック中量、炭化粒子少量	7	褐	色	ローム粒子多量
2	灰	褐	色	砂質粘土粒子多量、焼土ブロック中量、炭化材微量	8	褐	色	ロームブロック・粘土粒子中量、炭化粒子微量
3	灰	褐	色	粘土粒子多量、炭化材少量、ローム粒子・焼土粒子微量	9	灰	褐	砂質粘土ブロック・焼土粒子多量、白色粘土粒子微量
4	暗赤	褐	色	焼土ブロック多量、粘土粒子少量、炭化材微量	10	灰	褐	砂質粘土ブロック多量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量
5	暗赤	褐	色	焼土ブロック・粘土粒子多量	11	褐	色	燒土粒子微量
6	暗赤	褐	色	焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子微量	12	褐	色	ローム粒子・焼土粒子微量

ピット 2か所。P1・P2は深さ7~18cmで、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

## ピット土層解説

1 噴 白 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

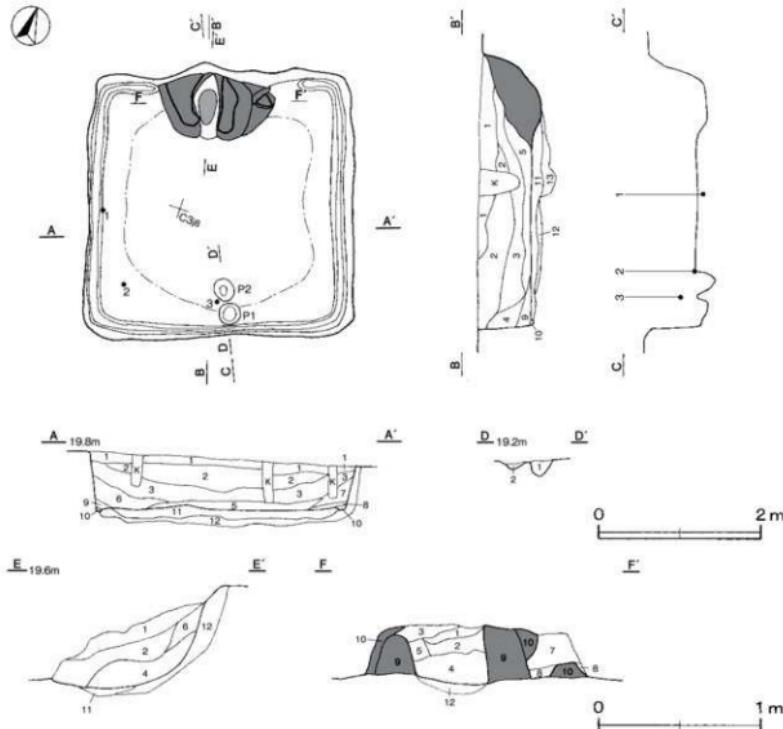
2 噴 白 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

**覆土** 10層に分層できる。各層にロームブロックを含んでいるが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積とみられる。第11～13層は、貼床の構築土である。

## 土層解説

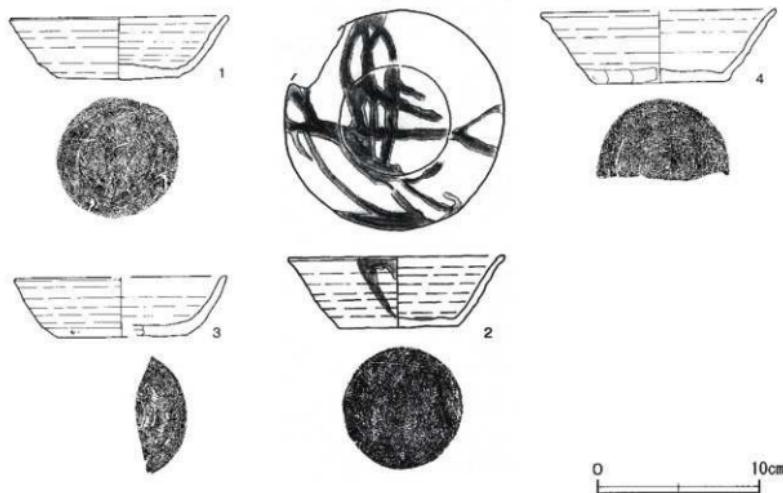
- |   |   |   |   |                            |    |     |     |         |                            |
|---|---|---|---|----------------------------|----|-----|-----|---------|----------------------------|
| 1 | 噴 | 褐 | 色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量      | 8  | 褐   | 色   | ローム粒子多量 |                            |
| 2 | 噴 | 褐 | 色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量        | 9  | 黒   | 褐   | 色       | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量      |
| 3 | 噴 | 褐 | 色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量      | 10 | 噴   | 白   | 色       | ロームブロック少量、炭化粒子微量           |
| 4 | 噴 | 褐 | 色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量             | 11 | 噴   | 褐   | 色       | ロームブロック中量、炭化粒子微量           |
| 5 | 黒 | 褐 | 色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量      | 12 | にふい | 黄褐色 | 色       | ローム粒子、焼土粒子微量               |
| 6 | 噴 | 褐 | 色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 13 | 噴   | 褐   | 色       | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 7 | 黒 | 褐 | 色 | ローム粒子少量                    |    |     |     |         |                            |

**遺物出土状況** 土器器片106点（坏6、高台付坏1、甕類99）、須恵器片44点（坏33、蓋1、甕類10）が南部を中心に出土している。また、流れ込んだ繩文土器片1点（深鉢）も出土している。1は壁溝の覆土中、2は南西部の床面からそれぞれ出土しており、廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。3は南部の覆土中層、4は覆土中からそれぞれ出土している。



第6図 第1号住居跡実測図

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 滋	燒成	手 法 の 特 殊 は か	出土位置	備 考
1	須恵器	环	13.2	4.0	7.4	黄石・白色斜状物	灰	良好	底部多方向の手持ちへラ削り	壁溝覆土中	100% PL19
2	須恵器	环	13.3	4.4	7.3	黄石・石英・赤色 粒子	黄灰	良好	底部多方向の手持ちへラ削り・外・内面欠擦有り	床面	90% PL19
3	須恵器	环	[128]	3.8	[8.1]	黄石・網織	灰	良好	体部下端・底部回転へラ削り	覆土中層	40%
4	須恵器	环	[142]	4.5	8.0	黄石・赤色粒子	橙	不良	体部下端手持ちへラ削り・底部回転へラ削り	覆土中	30%

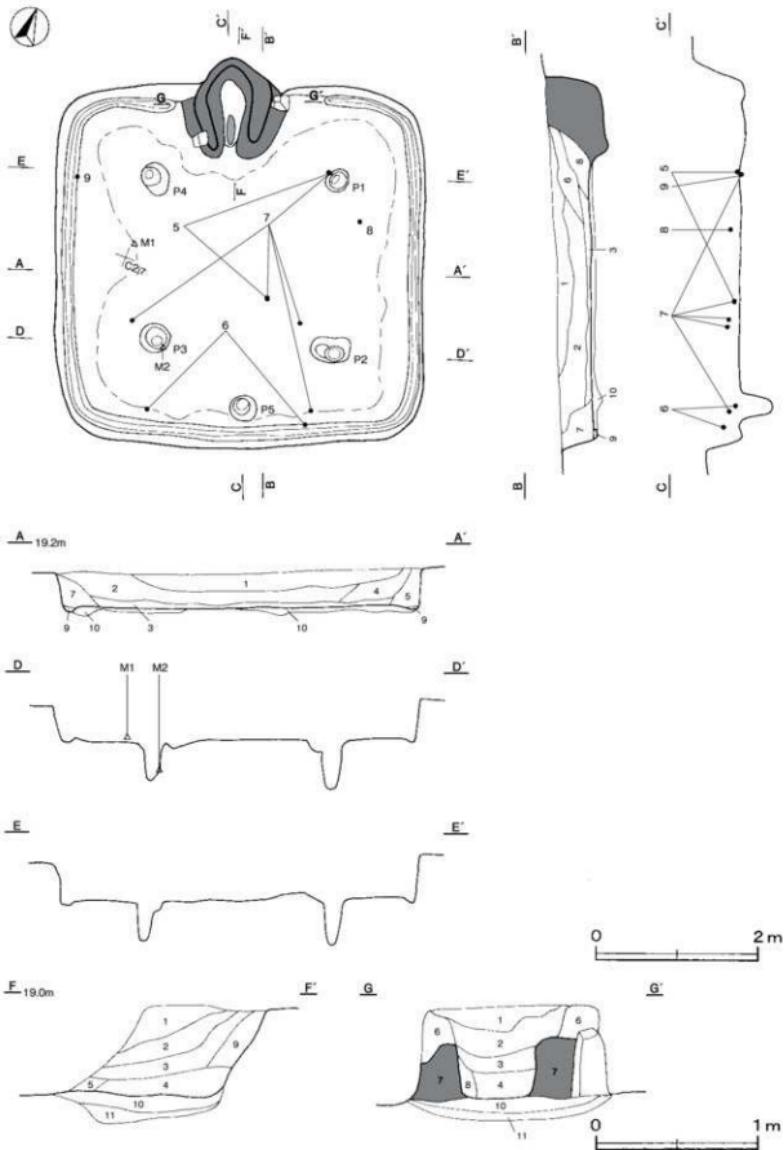
## 第2号住居跡（第8・9図）

位置 調査区西部のC217区、標高19.0mの台地平坦部に位置している。

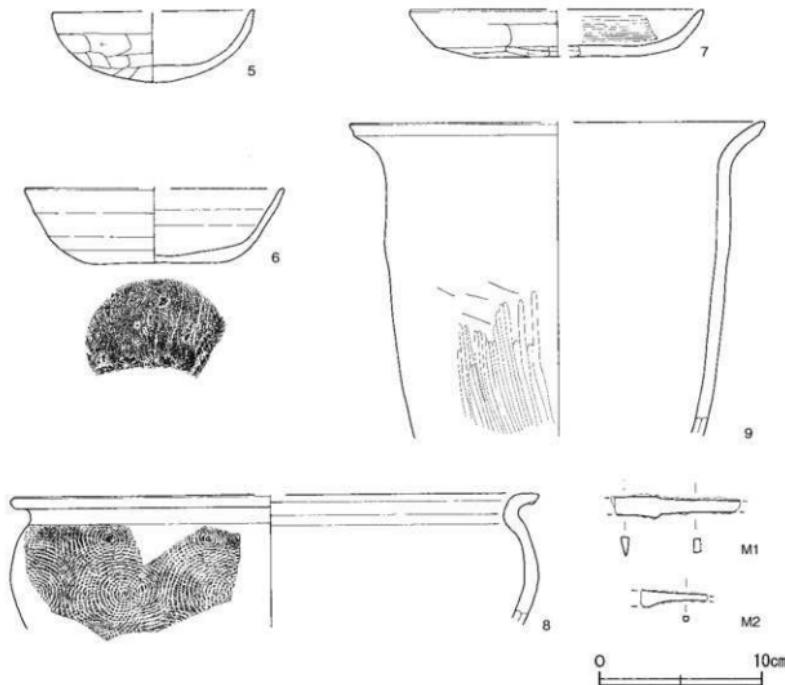
規模と形状 長軸4.56m、短軸4.42mの方形で、主軸方向はN-19°-Wである。壁高は40~54cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土を4~13cmほど埋めて構築されている。北東部に窓の構築材と考えられる砂質粘土ブロックが、15×40cmの範囲で確認できた。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで120cmで、燃焼部幅は28cmである。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第7層を積み上げて構築されている。左袖前部と右袖後部の外側に角柱状の切石（砂岩）が補強材として使用されている。火床部は床面とはほぼ同じ高さで、ロームブロックを含んだ第10~11層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に28cm掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。第1・2層は、天井部の崩落土層である。



第8図 第2号住居跡実測図



第9図 第2号住居跡出土遺物実測図

**遺土層解説**

- |                                       |                                  |
|---------------------------------------|----------------------------------|
| 1 細 細 色 ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子少量         | 6 にい青褐色 焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量      |
| 2 灰 黃褐色 砂質粘土粒子中量、炭化粒子少量、粘土粒子微量        | 7 灰 黄褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 にい青褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 8 灰 黄褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、砂質粘土ブロック少量   |
| 4 灰 黄褐色 焼土ブロック・炭化物中量                  | 9 細 細 色 焼土粒子・炭化粒子微量              |
| 5 細 細 色 焼土ブロック少量、砂質粘土粒子微量             | 10 細 細 色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子微量 |
|                                       | 11 細 細 色 ロームブロック中量               |

**ピット** 5か所。P 1～P 4は深さ44～54cmで、配置から主柱穴である。P 5は深さ40cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 9層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第10層は、貼床の構築土である。

**土層解説**

- |                          |                                |
|--------------------------|--------------------------------|
| 1 細 細 色 ローム粒子少量          | 6 細 細 色 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量  |
| 2 黒 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子微量     | 7 にい青褐色 ロームブロック中量              |
| 3 にい青褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 | 8 灰 黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量     |
| 4 細 細 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 9 細 細 色 ローム粒子微量                |
| 5 細 細 色 炭化粒子少量、ローム粒子微量   | 10 黒 黑褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

**遺物出土状況** 土師器片110点(环16, 壺類93, 梵1), 須恵器片11点(环9, 盖1, 壺1), 鉄製品2点(刀子)が出土している。9は西部の床面, 8は東部, M1は西部の覆土下層, M2はピット3の覆土下層から

それぞれ出土している。5は北東部と中央部の覆土下層から出土した破片、6は南西部の覆土下層と南部の覆土中層から出土した破片、7は南部の覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。いずれも廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。

第2号住居跡出土遺物観察表（第9図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 満	焼成	手 法 の 特 標 は か	出土位置	備 考
5	土師器	环	[124]	4.4	—	長石・石英・雲母・赤褐色子	棕	普通	体部外側へラ削り 内面ナデ	覆土下層	20% PL19
6	粗造器	环	[15.8]	4.7	[9.0]	長石・雲母	灰黄	普通	底部一方向のへラ削り	覆土下層・中層	50% PL19
7	土師器	瓶	[18.0]	(2.9)	[14.8]	長石・石英・赤色 粒子	棕	普通	体部外側へラ削り 内面擦殺のへラ削り	覆土中層	30% PL21
8	粗造器	瓶	[32.2]	(8.2)	—	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外側同じく文のみ叩き 内面ハラナデ	覆土下層	10%
9	土師器	瓶	[25.4]	(19.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい棕	普通	体部下手へラ削り 内面ハラナデ	床面	20%

番号	部 様	長 S	幅 S	厚 S	重量	材 料	特 標	出土位置	備 考
M1	刀子	(8.0)	1.5	0.5	(8.1)	鐵	刃部・茎部欠損 両側 内刃部面三角形 茎部断面長方形	覆土下層	PL31
M2	刀子±	(4.1)	1.0	0.4	(2.5)	鐵	刃部・茎部欠損 茎部断面長方形	P3 覆土下層	

第3号住居跡（第10・11図）

**位置** 調査区西部のD3a3区、標高19.4mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 一辺4.50mの方形で、主軸方向はN-22°-Wである。壁高は40~50cmで、ほぼ直立している。

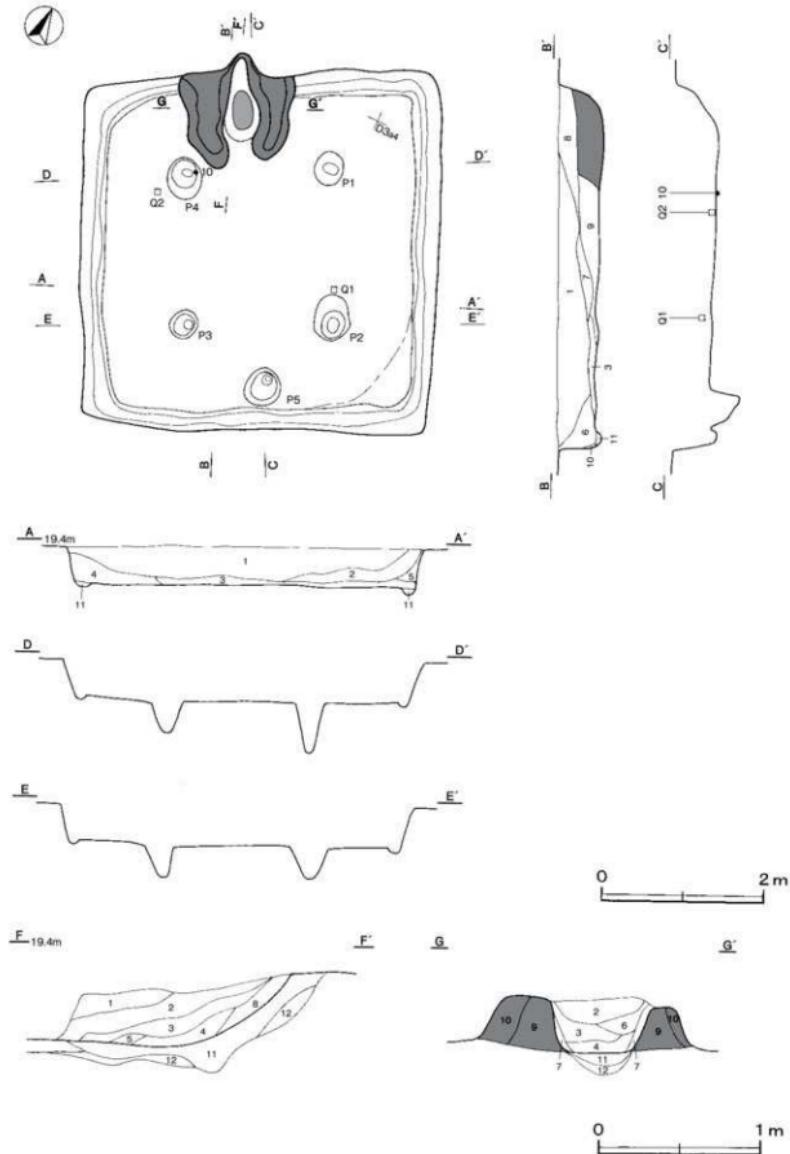
**床** ほぼ平坦な貼床で、南東コーナー部を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、4隅を土坑状に13~22cm、それ以外の部分を5~9cmほど掘り込み、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を埋め戻して構築されている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで135cmで、燃焼部幅は46cmである。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第9・10層を積み上げて構築されており、内側は赤変している。火床部は床面を若干掘り込み、ロームブロックを含んだ第11・12層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に28cm掘り込まれ、火床面からほぼ直立しており、内側は赤変している。第2層は、天井部の崩落土層である。

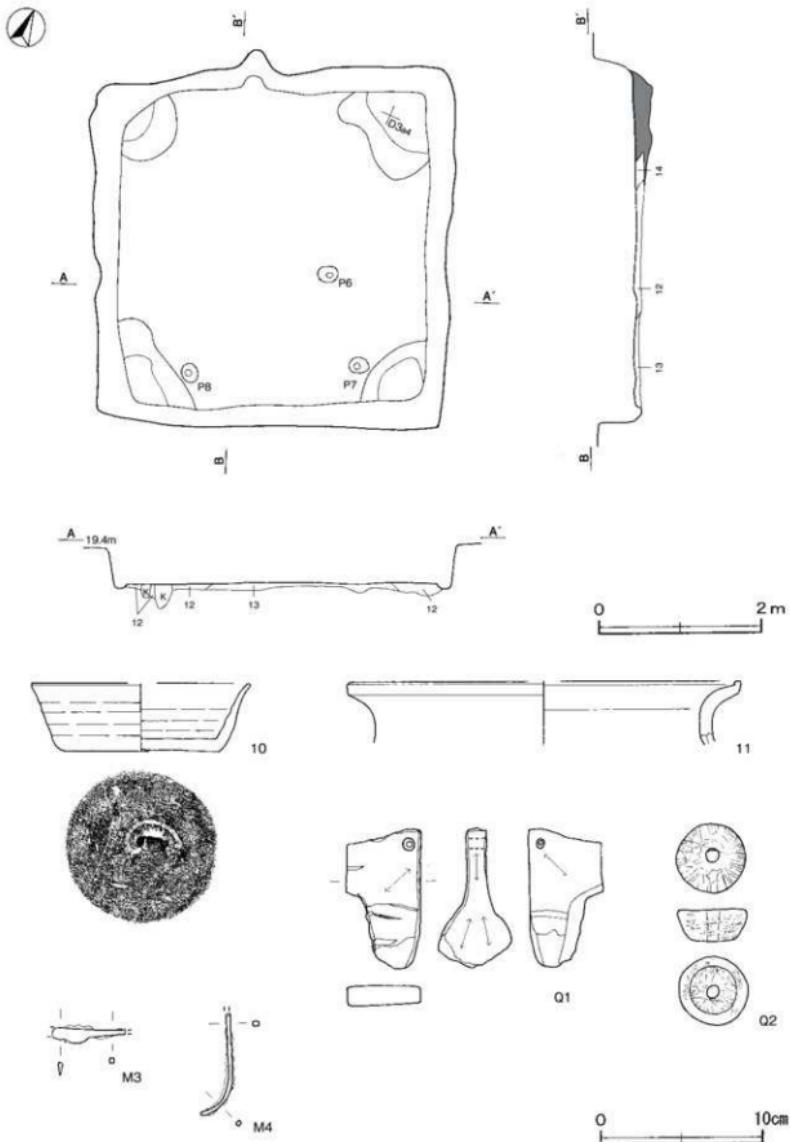
#### 竈土層解説

1	暗 棕 色	炭化物、ローム粒子、焼土粒子、砂質粘土粒子少量	7	暗 棕 色	燒土ブロック・砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
2	暗 棕 色	白色粘土ブロック少量、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子、砂質粘土粒子少量	8	にぶい赤褐色	燒土ブロック多量、砂質粘土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量
3	暗 赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	9	にぶい褐色	砂質粘土ブロック多量、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量
4	にぶい赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子、砂質粘土粒子少量、炭化物微量	10	にぶい褐色	砂質粘土ブロック多量、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量
5	暗 棕 色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量	11	暗 棕 色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物、砂質粘土粒子中量
6	暗 棕 色	焼土粒子、砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	12	暗 棕 色	ローム粒子多量、燒土粒子、炭化粒子微量

**ピット** 8か所。P1~P4は深さ33~60cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ30cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P6~P8が南壁近くの床下から確認されたが、性格不明である。



第10図 第3号住居跡実測図



第11図 第3号住居跡・出土遺物実測図

**覆土** 11層に分層できる。各層にロームブロックを含んでいるが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第12～14層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8	暗褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	9	黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10	暗褐色	ローム粒子多量
4	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	11	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック中量	12	黒褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
6	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	13	暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
7	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	14	黒褐色	ロームブロック多量

**遺物出土状況** 土器器片253点(坏25、甕類228)、須恵器片29点(坏27、甕類2)、石製品2点(砥石、紡錘車)。鉄製品2点(刀子、鉤カ)が床面から覆土下層にかけて、散在した状態で出土している。10・Q2は西部の床面、Q1は中央部の覆土下層からそれぞれ出土しており、廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。11・M3・M4は、覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。

第3号住居跡出土遺物観察表(第11図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
10	須恵器	坏	[13.3]	42	95	長石・石英・雲母	灰青	普通	底部剥離ハラ切り痕を残す一向向の手持ちヘウ崩り	床面	75% PL19
11	土師器	甕	[24.1]	[39]	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	において	普通	内面ヘナナデ	覆土中	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q1	砥石	8.5	4.6	4.5	108.9	矽灰岩	砥面3面のうち1面に溝状の研磨痕有り	他は鏡面	横げ砥石	覆土下層	PL30
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q2	胡錦車	42	20	0.8	54.1	鈷鉄	全面研磨	上・下面に織目状の縫合線		床面	PL30
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
M3	刀子	[4.6]	1.0	0.3	(3.18)	鉄	刃部・茎部欠損	刃部断面三角形	茎部断面長方形	覆土中	
M4	鉤#	[6.3]	0.4	0.3	(3.90)	鉄	解説板	刃部欠損	断面方形	覆土中	PL32

第6号住居跡(第12・13図)

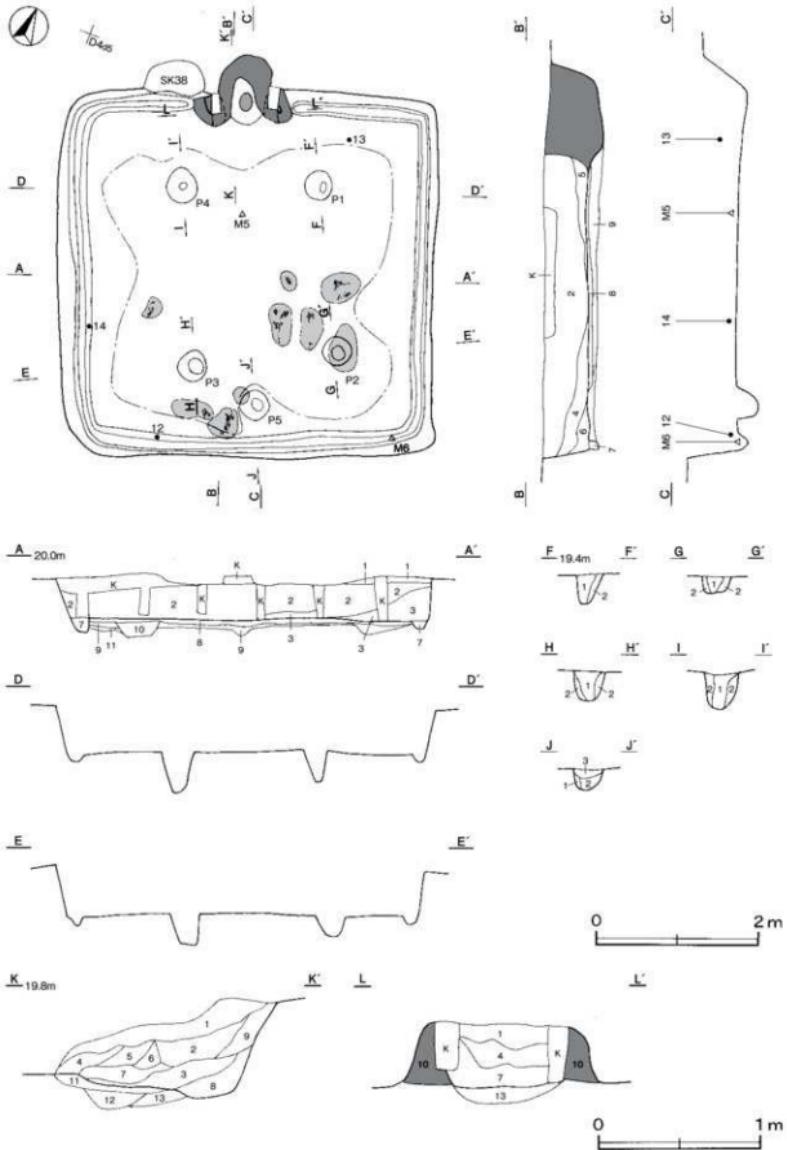
**位置** 調査区中央部のD-4d5区、標高19.8mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第38号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.70m、短軸4.52mの方形で、主軸方向はN-22°-Wである。壁高は54～62cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦な貼床で、縁際を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロックを含むにぶい黄褐色土を10～15cmほど埋めて構築されている。中央から南部を中心に焼土塊や炭化材が床面に点在し、南部の床面の一部が赤変している。

**窓** 北壁中央部に付設されている。搅乱を受けているため遺存状況は悪く、規模は焚口部から煙道部まで88cmで、煙道部幅は53cmと推定される。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを中心とする第10層を積み上げて構築されている。火床部は床面を8cmほど掘り込み、ロームブロック・焼土粒子を含んだ第11・12層を埋土



第12図 第6号住居跡実測図

して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に39cm掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。第2・5・9層は、天井部の崩落土層である。

#### 地層解説

1 黒褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量	6 單褐色	ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子、砂質粘土粒子微量
2 黒褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、ローム粒子、炭化粒子微量	7 單赤褐色	燒土粒子少量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
3 單赤褐色	焼土粒子多量、炭化物少量、ローム粒子、砂質粘土粒子微量	8 橙褐色	燒土粒子少量、炭化粒子、砂質粘土粒子、炭化粒子微量
4 黑褐色	ロームブロック少量、焼土粒子、砂質粘土粒子微量	9 灰褐色	砂質粘土ブロック中量、燒土粒子、炭化粒子少量
5 單褐色	砂質粘土ブロック中量、燒土粒子、炭化粒子微量	10 にふい青褐色	ロームブロック多量、燒土粒子、炭化粒子微量
		11 にふい青褐色	ローム粒子、燒土粒子多量、ローム粒子、炭化粒子微量
		12 單褐色	燒土粒子少量、ローム粒子、炭化粒子微量
		13 單褐色	燒土ブロック、炭化粒子微量

**ピット** 5か所。P 1～P 4は深さ22～43cmで、配置から主柱穴である。P 5は深さ27cmで、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

#### ピット地層解説

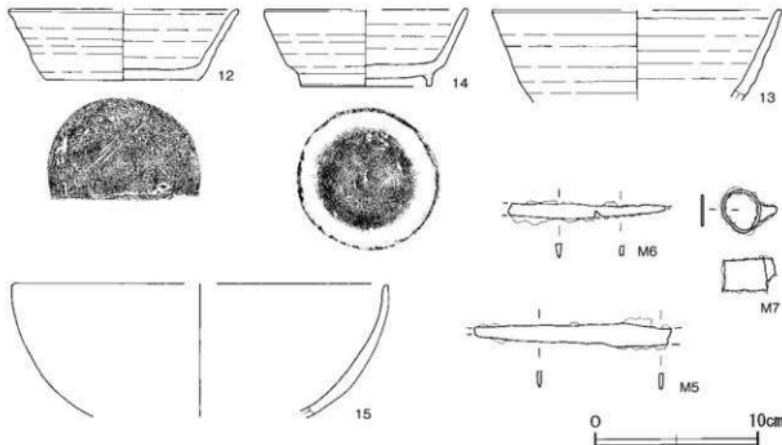
1 單褐色	ロームブロック少量	3 單褐色	ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量
2 にふい青褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		

**覆土** 7層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第8～11層は、貼土の構築土である。

#### 土層解説

1 單褐色	ローム粒子、焼土粒子微量	7 單褐色	ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量
2 單褐色	ロームブロック、焼土ブロック少量	8 にふい青褐色	ロームブロック中量、燒土粒子微量
3 單褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量	9 單褐色	ロームブロック少量
4 單褐色	ロームブロック中量、砂質粘土粒子微量	10 單褐色	ロームブロック少量、燒土粒子、炭化粒子微量
5 單褐色	ローム粒子、焼土粒子、砂質粘土粒子少量	11 單褐色	ロームブロック少量
6 單褐色	ローム粒子少量、燒土粒子微量		

**遺物出土状況** 土器器片312点（坏26、甕類286）、須恵器片192点（坏140、椀1、高台付坏4、仏鉢1、蓋8、甕類38）、土製品3点（管状土錐）、鐵製品3点（刀子2、環状金具1）が、中央部から南部の覆土下層から中層を中心に出土している。また、流れ込んだ織文土器片4点（深鉢）も出土している。M6は壁溝の覆土中、12は南部、14は西部、M5は中央部の覆土下層、13は北部の覆土中層からそれぞれ出土している。15・M7は、覆土中からそれぞれ出土している。



第13図 第6号住居跡出土遺物実測図

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。床面が焼けており、焼土塊が点在していることから焼失住居と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
12	須恵器	环	[14.0]	4.4	9.4	長石・石英・赤色 粒子	江戸の黄	普通	底部一方向の手持ちハラ削り	覆土下層	50% PL19
13	須恵器	瓶	[17.8]	[5.6]	—	長石・石英・白色 封状物	灰	普通	ロクロ成形	覆土中層	30%
14	須恵器	高台付环	[12.4]	4.8	8.0	長石・石英	灰黄	底部回転ハラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	30% PL19	
15	須恵器	弦鉢	[23.0]	[8.2]	—	長石・石英	灰白	普通	外・内面ロクロ成形	覆土中	20% PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M5	刀子	(12.1)	1.5	0.3	(35.0)	鉄	刃部・茎部欠損 背闊 刃部断面三角形	覆土下層	PL31
M6	刀子	(9.6)	1.0	0.3	(67.5)	鉄	刃部・茎部欠損 芳部断面三角形 茎部断面長方形	厚覆土中	PL31
M7	環状金具	(20)	3.3	0.2	(225)	鉄	断面長方形 リング状	覆土中	PL32

第7号住居跡（第14図）

**位置** 調査区北部のC4e3区、標高19.7mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 北部が調査区域外に延びているため、東西軸は3.60mで、南北軸は2.24mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定され、主軸方向はN-16°-Wである。壁高は66~68cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められているが北半部の範囲は不明である。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロックを含む暗褐色土を10cmほど埋めて構築されている。中央部の床面上に焼土塊を確認したが、床面は赤変していない。

**ピット** 6か所。P1・P2は深さ16~19cmで、配置から主柱穴である。P3は深さ25cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P4~P6が南壁近くの床下から確認されたが、性格不明である。

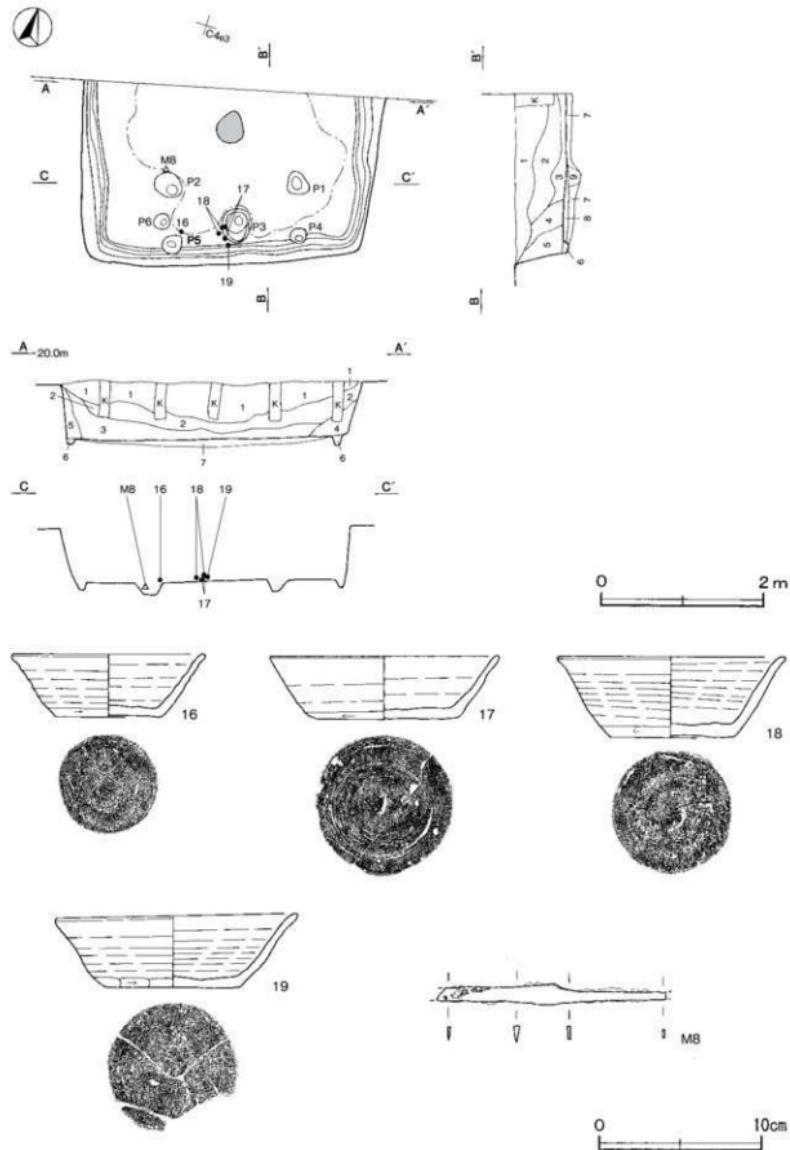
**覆土** 6層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第7~9層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	6	暗褐色	ローム粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	にじむ黄褐色	ロームブロック中量
3	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	8	暗褐色	ロームブロック少量
4	にじむ黄褐色	ローム粒子少量	9	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
5	褐色	ローム粒子微量			

**遺物出土状況** 土師器片45点（坏2、壺類43）、須恵器片30点（坏25、壺4、瓶1）、鉄製品1点（刀子）が南壁際を中心に出土している。また、流れ込んだ繩文土器片1点（深鉢）も出土している。M8は南部の床面、16・18・19は、南部の覆土下層からそれぞれ出土している。17は、南部の床面と覆土下層から出土した破片が接合したものである。いずれも廃施設早い段階で廃棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第14図 第7号住居跡・出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種類	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	出土位置	備考
16	須恵器	环	11.7	4.4	6.6	灰石・石英・白色 鉄鉱物	黄灰	普通	体部下端回転へラ削り 底部多方向の手持ちへラ削り 0.底部「×」へラ削り	覆土下層	95% PL19
17	須恵器	环	14.0	4.0	8.9	灰石・石英・黒鐵	に赤い貴重	不良	体部下端回転へラ削り 底部回転へラ削り	覆土下層	90% PL19
18	須恵器	环	14.0	5.0	7.6	灰石・石英	灰黄	普通	体部下端回転へラ削り 底部回転へラ削り 破壊なし	覆土下層	80% PL19
19	須恵器	环	14.7	4.6	8.0	灰石	青白	普通	体部下端手持ちへラ削り 底部回転へラ削り	覆土下層	60% PL20

番号	部種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M8	刀子	(141)	1.4	0.4	(10.5)	鉄	刃部・茎部欠損 四周 刃部断面三角形 茎部断面長方形	床面	PL21

第8号住居跡（第15・16図）

**位置** 調査区中央部のC4F5区、標高19.6mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸4.00m、短軸3.54mの長方形で、主軸方向はN-23°-Wである。壁高は52~60cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで107cmで、燃焼部幅は49cmである。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第10層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に30cm掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。第4層は、天井部の崩落土層である。

#### 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量	砂質粘土粒子微量	7 黒褐色	燒土ブロック少量	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
2 黒褐色	砂質粘土ブロック中量	ロームブロック少量	8 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	
3 單褐色	ロームブロック少量	砂質粘土粒子微量	9 黒褐色	燒土ブロック少量	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4 灰褐色	砂質粘土ブロック多量	炭化粒子・燒土粒子微量	10 灰褐色	砂質粘土ブロック多量	ロームブロック・燒土ブロック中量
5 暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量				
6 に赤い褐色	砂質粘土ブロック多量	燒土ブロック・炭化粒子微量			

**ピット** 2か所。P1は深さ26cm、P2は深さ7cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

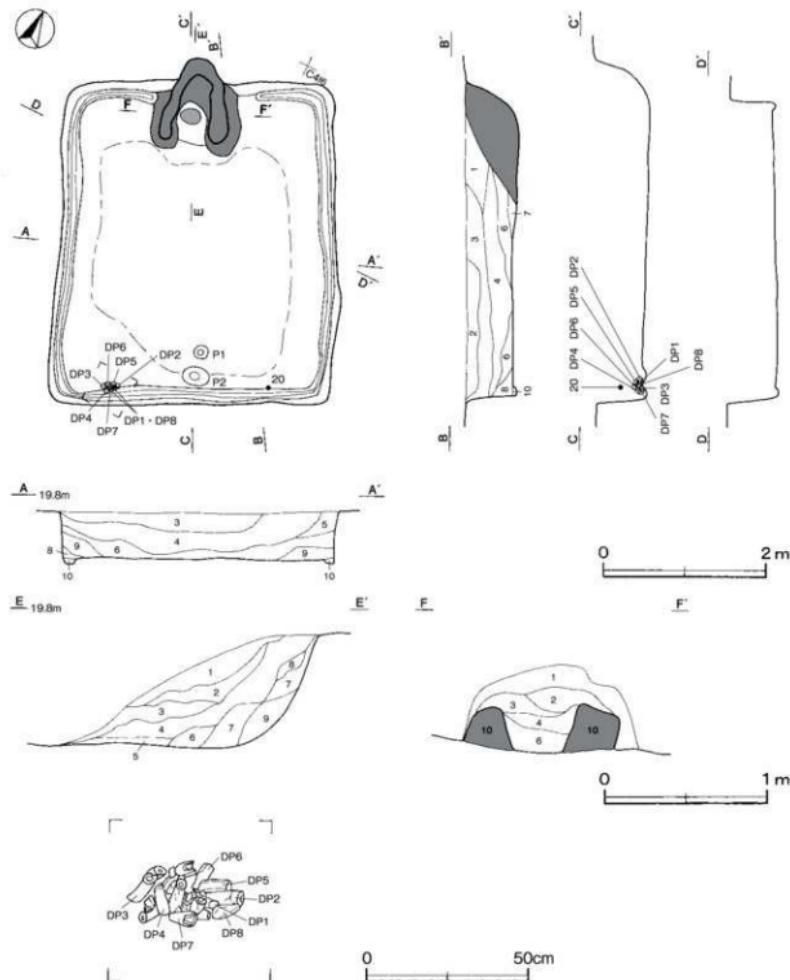
**覆土** 10層に分層できる。ロームブロックを多量に含んでいることから埋め戻されている。

#### 土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量	7 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック微量
2 灰褐色	ロームブロック多量	8 黒褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック中量	9 暗褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	ロームブロック多量	10 暗褐色	ローム粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量		
6 暗褐色	ロームブロック中量	砂質粘土粒子少量	燒土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片33点（环2、甕類31）、須恵器片17点（环10、甕類7）、土製品36点（未焼成の管状土錐）が南西部を中心に出土している。また、混入した縄文土器片22点（深鉢）も出土している。DP1~DP8は未焼成の管状土錐で、南西部の床面からまとまって出土している。20は南部の覆土中層、TP1は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。

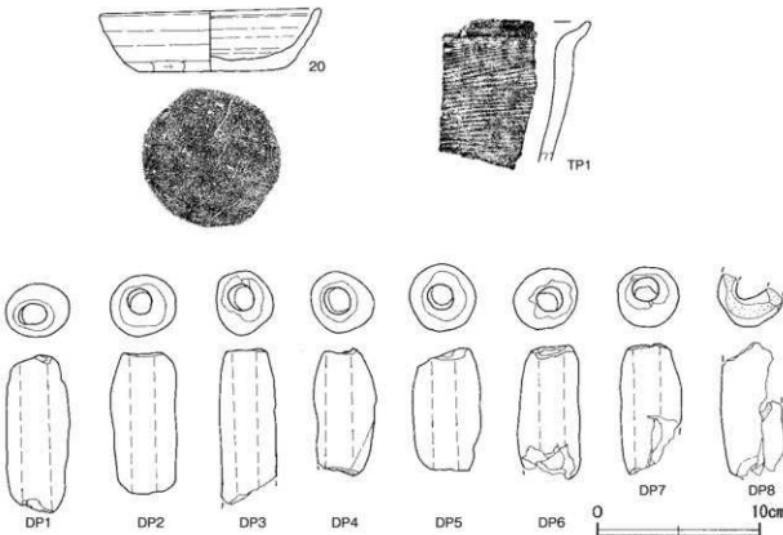


第15図 第8号住居跡実測図

第8号住居跡出土遺物観察表（第16図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	新 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
ZD	埴造器	环	13.5	3.9	8.6	長石・石英	灰青	普通	体部下端子持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り 口縁部内面式擦有り	覆土中層	90% PL20

番号	種 別	器種	新 土	色 調	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP 1	埴造器	夷	長石・石英・雲母	灰白	体部外表面横位の平行叩き 内面ヘラナデ	覆土中	PL28



第 16 図 第 8 号住居跡出土物実測図

番号	形 様	長さ	厚さ	孔径	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
DP 1	管状土錐	98	3.3	1.8	(990)	土 (長石・石英)	未焼成 ナデ 端部一部欠損	床面	PL26・29
DP 2	管状土錐	86	3.8	1.5	(1148)	土 (長石・石英)	未焼成 ナデ 端部一部欠損	床面	PL26・29
DP 3	管状土錐	(95)	3.9	1.5	(1062)	土 (長石・石英)	未焼成 ナデ 端部欠損	床面	PL26・29
DP 4	管状土錐	7.8	3.8	1.7	(856)	土 (長石・石英)	未焼成 ナデ 端部欠損	床面	PL26・29
DP 5	管状土錐	7.5	4.2	1.5	993	土 (長石・石英)	未焼成 ナデ	床面	PL26・29
DP 6	管状土錐	(82)	3.9	1.6	(832)	土 (長石・石英)	未焼成 ナデ 端部一部欠損	床面	PL26・29
DP 7	管状土錐	(80)	3.7	1.6	(759)	土 (長石・石英)	未焼成 ナデ 端部一部欠損	床面	PL26・29
DP 8	管状土錐	(83)	(3.9)	-	(480)	土 (長石・石英)	未焼成 ナデ 端部欠損	床面	

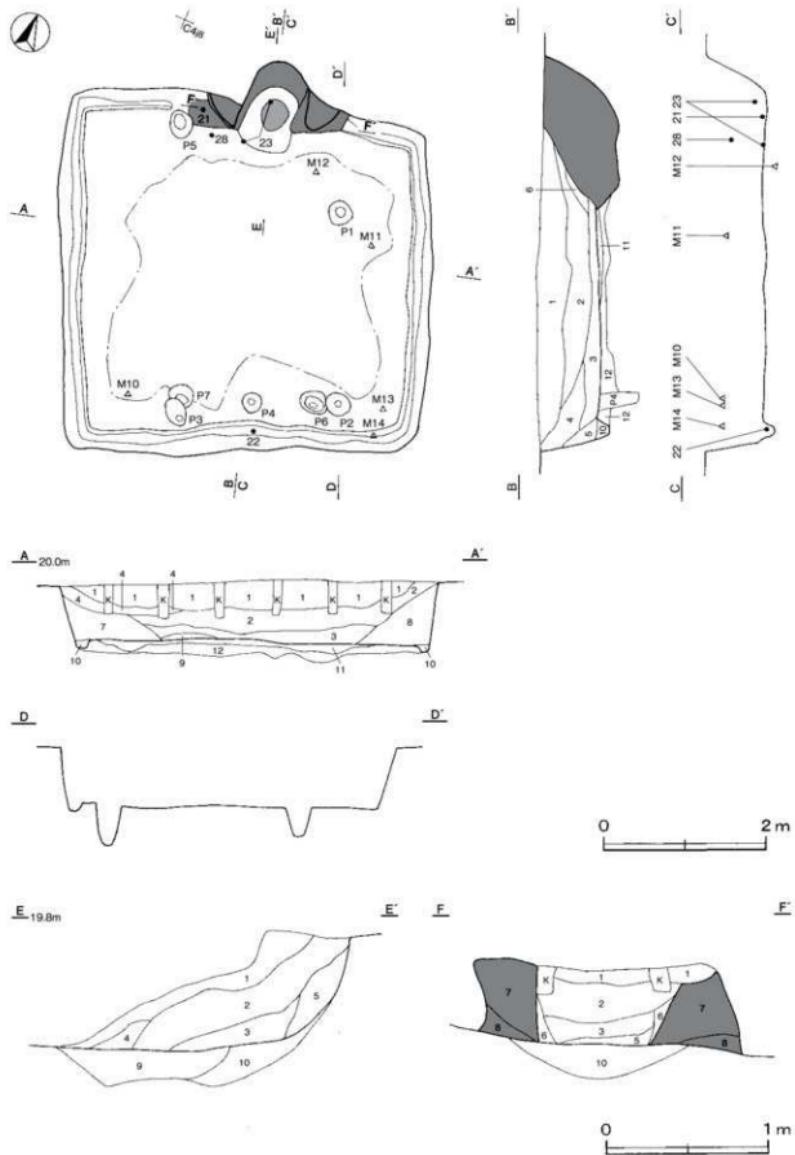
### 第 12 号住居跡（第 17・18 図）

位置 調査区中央部の C 4j8 区、標高 19.7 m の台地平坦部に位置している。

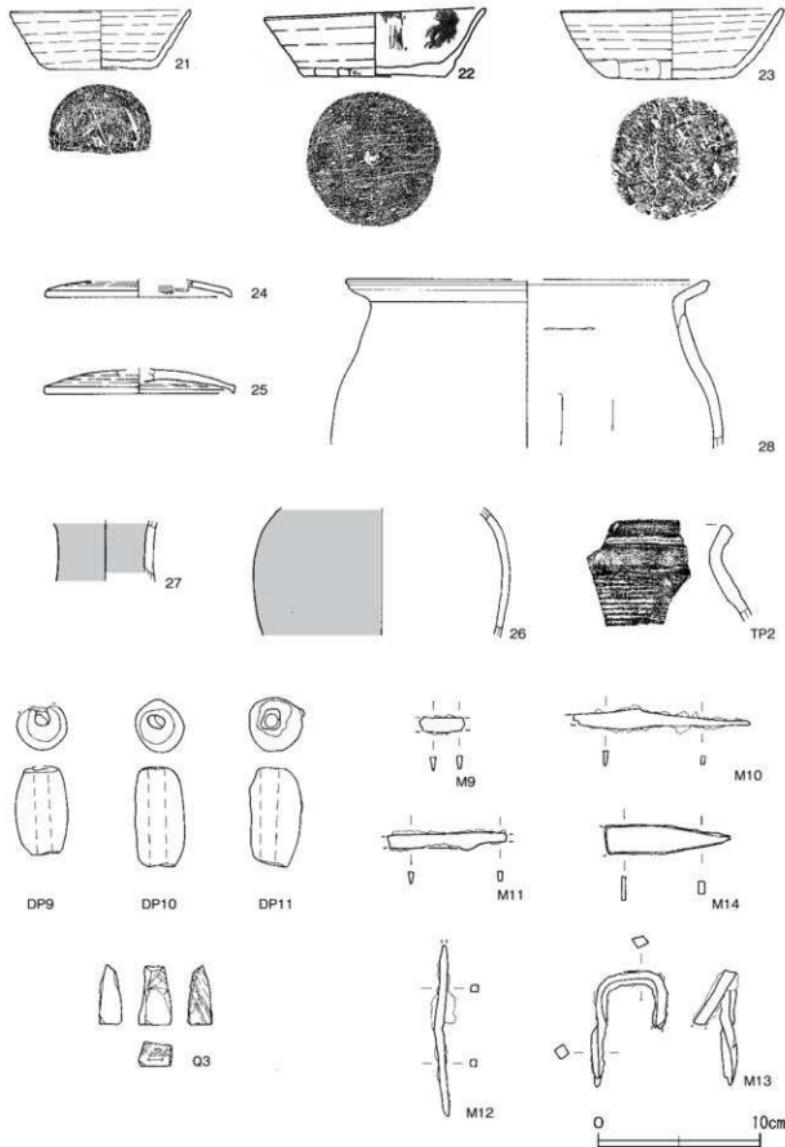
規模と形状 長軸 4.60 m、短軸 4.50 m の方形で、主軸方向は N - 26° - W である。壁高は 68 ~ 76 cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、南西コーナー部を除く 3 個を 28 ~ 37 cm 堀り込み、それ以外の部分を 15 ~ 20 cm ほど掘り込み、ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻して構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 115 cm で、燃焼部幅は 48 cm である。袖部は、床面上にローム粒子、炭化粒子を含んだ第 8 層を基部とし、砂質粘土ブロックを主体とする第 7 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、ローム粒子・砂質粘土粒子を含んだ第 9・10 層を埋



第17図 第12号住居跡実測図



第18図 第12号住居跡出土遺物実測図

土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に48cm掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。第2層は、天井部の崩落土層である。

#### 遺土層解説

1	暗褐色	燒土ブロック・炭化粒子少量	6	灰黃褐色	燒土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
2	灰黃褐色	砂質粘土ブロック多量、燒土ブロック・炭化粒子少量	7	灰黃褐色	砂質粘土ブロック多量、燒土粒子少量、炭化粒子微量
3	暗褐色	燒土ブロック多量、炭化粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量	8	褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4	にほい青褐色	炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量	9	にほい青褐色	砂質粘土粒子中量、燒土粒子少量、ローム粒子微量
5	にほい青褐色	ローム粒子・燒土粒子・灰微量	10	褐色	ローム粒子微量

**ピット** 7か所。P 1～P 3は深さ30～47cmで、配置から主柱穴である。P 4は深さ30cmで、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P 5～P 7が北壁・南壁近くの床下から確認されたが、性格不明である。

**覆土** 10層に分層できる。各層にロームブロック・粒子を含んでいるが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第11・12層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

1	黒褐色	燒土ブロック・ローム粒子少量	7	暗褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量、燒土粒子微量	8	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
3	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	9	灰黃褐色	砂質粘土粒子中量
4	暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量	10	褐色	ロームブロック中量
5	暗褐色	ローム粒子少量	11	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
6	にほい青褐色	燒土粒子・砂質粘土粒子少量	12	褐色	ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土器片679点(环12, 盖3, 壶類664), 須恵器片342点(环238, 盖12, 壶類91, 円面鏡カ1), 土製品21点(管状土錐), 石製品1点(砥石), 鉄製品6点(刀子3, 鐐1, 門1, 不明1)が床面から覆土中層にかけて、散在した状態で出土している。また、混入した土師質土器片1点(皿), 陶器片8点(碗)も出土している。21は北部の床面, 22は壁溝の覆土中, M 12は貼床の構築土, 28は北部, M 11は東部, M 10は南西部, M 13・M 14は南東部の覆土中層からそれぞれ出土している。23は、竈の覆土下層から出土した破片が接合したものである。24～27, TP 2・DP 9～DP11, Q 3・M 9は、覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。

第12号住居跡出土遺物観察表(第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	はか	出土位置	備考
25	須恵器	环	10.9	3.7	6.2	灰石・石英・白色 付物	灰	普通	底部一方向の雄なヘラ削り	床面	55% PL20	
26	須恵器	环	13.4	4.3	8.6	灰石・石英・雲母	灰青	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	埋漬度土中	30% PL20	
27	須恵器	环	13.8	4.4	7.8	灰石・石英	灰	リニア	普通 体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	竈覆土下層	70%	
28	土師器	蓋	[11.4]	[1.0]	—	砂程	青褐色	普通	内面へワ磨き	覆土中	5%	
25	須恵器	蓋	[11.6]	(1.5)	—	灰石・石英	灰灰	普通	天脊部凹軸ヘラ削り	覆土中	40%	
26	灰釉陶器	長颈瓶	—	[9.8]	—	磁青・黒色粒子	灰灰	良好	外面施釉	覆土中	5%	
27	灰釉陶器	長颈瓶	—	[3.8]	—	磁青	灰青色	良好	外・内面施釉	覆土中	5%	
28	土師器	蓋	[22.0]	[10.4]	—	灰石・石英	明赤褐	普通	内面へワナゲ 輪模痕	覆土中層	5%	

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴	はか	出土位置	備考
TP 2	須恵器	蓋	灰石・石英・雲母	にほい青褐	体部外縁横位の平行叩き 内面ナタ	—	覆土中	PL28

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	持	備考	
DP 9	管状土錐	5.4	3.1	0.9	(36.1)	土(灰石・石英)	ナデ	罐一部欠損	覆土中	PL29
DP10	管状土錐	6.1	3.1	1.0	50.7	土(灰石・石英)	ナデ	—	覆土中	PL29
DP11	管状土錐	6.1	3.3	1.2	53.8	土(灰石・石英)	ナデ	—	覆土中	PL29

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 3	砥石	35	20	15	120	麻灰岩	磨面2面のうち1面に溝状の横槽有り 他は鏡面	覆土中	PL30
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 9	刀子	(28)	10	0.4	(220)	鉄	刃部・茎部欠損 刃部断面三角形	覆土中	
M 10	刀子	(169)	13	0.3	(860)	鉄	刃部欠損 背面 刃部断面三角形 茎部断面長方形	覆土中層	PL31
M 11	刀子	(73)	10	0.35	(705)	鉄	刃部・茎部欠損 刃部断面三角形 茎部断面長方形	覆土中層	
M 12	鎌	(196)	05	0.4	(125)	鉄	鍔部分欠損 鍔部断面三角形	鰐床構築土	PL32
M 13	円	(72)	47	0.8	(286)	鉄	断面長方形	覆土中層	PL32
M 14	不明直輪品	(76)	18	0.4	(197)	鉄	断面長方形	覆土中層	

### 第 13 号住居跡（第 19 図）

位置 調査区中央部の C 4h9 区、標高 19.7 m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 3.34 m、短軸 3.10 m の方形で、主軸方向は N - 21° - W である。壁高は 40cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。北東部を除き、壁下には堀溝が巡っている。貼床は、ロームブロック・砂質粘土粒子を含むにぶい黄褐色土とロームブロックを含む暗褐色土を 10 ~ 15cm ほど埋めて構築されている。

窓 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 93cm で、煙道部幅は 45cm である。袖部の遺存状況は悪く、床面上にロームブロック・砂質粘土粒子を含んだ第 15 層を基部としていることのみ確認できた。火床部は床面を若干掘り込み、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含んだ第 16 層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 45cm 掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。第 2 層は、天井部の崩落土層である。

#### 遺土層解説

1	褐	褐	地土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子、ローム粒子微量	9	褐	褐	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2	にぶい黄褐色	褐	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	10	灰	褐	地土ブロック中量、ローム粒子少量
3	にぶい黄褐色	褐	砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量	11	灰	褐	砂質粘土粒子中量、ロームブロック少量
4	黒	褐	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量	12	褐	褐	ローム粒子・焼土粒子少量
5	暗赤褐色	褐	焼土粒子多量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量	13	褐	色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土粒子少量
6	黒	褐	ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子少量	14	褐	色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
7	暗	褐	ロームブロック・地土・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量	15	褐	色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
8	灰	褐	ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子少量	16	にぶい黄褐色	色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 深さ 13cm で、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

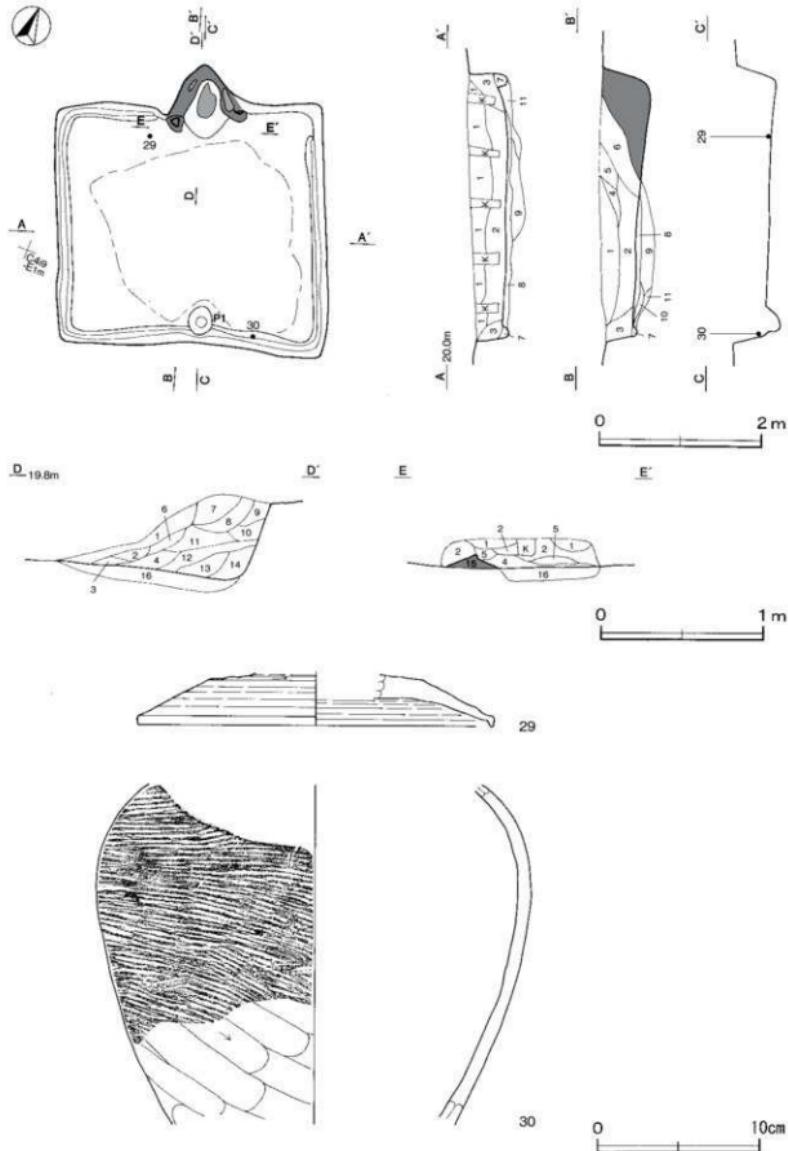
覆土 7 層に分層できる。各層にロームブロック・粒子を含んでいるが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第 8 ~ 11 層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

1	暗	褐	ロームブロック中量、炭化粒子微量	7	暗	褐	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2	暗	褐	ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量	8	にぶい黄褐色	色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
3	暗	褐	ロームブロック少量	9	暗	褐	ロームブロック多量
4	黒	褐	焼土粒子少量、ローム粒子微量	10	褐	色	ローム粒子微量
5	黒	褐	砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11	にぶい黄褐色	色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片 39 点（甕類）、須恵器片 23 点（壺 15、高台付壺 1、蓋 2、甕類 4、鉢 1）が出土している。また、流れ込んだ石器 1 点（鎌）、混入した磁器片 5 点（碗）も出土している。29 は北部の床面、30 は南部の覆土下層からそれぞれ出土しており、廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第19図 第13号住居跡、出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表（第19図）

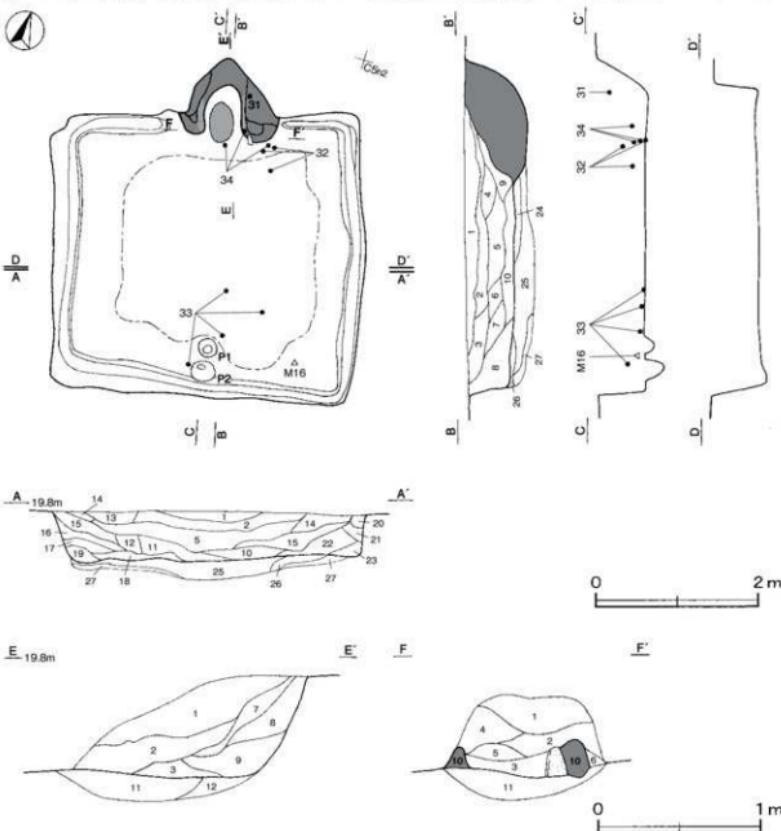
番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	地成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備考
29	厨窓器	釜	122.0	3.25	—	黄石・石英・雲母	灰	良好	天井部剥離へラ削り	床面	10%
30	厨窓器	釜	—	121.0	—	黄石・石英・雲母・ 赤色粒子	灰	普通	全体外表面斜度の平行叩き・下端へラ削り	壁上層	20%

第15号住居跡（第20・21図）

位置 調査区中央部のC5h1区、標高19.7mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.86m、短軸3.60mの方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は48~64cmで、ほぼ直立している。

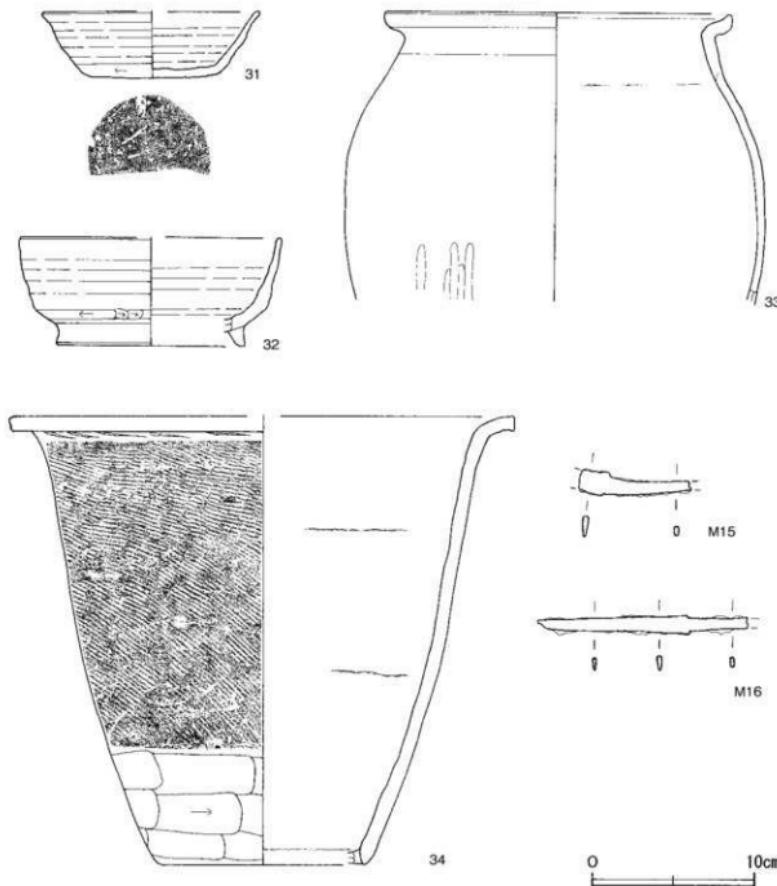
床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロック・



第20図 第15号住居跡実測図

焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土とローム粒子を含む褐色土を12～26cmほど埋めて構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで110cmで、燃焼部幅は47cmである。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第10層を積み上げて構築されており、内側は赤変している。右袖部の内側に角柱状の切石（砂岩）が補強材として使用されている。火床部は床面を若干掘り込み、ローム粒子・焼土粒子を含んだ第11層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に68cm掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。



第21図 第15号住居跡出土遺物実測図

#### 遺土層解説

1	暗褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	7	にじく黄褐色	砂質粘土粒子多量、炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2	暗褐色	焼土・ローム粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	8	褐暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
3	暗褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量	9	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、砂質粘土粒子微量	10	にじく黄褐色	砂質粘土ブロック多量、炭化粒子微量
5	褐暗褐色	焼土粒子中量、ローム粒子微量	11	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
6	暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量	12	褐色	ローム粒子少量

ピット 2か所。P 1・P 2は深さ 12・23cmで、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 23層に分層できる。ロームブロックを多量に含み、不自然な堆積状況を示していることから埋め戻されている。第 24～27 層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

1	褐暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	14	暗褐色	ローム粒子多量
2	暗褐色	ローム粒子中量	15	褐色	ロームブロック微量
3	暗褐色	ロームブロック中量	16	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック少量、炭化物・砂質粘土粒子微量	17	褐色	ローム粒子中量
5	褐暗褐色	ロームブロック少量	18	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
6	暗褐色	ロームブロック多量	19	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
7	褐暗褐色	ロームブロック中量	20	黒褐色	ローム粒子少量
8	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	21	褐色	ローム粒子多量
9	暗褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	22	褐暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
10	褐暗褐色	ロームブロック微量	23	黒褐色	ロームブロック微量
11	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	24	にじく黄褐色	ロームブロック少量
12	褐色	ロームブロック多量、焼土粒子微量	25	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
13	褐暗褐色	ローム粒子少量	26	暗褐色	ロームブロック微量
			27	褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片 165 点（壺 5、甕類 160）、須恵器片 56 点（壺 33、蓋 1、甕類 21、瓶 1）、土製品 1 点（管状土錐）、鉄製品 2 点（刀子）が覆土下層から中層にかけて、散在した状態で出土している。M 16 は南東部の覆土下層、31 は竈右袖の構築土からそれぞれ出土している。33 は中央部の床面と南部の覆土中層から出土した破片、34 は竈前面の覆土下層から出土した破片、32 は北部の覆土下層と中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。M 15 は、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。

第 15 号住居跡出土遺物観察表（第 21 図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
31	須恵器	壺	[13.2]	4.1	[8.0]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端削除へラ削り、底部多方向のへラ削り	竈右袖側壁上	55% PL30	
32	須恵器	壺付付	[15.8]	(6.7)	[11.4]	長石・石英	灰青	普通	体部下端削除へラ削り、一部手持ちへラ削り	竈上層・中層	40%	
33	土師器	甕	21.2	(17.8)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にじく黄褐色	普通	体部外縁へラ削り、内面へナガテ	軸積痕	覆土上層	30%
34	須恵器	瓶	[30.8]	27.2	[12.4]	長石・石英	灰	普通	体部外縁削除の平行叩き、下端へラ削り、内面へナガテ	軸積痕	覆土下層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 15	刀子	(6.9)	1.6	0.4	7.90	鉄	刃部・茎部欠損 両側 両部断面三角形 茎部断面長方形	覆土中	PL31
M 16	刀子	(12.9)	1.2	0.3	9.05	鉄	茎部欠損 両側 両部断面三角形 茎部断面長方形	覆土下層	PL31

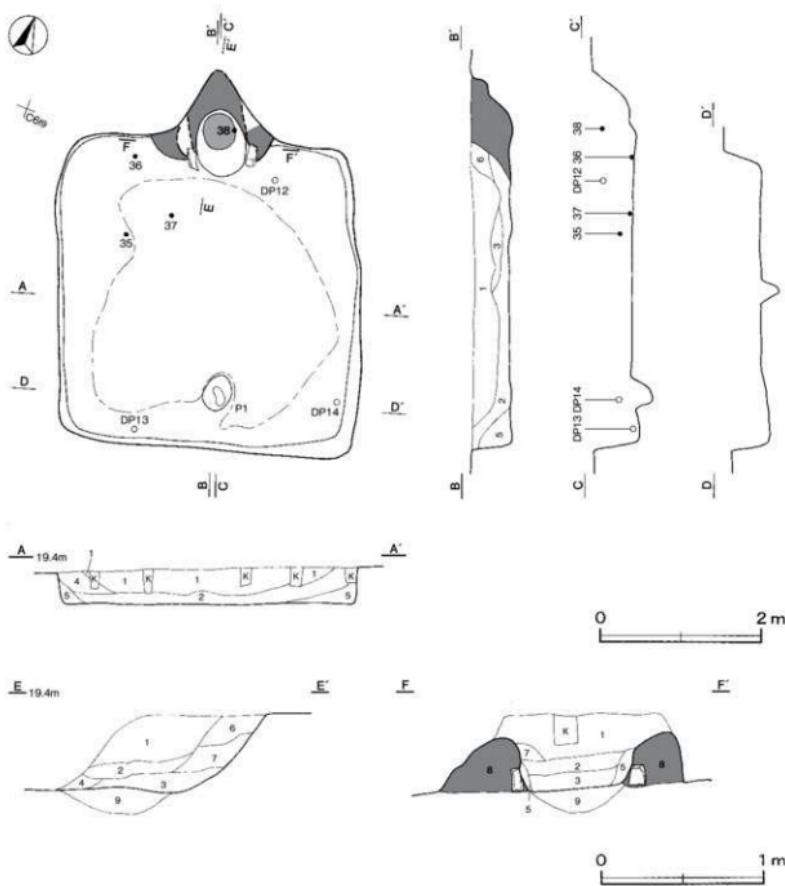
第 18 号住居跡（第 22～24 図）

位置 調査区東部の C 6f9 区、標高 19.3m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 3.84 m、短軸 3.74 m の方形で、主軸方向は N - 20° - W である。壁高は 46～54cm で、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、ロームブロックを含むにぶい黄褐色土と褐色土を10~27cmほど埋めて構築されている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで132cmで、燃焼部幅は64cmである。袖部は、床面上に白色粘土ブロックを主体とする第8層を積み上げて構築されており、内側は赤変している。両袖の内側に角柱状の切石（砂岩）が補強材として使用されている。火床部は床面を若干掘り込み、ローム粒子・焼土粒子を含んだ第9層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に79cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第2層は、天井部の崩落土層である。



第22図 第18号住居跡実測図（1）

**遺土解説**

1 黒 細 色 塗土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・白色粘土粒子微量	5 灰 黄 細 色 白色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 細 色 白色粘土ブロック中量、焼土ブロック・白色粘土・炭化物微量	6 暗 細 色 焼土ブロック・白色粘土ブロック・炭化物少量
3 暗 細 色 焼土ブロック・炭化物・白色粘土粒子少量	7 黒 細 色 焼土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子微量
4 暗 細 色 炭化物少量、ローム粒子微量	8 灰 黄 細 色 白色粘土ブロック多量
	9 暗 細 色 ローム粒子・焼土粒子微量

**ピット** 5か所。P 1は深さ19cmで、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 2・3は北壁際、P 4・5は南壁際の床下から確認されたが、性格は不明である。

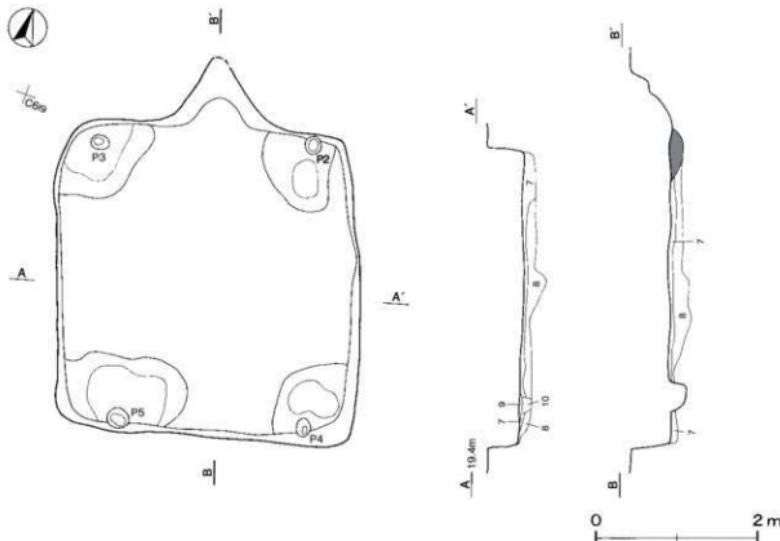
**覆土** 6層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第7～10層は、貼床の構築土である。

**土層解説**

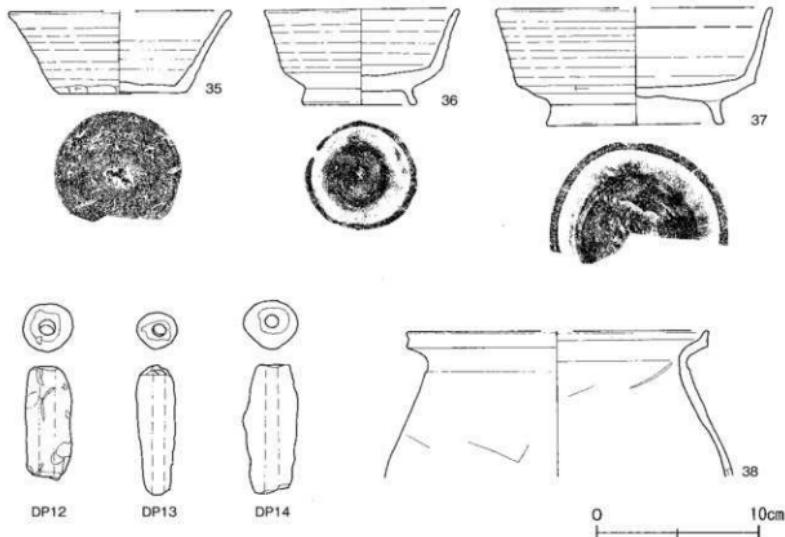
1 暗 細 色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量	6 暗 細 色 焼土ブロック中量、砂質粘土粒子少量
2 暗 細 色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量	7 にい黄褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 暗 細 色 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量	8 暗 細 色 ロームブロック中量
4 にい黄褐色 ローム粒子・炭化粒子微量	9 暗 細 色 ローム粒子少量
5 暗 細 色 ローム粒子微量	10 暗 細 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片86点(壺1、甕類85)、須恵器片29点(壺18、高台付坏2、蓋3、甕5、瓶1)、土製品4点(管状土錐)が出土している。また、流れ込んだ繩文土器片2点(深鉢)も出土している。36は北西部、37は中央部の床面、DP13は南部の覆土下層、35は西部、DP14は東部の覆土中層、38は竈の覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第23図 第18号住居跡実測図（2）



第24図 第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	留糞	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
35	便器	环	[137]	51	7.9	長石・石英・雲母	灰	良好	底部下端手持ちハラ削り、底部内板へラ切り削を残す 「壁なしナマ」	覆土中層	60% PL20
36	便器	高台付环	120	59	6.9	長石・石英	褐灰	良好	底部内板へラ削り後、高台貼り付け	床面	70% PL20
37	便器	高台付环	[168]	72	10.8	長石・石英	黄灰	良好	底部内板へラ削り後、高台貼り付け	床面	40% PL21
38	土器器	甕	[185]	(89)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面ハラナマ	覆土上層	10%

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP12	管状土器	6.9	2.9	1.0	32.2	土(長石・石英)	ナマ	床面	PL29
DP13	管状土器	8.0	2.2	0.8	30.0	土(長石・石英)	ナマ 錐部欠損	覆土下層	
DP14	管状土器	7.9	3.0	0.9	57.2	土(長石・石英)	ナマ	覆土中層	

第19号住居跡（第25・26図）

位置 調査区東部のC7a4区、標高19.9mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 一辺3.25mの方形で、主軸方向はN-30°-Wである。壁高は18~27cmで、ほぼ直立している。床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を4~12cmほど埋めて構築されている。南壁際と南西コーナー際に、厚さ2cmの白色粘土が遺存していた。

■ 北壁中央部に付設されている。搅乱を受けているため遺存状況は悪く、煙道部の掘り込みと袖構築材の一部、火床面が確認できただけである。袖部は、床面上に白色粘土ブロックを主体とする第4層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、ロームブロック・焼土ブロックなどを含んだ第5層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に30cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

#### ■ 土層解説

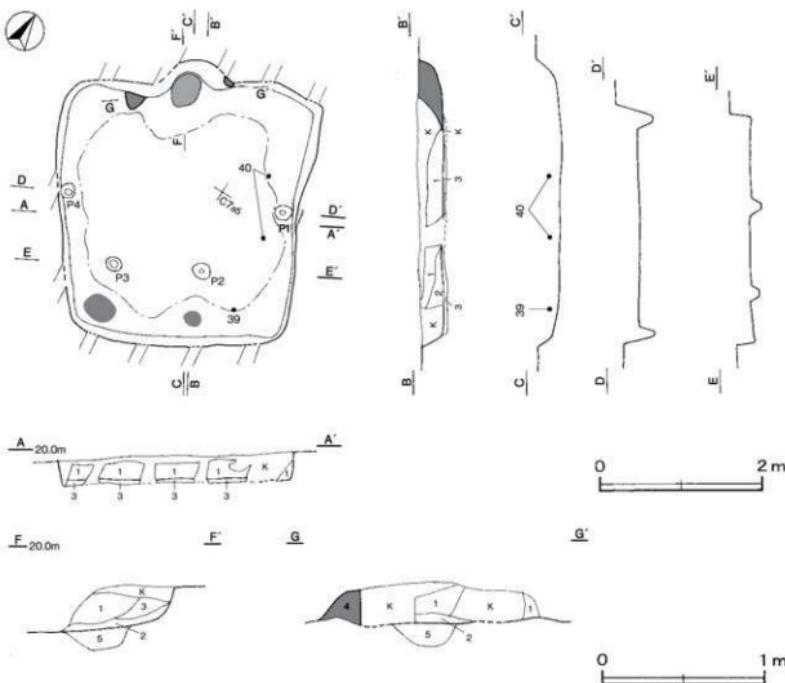
1 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 灰 褐 色 白色粘土ブロック多量、焼土粒子微量
2 喙 褐 色 焼土粒子少量、ローム粒子微量	5 喙 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物・白色粘土粒子少量
3 にぶい赤褐色 白色粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	

ピット 4か所。P.1～P.4は深さ12～19cmで、P.1は東壁際、P.4は西壁際、P.2・3は中央部よりやや南寄りに確認したが、性格は不明である。

覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックを含んでいるが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第3層は、貼床の構築土である。

#### ■ 土層解説

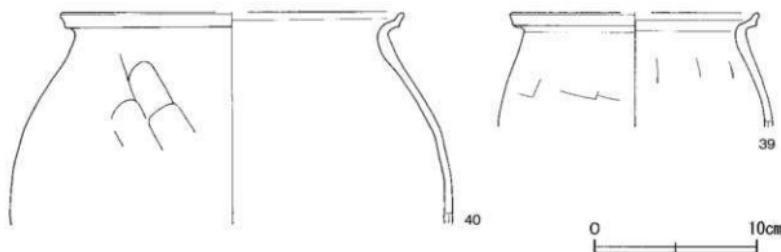
1 黒 褐 色 ロームブロック少量、白色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	2 黒 褐 色 ロームブロック少量
化粒子微量	3 喙 褐 色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量



第25図 第19号住居跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片 36 点（甕類）、須恵器片 14 点（壺 6、甕類 8）が出土している。39 は、南東部の覆土中層から出土している。40 は、東部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 時期は、出土土器から 8 世紀中葉と推定される。



第 26 図 第 19 号住居跡出土遺物実測図

第 19 号住居跡出土遺物観察表（第 26 図）

番号	種別	形様	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
39	土師器	甕	[15.2]	(7.0)	-	長石・石英・雲母 にぶい程	普通	外・内面ヘラナダ		覆土中層	10%
40	土師器	甕	[21.0]	(13.1)	-	長石・石英・雲母 にぶい程	普通	体外部ヘラ振り後ナダ 内面ナダ		覆土中層	20%

第 20 号住居跡（第 27 図）

**位置** 調査区東部の C7b6 区、標高 19.7 m の台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 東部が調査区域外に延びているため、南北軸は 2.64 m で、東西軸は 1.76 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定され、主軸方向は N - 29° - W である。壁高は 29 ~ 47 cm で、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められているが、東半部は不明である。貼床は、ロームブロックを含むにぶい黄褐色土を 8 ~ 25 cm ほど埋めて構築されている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。搅乱を受けているため遺存状況は悪く、規模は焚口部から煙道部まで 74 cm と推定され、燃焼部幅は 48 cm である。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第 6 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、ロームブロックを含んだ第 7 層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 28 cm 堀り込まれていると推定され、火床面からほぼ直立している。

#### 覆土層解説

- |   |        |   |                                   |   |      |   |                         |
|---|--------|---|-----------------------------------|---|------|---|-------------------------|
| 1 | 暗褐色    | 色 | 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量、ローム<br>粒子微量 | 5 | 暗褐色  | 色 | 砂質粘土粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量    |
| 2 | 暗褐色    | 色 | ローム粒子、焼土粒子・炭化粒子微量                 | 6 | 灰黃褐色 | 色 | ローム粒子・砂質粘土粒子微量          |
| 3 | 暗褐色    | 色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子微量                   | 7 | 暗褐色  | 色 | ロームブロック中量               |
| 4 | にぶい黄褐色 | 色 | 炭化物・砂質粘土粒子少量                      | 8 | 暗褐色  | 色 | ロームブロック中量、燒土粒子・砂質粘土粒子微量 |
|   |        |   |                                   | 9 | 暗褐色  | 色 | ロームブロック微量               |

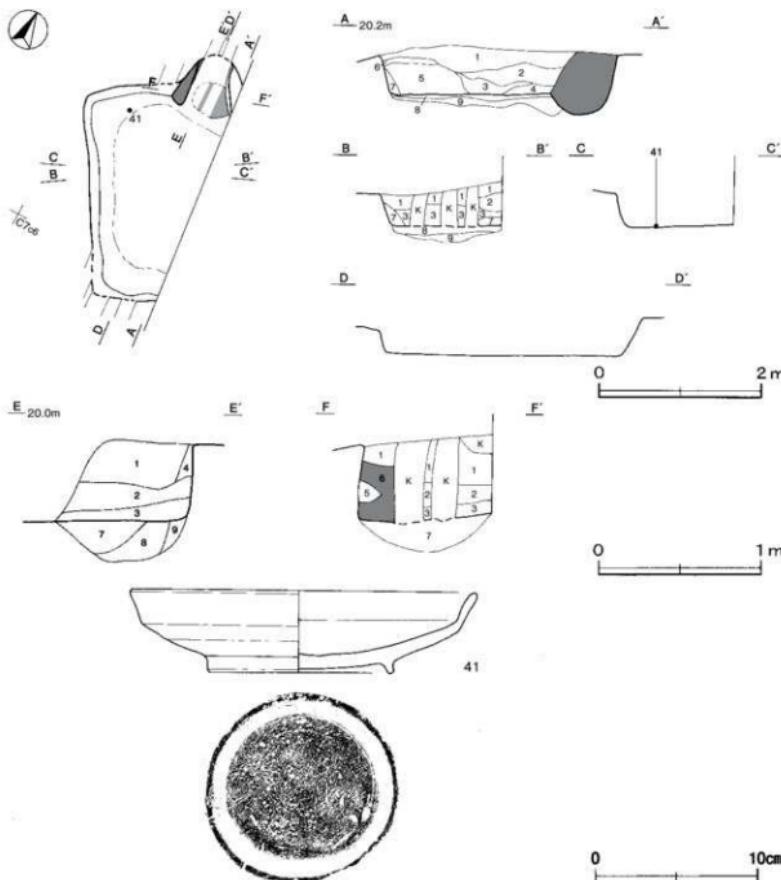
**覆土** 7 層に分層できる。ロームブロックを含み、不自然な堆積状況を示していることから埋め戻されている。第 8・9 層は、貼床の構築土である。

**土層解説**

1 黒 開 色 ロームブロック・焼土粒子少量	5 塗 開 色 ローム粒子微量
2 明 開 色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・灰化粒子微量	6 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
3 暗 開 色 ローム粒子・炭化粒子微量	7 塗 開 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 明 開 色 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量	8 塗 開 色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
	9 にぶい黄褐色 ロームブロック中量、砂質粘土ブロック・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片 9 点（壺類）、須恵器片 11 点（坏 8、盤 1、甕類 2）が出土している。また、混入した陶器片 1 点（鉢）も出土している。41 は北西部の床面から出土しており、廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。



第 27 図 第 20 号住居跡・出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表（第27図）

番号	種別	器種	口径	深高	底径	胎土	色調	塊成	手法の特徴はか	出土位置	備考
41	須志器	甕	21.3	5.0	11.3	灰石・石英・雲母	灰黄	普通	底部糊紙ヘラ削り後、高台貼り付け	床面	80% PL21

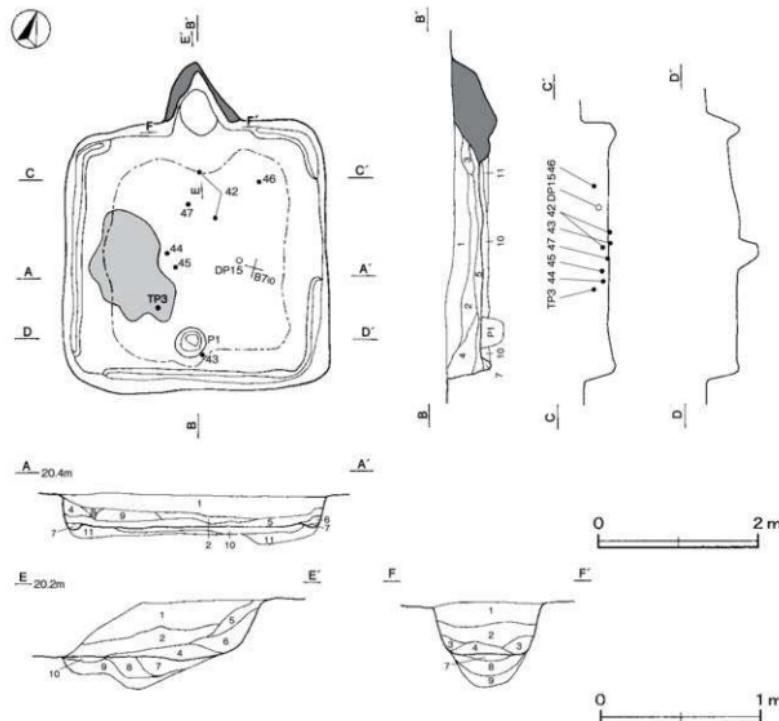
第21号住居跡（第28～30図）

位置 調査区東部のB7h9区、標高20.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.38m、短軸3.34mの方形で、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は28～37cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。北部と東部の一部を除き、壁下には壁溝が巡っている。貼床は、ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土、褐色土を8～13cmほど埋めて構築されている。

窓 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで105cmで、燃焼部幅は56cmである。袖部は遺存していないが、燃焼部の構築状況から砂質粘土を積み上げて構築されていたものと推測できる。火床部



第28図 第21号住居跡実測図

部は床面を若干掘り込み、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子を含んだ第7層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化していない。煙道部は壁外に71cm掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。第7～10層は、掘方への埋土である。

#### 遺土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子、炭化粒子微量	6 暗赤褐色	燒土ブロック中量、ローム粒子、炭化粒子、砂質粘土粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子、炭化粒子微量	7 暗赤褐色	ロームブロック・燒土ブロック中量、炭化粒子微量
3 暗褐色	燒土粒子・砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック中量
4 暗赤褐色	燒土粒子、炭化粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子多量、燒土粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量、砂質粘土ブロック・燒土粒子、炭化粒子微量	10 黑褐色	ローム粒子多量、燒土粒子、炭化粒子微量

**ピット** 深さ25cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

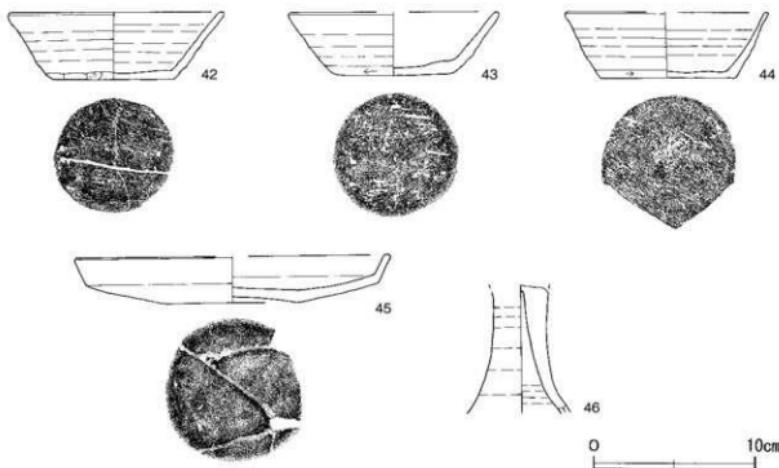
**覆土** 9層に分層できる。第8・9層は覆土中層で確認された焼土範囲の層で、不自然な堆積状況から投棄されたものとみられる。ほかはロームブロックを含む層が多いが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第10・11層は、貼床の構築土である。

#### 土器解説

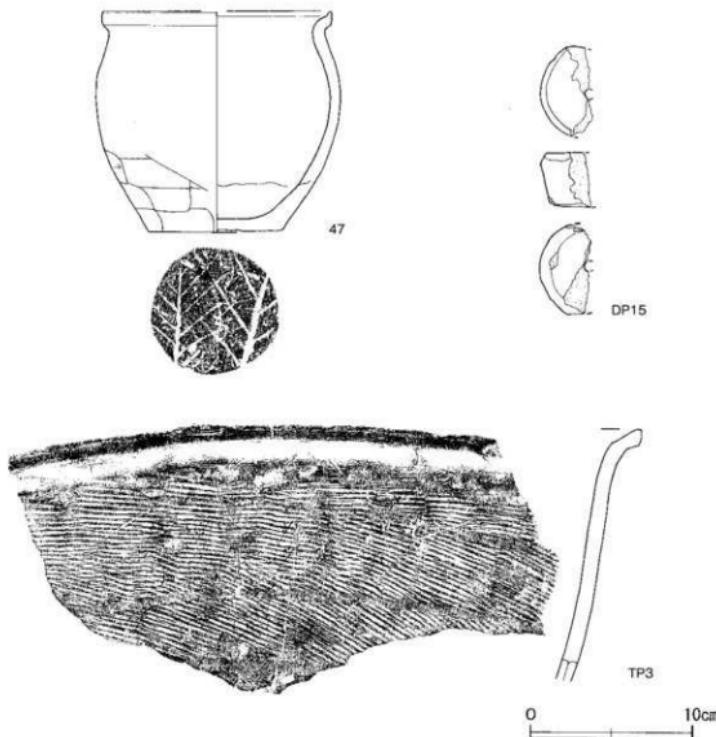
1 黒褐色	炭化物中量、ローム粒子少量、燒土粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子、炭化粒子微量	8 暗赤褐色	燒土粒子多量、ローム粒子、炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量、燒土粒子微量	9 明赤褐色	燒土ブロック多量、炭化粒子少量
4 黑褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	10 黑褐色	ローム粒子多量、燒土粒子、炭化粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土器片92点(甕類87、小形甕1、瓶4)、須恵器片96点(坏41、蓋2、盤2、高杯1、甕類49、瓶1)、土製品1点(紡錘車)、鐵滓1点が散在した状態で出土している。43は南部、47は中央部の床面、44・45は中央部の覆土下層、46は北東部、TP 3・DP15は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。42は、中央部の床面と覆土下層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第29図 第21号住居跡出土遺物実測図（1）



第30図 第21号住居跡出土遺物実測図(2)

第21号住居跡出土遺物観察表(第29・30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
42	頸壺器	环	13.1	4.2	7.4	灰石・石英・雲母 灰灰	普通	体部下端斜めハラ削り、底部一方向のハラ削り	床面・壁土下層	100% PL21	
43	頸壺器	环	[130]	4.0	7.0	灰石・石英・雲母 に灰・黄	普通	体部下端斜めハラ削り、底部一方向のハラ削り	床面	80%	
44	頸壺器	环	[123]	4.2	8.2	灰石・石英・雲母 灰灰	普通	体部下端斜めハラ削り、底部一方向のハラ削り	覆土下層	50%	
45	頸壺器	盤	[194]	2.9	8.0	灰石・石英・砂粒 灰灰	普通	底部斜めハラ削り	覆土下層	60% PL21	
46	頸壺器	高环	—	(7.9)	—	石英	灰青	良好 ロクロ現象	覆土中層	30% PL22	
47	土器器	小形甕	[140]	13.6	8.2	灰石・石英	に灰・赤褐色	普通 体部下端ハラ削り 内面ハラナデ 軸粗削 灰土本 胎土	床面	70% PL22	

番号	種別	器種	胎土上	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 3	頸壺器	甕	灰石・石英	灰	体部外表面斜位の平行引き	青土中層	PL28

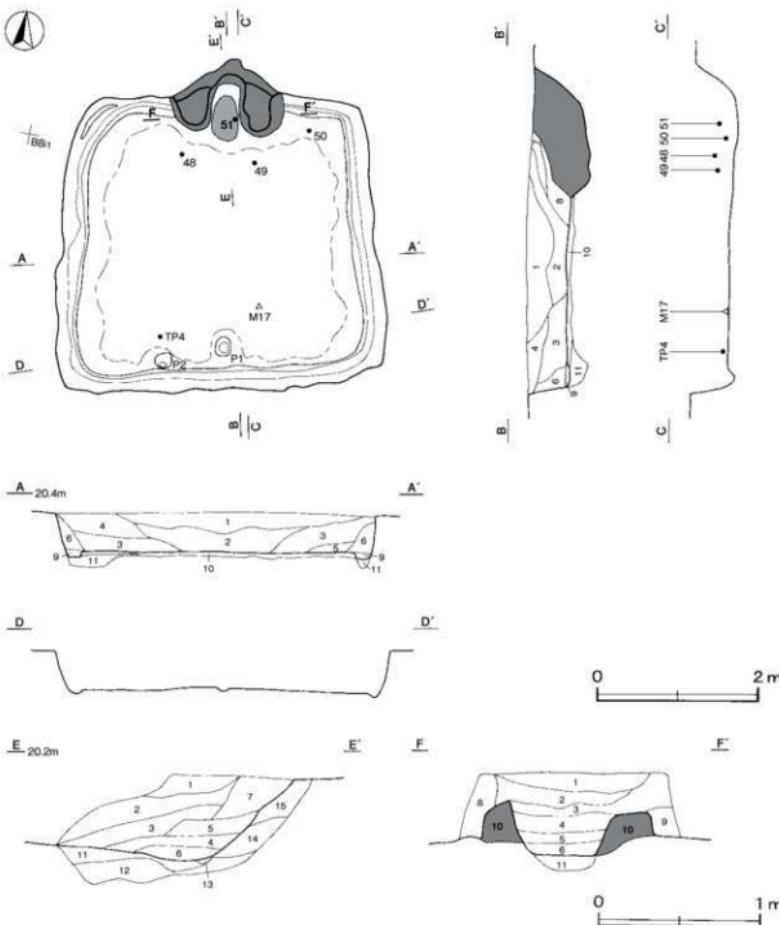
番号	器種	種	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DPS5	輪錐車	(5.0)	3.4	—	(500)	土(灰石・石英)	側面ナデ	青土中層	PL29

第22号住居跡（第31～33図）

位置 調査区東部のB8i1区、標高20.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.04m、短軸3.62mの長方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は46～52cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土を3～8cmほど埋めて構築されている。



第31図 第22号住居跡実測図

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 110cm で、燃焼部幅は 42cm である。袖部は、地山を掘り残して基部とし、白色粘土ブロックを主体とする第 10 層を積み上げて構築されている。火床部は床面を 10cm ほど掘り込み、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含んだ第 11 層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 34cm 堀り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

#### 遺土層解説

1 黒 極 色	燒土ブロック少量、ローム粒子微量	9 鮎 極 色	白色粘土ブロック・ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 黒 極 色	燒土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少量	10 灰 黃 極 色	白色粘土ブロック多量
3 黑 極 色	ロームブロック少量、燒土ブロック・白色粘土粒子微量	11 鮎 極 色	ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子微量
4 鮎 極 色	ロームブロック・燒土ブロック・白色粘土粒子少量	12 鮎 極 色	ローム粒子多量
5 灰 黃 極 色	白色粘土ブロック中量、燒土ブロック・ローム粒子微量	13 鮎 赤 極 色	燒土ブロック・白色粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
6 鮎 極 色	燒土ブロック中量、炭化粒子少量、白色粘土粒子微量	14 鮎 極 色	ローム粒子微量
7 鮎 極 色	燒土ブロック少量、炭化粒子微量	15 鮎 極 色	ローム粒子・炭化粒子微量
8 鮎 極 色	白色粘土ブロック・燒土粒子少量、ロームブロック・燒土ブロック微量		

**ピット** 2か所。P 1 は深さ 27cm で、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 2 は深さ 9cm で、南壁際に位置しており、性格不明である。

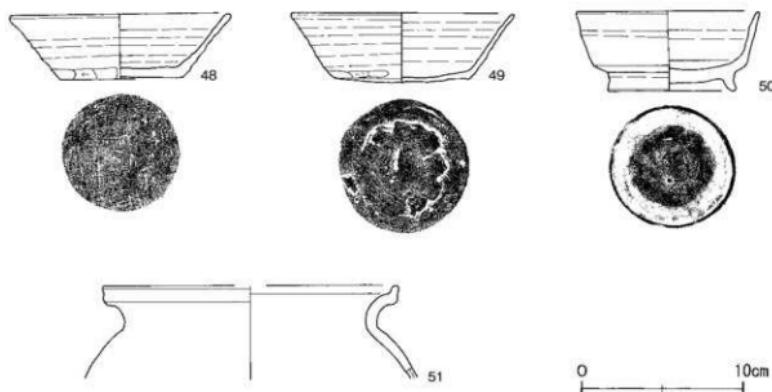
**覆土** 9層に分層できる。ロームブロックを含む層が多いが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第 10・11 層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

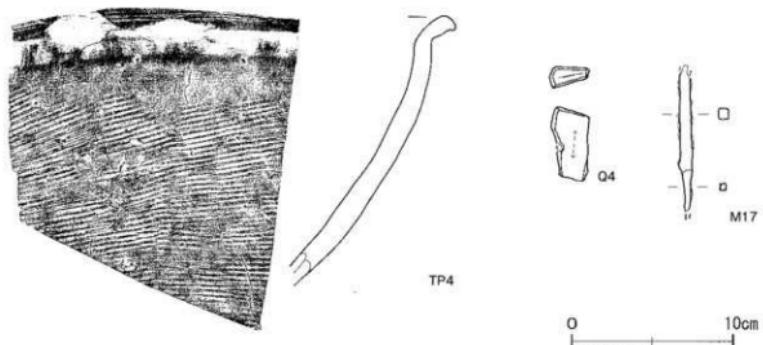
1 鮎 極 色	ロームブロック少量	6 にふい黄褐色	ロームブロック中量
2 鮎 極 色	ロームブロック・白色粘土ブロック少量、燒土ブロック・微量	7 黒 極 色	ローム粒子微量
3 鮎 極 色	ロームブロック中量、燒土ブロック・炭化粒子微量	8 黒 極 色	燒土ブロック・白色粘土ブロック少量
4 黒 極 色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	9 鮎 極 色	ローム粒子微量
5 黑 極 色	ロームブロック少量	10 黒 極 色	ローム粒子多量、燒土粒子少量、炭化粒子微量
		11 鮎 極 色	ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片 89 点（甕類）、須恵器片 49 点（坏 32、高台付坏 1、蓋 6、甕類 9、鉢 1）、石製品 1 点（砾石）。鐵製品 1 点（鎌）が竈前面を中心に出土している。M 17 は南部の床面、50 は北東部、TP 4 は南部の覆土下層、48・49 は北部の覆土中層、51 は竈覆土中層からそれぞれ出土している。Q 4 は、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第 32 図 第 22 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第33図 第22号住居跡出土遺物実測図（2）

第22号住居跡出土遺物観察表（第32・33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備考
48	須恵器	环	13.4	4.0	7.4	黄石・石英・白色 剥離物	灰	良好	底部下端手持ちハラ削り、底部一方向のハラ削り	覆土中層	80% PL21
49	須恵器	环	13.6	4.3	8.3	黄石・石英・白色 剥離物	灰	普通	底部下端手持ちハラ削り、底部多方向のハラ削り	覆土中層	90% PL21
50	須恵器	壺台付环	11.4	5.0	7.7	黄石・石英・白色 剥離物	灰	普通	底部回転ハラ削り後、高台削り付け	覆土下層	90% PL21
51	土師器	壺	18.0	(5.8)	—	黄石・石英・赤色 粒子	褐	普通	外・内面ハラナデ	覆土中層	5%

番号	種別	器種	胎 土	色 調	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備考
TP 4	須恵器	环	黄石・石英	黄灰	体部外面側位の平行叩き 内面ハラナデ	覆土下層	PL28

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q 4	砾石	46	24	13	(135)	礫灰岩	表面一面 他は破断面 後づけ砾石	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
M 17	砾	(90)	14	0.6	(127)	灰	表面一部欠損 断面正方形	床面	PL32

### 第23号住居跡（第34・35図）

位置 調査区東部のC7d9区、標高20.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.18m、短軸3.04mの方形で、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は45~48cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。北東部を除き、壁下には壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、暗褐色土を7~18cmほど埋めて構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。第8号溝に掘り込まれているため遺存状況は悪く、袖構築材の一部と火床面が確認されただけである。袖部は、床面上に白色粘土ブロックを主体とする第3層を積み上げて構築さ

れている。火床部は床面を若干掘り込み、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に30cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

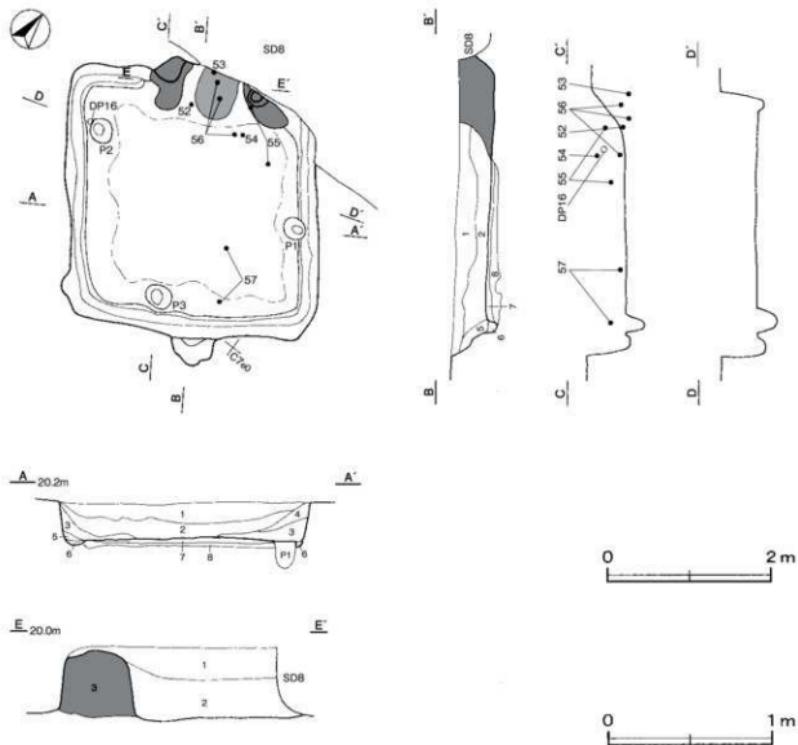
#### 遺土層解説

- |  |                                      |
|--|--------------------------------------|
| 1 植暗褐色 ロームブロック中量、燒土ブロック・炭化物・白色粘土<br>粒子微量 | 3 灰褐色 白色粘土ブロック多量、燒土ブロック中量、炭化粒子<br>微量 |
| 2 植暗褐色 白色粘土ブロック中量、ローム粒子・純土粒子・炭化粒<br>子微量  |                                      |

**ピット** 3か所。P1～P3は深さ15～26cmで、P1は東壁際、P2は西壁際に位置しており、性格不明である。P3は南壁近くの床下から確認されたが、性格不明である。

**張り出し施設** 南壁の中央部に位置している掘り込みである。長軸50cm、短軸34cmの橢円形で、深さは23cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がっている。規模と形状から出入り口施設の可能性も考えられる。

**覆土** 6層に分層できる。各層にロームブロックを含んでいるが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第7・8層は、貼床の構築土である。



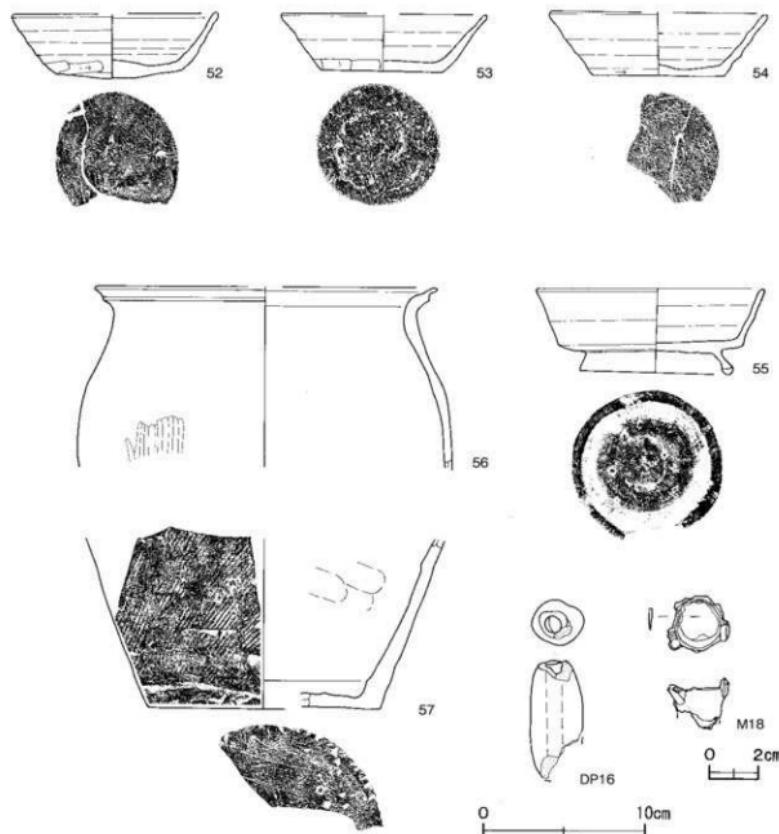
第34図 第23号住居跡実測図

**土質解説**

1 喰 間 色 ロームブロック少量	5 喰 間 色 ロームブロック微量
2 板 磁 茶色 ロームブロック中量。燒土粒子・炭化粒子微量	6 喰 間 色 ロームブロック少量。燒土粒子・炭化粒子微量
3 喰 間 色 ロームブロック中量	7 黒 間 色 ロームブロック中量。燒土粒子・炭化粒子微量
4 喰 間 色 ローム粒子少量。炭化粒子微量	8 喰 間 色 ローム粒子多量。燒土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片 96 点（甕類）、須恵器片 70 点（坏 52、蓋 2、甕類 16）、土製品 1 点（管状土錐）、鉄製品 1 点（環状金具）が散在した状態で出土している。53 は竈火床面、52 は竈の覆土下層、54 は北部、DP16 は北西部の覆土中層からそれぞれ出土している。56 は竈火床面から出土した破片、57 は南部の覆土下層と中層から出土した破片、55 は北東部の覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。M18 は、覆土中から出土している。

**所見** 本跡は、南壁中央部に張り出し施設を持つ住居である。時期は、出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。



第 35 図 第 23 号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表（第35図）

番号	種 別	器種	口径	深高	底径	胎 土	色 調	地成	手 法 の 特 徴 は か	出土状況	備 考
52	須恵器	环	[126]	41	77	長石	灰青	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部斜削へラ切り後、難	竪覆土下層	50%
53	須恵器	环	[126]	35	72	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	竪火床面	60%
54	須恵器	环	[132]	39	[80]	長石・石英・雲母・半色粒子	にいき質相	不良	体部下端斜削へラ削り 底部一方向のヘラ削り 底 部足裏墨	覆土中層	20% PL22
55	須恵器	高台付环	138	54	90	長石・石英	灰青	普通	底部側面斜削へラ削り 以後、高台付り付け 側成時に胎土 塊付着	覆土中層	70% PL20
56	土師器	甕	[269]	[112]	—	長石・石英・雲母	にいき質相	普通	体部外縁へラ削り 内面へラ削り	竪火床面	10%
57	須恵器	甕	—	[105]	[144]	長石・石英・白色 鉢状物	灰	良好	体部外縁斜削の平行叩き 内面粗面状	覆土下層・中層	10%

番号	器 種	長さ	厚さ	孔径	重量	材 質	特 徴	出土状況	備 考
DPM8	骨質土鉢	(7.3)	27	10	(44.0)	土(長石・石英)	ナデ 竪部欠損	覆土中層	PL29

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土状況	備 考
M18	環状金具	(2.1)	25	6.1	(3.56)	鐵	表面長方形 リング状	覆土中	PL32

## 第24号住居跡（第36・37図）

位置 調査区東部のC8d3区、標高20.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第6号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.20m、短軸3.06mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は38~40cmで、やや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。東部と西部の一部を除き、壁下には壁溝が巡っている。貼床は、南壁際を溝状に11~15cm、竪前面と北東・北西部は土坑状に9~18cm、それ以外の部分は4~18cmほど掘り込み、ロームブロック・炭化粒子を含む黒褐色土と褐色土を埋め戻して構築されている。

竪 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで94cmで、燃焼部幅は56cmである。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第6層を積み上げて構築されている。火床部は床面を11cmほど掘り込み、ローム粒子・焼土粒子を含んだ第7層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に55cm掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。

## 竪土層解説

1 黑 橙 色	燒土ブロック・砂質粘土粒子少量	ローム粒子・炭化粒子 微量	4 灰 黄 橙 色	砂質粘土ブロック中量	燒土粒子微量
2 紺 橙 色	燒土粒子少量	—	5 紺 橙 色	ローム粒子微量	—
3 にいき質相	燒土ブロック中量	ローム粒子微量	6 灰 黄 橙 色	砂質粘土ブロック多量	燒土ブロック少量

7 紺 赤 橙 色 ローム粒子多量、燒土粒子中量

ピット 2か所。P1は深さ41cmで、配置から主柱穴と考えにくく、性格不明である。P2は深さ17cmで、床下から確認され、性格不明である。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含む層が多いが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第9~11層は、貼床の構築土である。

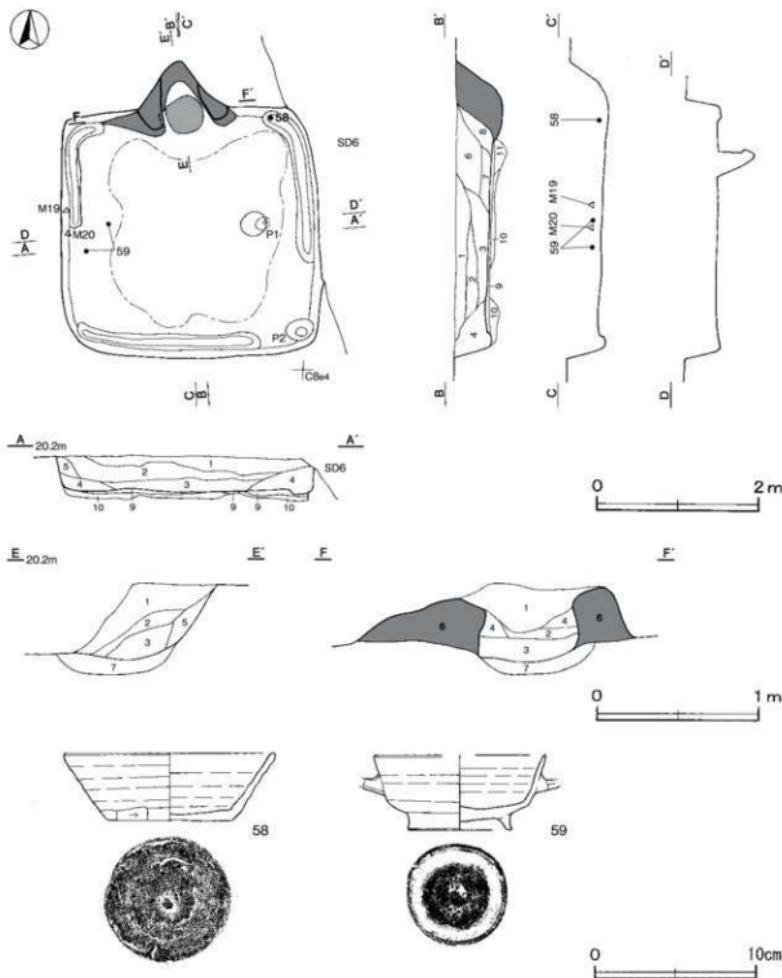
## 土層解説

1 紺 橙 色	ロームブロック中量	燒土ブロック少量	7 黒 橙 色	燒土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	
2 紺 橙 色	ロームブロック中量	—	8 黒 橙 色	燒土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量	
3 黑 橙 色	ローム粒子微量	—	9 黑 橙 色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量	
4 紺 橙 色	ロームブロック・炭化粒子少量	—	10 紺 橙 色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	
5 にいき質相	ローム粒子微量	—	11 黑 橙 色	ロームブロック中量	

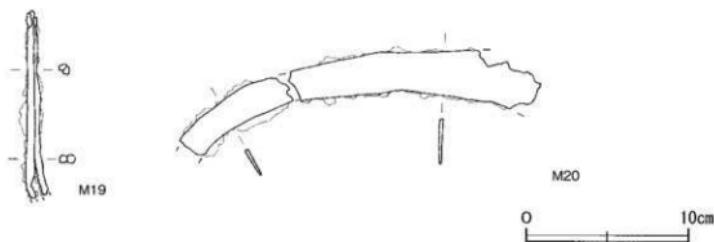
遺物出土状況 土器片26点（甕類）、須恵器片41点（环37、双耳环1、蓋1、甕2）、鐵製品2点（鎌、鎌）

が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片2点（深鉢）も出土している。58は北東部、M19・M20は西部の覆土下層からそれぞれ出土しており、廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。59は、西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第36図 第24号住居跡・出土遺物実測図



第37図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表（第36・37図）

番号	種類	断面	口径	深さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
28	埴器	环	12.9	4.3	7.8	灰石・石英・漂母	にい赤褐色	不良 子窓なし	底部下端手持ちハラ削り　底部内側ハラ削り部を残す	層土下層	90% PL21
29	埴器	冠耳杯	10.6	4.7	6.4	灰石・石英	灰	普通	底部中央に把手取り付け　底部内側ハラ削り残す　真	層土下層	70% PL21
M19	罐	(11.5)	1.1	0.6	(14.1)	鉄	茶部欠損　断面方形	2本窓有			PL32
M20	罐	(22.2)	3.6	0.2	(85.0)	鉄	刃部・柄付部一部欠損				PL31

第25号住居跡（第38～43図）

位置 調査区東部のB9f6区、標高20.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第10号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.32m、短軸6.14mの方形で、主軸方向はN-38°-Wである。壁高は44～53cmで、ほぼ直立している。

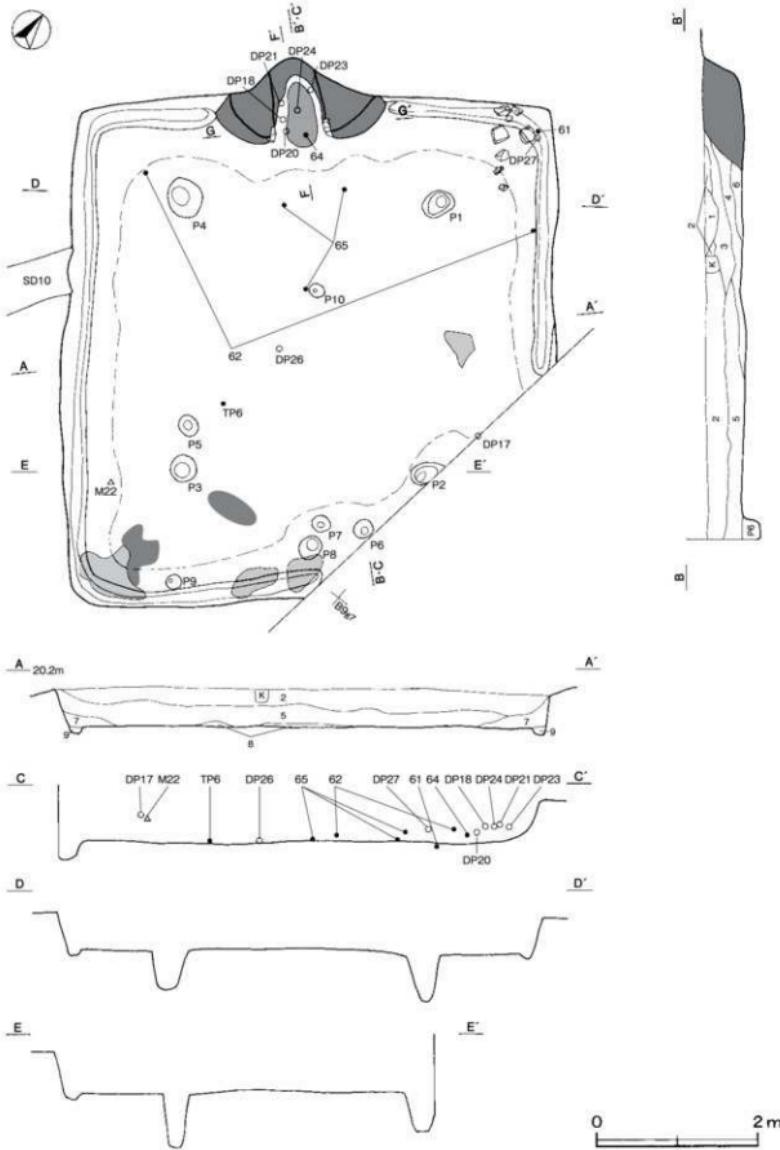
床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、南東コーナー部を除く3隅を24～30cm掘り込み、それ以外の部分を4～9cmほど掘り込み、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む褐色土を埋め戻して構築されている。南西部の床面を中心へ焼土塊や粘土塊が点在し、北東コーナー部には焼土混じりの切石（砂岩）がまとまって出土している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで114cmで、燃焼部幅は53cmである。袖部は、地山をわずかに掘り残し、その上に砂質粘土ブロックを主体とする第6層を積み上げて構築されている。両袖の内側に上部がL字状に加工された角柱状の切石（砂岩）を立て、その上に切石を渡し、焚口部を構築していたものと推測できる。火床部は床面とほぼ同じ高さで、ロームブロック・粘土粒子などを含んだ第7・8層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に36cm掘り込まれ、火床面からは直立している。

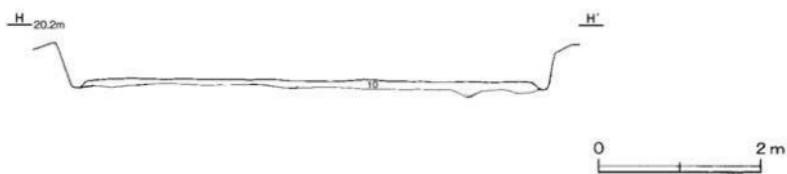
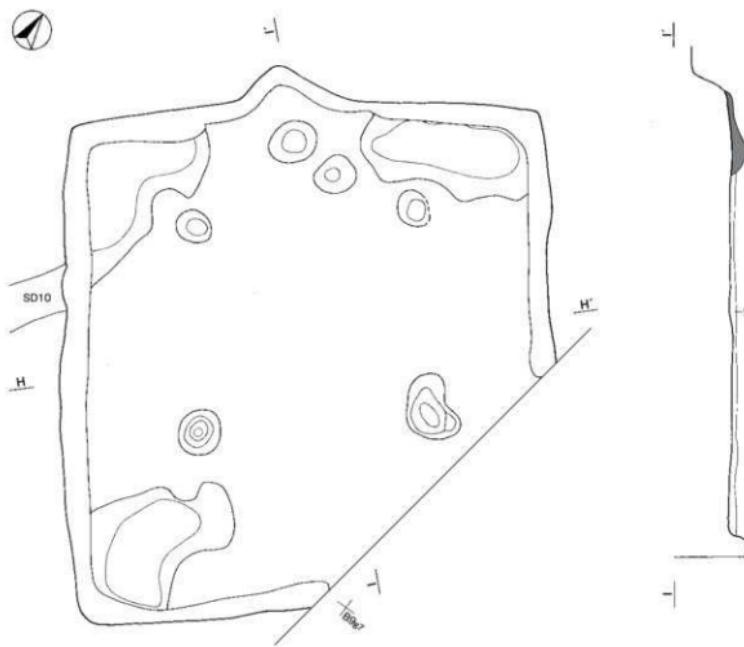
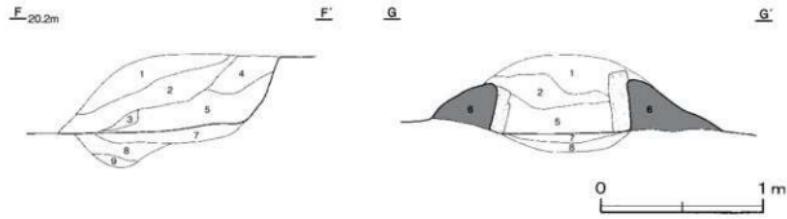
#### 竈土層解説

- |   |      |                               |   |       |                                 |
|---|------|-------------------------------|---|-------|---------------------------------|
| 1 | 灰褐色  | 燒土ブロック・砂質粘土ブロック中量             | 5 | にい赤褐色 | 燒土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子微量          |
| 2 | 暗赤褐色 | 燒土粒子少量、ローム粒子、炭化粒子、砂質粘土粒子微量    | 6 | 灰褐色   | 砂質粘土ブロック多量、ロームブロック・燒土ブロック・炭化物少量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 燒土ブロック中量、ローム粒子、炭化粒子、砂質粘土粒子微量  | 7 | 暗赤褐色  | 燒土粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量           |
| 4 | 暗赤褐色 | 燒土ブロック多量、炭化物・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 8 | 暗褐色   | ロームブロック多量                       |
|   |      |                               | 9 | 褐色    | ローム粒子少量                         |

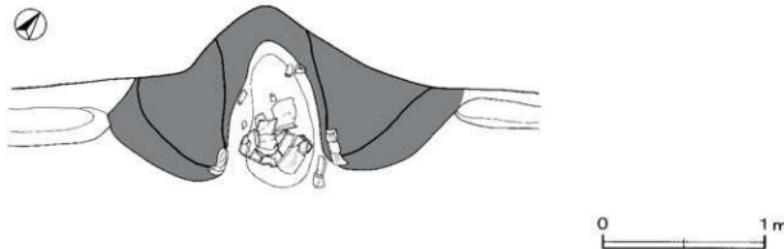
ピット 10か所。P1～P4は深さ47～61cmで、配置から主柱穴である。P1・2は同一か所に2か所掘



第38図 第25号住居跡実測図（1）



第39図 第25号住居跡実測図（2）



第40図 第25号住居跡実測図（3）

り込まれていることから、柱の立て替えが考えられる。P 5は深さ27cmで、P 3の北側に位置していることから補助柱穴とみられる。P 6～P 8は深さ19～21cmで、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 9は南壁際、P 10は中央部に位置しており、性格不明である。

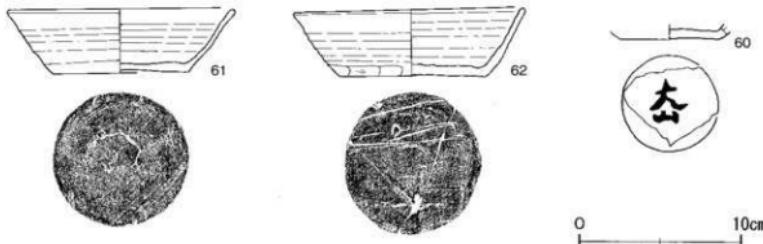
**覆土** 9層に分層できる。各層にローム粒子を含んでいるが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第10層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

1 黒 土 色	ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量	5 噴 開 色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 桐 明 細 色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量	6 噴 開 色	燒土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
3 暗 極 色	ローム粒子・燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	7 噴 開 色	ローム粒子少量
4 暗 土 色	燒土ブロック中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	8 噴 開 色	ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量
	化粧土微量	9 黒 土 色	ローム粒子少量
		10 暗 土 色	ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片732点（坏27、壺1、甕類700、瓶4）、須恵器片216点（坏144、蓋20、長頭瓶1、甕類51）、土製品39点（支脚2、糸錘車3、管状土錘34）、鉄製品3点（刀子・鎌・不明鉄製品）が、北部の床面から覆土中層を中心に出土している。61は壁溝の覆土中、TP 6・DP26は中央部の床面、64・DP20は竈の覆土下層、DP18・DP21・DP23・DP24は竈の覆土中層、DP27は北東部の覆土中層、DP17は東部、M 22西部の覆土上層からそれぞれ出土している。65は中央部の覆土下層から出土した破片、62は北東部の覆土下層と北西部の覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。60・63・TP 5・DP19・DP22・DP25・M 21は覆土中からそれぞれ出土している。

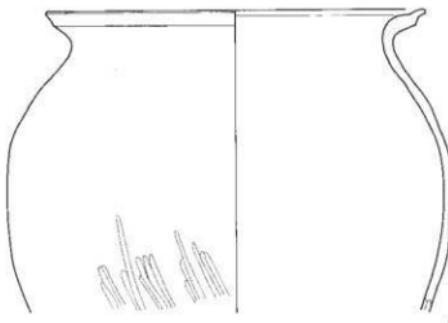
**所見** 本跡は、竈の焚口を角柱状の砂岩で構築している住居である。時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。



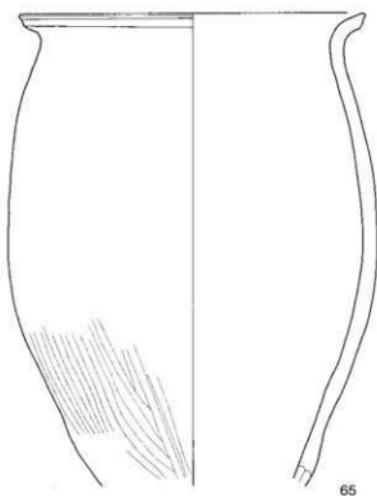
第41図 第25号住居跡出土遺物実測図（1）



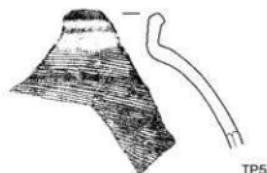
63



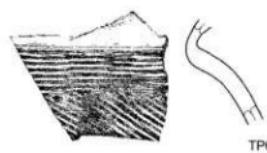
64



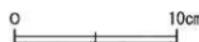
65



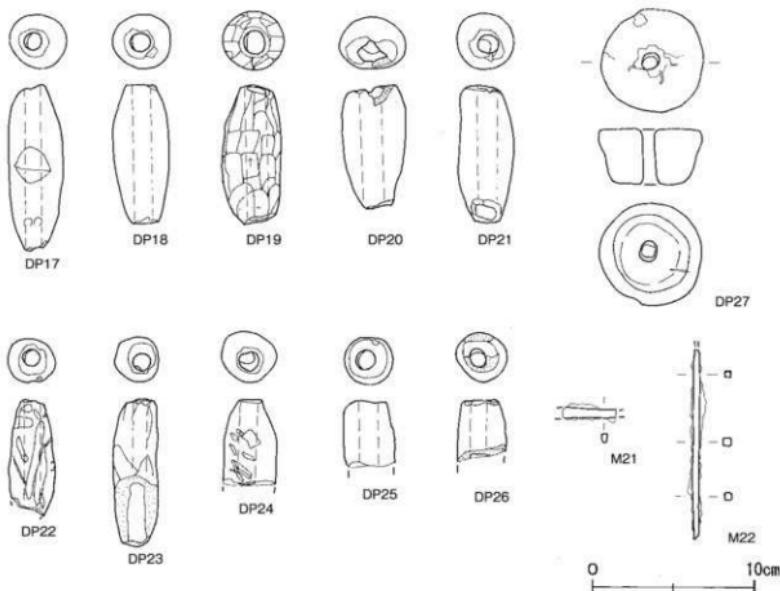
TP5



TP6



第42図 第25号住居跡出土遺物実測図（2）



第43図 第25号住居跡出土遺物実測図（3）

第25号住居跡出土遺物観察表（第41～43図）

番号	種 別	器種	口径	高さ	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 殊 は か	出土位置	備 考
60	土器部	环	—	(0.9)	60	長石・石英・雲母	黄褐色	普通	底部一方向のヘラ削り 塗書「大山」	覆土中	20% PL22
61	粗毛器	环	13.7	4.0	84	長石・石英・雲母	に赤い質感	普通	底部一方向のヘラ削り	覆溝土中	90% PL20
62	粗毛器	环	14.1	4.2	89	長石・石英・雲母	黄褐色	普通	底部下端手持ちヘラ削り 端部一方向のヘラ削り	覆土下層・半層	70% PL20
63	粗毛器	粗面環	—	(4.7)	[35.2]	長石・石英・雲母	に赤い質感	普通	底部外側斜位の平行叩き 内面斜付有	覆土中	10% PL22
64	土器部	甌	23.0	(186)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い質感	普通	底部外側斜位のヘラ削き 内面ナデ	覆土下層	45% PL22
65	土器部	甌	21.0	(293)	—	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	底部外側斜位のヘラ削き 内面ヘラナデ	覆土下層	60% PL22

番号	種 別	器種	胎 土					手 法 の 特 殊 は か		出土位置	備 考
			長石	石英	云母	灰	材質	底部外側斜位の平行叩き	内面ヘラナデ		
TP 5	粗毛器	粗面甌	長石・石英			灰	体部外側斜位の平行叩き 内面ヘラナデ			覆土中	PL28
TP 6	粗毛器	甌	長石・石英・雲母			灰	体部外側斜面横位の平行叩き 中位斜位の平行叩き 内面ヘラナデ			床面	PL28

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材 質	特 殊	出土位置	備 考
DP17	質状土錐	10.2	3.4	1.0	(993)	土 (長石・石英)	ナデ 体部一部欠損	覆土上層	PL29
DP18	質状土錐	8.5	3.3	1.1	298	土 (長石・石英)	ナデ	覆土上層	PL29
DP19	質状土錐	8.5	3.6	1.3	881	土 (長石・石英)	舞面ヘラ削り	覆土中	PL29
DP20	質状土錐	7.6	3.2	1.3	(769)	土 (長石・石英)	ナデ 端部一部欠損	覆土下層	PL29
DP21	質状土錐	8.5	3.4	1.3	786	土 (長石・石英)	ナデ	覆土中層	PL29
DP22	質状土錐	(7.2)	2.6	1.0	(408)	土 (長石・石英)	ナデ 端部一部欠損	覆土中	PL29
DP23	質状土錐	9.1	2.8	1.1	(523)	土 (長石・石英)	ナデ 端部欠損	覆土中層	PL29

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP28	管状土錐	(5.3)	3.4	1.1	(47.7)	土(鉄石・石英)	ナデ ヘラ当て痕有り 薙部欠損	薙覆土中層	PL29
DP25	管状土錐	(4.1)	2.8	1.1	(29.0)	土(鉄石・石英)	ナデ 薙部欠損	薙土中	PL29
DP26	管状土錐	(3.8)	3.1	0.9	(27.6)	土(鉄石・石英)	ナデ 薙部欠損	床面	PL29
DP27	結節車	6.2	3.4	1.0	122.7	土(鉄石・石英)	側面ヘラナデ 一方向からの穿孔	薙土中層	PL29

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 21	刀子	(3.3)	0.8	0.4	(31.2)	鉄	刃部・茎部欠損 刃部断面長方形	薙土中	
M 22	刀	(11.8)	0.5	0.5	(89.0)	鉄	側身部欠損 茎部断面正方形	薙土上層	PL32

### 第28号住居跡（第44図）

位置 調査区中央部のD4e0区、標高19.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第9号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.72m、短軸3.58mの方形で、主軸方向はN-22°-Wである。壁高は16~23cmで、ほぼ直立している。

床 中央部が若干高いがほぼ平坦な貼床である。中央部は踏み固められているが、北西部は重複しているため不明である。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロック・炭化粒子を含むにぶい黄褐色土、褐色土を9~23cmほど埋めて構築されている。中央部と南東部の床面上に焼土塊を確認したが、床面は赤変していない。

竈 北壁中央部に付設されている。第9号住居により大部分が壊されており、袖構築材の一部が確認されただけである。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第1層を積み上げて構築されている。第2~4層は、掘方への埋土である。

#### 出土層解説

- |         |                    |         |                      |
|---------|--------------------|---------|----------------------|
| 1 床 周 色 | 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子微量 | 3 竈 周 色 | 燒土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 壁 周 色 | ローム粒子・燒土粒子微量       | 4 竈 周 色 | ローム粒子少量、燒土粒子微量       |

ピット 深さ29cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

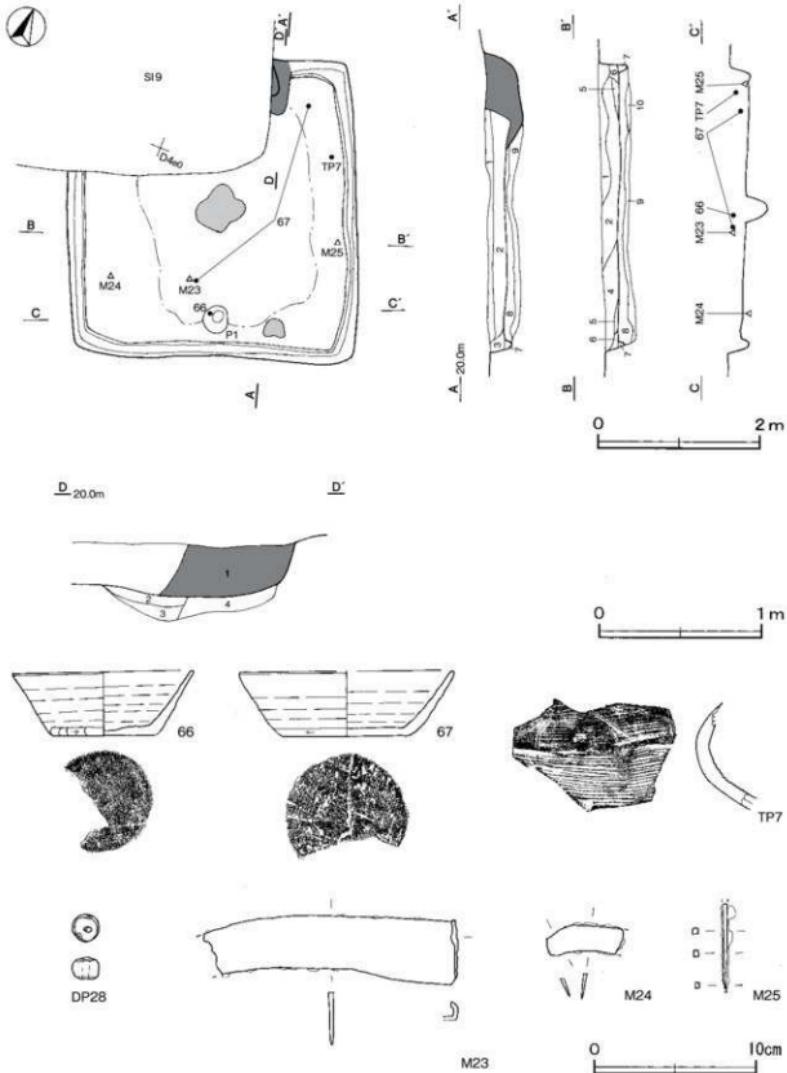
覆土 7層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第8~10層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

- |          |                  |          |                  |
|----------|------------------|----------|------------------|
| 1 細 周 色  | ローム粒子微量          | 6 黒 橙 色  | 炭化粒子微量           |
| 2 細 周 色  | ロームブロック少量、燒土粒子微量 | 7 細 周 色  | ローム粒子微量          |
| 3 細 橙 色  | ロームブロック少量        | 8 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 4 にぶい黄褐色 | 燒土ブロック少量、ローム粒子微量 | 9 細 色    | ロームブロック少量        |
| 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量        | 10 細 色   | ローム粒子少量          |

遺物出土状況 土師器片74点(甕類68、瓶6)、須恵器片38点(壺25、甕類13)、土製品2点(土玉、管状土錐)、鉄製品3点(鎌2、釘1)が出土している。また、混入した陶器片1点(碗)、磁器片1点(猪口)も出土している。M 24は南西部、M 25は東部の床面、66・M 23は南部、TP 7は北東部の覆土中層からそれぞれ出土している。67は、北東部と南部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。DP28は、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から8世紀後葉に比定できる。



第44図 第28号住居跡・出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表（第44図）

番号	種 別	器種	口径	深高	底径	胎 土	色 調	堆成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
66	瓶形器	环	11.0	40	62	黄石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方方向のヘラ削り	覆土中層	60%
67	瓶形器	环	(13.0)	40	74	黄石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方方向のヘラ削り	覆土中層	60%
番号	種 別	器種				胎 土	色 調		手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP.7	瓶形器	类	黄石・石英・雲母			灰			体部外側横位の平行叩き 内面ナデ		覆土中層 PL.28
番号	器 様	長さ	径	孔径	重量	材 質			特 徴	出土位置	備 考
DP28	土玉	1.3	1.6	0.4	3.32	土(黄石・石英)	ナデ	一方向からの穿孔		覆土中	PL.29
番号	器 様	長さ	幅	厚さ	重量	材 質			特 徴	出土位置	備 考
M.23	鑑	(15.7)	4.0	0.3	(64.6)	鉄			切先部欠損 植諾着部上方へ90度折り曲げ	覆土中層	PL.31
M.24	小鑑	(4.9)	1.6	0.2	(7.45)	鉄			植付部欠損		
M.25	鉗	(5.3)	0.4	0.4	(3.02)	鉄			断面方形		

第29号住居跡（第45・46図）

位置 調査区中央部のD5c5区、標高 19.7 m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 3.50 m、短軸 3.28 m の方形で、主軸方向は N - 27° - W である。壁高は 48 ~ 56 cm で、ほぼ直立している。

床 東部が若干高いがほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロックを含むにぶい黄褐色土と褐色土を 11 ~ 19 cm ほど埋めて構築されている。

窓 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 58 cm で、燃焼部幅は 44 cm である。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第7層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、ローム粒子等を含んだ第8 ~ 10 層を埋土して構築されており、火床面は赤茶硬化していない。煙道部は壁外に 35 cm 挖り込まれ、火床面からほぼ直立している。

#### 出土層解説

1	暗	褐	色	燒土ブロック少量、ロームブロック・砂質粘土粒子微量	6	にふい青褐色	ロームブロック多量
2	暗	褐	色	ロームブロック中量、燒土ブロック・炭化粒子微量	7	灰 黄	褐 色 砂質粘土ブロック多量、燒土粒子微量
3	黒	褐	色	砂質粘土粒子少量、燒土粒子微量	8	暗	褐 色 白色粘土粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量
4	黒	褐	色	ロームブロック中量、燒土粒子微量	9	暗	褐 色 ローム粒子・燒土粒子微量
5	暗	褐	色	砂質粘土粒子中量、ロームブロック少量	10	褐	褐 色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量

ピット 深さ 9 cm で、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 12 層に分層できる。第 1 ~ 6 層は、ロームブロックを多量に含み、不自然な堆積状況を示していることから埋め戻されている。第 7 ~ 12 層は、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。

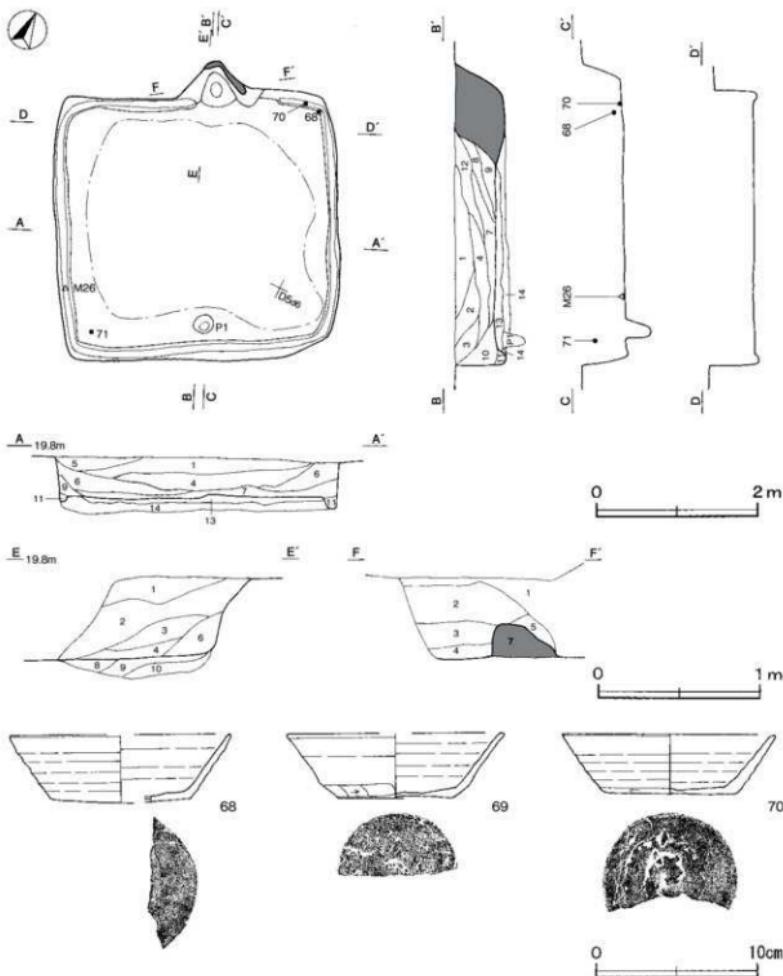
第 13・14 層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

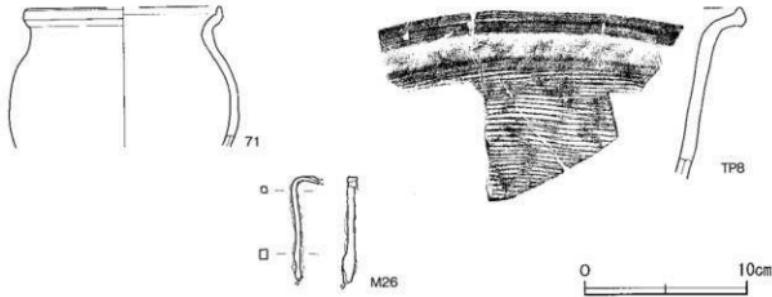
1	暗	褐	色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量	8	黒	褐	色	砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・燒土粒子微量
2	暗	褐	色	ロームブロック多量、炭化粒子微量	9	黒	褐	色	ローム粒子・砂質粘土粒子微量
3	暗	褐	色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	10	無	褐	色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
4	暗	褐	色	ロームブロック多量、燒土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	11	暗	褐	色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
5	黒	褐	色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量	12	黒	褐	色	砂質粘土ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
6	暗	褐	色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量	13	にふい青褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量		
7	黒	褐	色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量	14	暗	褐	色	ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土師器片 72 点（壺類 71、小形壺 1）、須恵器片 65 点（坏 37、蓋 2、壺類 26）、鉄製品 1 点（門ヶ）が出土している。また、混入した陶器片 1 点（鑿鉢）、磁器片 2 点（碗）も出土している。70 は整溝の覆土中、68 は北東部、M 26 は南西部の覆土下層、71 は南西部の覆土上層からそれぞれ出土している 69・TP 8 は、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。



第 45 図 第 29 号住居跡・出土遺物実測図



第46図 第29号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡出土遺物観察表（第45・46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
68	須恵器	环	[13.5]	4.2	[8.7]	良石	にあく黒帯	普通	底部一向向のハラ削り	覆土下層	30%
49	須恵器	环	[13.3]	4.1	7.1	良石・石英	灰	普通	体部下端手持ちハラ削り 底部多方向のハラ削り	覆土中	40%
70	須恵器	环	13.1	3.7	8.1	良石・石英・雲母	にあく黒帯	不良	体部下端回転へラ削り 底部回転へラ切り削を残す 横溝なし	標溝裏上中	60%
71	土器部	小形壺	[11.8]	[8.6]	—	良石・石英・雲母	にあく黒帯	普通	外・内面ナデ	覆土上層	20%
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考				
TP8	須恵器	壺	良石・石英	灰黄	体部外側横位の平行叩き 内面十字	覆土中	PL28				
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考		
M26	円錐	(6.5)	0.5	0.6	(5.30)	鉄	断面長方形	覆土中			

表3 奈良時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模(m) (長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	構造	内部施設		土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)	
								主軸	出入口	壁	床	窓		
1	C 3.8	方 形	N - 20° - W	3.30 × 3.28	55 - 68	平頂	全周	-	2	-	窓 I	-	自然	土器部、須恵器 8世紀後葉
2	C 2.7	方 形	N - 19° - W	4.56 × 4.62	40 - 54	平頂	全周	4	1	-	窓 I	-	自然	土器部、須恵器、供養品 8世紀前葉
3	D 3.6	方 形	N - 22° - W	4.50 × 4.48	40 - 50	平頂	全周	4	1	3	窓 I	-	自然	土器部、須恵器、石製品、 8世紀前葉
6	D 4.6	方 形	N - 20° - W	4.70 × 4.52	54 - 62	平頂	全周	4	1	-	窓 I	-	自然	土器部、須恵器、土製品、 8世紀前葉
7	C 4.6	方 形	N - 16° - W	3.60 × 2.24	66 - 68	平頂 (全周)	2	1	3	-	-	-	自然	土器部、須恵器、供養品 8世紀後葉
8	C 4.15	長方形	N - 23° - W	4.00 × 3.34	32 - 60	平頂	全周	-	2	-	窓 I	-	人為	土器部、須恵器、土製品 8世紀前葉
12	C 4.18	方 形	N - 26° - W	4.60 × 4.50	68 - 76	平頂	全周	3	1	3	窓 I	-	自然	土器部、須恵器、土製品、 8世紀後葉
13	C 4.19	方 形	N - 21° - W	3.34 × 3.10	40	平頂 [全周]	-	1	-	窓 I	-	自然	土器部、須恵器 8世紀後葉	
15	C 5.6	方 形	N - 15° - W	3.86 × 3.60	48 - 64	平頂	全周	-	2	-	窓 I	-	人為	土器部、須恵器、土製品、 8世紀中期
18	C 6.19	方 形	N - 20° - W	3.84 × 3.74	46 - 54	平頂	-	-	1	4	窓 I	-	自然	土器部、須恵器、土製品 8世紀後葉
19	C 7.4	方 形	N - 30° - W	3.25 × 3.22	18 - 27	平頂	-	-	-	4	窓 I	-	自然	土器部、須恵器 8世紀後葉
20	C 7.16	方 形	N - 29° - W	2.64 × 1.76	29 - 47	平頂	-	-	-	-	窓 I	-	人為	土器部、須恵器 8世紀後葉
21	B 7.16	方 形	N - 17° - W	3.38 × 3.34	26 - 37	平頂 [全周]	-	1	-	窓 I	-	人・自	土器部、須恵器、土製品 8世紀後葉	
22	B 8.1	長方形	N - 15° - W	4.04 × 3.62	46 - 52	平頂	全周	-	1	1	窓 I	-	自然	土器部、須恵器、石製品、 8世紀後葉

番号	位置	平面形	主軸方向	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁構	内部施設				主な出土遺物	時期	備考	
								柱穴	出入口	ビット	印・窓・石竪穴				
23	C 7 d9	方 形	N - 30° - W	318 × 304	45 - 48	平坦	[全周]	-	-	3	窓1	-	土師器、須恵器、土製品 鉄製品	8世紀中葉	本跡→SD8
24	C 8 d3	方 形	N - 2° - W	320 × 306	38 - 40	平坦	[全周]	-	-	2	窓1	-	土師器、須恵器、土製品 鉄製品	8世紀後葉	本跡→SD6
25	B 9 16	方 形	N - 38° - W	632 × 614	44 - 53	平坦	[全周]	4	-	6	窓1	-	土師器、須恵器、土製品 鉄製品	8世紀中葉	本跡→SD10
28	D 4 e6	方 形	N - 22° - W	322 × 358	16 - 23	平坦	[全周]	-	1	-	窓1	-	土師器、須恵器、土製品 鉄製品	8世紀後葉	本跡→SD9
29	D 5 c5	方 形	N - 27° - W	350 × 328	48 - 56	平坦	全面	-	1	-	窓1	-	人・目 土師器、須恵器、土製品	8世紀中葉	

## (2) 掘立柱建物跡

### 第1号掘立柱建物跡 (第47・48図)

位置 調査区西部のD3g7区、標高193mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号ビット群のP5・6に掘り込まれている。

規模と構造 東部と南部が調査区域外のため、正確な規模は確定できない。確認できた範囲では、桁行3間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向N-74°-Eの東西棟である。規模は桁行6.60m、梁行4.50mで、面積は29.7m<sup>2</sup>である。柱間寸法は桁行が西妻から2.4m(8尺)・1.8m(6尺)・2.4m(8尺)で、梁行は北妻から2.1m(7尺)・2.4m(8尺)である。柱筋は、ほぼ揃っている。

柱穴 12か所。平面形は円形または楕円形で、長径90~130cm、短径88~106cmである。深さは78~125cmで、掘方の断面形は、逆台形またはU字形である。第1層は柱痕跡、第2~6層は埋土、第7~17層は柱抜き取り後の覆土である。

#### 土層解説 (各柱穴共通)

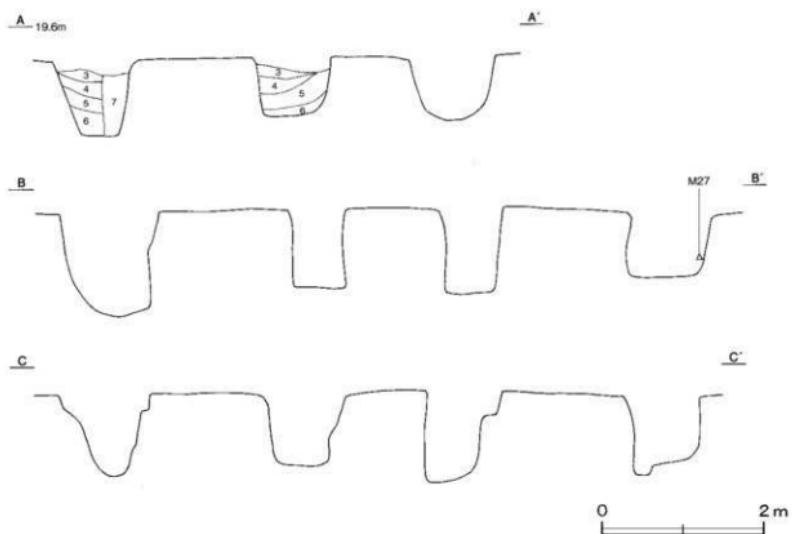
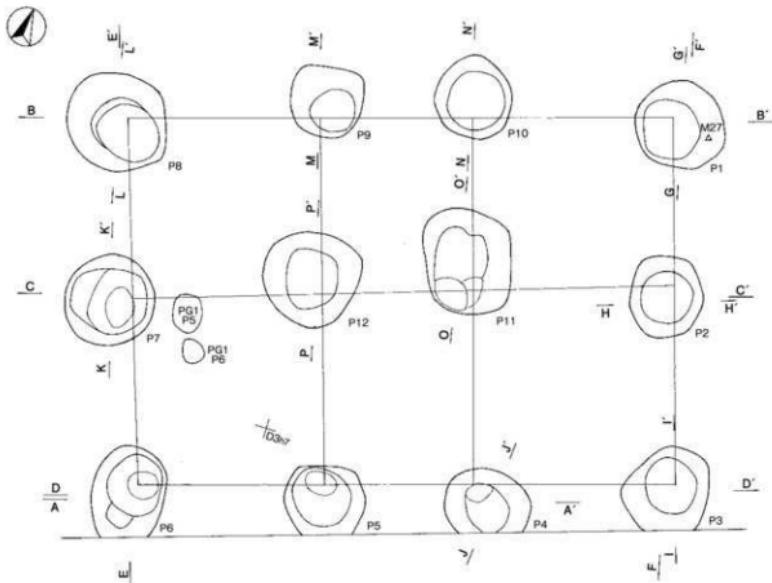
1 黒褐色 ロームブロック少量	10 塗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量	11 暗褐色 ロームブロック、炭化物少量
3 黒褐色 ロームブロック多量	12 塗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック中量	13 塗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
5 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	14 塗褐色 ローム粒子多量
6 黒褐色 ローム粒子微量	15 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
7 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量	16 塗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量
8 暗褐色 ロームブロック多量、炭化物微量	17 塗褐色 ロームブロック中量
9 暗褐色 ローム粒子、炭化粒子微量	

遺物出土状況 土師器片28点(坏4、甕類24)、須恵器片17点(坏8、蓋2、甕類7)、鉄塊1点が各ビットから出土している。M27はP1の覆土中層から出土している。72はP6、TP9はP11の覆土中から出土している。

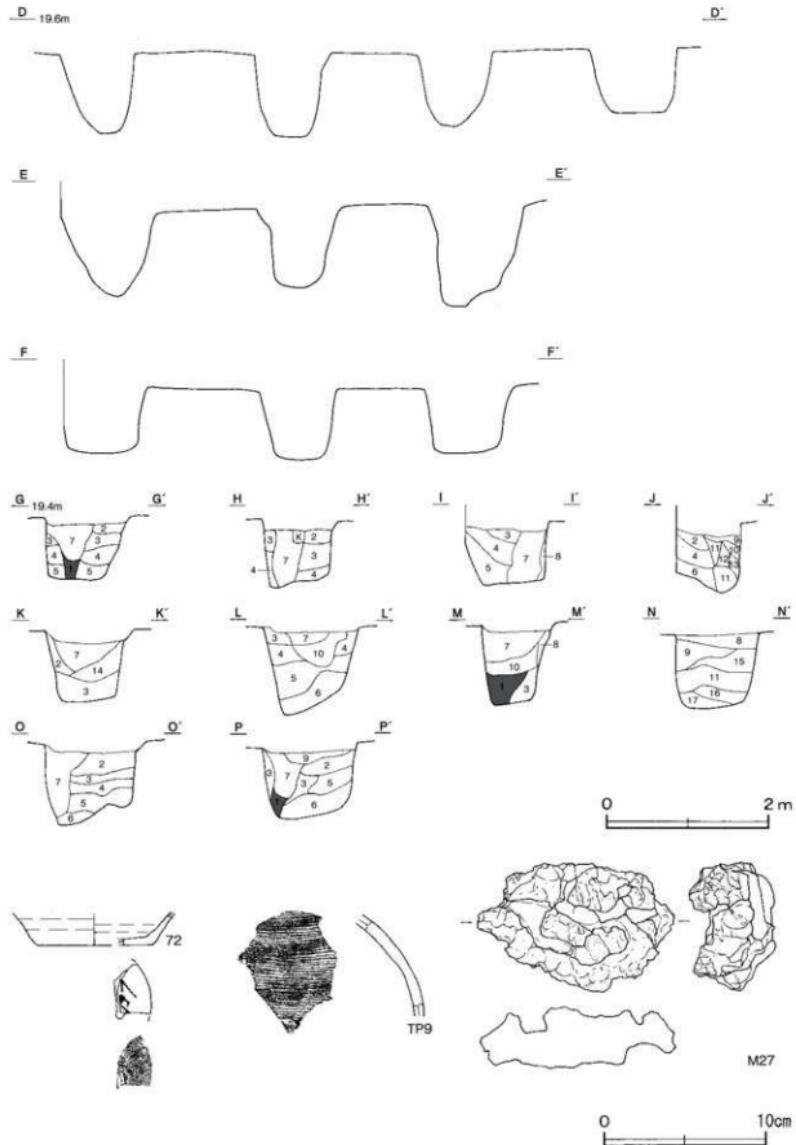
所見 柱穴の規模や配置から、南部に広がることが推測できる。時期は、出土土器から8世紀前半と推定される。

### 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第48図)

番号	種 別	器種	LH横	基高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
72	須恵器	坏	-	(28)	[78]	灰石・石英・雲母	灰青	普通	底部一方向のヘラ削り、墨書き	P 6 覆土中	10% PL22
番号	種 別	器種	胎 土	色 調					手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
TP 9	須恵器	甕	灰石・石英	灰白		体部外面擦痕の平行引き				P 11 覆土中	PL28
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質			特 徴	出土位置	備 考
M 27	鉄塊	29	12.1	5.3	597	鉄	地色は暗褐色灰色で滑らか	着磁性強い		P 1 覆土中層	PL32



第47図 第1号掘立柱建物跡実測図

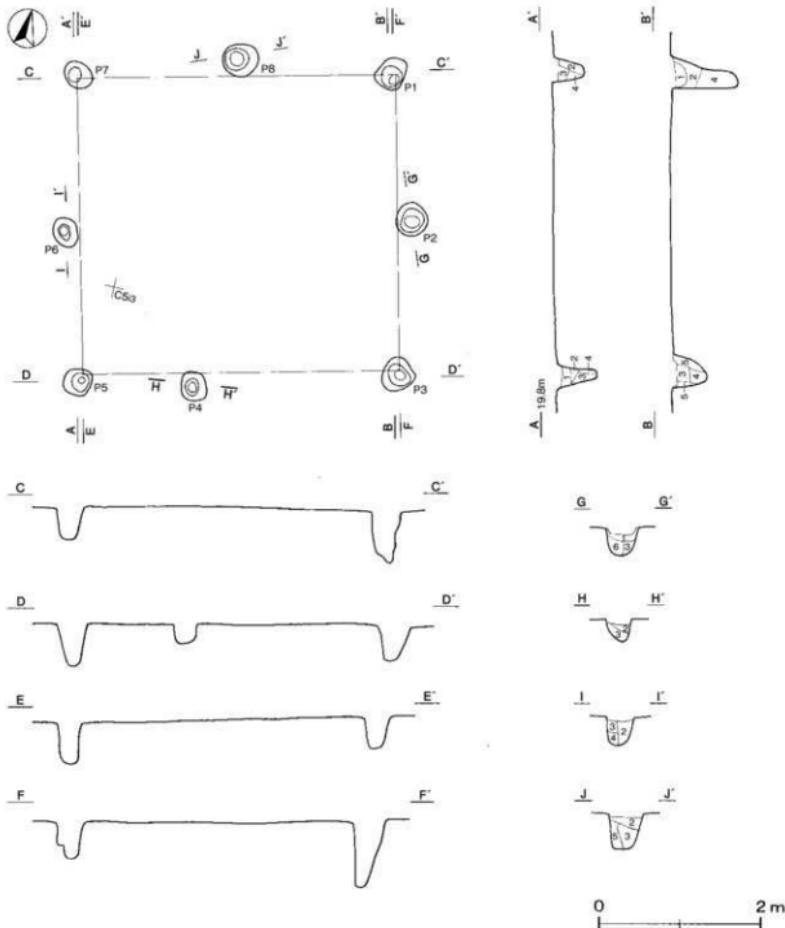


第48図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

### 第6号掘立柱建物跡（第49図）

位置 調査区中央部のC5h3区、標高19.7mの台地平坦部に位置している。

規模と構造 柱行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向N-76°-Eの東西棟である。規模は、桁行3.90m、梁行が3.60mで、面積は14.04m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、桁行が北平は2.1m（7尺）の等間隔で、南平は西妻から1.8m（6尺）・2.4m（8尺）である。梁行は1.8m（6尺）の等間隔に配置されている。柱筋は、不描いである。



第49図 第6号掘立柱建物跡実測図

**柱穴** 8か所。平面形は円形または楕円形で、長径 33 ~ 46cm、短径 30 ~ 39cm である。深さは 28 ~ 60cm である。掘方の断面形は、U 字形である。第 1 ~ 6 層は、柱抜き取り後の覆土である。

土層解説（各柱穴共通）

- 1 黒 細 色 ローム粒子中量
- 2 暗 細 色 ロームブロック中量
- 3 灰 細 色 ロームブロック中量

- 4 灰 細 色 ローム粒子少量
- 5 灰 細 色 ロームブロック中量
- 6 暗 細 色 ロームブロック多量

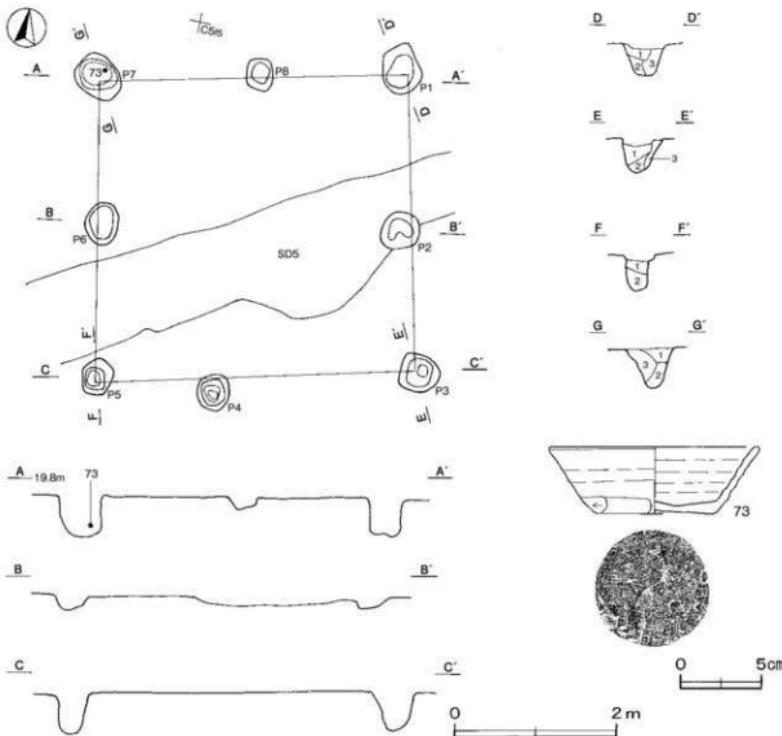
**遺物出土状況** 土師器片 2 点（甕）、須恵器片 3 点（环 1、甕 2）が P1 ~ P3 の覆土中から出土しているが、細片のため図示できない。

**所見** 出土土器が細片のため時期判断は困難であるが、北東 10m に位置する第 9 号掘立柱建物跡と平行方向・規模などがほぼ一致することから、同時期に存在していたと推測される。時期は、8 世紀後半と推定される。

**第 9 号掘立柱建物跡（第 50 図）**

**位置** 調査区中央部の C5f5 区、標高 19.6m の台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第 5 号溝に掘り込まれている。



第 50 図 第 9 号掘立柱建物跡、出土遺物実測図

**規模と構造** 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向N-78°-Eの東西棟である。規模は、桁行3.90m、梁行が3.60mで、面積は14.04m<sup>2</sup>である。桁行の柱間寸法は、西妻から北平が2.1m(7尺)・1.8m(6尺)、南平が1.5m(5尺)・2.4m(8尺)である。梁行は1.8m(6尺)の等間隔に配置されている。柱筋は、不揃いである。

**柱穴** 8か所。平面形は円形または楕円形で、長径38~60cm、短径33~49cmである。深さは15~48cmで、掘方の断面形は、逆台形またはU字形である。第1~3層は、柱抜き取り後の覆土である。

土層解説(各柱穴共通)

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量  
2 極褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

- 3 黒褐色 ローム粒子・純土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片2点(甕)、須恵器片1点(壺)がP3・P7から出土している。また、流れ込んだ繩文土器片1点(深鉢)もP3から出土している。P3は、P7の覆土中層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。

第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第50図)

番号	種別	器種	L1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	はか	出土位置	備考
73	須恵器	壺	12.7	4.1	7.4	長石・石英	灰灰	良好	体部下端手持ちハラ削り・底部一方回のハラ削り 墨書き	P7 覆土中層	60%	PL26

表4 奈良時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位位置	桁行方向	柱間数		規格		面積		柱間寸法		柱穴			主な出土遺物	時期	備考
			幅×奥(間)	幅×奥(メートル)	(af)	桁行(m)	梁間(m)	棟造	柱穴数	平面形	深さ(cm)					
1	D 3 g2	N-74°-E	3×2	6.60×4.50	29.70	18~24	21~24	超柱	12	円形・楕円形	26~125	土師器、須恵器	8世紀前半	本跡→PGI P5・P6	重複関係(古→新)	
6	C 5 h3	N-76°-E	2×2	3.90×3.60	14.08	18~24	18.0	楕柱	8	円形・楕円形	28~60	土師器、須恵器	8世紀後半			
9	C 5 f2	N-78°-E	2×2	3.90×3.60	14.08	15~24	18.0	楕柱	8	円形・楕円形	15~48	土師器、須恵器	8世紀後半	本跡→SD5		

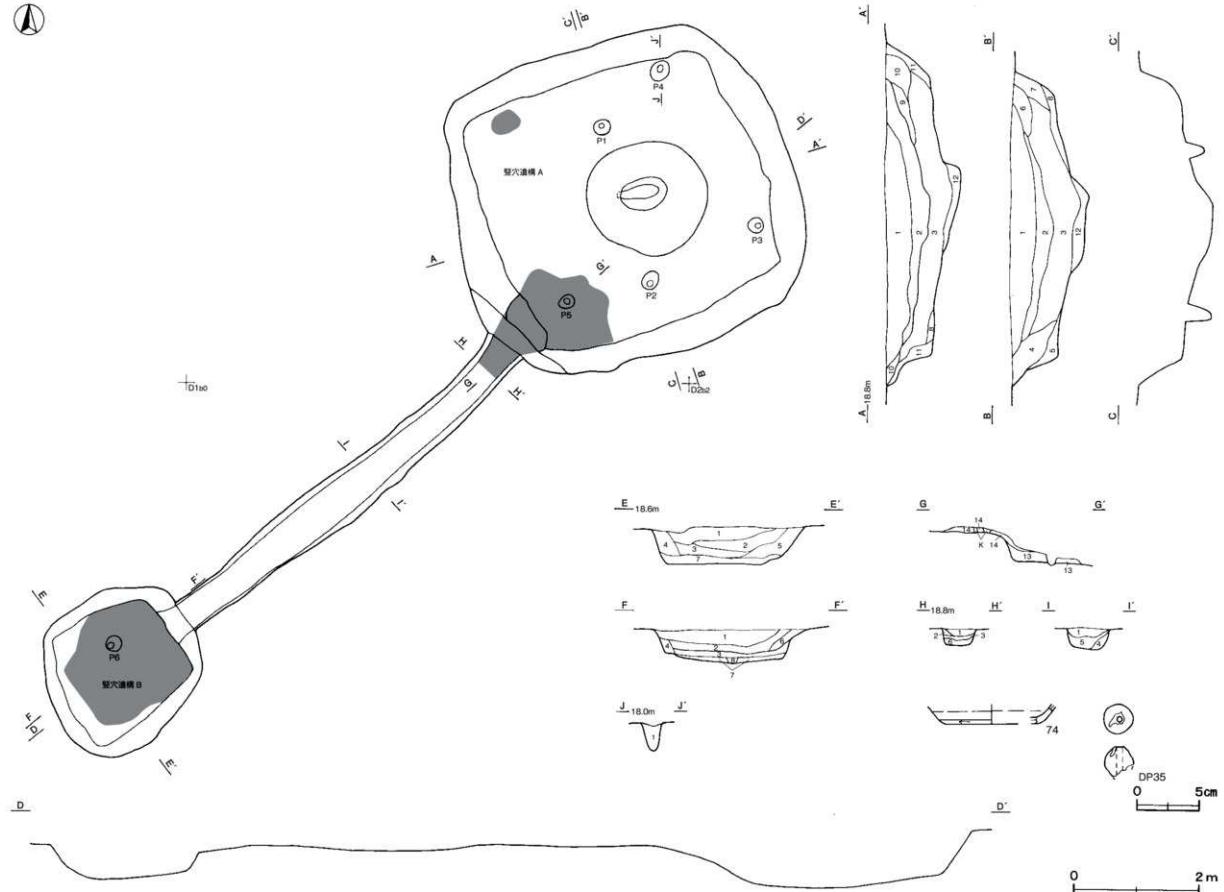
(3) 連結堅穴造構

第1号連結堅穴造構(第51図)

**位置** 調査区西部のD2b1区、標高185mの台地平坦部に位置している。

**確認状況** 堅穴造構A(図A)と重複する溝跡を確認した。トレント調査で新旧の確認を行ったところ、堅穴造構A(図A)の南西コーナー部から溝の北東部にかけて、厚さ8cmの砂質粘土粒子を多量に含む層が続いていることを確認した。また、溝の南西部の搅乱土を除去したところ、新たに溝と重複する堅穴造構B(図B)を1基確認した。覆土の堆積状況を検討した結果、これらの造構は同時期に機能していたものと判断し、堅穴造構Aと溝で連結された堅穴造構Bを連結堅穴造構とした。

**規模と構造** 堅穴造構Aは、長軸5.49m、短軸5.03mの隅丸方形で、長軸方向はN-73°-Eである。形状は擂鉢状で、底面は硬化している。深さは119cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面中央には、径185cm、深さ37cmの円筒形の掘り込みがある。南西コーナー部には、白色粘土と砂質粘土がスロープ状に貼られており、上層にあたる砂質粘土層は、溝の北東部まで続いている。北西壁際の床面上に白色粘土ブロックが、径38cmの範囲で確認できた。堅穴造構Bは、長軸2.56m、短軸2.44mの隅丸方形で、長軸方向はN-57°-Eである。底面は平坦で、厚さ8~13cmの白色粘土が、西・南壁下の一部を除いた部分に貼られている。壁高は58cmで、



第51図 第1号連結竪穴遺構・出土遺物実測図

外傾して立ち上がっている。2つの堅穴造構を連結する溝はほぼ直線で、全長6.72m、上幅0.51~0.76m、下幅0.44~0.56mで、深さは26~32cmである。走行方向はN-51°-Eで、堅穴造構Aの南西コーナー部と堅穴造構Bの北辺を結んでいる。断面形は逆台形状で、底面は平坦で硬化している。底面のレベルは、ほぼ水平である。

**ピット** 堅穴造構A 5か所。P1は深さ24cm、P2は深さ38cmで、長軸方向と直交して、2.6mの間隔では中央部に位置していることから柱穴と考えられる。P3は深さ33cmで南東壁際、P4は深さ40cmで北壁際で位置しており、性格不明である。P5は深さ6cmで、南西部に貼られた砂質粘土層の下から確認されたが、性格不明である。

堅穴造構B 1か所。P6は深さ32cmで中央部に位置しており、性格不明である。

**覆土** 堅穴造構Aは12層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第13・14層はスロープの構築粘土である。堅穴造構Bは8層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。溝は6層に分層できる。第1~5層は、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第6層は、堅穴造構Aから続く砂質粘土層である。

#### 堅穴造構A土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	8 黒褐色	ロームブロック中量。焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子中量。炭化粒子少量。焼土粒子微量	9 黒褐色	炭化粒子中量。ローム粒子少量
3 喀褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	10 黒褐色	ローム粒子中量。焼土粒子・炭化粒子微量
4 喀褐色	ローム粒子少量。焼土粒子微量	11 にぶい黄褐色	ローム粒子微量
5 にぶい黄褐色	ロームブロック中量。砂質粘土粒子微量	12 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量
6 喀褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	13 にぶい黄褐色	白色粘土ブロック多量。焼土ブロック多量
7 喀褐色	ロームブロック中量	14 にぶい黄褐色	砂質粘土粒子多量。焼土粒子少量

#### 堅穴造構B土層解説

1 喀褐色	ロームブロック中量	5 にぶい黄褐色	ロームブロック中量。焼土粒子少量
2 喀褐色	ローム粒子微量	6 喀褐色	ローム粒子少量
3 にぶい黄褐色	ロームブロック中量。白色粘土粒子少量	7 喀褐色	白色粘土ブロック多量。ローム粒子・焼土粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック少量。炭化粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子微量

#### 溝土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	4 にぶい黄褐色	ロームブロック中量
2 にぶい黄褐色	ローム粒子微量	5 喀褐色	ローム粒子微量
3 喀褐色	砂質粘土粒子中量。ローム粒子・焼土粒子少量	6 にぶい黄褐色	砂質粘土粒子多量。焼土粒子少量

**遺物出土状況** 堅穴造構Aは、土師器片43点(甕類)、須恵器片11点(环)、土製品1点(土玉)が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片5点(深鉢)、石器1点(鎌)も出土している。74・DP35は、覆土中から出土している。堅穴造構Bと溝からは遺物は出土していない。

**所見** 堅穴造構Aは擂鉢状の構造のため、居住施設とは考えにくい。性格は、堅穴造構Aと溝の底面が硬化していることや、堅穴造構Aに入り口に使用したと考えられるスロープ状の粘土堆積が確認されたことから、作業場または倉庫として機能していたものと想定できる。出土土器が細片のため時期判断は困難であるが、覆土中から出土している須恵器片の様相から8世紀前半と推定される。

第1号連続堅穴造構出土遺物観察表(第51回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
74	須恵器	环	-	(1.4)	(7.3)	長石・石英	緑灰青	普通	体部下端一方向へのく折り	覆土中	5%
番号	部種	大きさ	径	孔径	重量	材質	特徴			出土位置	備考
DP35	土玉	(24)	24	0.5	(9.25)	土(長石・石英)	ナデ	一方向からの穿孔	端部欠損	覆土中	PL29

#### (4) 土坑

##### 第1号土坑（第52図）

**位置** 調査区西部のC3i5区、標高19.5mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径1.37m、短径1.13mの楕円形で、長径方向はN-20°-Eである。深さは24cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 5層に分層できる。各層にロームブロック・粒子を含んでいることから埋め戻されている。

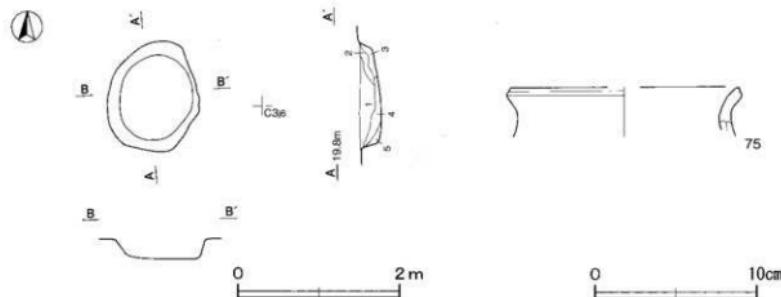
##### 土層解説

1	褐	色	ローム粒子中量、炭化物少量、焼土粒子微量
2	褐	色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
3	黒	色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

4	黒	色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
5	褐	色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片9点（壺）が出土している。75は、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土器から8世紀前葉に比定できる。



第52図 第1号土坑・出土遺物実測図

##### 第1号土坑出土遺物観察表（第52図）

番号	様式	沿様	口様	器表	底	施土	色調	焼成	手法の特徴	はか	出土状況	備考
75	土師器	壺	[14.0]	[3.0]	-	長石・石英・雲母	ぶぶ・黒	普通	内面ナマ		覆土中	5%

##### 第2号土坑（第53図）

**位置** 調査区西部のD3a5区、標高19.5mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径0.57m、短径0.48mの楕円形で、長径方向はN-31°-Wである。深さは18cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

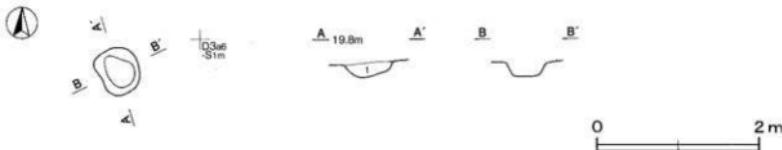
**覆土** 単一層である。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

##### 土層解説

1	褐	色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
---	---	---	-------------------

**遺物出土状況** 土師器片8点（壺）が出土しているが、細片のため図示できない。

**所見** 出土器が細片のため時期の確定は困難であるが、覆土中から出土している土師器壺の様相から8世紀代と推定される。



第53図 第2号土坑実測図

### 第3号土坑（第54図）

**位置** 調査区西部のD3a6区、標高19.5mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 径0.44mの円形で、深さは52cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 2層に分層できる。各層にロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

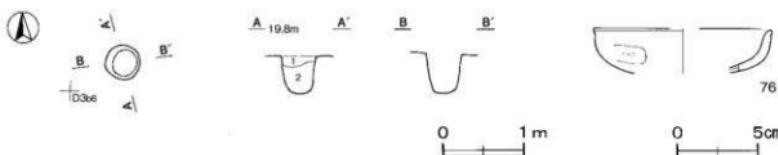
#### 土層解説

1 帽 開 色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量

2 帽 開 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片3点（壺1、甕2）が出土している。76は、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第54図 第3号土坑・出土遺物実測図

### 第3号土坑出土遺物観察表（第54図）

番号	種 別	器種	LH径	径高	底径	胎 土	色 調	燒成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
76	土師器	壺	[11.0]	(2.7)	—	共石・石素	褐	普通	体外表面へ塗り	覆土中	10%

### 第20号土坑（第55図）

**位置** 調査区西部のD3g6区、標高19.2mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号ピット群のP4を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.56m、短径1.44mの円形で、深さは33cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。各層にロームブロック・粒子を含んでいることから埋め戻されている。

#### 土層解説

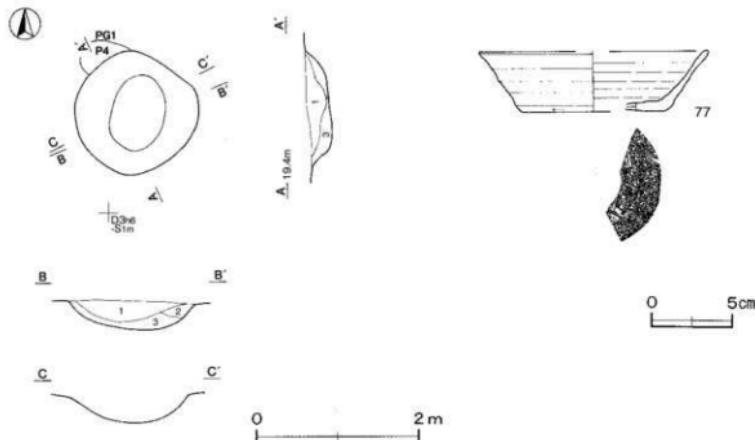
1 帽 開 色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量

3 黒 開 色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量

2 帽 開 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片13点（甕）、須恵器片10点（壺7、甕3）が出土している。また、流れ込んだ繩文土器片1点（深鉢）も出土している。77は、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第 55 図 第 20 号土坑・出土遺物実測図

第 20 号土坑出土遺物観察表（第 55 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	燒成	手 法 の 特 徴 は か	出土状況	備 考
77	須恵器	环	[14.0]	37	[8.6]	長石・石英	黒灰	普通	底部下端回転へラ削り、底部一方に向かうハラ削り	覆土中	30%

第 39 号土坑（第 56 図）

位置 調査区中央部の D4g4 区、標高 19.8 m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 径 0.42 m の円形で、深さは 36cm である。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2 層に分層できる。各層にロームブロック・粒子を含んでいることから埋め戻されている。

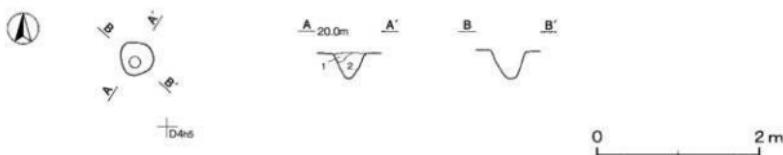
土壤解説

1 黒 細 色 ローム粒子・炭化粒子少量

2 細 細 色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 1 点（甕）、須恵器片 4 点（环 2、蓋 1、甕 1）が出土しているが、細片のため図示できない。

所見 出土土器が細片のため時期の確定は困難であるが、覆土中から出土している須恵器环と蓋の様相から 8 世紀代と推定される。



第 56 図 第 39 号土坑実測図

### 第40号土坑（第57図）

**位置** 調査区中央部のD411区、標高19.5mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 南部と西部が調査区域外に延びているため、短径は1.28mで、長径は1.12mしか確認できなかった。平面形は橢円形あるいは不整形と推定され、長径方向はN-6°-Eである。深さは35cmで、底面は平坦である。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 4層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示したことから自然堆積である。

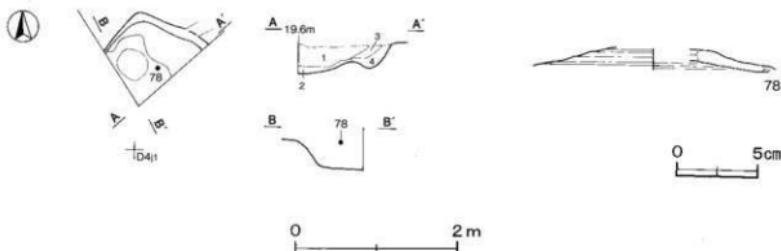
#### 土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量  
2 にふく黄褐色 ローム粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量  
4 極褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土師器片1点（甕）、須恵器片1点（蓋）が出土している。78は、覆土上層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後半と推定される。



第57図 第40号土坑・出土遺物実測図

第40号土坑出土遺物観察表（第57図）

番号	種別	基標	口徑	基高	底径	幼土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
78	須恵器	蓋	-	(1.8)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部剥離へテ削り	覆土上層	10%

表5 奈良時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	C 3.15	N - 29° - E	橢円形	1.37 × 1.13	24	平坦	外傾	人為	土師器	重複開発(古→新)
2	D 3.65	N - 31° - W	橢円形	0.57 × 0.48	18	平坦	外傾	自然	土師器	
3	D 3.66	-	円 形	0.44 × 0.43	52	基状	外傾	人為	土師器	
20	D 3.66	-	円 形	1.56 × 1.44	33	基状	磚斜	人為	土師器・須恵器	PG1 → 本跡
39	D 4.64	-	円 形	0.42 × 0.42	36	基状	外傾	人為	土師器・須恵器	
40	D 4.11	N - 6° - E	不整形	(1.12) × 1.28	35	平坦	外傾	自然	土師器・須恵器	

### 3 平安時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡5棟、土坑3基である。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

#### (1) 竪穴住居跡

##### 第4号住居跡（第58・59図）

位置 調査区西部のD3b0区、標高19.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.84m、短軸3.70mの方形で、主軸方向はN-9°-Wである。壁高は44~56cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。貼床は、ロームブロック・炭化粒子を含む暗褐色土と褐色土を3~12cmほど埋めて構築されている。

窓 2か所。窓1は、北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで89cmで、燃焼部幅は25cmである。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第9層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、ロームブロック・炭化粒子を含んだ第10・11層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に68cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。窓2は、北西コーナー部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで110cmで、燃焼部幅は54cmである。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第9層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は赤変硬化していない。煙道部は壁外に39cm掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。窓1に火床部を塞いだと思われる壁材の層が確認できることから、窓1から窓2へ作り替えられていると考えられる。

##### 窓1土層解説

1	暗褐色	ロームブロック中量	7	にい青褐色	燒土粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	8	暗褐色	ローム粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・砂質粘土粒子少量	9	にい青褐色	砂質粘土ブロック多量、ロームブロック・燒土ブロック中量
4	にい青褐色	燒土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック中量、燒土粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量	11	暗褐色	ロームブロック中量

##### 窓2土層解説

1	暗褐色	燒土粒子少量、ローム粒子微量	6	暗褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック中量	7	暗褐色	ロームブロック中量、燒土粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量	8	にい青褐色	ロームブロック微量
4	にい青褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量	9	灰黃褐色	砂質粘土ブロック多量、燒土粒子微量
5	にい青褐色	ローム粒子・炭化粒子微量			

ピット 3か所。P1~P3は深さ33~42cmで、配置から主柱穴である。

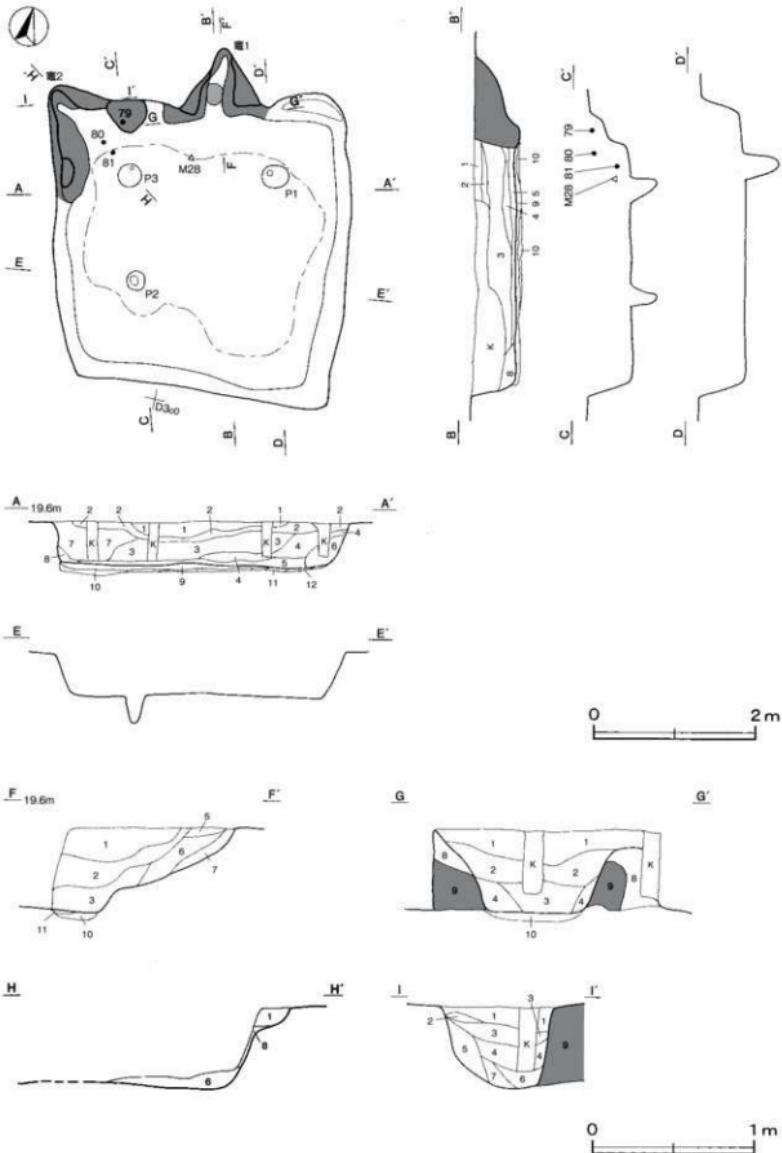
覆土 8層に分層できる。各層にロームブロックを含んでおり、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第9~12層は、貼床の構築土である。

##### 土層解説

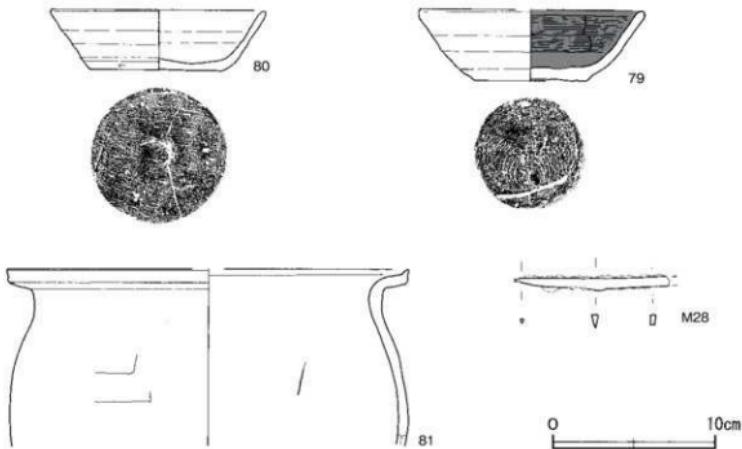
1	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	7	暗褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・燒土粒子少量
2	暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量	8	暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック少量
3	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	9	暗褐色	ロームブロック中量、燒土粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック少量
5	暗褐色	ロームブロック中量	11	にい青褐色	ロームブロック少量
6	にい青褐色	ロームブロック少量、砂質粘土粒子微量	12	にい青褐色	ローム粒子・燒土粒子微量

遺物出土状況 土師器片114点（坏2、甕類112）、須恵器片30点（坏20、蓋1、長頸瓶1、甕類8）、土製品2点（支脚）、鉄製品1点（刀子）が出土している。また、流れ込んだ繩文土器片1点も出土している。81は北西部、M28は中央部の覆土中層、79・80は窓の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第58図 第4号住居跡実測図



第59図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表（第59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	施土	色調	焼成	手法の特徴は	出土位置	備考
79	土師器	环	[136]	44	68	長石	にい・橙	普通	底部剥離系切り 内面ヘラ磨き	遺覆土上層	40% PL23
80	土師器	环	13.1	38	8.4	長石・石英・雲母	にい・青帯	不良	体部下端回転ハラ削り 底部一方方向のハラ削り	遺覆土上層	70%
81	土師器	瓶	[246]	[109]	—	長石・石英	橙	普通	外・内面ヘラナド	遺土中層	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 質			出土位置	備考
M28	刀子	(9.3)	0.7	0.5	(5.40)	鉄	刃部・茎部欠損	刃部断面三角形 茎部断面長方形		遺土中層	

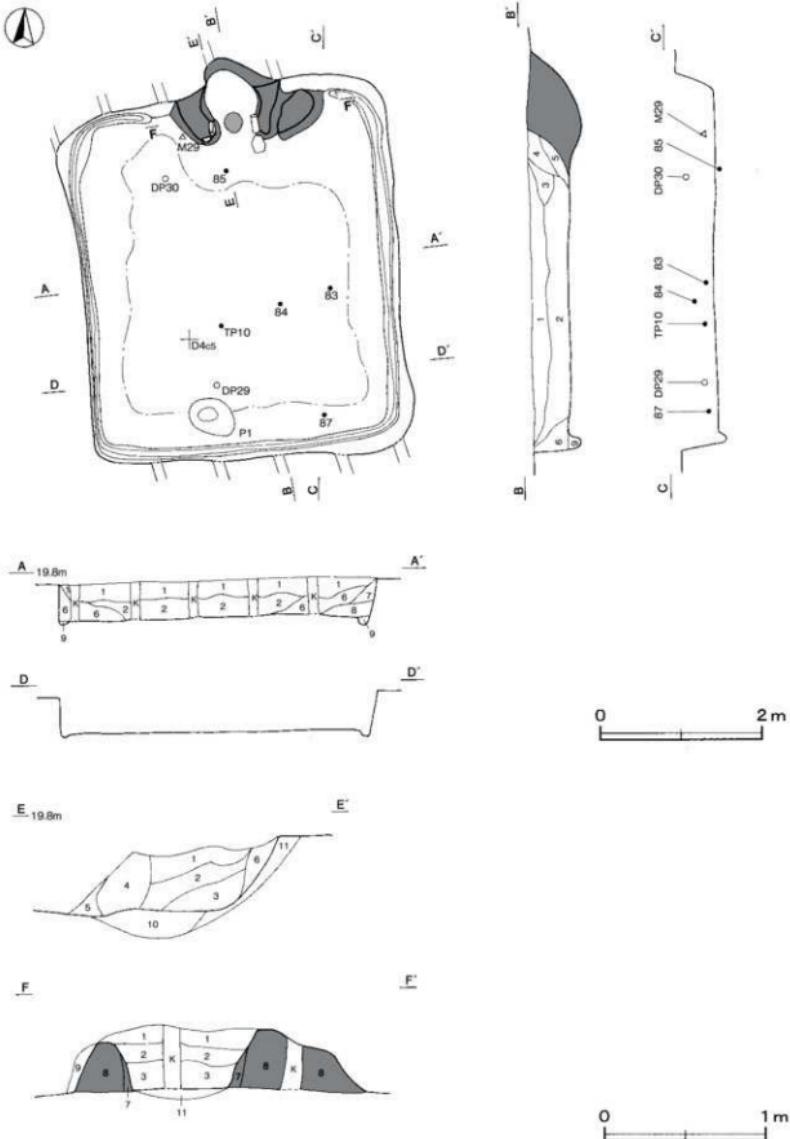
第5号住居跡（第60～62図）

位置 調査区中央部のD4b5区、標高 19.6 m の台地平坦部に位置している。

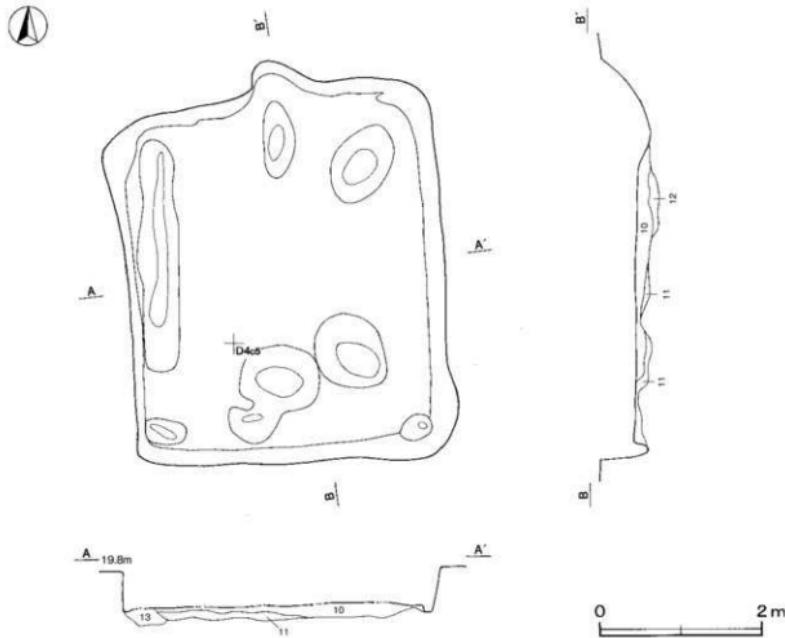
規模と形状 長軸 4.74 m、短軸 3.94 m の長方形で、主軸方向は N - 5° - W である。壁高は 46 ~ 50 cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際、北東部を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、西壁際を溝状に 18 ~ 23 cm、竈前面と北東部、南部は土坑状に 24 ~ 40 cm、それ以外の部分は 5 ~ 27 cm ほど掘り込み、ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻して構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 110 cm で、燃焼部幅は 45 cm である。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第 7・8 層を積み上げて構築されている。両袖部の内側に角柱状の切石（砂岩）が補強材として使用されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子を含んだ第 10 層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 35 cm 掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。



第60図 第5号住居跡実測図（1）



第61図 第5号住居跡実測図（2）

**竪土層解説**

- |                                    |   |
|------------------------------------|---|
| 1 にふい黄褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量。砂質粘土粒子少量 | 7 灰黄褐色 焼土ブロック中量。砂質粘土ブロック・炭化粒子少量。<br>ローム粒子微量 |
| 2 紙褐色 烧土ブロック・砂質粘土粒子少量。ローム粒子微量      | 8 灰黄褐色 烧土ブロック・砂質粘土ブロック中量。炭化粒子少量             |
| 3 紙褐色 烧土ブロック・炭化粒子少量。ローム粒子微量        | 9 にふい黄褐色 砂質粘土粒子・ローム粒子微量                     |
| 4 黒褐色 砂質粘土ブロック中量。炭化粒子少量            | 10 紙褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量                    |
| 5 紙褐色 烧土粒子少量。ローム粒子・炭化粒子微量          | 11 紙褐色 ローム粒子微量                              |
| 6 紙褐色 炭化粒子少量。ローム粒子微量               |   |

**ピット** 深さ 29cmで、南壁際に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

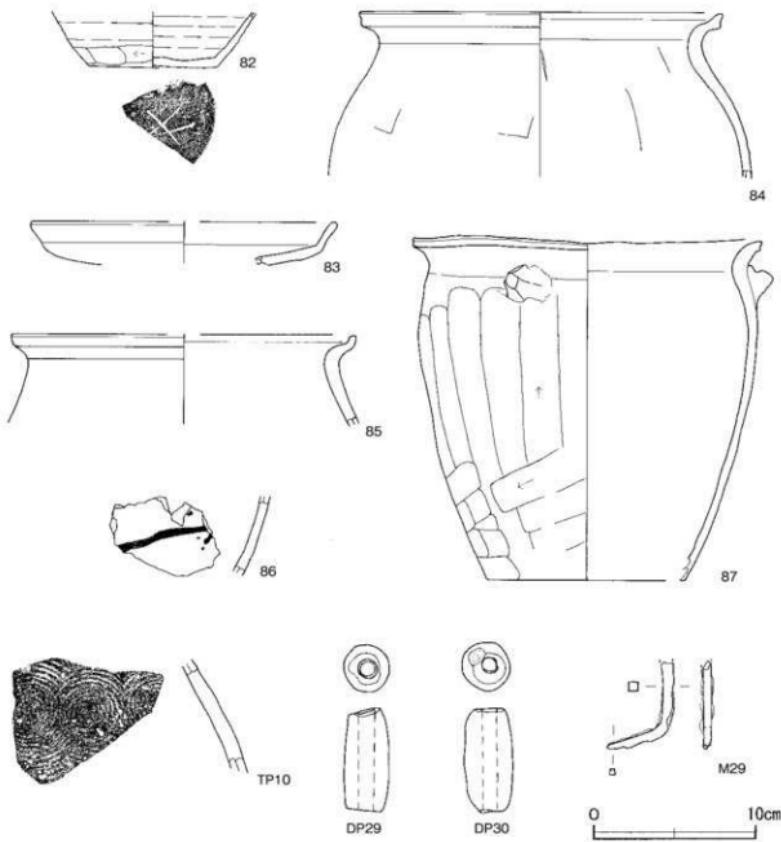
**覆土** 9層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第10～13層は、貼床の構築土である。

**土層解説**

- |                             |                              |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1 紙褐色 ローム粒子・炭化粒子微量          | 8 紙褐色 ロームブロック少量              |
| 2 紙褐色 ロームブロック少量。燒土粒子・炭化粒子微量 | 9 紙褐色 ローム粒子微量                |
| 3 紙褐色 砂質粘土粒子少量。ローム粒子微量      | 10 紙褐色 ロームブロック中量。燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 紙褐色 烧土粒子少量。炭化粒子微量         | 11 にふい黄褐色 ロームブロック少量          |
| 5 紙褐色 烧土粒子・炭化粒子少量。砂質粘土粒子微量  | 12 紙褐色 ロームブロック中量。砂質粘土ブロック少量  |
| 6 紙褐色 ローム粒子・焼土粒子少量          | 13 紙褐色 ローム粒子微量               |
| 7 にふい黄褐色 ロームブロック少量。炭化粒子微量   |                              |

**遺物出土状況** 土師器片 335点（环18、甕類315、瓶2）、須恵器片 165点（环113、蓋3、甕類49）、土製品 2点（管状土錐）、鉄製品 1点（門カ）が床面から覆土上層にかけて、散在した状態で出土している。85は中央部の床面、87は南部、83・M29は北部の覆土下層、84・TP10・DP29は中央部の覆土中層、DP30は北西部の覆土上層からそれぞれ出土している。82・86は、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第62図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第62図）

番号	種 別	器種	口様	器高	底径	施 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほか	出土位置	備 考
82	箱形器	环	—	(3.5)	[7.9]	良石・石英・雲母	灰黄	不良	底部下端手持ちハラ削り、底部一方のへつ削り へラ記号「×」	覆土中	20% PL26
83	箱形器	盤	[18.8]	(2.6)	—	良石・雲母	灰黄	普通	ロクロ成形	覆土中層	20%
84	土器器	甌	22.3	(10.1)	—	良石・石英・雲母	に赤い斑	普通	外・内面ハラナヂ	覆土中	20%
85	土器器	甌	[21.0]	(5.6)	—	良石・石英・雲母	に赤い斑	普通	外・内面ハラナヂ	床面	5%
86	土器器	甌	—	(4.9)	—	良石・石英・雲母	に赤い斑	普通	体部外側墨書き「—」 内面ハラナヂ 把手取付け跡	覆土中	5% PL26
87	土器器	甌	21.3	(21.1)	—	良石・石英・雲母 非熱裂子	に赤い斑	普通	体部外側ハラ削り 内面ハラナヂ 把手取付け跡	覆土中層	20% PL25

番号	種別	器種	粘土	色調	手法の特徴は	出土位置	備考		
TP99	須恵器	壺	長石・石英・雲母	に深い黄 体部外側面円凹の押き 内面ナデ		覆土中層			
DP29	骨灰土鉢	6.4	29	11 (47.7)	土(長石・石英) ナデ 蓋部欠損	覆土中層	PL29		
DP30	骨灰土鉢	6.4	30	09 (49.5)	土(長石・石英) ナデ 蓋部欠損	覆土上層	PL29		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M29	円#	(5.4)	0.8	0.6	(10.8)	鉄	断面長方形		覆土下層

### 第9号住居跡（第63～66図）

位置 調査区中央部のD4d9区、標高19.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第28号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.90m、短軸4.78mの方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は50～62cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、西壁際を溝状に16～23cm、北東部、南東部、南西部は土坑状に10～19cm、それ以外の部分は6～11cmほど掘り込み、ロームブロックを含むにぶい黄褐色土を埋め戻して構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで125cmで、燃焼部幅は54cmである。袖部は、床面上に白色粘土ブロックを主体とする第9層を積み上げて構築されている。両袖の内側に角柱状の切石（砂岩）を立て、その上に角柱状の切石を渡し、焚口部を構築していたものと推測できる。火床部は床面を若干掘り込み、ロームブロック・炭化粒子を含んだ第10層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。火床部の左部に切石が据えられており、支脚として使用されていたと推測できる。煙道部は壁外に55cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

#### 竈土層解説

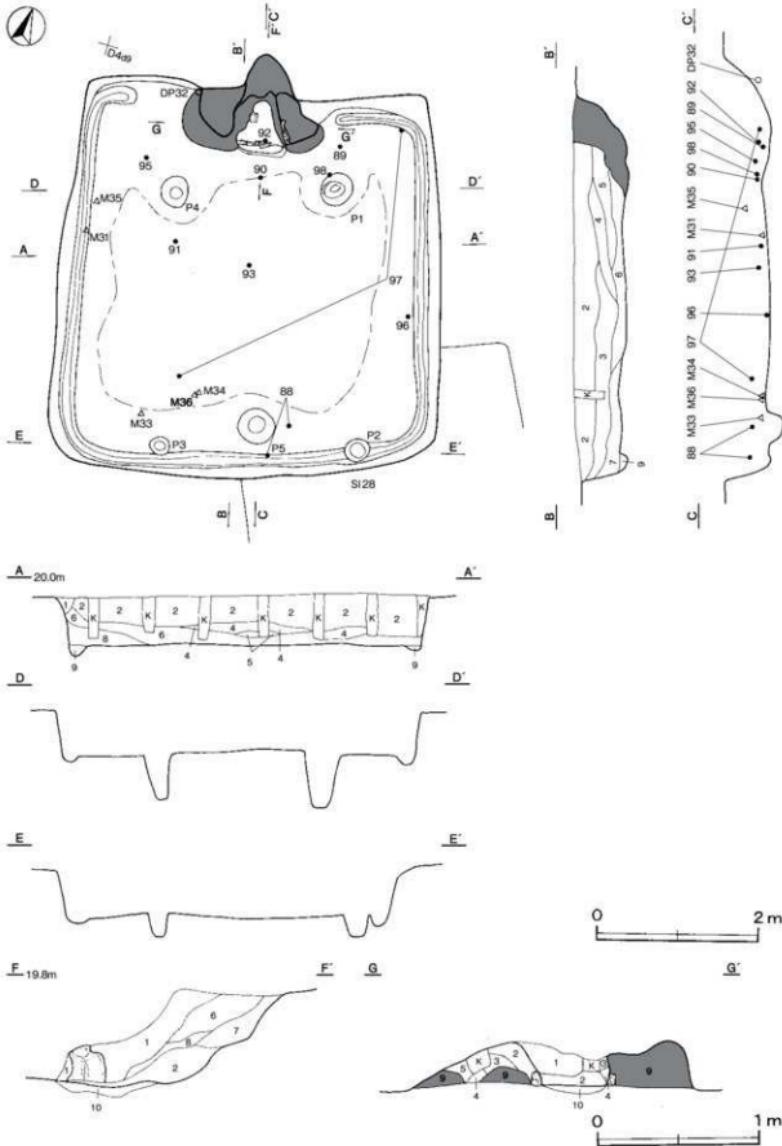
1	暗褐色	白色粘土ブロック中量、燒土粒子微量	7	黒褐色	燒土粒子少量、白色粘土粒子微量
2	赤褐色	燒土ブロック中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量	8	暗褐色	燒土粒子少量、炭化粒子微量
3	に深い黄色	燒土ブロック・ローム粒子微量	9	灰黄色	白色粘土ブロック多量
4	暗褐色	白色粘土ブロック中量、ローム粒子・燒土粒子微量	10	暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
5	灰褐色	白色粘土粒子少量			
6	灰黃褐色	白色粘土ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子少量、 ローム粒子微量			

ピット 7か所。P1～P4は深さ27～51cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ18cmで、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・7は北壁際の床下から確認されたが、性格不明である。

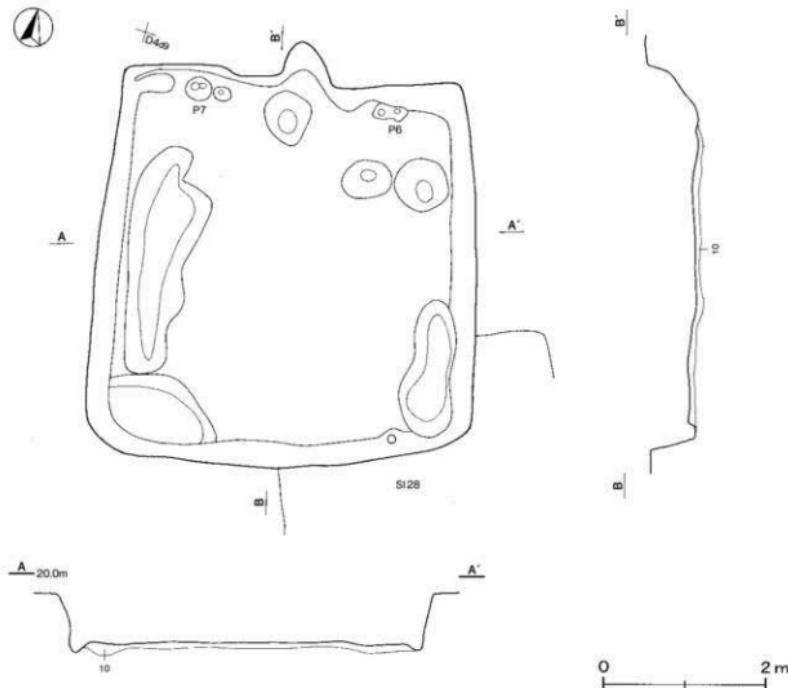
覆土 9層に分層できる。第1層は壁の崩落土である。各層にローム粒子を含んでいるが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第10層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

1	褐色	ローム粒子多量	6	暗褐色	炭化物少量、ローム粒子・燒土粒子・白色粘土粒子微量
2	無褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子・燒土粒子少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量
3	無褐色	ローム粒子・燒土粒子少量、炭化粒子微量	8	暗褐色	燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・白色粘土粒子微量
4	暗褐色	燒土粒子・白色粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	9	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	白色粘土ブロック中量、ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量	10	に深い黄色	ロームブロック中量、炭化粒子微量



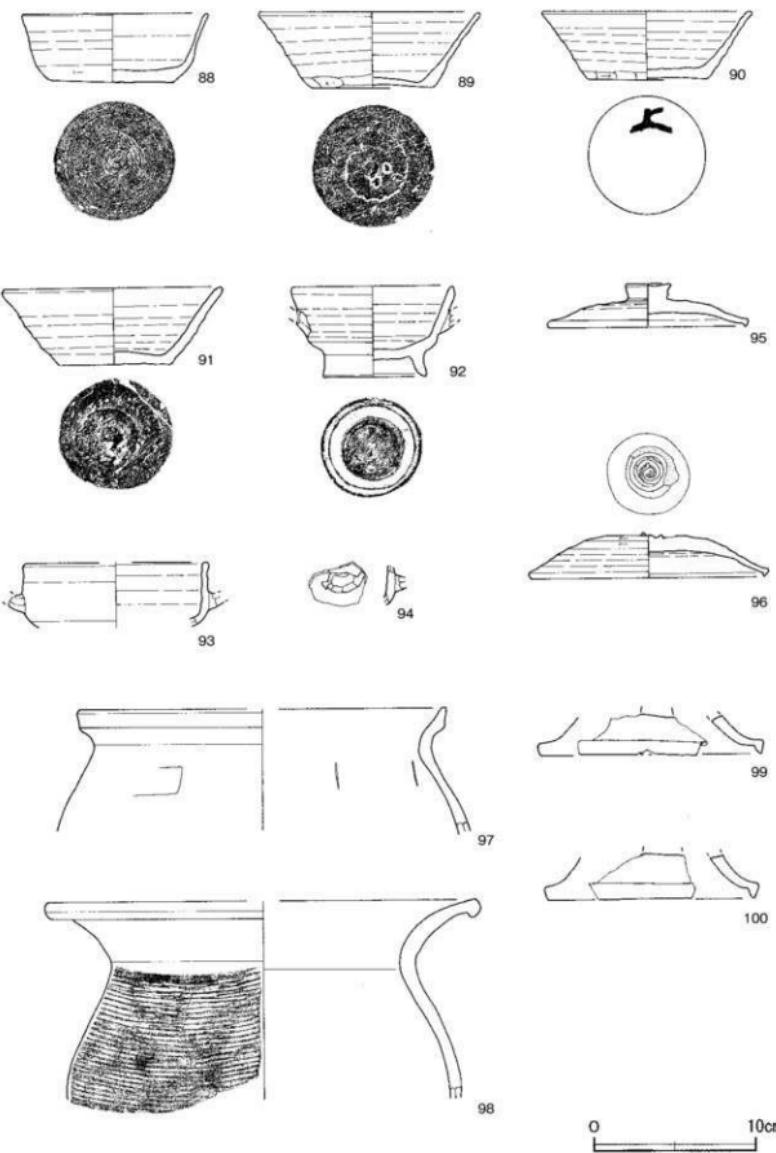
第63図 第9号住居跡実測図（1）



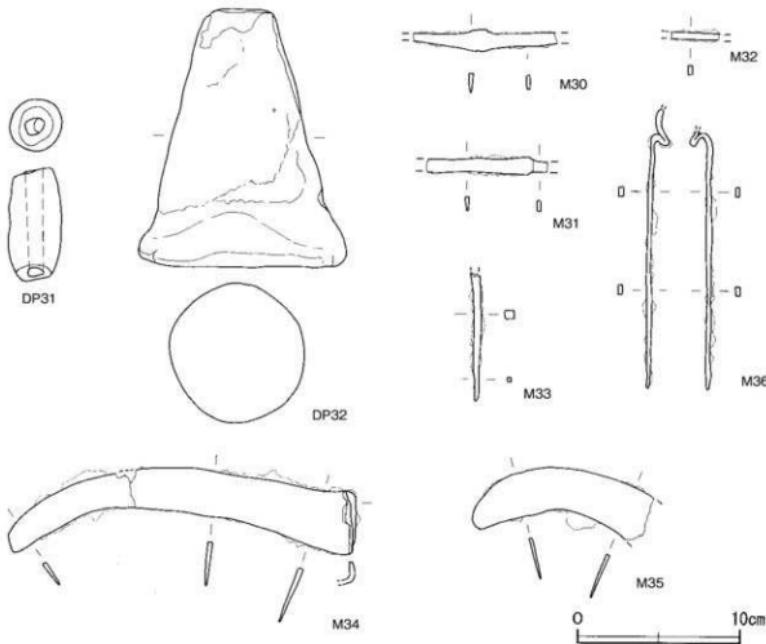
第64図 第9号住居跡実測図（2）

**遺物出土状況** 土師器片 671 点（壺6、甌類 665）、須恵器片 407 点（壺263、双耳壺4、蓋25、盤1、高盤2、甌類 111、瓶1）、土製品 5 点（支脚1、管状土錐4）、石製品 2 点（磨石、剥片）、鐵製品 7 点（刀子3、鎌1、鎌2、簾子状鉄製品1）が床面から覆土中層にかけて、散在した状態で出土している。また、流れ込んだ繩文土器片 8 点（深鉢）も出土している。89は北東部、96は東部、M34・M36は北部、91は中央部の床面、92は竈の覆土下層、93は中央部、90・98・DP32は北部、M31は西部、M33は南西部の覆土下層、95は北西部、M35は西部の覆土中層からそれぞれ出土している。88は南部の覆土中層から出土した破片、97は中央部と北東部の覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。94・99・100・DP31・M30・M32は、覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡は、竈の焚口を角柱状の砂岩で構築している住居である。時期は、出土土器や重複関係から9世紀前葉に比定できる。



第65図 第9号住居跡出土遺物実測図（1）



第 66 図 第 9 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 9 号住居跡出土遺物観察表 (第 65・66 図)

番号	種 別	器 様	L径	幅 面	底 径	胎 土	色 調	健 成	手 法 の 特 徴	は か	出土位置	備 考
88	顎忠器	環	112	44	75	長石・石英・雲母	相	普通	体底下端・底部側面へラ削り	覆土中層	70%	PL23
89	顎忠器	環	135	47	75	長石・石英・雲母	にいき青碧	普通	体底下端手持ちへラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	95%	PL23
90	顎忠器	環	129	42	73	長石・石英・雲母	黄灰	良好	体底下端手持ちへラ削り 底部一方向のヘラ削り 墨塵「上」+	覆土下層	90%	PL23
91	顎忠器	環	133	47	68	長石・石英	灰青	普通	底部側面へラ削り頭を残す鍔なナデ	床面	90%	PL23
92	顎忠器	耳耳环	109	56	63	長石・石英	98白	普通	体部中央に一対の把手貼り付け 底部側面へラ削り 後・底部側面へラ削り付け	覆土下層	80%	PL23
93	顎忠器	耳耳环	[110]	(39)	—	長石・石英	灰	良好	体部中央に把手貼り付け	覆土下層	5%	PL23
94	顎忠器	耳耳环	—	(27)	—	長石・石英	にいき・青	普通	把手貼り付け	覆土中	5%	PL23
95	顎忠器	蓋	123	28	—	長石・石英	灰	良好	天井面側面へラ削り	覆土中層	90%	PL26
96	顎忠器	蓋	142	(29)	—	長石・石英	灰	普通	天井面側面へラ削り	床面	60%	PL26
97	土師器	甌	[226]	(7.7)	—	長石・石英・雲母	にいき・青	普通	外・内面ナデ	覆土中層	5%	
98	顎忠器	甌	[263]	(12.7)	—	長石・石英・雲母	にいき青碧	普通	体部外側縦状の平行叩き	覆土下層	10%	
99	顎忠器	高盤	—	(24)	[13.6]	長石・石英	黄灰	普通	外・内面ロクロ成形	覆土中	5%	
100	顎忠器	高盤	—	(28)	[12.6]	長石・石英	黄灰	普通	外・内面ロクロ成形	覆土中	5%	

番号	器 様	長さ	厚さ	花 球	重 量	材 質	特 徴	出 土 位 置	備 考
DP38	管状土鉢	7.0	3.3	1.1	61.0	土(長石・石英)	ナデ	覆土中	PL29

番号	部 様	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 樹	出土位置	備 考
DP32	支脚	15.9	12.7	12.6	1380	土(長石・石英)	ナゲ調整わずかに残存	覆土下層	PL29
番号	部 様	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 樹	出土位置	備 考
M 30	刀子	(8.9)	1.2	0.3	(12.3)	鉄	刃部・茎部欠損 両側 刃部断面三角形 茎部断面長方形	覆土中	PL31
M 31	刀子	(7.5)	1.1	0.3	(6.45)	鉄	刃部・茎部欠損 両側 刃部断面三角形 茎部断面長方形	覆土下層	
M 32	刀子	(3.2)	0.5	0.3	(1.64)	鉄	刃部・茎部欠損 茎部断面長方形	覆土中	
M 33	劍	(7.9)	0.5	0.5	(8.40)	鉄	鍔身部欠損 鍔部断面長方形	覆土下層	
M 34	劍	21.6	3.8	0.3	(85.0)	鉄	切先部一部欠損 鋒呂着部上方へ90度折り曲げ	床面	PL31
M 35	劍	(11.2)	3.2	0.2	(36.3)	鉄	柄付部欠損	覆土中層	PL31
M 36	剣刃頭部	(7.2)	4.0	0.3	(29.0)	鉄	頭部欠損 断面長方形	床面	PL32

### 第 10 号住居跡（第 67・68 図）

位置 調査区中央部のD 4b8 区、標高 19.8 m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 3.50 m、短軸 3.20 m の方形で、主軸方向は N - 10° - W である。壁高は 38 ~ 54 cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。貼床は、ロームブロックを含むにぶい黄褐色土と褐色土を 6 ~ 16 cm ほど埋めて構築されている。南東部の床面上に焼土塊を確認したが、床面は赤変していない。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 98 cm で、燃焼部幅は 64 cm である。袖部は、床面上に白色粘土ブロックを主体とする第 11 層を積み上げて構築されている。火床部は床面を若干掘り込み、焼土粒子・炭化粒子を含んだ第 13 層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化していない。煙道部は壁外に 31 cm 掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。

#### 竈土層解説

1	暗 紺 色	白色粘土ブロック少量、ローム粒子微量	8	暗 紺 色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
2	暗 紺 色	ローム粒子・焼土粒子・白色粘土粒子少量	9	にぶい黄褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3	灰 紺 色	ローム粒子少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量	10	黒 紺 色	ロームブロック中量
4	にぶい黄褐色	白色粘土ブロック中量、焼土粒子少量	11	灰 紺 色	白色粘土ブロック多量、焼土粒子微量
5	にぶい黄褐色	焼土ブロック中量、白色粘土粒子少量	12	灰 紺 色	白色粘土ブロック多量
6	にぶい黄褐色	焼土ブロック中量、白色粘土粒子微量	13	褐 色	焼土粒子・炭化粒子微量
7	暗 紺 色	焼土粒子中量			

棚状施設 窓の東側に付設されている。確認面から 34 cm 掘り込んで平坦面を作出している。規模は、幅 65 cm、奥行き 50 cm の梢円形で、床面からの高さは 10 cm である。

覆土 9 層に分層できる。各層にロームブロックを含み、不自然な堆積状況を示していることから埋め戻されている。第 10 ~ 12 層は、貼床の構築土である。

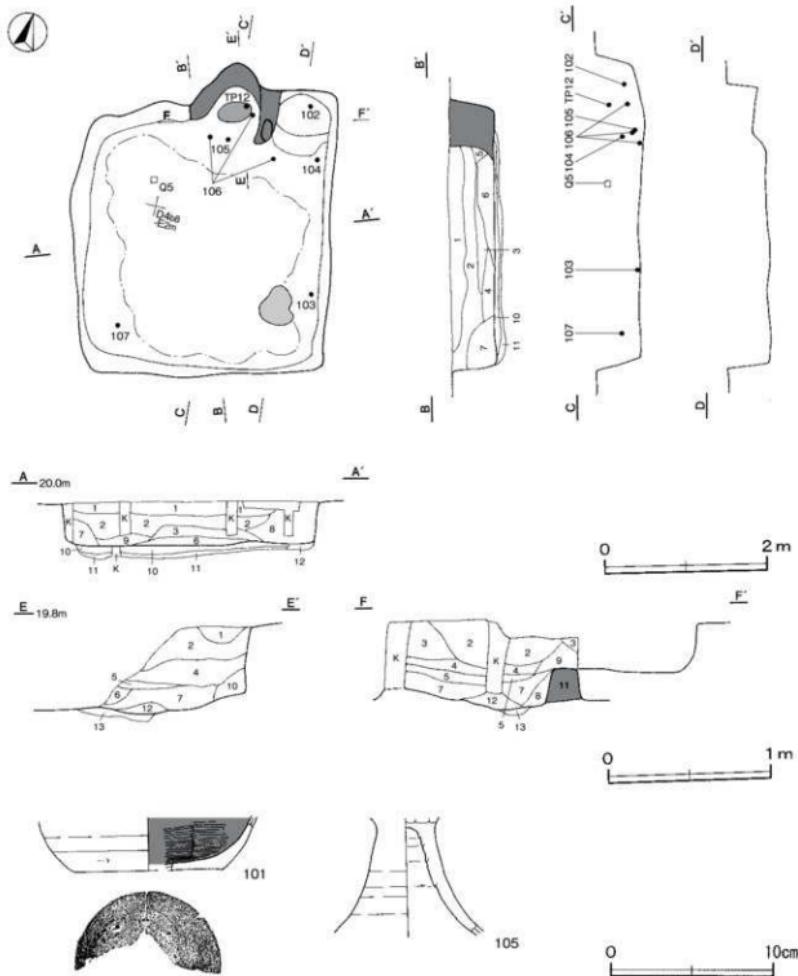
#### 土層解説

1	暗 紺 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8	暗 紺 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量
2	暗 紺 色	ロームブロック中量、炭化材・焼土粒子微量	9	暗 紺 色	ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子少量
3	褐 色	白色粘土ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	10	にぶい黄褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
4	暗 紺 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	11	褐 色	ロームブロック中量
5	黑 黑 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量	12	褐 色	ローム粒子少量
6	暗 紺 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量			
7	暗 紺 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量			

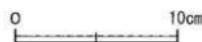
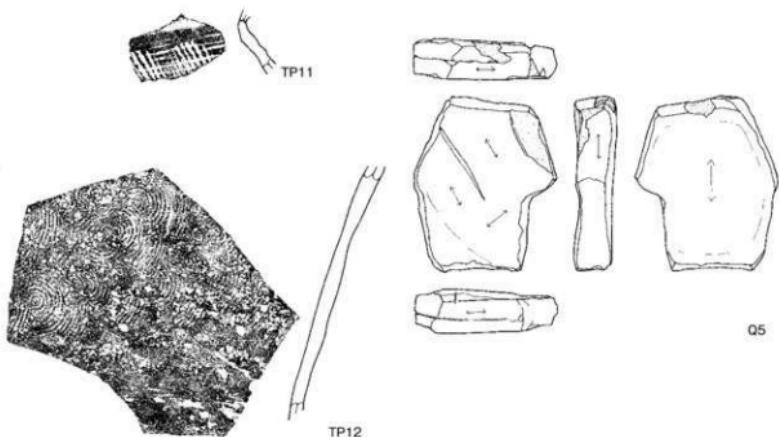
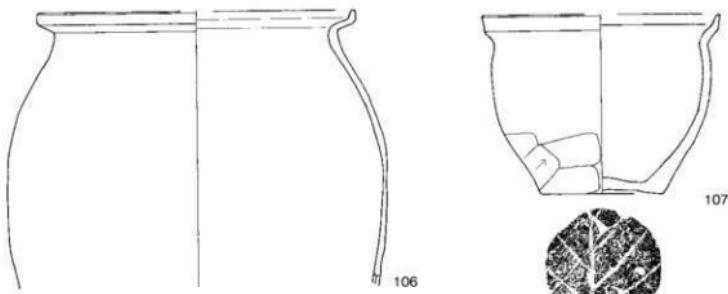
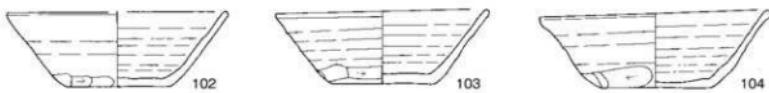
遺物出土状況 土師器片 286 点（坏 11、壺類 275）、須恵器片 139 点（坏 67、蓋 4、高盤 1、壺類 64、瓶 3）、

石製品 1 点（砥石）が、北部の床面から覆土上層を中心に出土している。103 は東部の床面、105 は竈の覆土下層、104 は北東部、107 は南西部の覆土中層、TP12 は竈の覆土上層、Q5 は中央部の覆土上層からそれれ出土している。102 は、棚状施設の中央に伏せられた状態で出土している。106 は、竈の覆土下層と中層から出土した破片が接合したものである。101・TP11 は、覆土中から出土している。

**所見** 本跡は、竈の右側に棚状の施設をもつ住居である。時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 67 図 第 10 号住居跡・出土遺物実測図



第68図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表(第67・68図)

番号	種 別	器種	口径	深高	底径	胎 土	色 調	塊成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
101	土師器	环	—	(3.3)	9.0	長石・石英・赤色 粒子	にふい程	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ削き 底部回転系 切り	覆土中	20%
102	領巻器	环	[134]	4.6	6.2	長石・石英・雲母	灰青	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り 墨書き「双神」	覆土施設	40% PL24
103	領巻器	环	131	4.7	6.2	長石・石英・雲母	灰青	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	95% PL23
104	領巻器	环	140	4.8	6.6	長石・石英・雲母	にふい程	不良	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層	80% PL23
105	領巻器	高麗環	—	(7.3)	—	長石・石英	灰灰	普通	外・内面クロ成形	覆土下層	20% PL24
106	土師器	甕	[193]	(17.0)	—	長石・石英・雲母	程	普通	外・内面ヘラナデ	覆土下層・中層	20%
107	土師器	小甕	[144]	11.0	7.3	長石・石英・雲母	にふい程	普通	体部下端ヘラ削り 内面ナデ 旅館木葉瓶	覆土中層	50% PL25

番号	種 別	器種	始 土	色 調	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP11	領巻器	甕	長石・石英・雲母	灰	体部外表面位の平行の叩き後 横位の平行叩き	覆土中	PL27
TP12	領巻器	甕	長石・石英・雲母	にふい程	体部外表面同心円形の叩き 下端ヘラ削り	覆土上層	PL28

番号	器 様	底 壁	幅	厚 さ	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q5	砥石	10.8	8.7	2.7	312.0	泥岩	鉄面5面のうち1面に溝状の研削痕有り 他は鏡面	覆土上層	

## 第11号住居跡(第69・70図)

位置 調査区中央部のD4b0区、標高19.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第47号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.06m、短軸3.92mの不整形で、主軸方向はN=31°-Wである。壁高は15~40cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土を7~21cmほど埋めて構築されている。

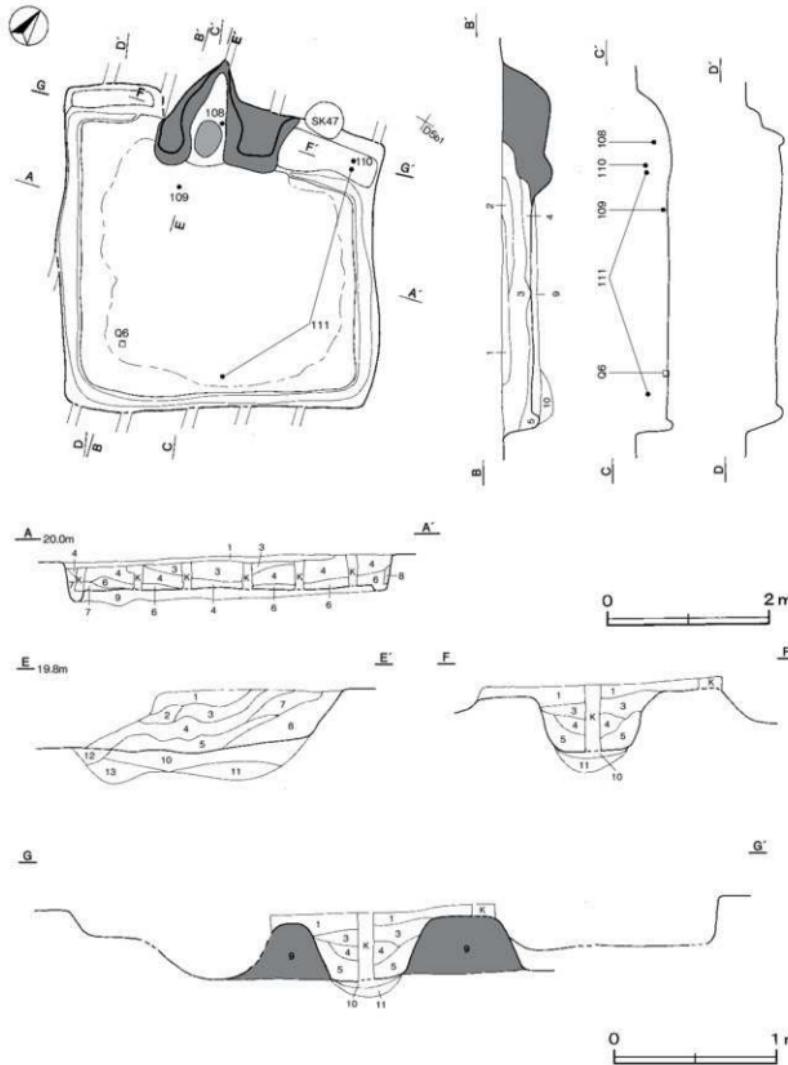
竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで134cmで、燃焼部幅は44cmである。袖部は、床面上に白色粘土ブロックを主体とする第9層を積み上げて構築されている。火床部は床面を若干掘り込み、第10・11層を埋土して構築されており。火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に35cm掘り込まれ、火床面からほぼ直立している。第12・13層は、掘方への埋土である。

## 竈土層解説

1	暗 細 色	ロームブロック・白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	にふい赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量
2	暗 細 色	ローム粒子・白色粘土粒子少量	8	にふい赤褐色	焼土粒子中量、白色粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3	にふい黄褐色	焼土ブロック・白色粘土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	9	にふい黄褐色	白色粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
4	暗 細 色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量	10	暗 赤 細 色	焼土粒子ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子少量
5	にふい赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子・白色粘土粒子微量	11	暗 細 色	ローム粒子多量、炭化粒子微量
6	暗 細 色	白色粘土ブロック少量、ローム粒子微量	12	黑 細 色	ローム粒子・焼土粒子少量
			13	黑 細 色	ロームブロック多量

棚状施設 竈の両側に付設されている。右部は、確認面から30cm掘り込んだ地山の上にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を10cmほど貼って平坦面を作出している。規模は、幅123cm、奥行き35cmの長方形で、床面からの高さは13cmである。左部は、確認面から18cm掘り込んで平坦面を作出している。規模は、幅98cm、奥行き18cmの長方形で、床面からの高さは27cmである。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含む層が多いが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第9・10層は、貼床の構築土である。



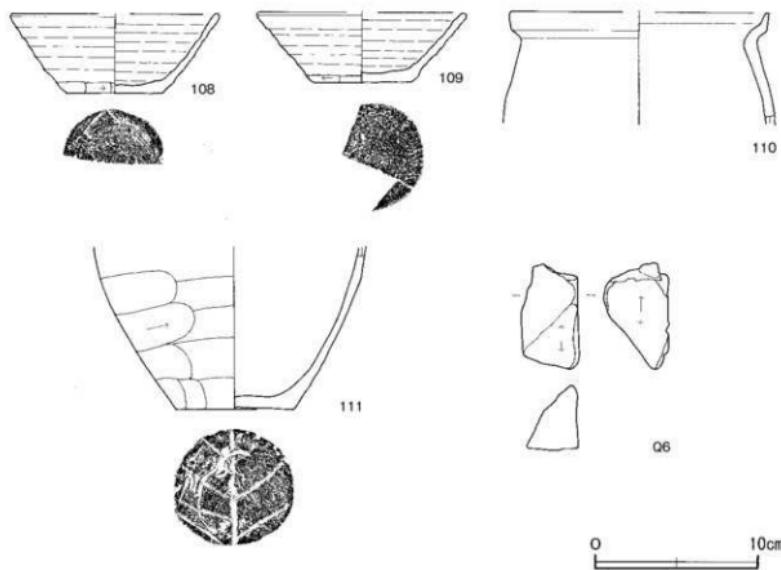
第69図 第11号住居跡実測図

## 土器解説

1	暗褐色	色	ロームブロック少量、燒土粒子微量	7	暗褐色	色	燒土ブロック少量、ローム粒子微量
2	暗褐色	色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	8	暗褐色	色	ローム粒子、炭化粒子微量
3	にい青褐色	色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9	黒褐色	色	ローム粒子多量、燒土粒子、炭化粒子少量
4	暗褐色	色	ローム粒子微量	10	暗褐色	色	ローム粒子多量、炭化粒子微量
5	暗褐色	色	ロームブロック少量				
6	暗褐色	色	燒土ブロック・砂質燒土ブロック中量、ロームブロック少量				

遺物出土状況 土師器片 233 点(坏 12, 壺類 221), 須恵器片 201 点(坏 122, 蓋 6, 長類 68, 瓶 5), 石製品 1 点(砥石), 土製品 1 点(管状土錐)が床面から覆土上層にかけて、散在した状態で出土している。また、混入した陶器片 8 点(碗)も出土している。109 は中央部, Q 6 は南西部の床面, 108 は窓の覆土下層, 110 は北東部の覆土上層からそれぞれ出土している。111 は、北東部と南部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡は、窓の両側に棚状の施設を持つ住居である。時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 70 図 第 11 号住居跡出土遺物実測図

第 11 号住居跡出土遺物観察表(第 70 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
108	須恵器	坏	[128]	4.9	[6.0]	長石・石英・雲母	にい・青褐色	不良	底部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	窓の覆土下層	40%
109	須恵器	坏	[136]	4.3	[5.9]	長石・石英・雲母	にい・青褐色	普通	底部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	50%
110	土師器	壺	[160]	[7.0]	—	石英・雲母	にい・青褐色	普通	外・内面ヘラナダ	窓の上層	5%
111	土師器	壺	—	[10.0]	7.3	長石・石英・雲母	にい・青褐色	普通	底部外周ヘラ削り 内面ヘラナダ 底部木枠痕	窓の中層	30%

番号	部 様	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土状況	備 考
Q 6	砥石	64	35	4.0	761	磨滅岩	鏡面2面 他は成断面	床面	

#### 第 14 号住居跡（第 71・72 図）

位置 調査区中央部の C 40 区、標高 19.7 m の台地平坦部に位置している。

重複関係 第 70・71 号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 長軸 4.48 m、短軸 4.36 m の方形で、主軸方向は N - 24° - W である。壁高は 58 ~ 67 cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。北壁を除き、壁下には壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロックを含む暗褐色土とロームブロックを含む暗褐色土を 5 ~ 11 cm ほど埋めて構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 124 cm で、燃焼部幅は 49 cm である。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第 8 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、ローム粒子・焼土粒子を含んだ第 9 層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 48 cm 挖り込まれ、火床面からはほぼ直立している。第 2 層は、天井部の崩落土層である。

##### 重土層解説

1	暗 黄 色	ローム粒子・砂質粘土粒子微量	7	暗 黄 色	ローム粒子・焼土粒子微量
2	灰 黄 色	砂質粘土ブロック多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	8	灰 黄 褐 色	砂質粘土ブロック多量
3	暗 黄 色	焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量	9	暗 黄 色	ローム粒子・焼土粒子微量
4	暗 黄 色	焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量	10	暗 黄 色	ロームブロック中量
5	灰 黄 色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	11	赤 黄 色	焼土ブロック多量、ローム粒子微量
6	にい黄褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・灰微量	12	にい黄褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 10か所。P 1 ~ P 4 は深さ 32 ~ 45 cm で、配置から主柱穴である。P 5 は深さ 8 cm で、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6 は床下から確認され、P 4 の作り替え前の主柱穴と考えられる。また、P 7・8 は竈の袖部の下から、P 9・10 は南壁近くの床下から確認されたが、性格は不明である。

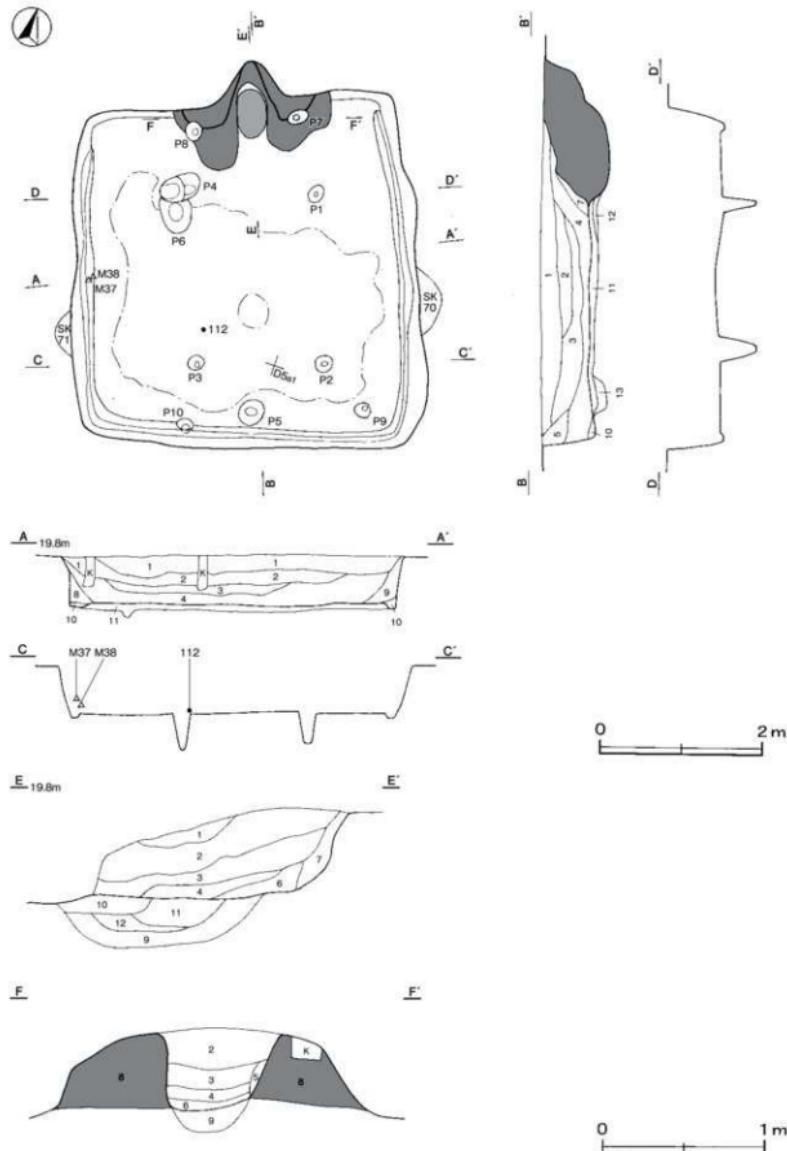
覆土 10 層に分層できる。各層にロームブロック・粒子を含んでいるが、周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第 11 ~ 13 層は、貼床の構築土である。

##### 土層解説

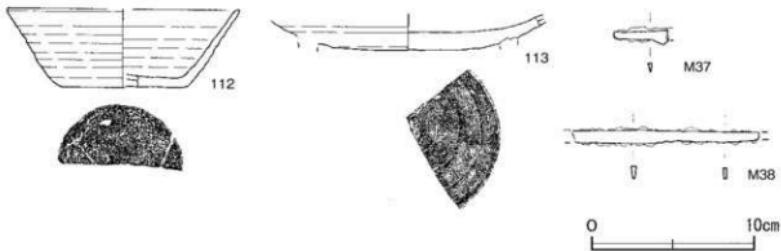
1	暗 黄 色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	7	灰 黄 褐 色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子微量
2	暗 黄 色	ロームブロック・砂質粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	9	褐 色	ロームブロック少量
3	暗 黄 色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	10	褐 色	ローム粒子微量
4	暗 黄 色	ロームブロック・炭化粒子少量	11	暗 黄 色	ロームブロック中量
5	にい黄褐色	ロームブロック少量	12	暗 黄 色	ロームブロック少量
6	暗 黄 色	ロームブロック・砂質粘土ブロック少量	13	にい黄褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土器片 153 点（壺 3、甕 150）、須恵器片 73 点（壺 56、盤 1、甕 16）、土製品 5 点（管状土錐）、鉄製品 2 点（刀子）が出土している。また、流れ込んだ繩文土器片 6 点（深鉢）、混入した磁器片 2 点（碗）も出土している。112 は中央部の床面、M 37・M 38 は西部の覆土中層からそれぞれ出土している。113 は、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第71図 第14号住居跡実測図



第 72 図 第 14 号住居跡出土遺物実測図

第 14 号住居跡出土遺物観察表（第 72 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 殊 ほ か	出土位置	備 考
112	瓦器部	环	[14.0]	4.8	[7.4]	灰石・石英	灰黄	普通	底部一方向のヘラ削り	床面	40%
113	瓦器部	盤	-	2.2	[33.6]	灰石・石英	灰黄	良好	底部回転ヘラ削り	覆土中	30%
番号	器 様	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 殊			出土位置	備 考
M.37	万子	(34)	10	0.3	(1.58)	灰	茶部欠損 両部断面三角形			覆土中層	
M.38	刀子	(115)	0.8	0.3	(8.25)	灰	両部・茶部欠損 両側 断面三角形 茶部断面長方形			覆土中層	

第 16 号住居跡（第 73・74 図）

位置 調査区中央部の C5i3 区、標高 19.7 m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 4.22 m、短軸 4.14 m の方形で、主軸方向は N - 6° - W である。壁高は 45cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロック等を含むにぶい黄褐色土と褐色土を 5 ~ 21cm ほど埋めて構築されている。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 134cm で、燃焼部幅は 54cm である。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第 11 層を積み上げて構築されている。右袖の基部からは須恵器瓶が逆位の状態で出土しており、袖の補強材と思われる。火床部は床面を 13cm 剖り込み、ロームブロック等を含んだ第 12・13 層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 65cm 剖り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

#### 遺土解説

- 灰 級 色 砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子 少量
  - 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
  - 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量
  - 灰 級 色 砂質粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
  - 灰 級 色 焼土粒子多量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
  - 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
- にぶい黄褐色 砂質粘土粒子中量、地土粒子微量
  - 灰 級 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
  - 暗赤褐色 燃焼土粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量
  - 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
  - 灰 級 色 砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量
  - 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
  - 褐色 ローム粒子微量

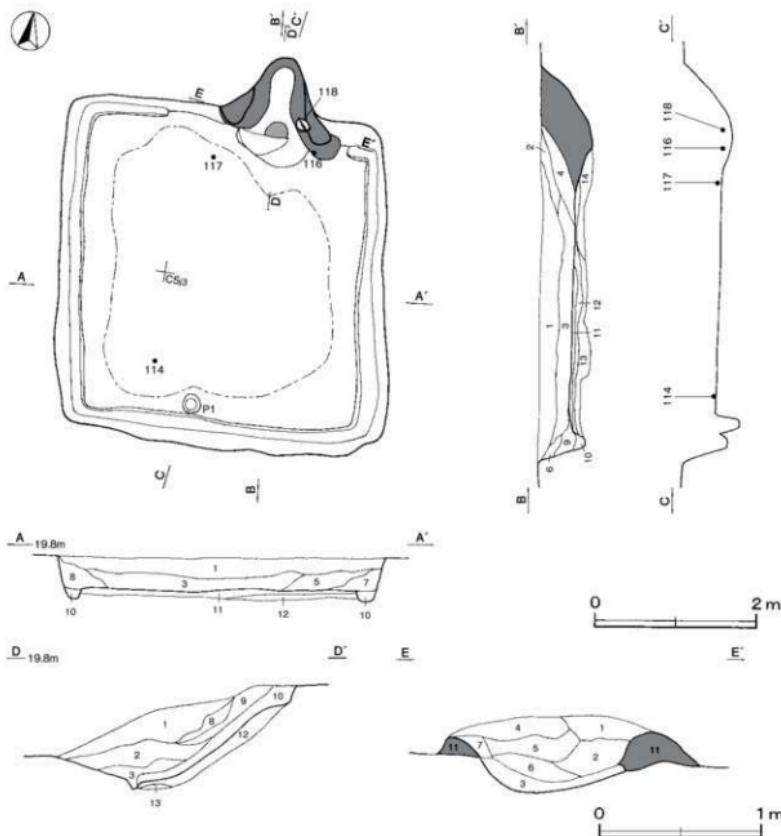
ピット 深さ 31cm で、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 10層に分層できる。ロームブロックを含む層が多いが、周囲から流れ込んだ状況を示していることが自然堆積である。第11～14層は、貼床の構築土である。

**土層解説**

- |                            |                              |
|----------------------------|------------------------------|
| 1 砂 褐 色 ローム粒子少量            | 8 砂 褐 色 ロームブロック中量            |
| 2 灰 褐 色 ローム粒子・砂質粘土粒子少量     | 9 砂 褐 色 ロームブロック中量            |
| 3 砂 褐 色 ロームブロック中量          | 10 砂 褐 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量    |
| 4 灰 褐 色 砂質粘土粒子中量、ロームブロック少量 | 11 にふい青褐色 ロームブロック中量、燒土ブロック微量 |
| 5 灰 褐 色 ロームブロック多量          | 12 灰 褐 色 ロームブロック少量           |
| 6 砂 褐 色 ロームブロック少量          | 13 灰 褐 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量    |
| 7 灰 褐 色 ロームブロック少量          | 14 灰 褐 色 ローム粒子微量             |

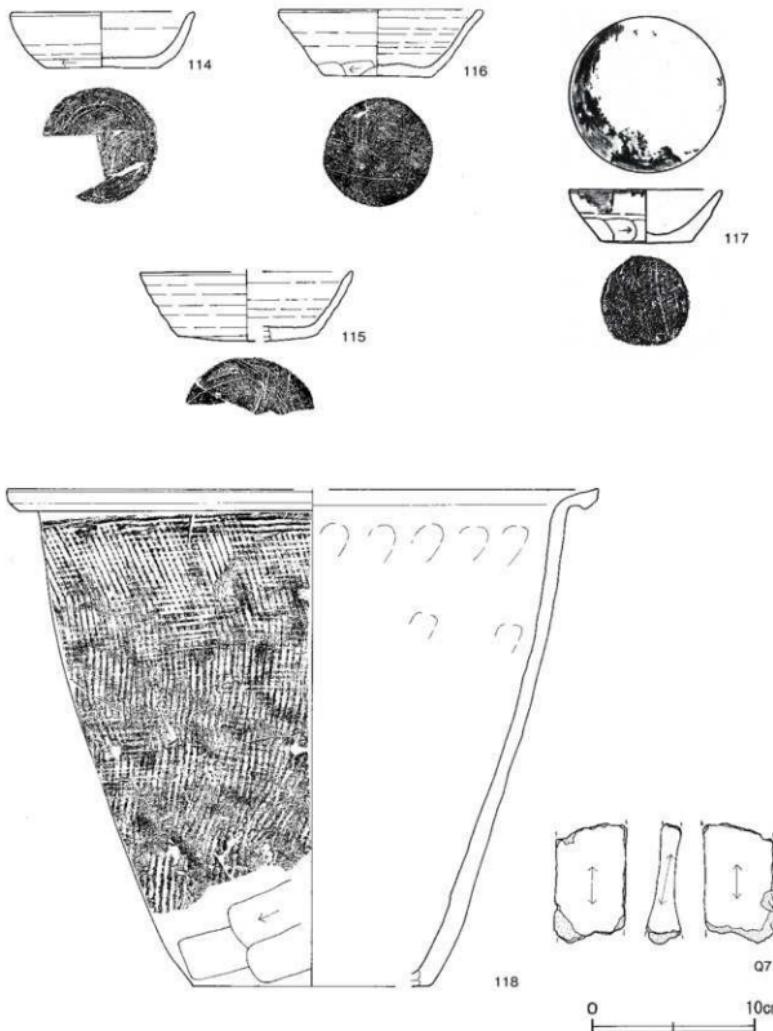
**遺物出土状況** 土師器片190点(坏3、高台付坏1、甕類186)、須恵器片123点(坏73、小形坏1、蓋3、高坏1、甕類39、瓶6)、石製品1点(砥石)が床面から覆土下層にかけて、散在した状態で出土している。117は北部。



第73図 第16号住居跡実測図

114 は南部の床面。116 は竈の覆土下層からそれぞれ出土しており、廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。118 は竈補強材として転用されていたものである。115・Q 7 は、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 74 図 第 16 号住居跡出土遺物実測図

第 16 号住居跡出土遺物観察表（第 74 図）

番号	種 別	器種	口径	深高	底律	胎 土	色 調	塊成	手 法 の 特 徴 は か	出土状況	備 考
114	土師器	环	11.3	34	7.0	長石・石英	にふい灰褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転糸切り	床面	80% PL24
115	須恵器	环	[13.0]	(4.2)	[8.6]	長石・石英	灰褐	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土中	30%
116	須恵器	环	12.6	4.2	6.5	長石・石英	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	90% PL24
117	須恵器	小形环	9.4	3.3	5.6	長石・石英・雲母	浅灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	100% PL24
118	須恵器	瓶	[36.2]	30.6	[14.6]	長石・石英	灰褐	普通	底部下端斜め引削り 底部の平行引き 下端 ヘラ削り 向田吉郎氏所蔵を残すナメ	底部焼跡上	70% PL25

番号	器 標	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出 土 状 況	備 考
Q 7	砥石	(7.4)	4.5	2.1	(63.3)	矽灰岩	砥面3面 他の破断面	覆土中	PL30

第 17 号住居跡（第 75・76 図）

位置 調査区東部の C6c8 区、標高 195 m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 一辺 3.32 m の方形で、主軸方向は N - 20° - W である。壁高は 25 ~ 31 cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロックを含むにぶい黄褐色土と褐色土を 10 ~ 16 cm ほど埋めて構築されている。

窓 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 133 cm で、燃焼部幅は 40 cm である。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第 9 層を積み上げて構築されており、内側は赤変している。天井部は崩落しているが、比較的良好に形状が残存しており、中央部や左寄りに架け口と思われる落ち込みが確認できた。火床面の範囲から架け口が 2 か所あったことも推測できる。火床部は床面を若干掘り込み、ロームブロック・焼土粒子を含んだ第 10・11 層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 75 cm 掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第 1・5 層は、天井部の崩落土層である。

#### 土層解説

1	褐 褐 色	ロームブロック中量、砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5	にふい褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
	化粧粒子微量		6	暗 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
2	暗 褐 色	焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	7	褐 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
	微量		8	褐 褐 色	焼土粒子微量、ローム粒子微量
3	褐 褐 色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、砂質粘土粒子微量	9	灰 褐 色	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量
	微量		10	にふい青褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
4	褐 褐 色	砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	11	褐 褐 色	ローム粒子微量

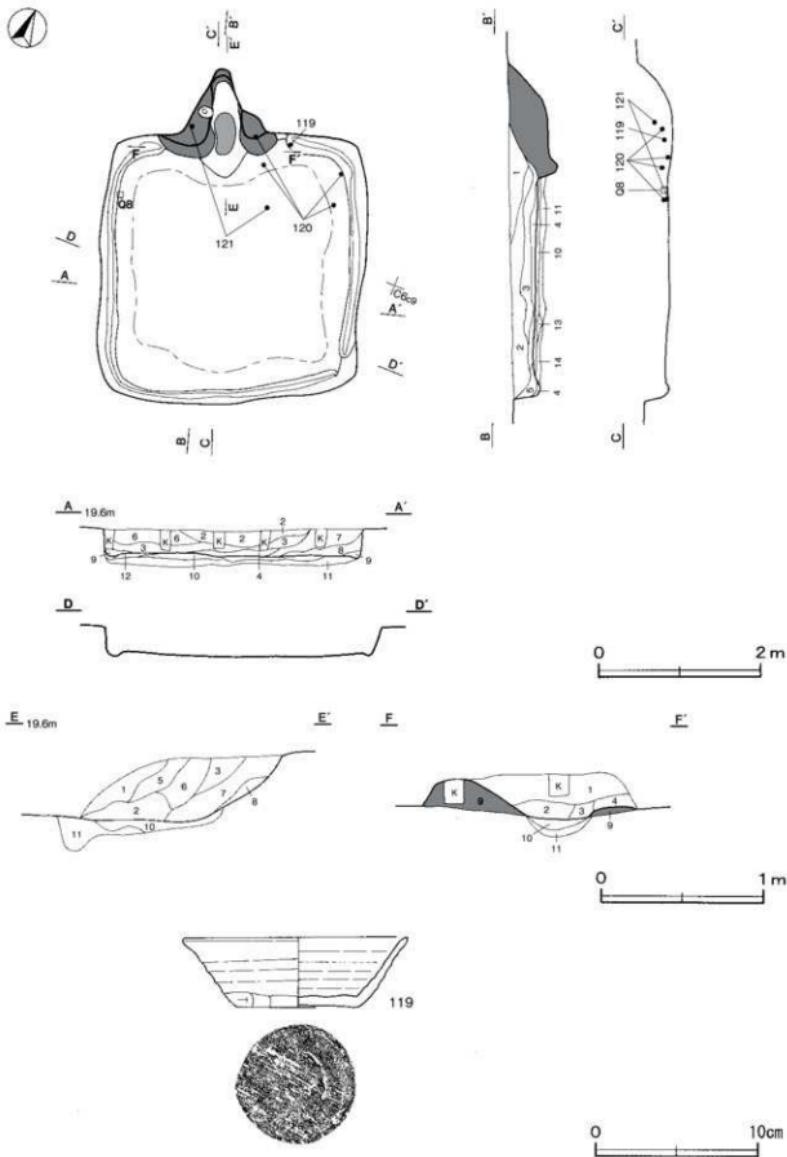
覆土 9 層に分層できる。ロームブロックを多量に含み、不自然な堆積状況を示していることから埋め戻されている。第 10 ~ 14 層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

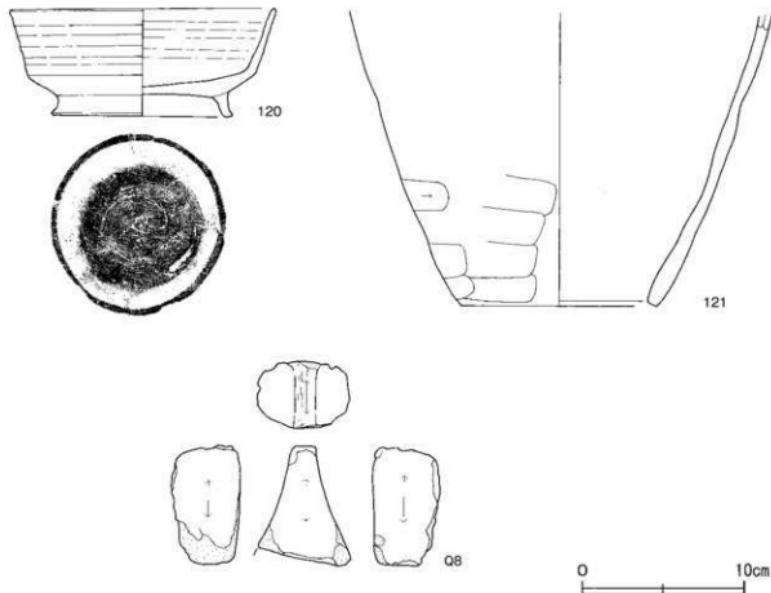
1	黑 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量	8	褐 褐 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2	暗 褐 色	ロームブロック多量、焼土粒子微量	9	褐 褐 色	ロームブロック・炭化粒子微量
3	褐 褐 色	ロームブロック多量、焼土粒子微量	10	にふい青褐色	ロームブロック中量
4	褐 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	11	褐 褐 色	ローム粒子少量
5	褐 褐 色	ロームブロック中量	12	褐 褐 色	ロームブロック微量
6	暗 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	13	褐 褐 色	ローム粒子微量
7	褐 褐 色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	14	褐 褐 色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 14 点（甕類 13、瓶 1）、須恵器片 5 点（环）、石製品 1 点（砥石）が北部を中心に出土している。また、混入した磁器片 2 点（碗）も出土している。119 は北部、Q 8 は西部の覆土下層からそれぞれ出土している。120 は北東部の覆土下層と窓の覆土中層から出土した破片、121 は中央部の床面と窓の覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第75図 第17号住居跡・出土遺物実測図



第76図 第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表（第75・76図）

番号	種別	器種	口径	基高	通体	粘土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
119	便器	环	13.6	4.4	7.4	灰石・石英・雲母	灰灰	普通	底部下端手持ちハラ削り 成部一方向のヘラ削り	覆土下層	70% PL24
120	便器	高台付环	16.2	6.7	11.0	灰石・石英・雲母	灰灰	不良	底部斜板ハラ削り後、高台貼り付け	覆土下層・覆砂層	80% PL24
121	土器器	瓶	-	-	(18.0)	[12.0]	灰石・石英	灰灰	普通 体部下端ハラ削り 内面ヘナナデ	表面・覆土中層	20%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	色調	特徴	出土位置	備考	
Q8	鐵石	7.2	5.7	4.1	(155.8)	褐色鉄	褐色	4面 他は鏡面	覆土下層	PL30	

第26号住居跡（第77・78図）

位置 調査区東部のB8h2区、標高19.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第6号溝に掘り込まれている。

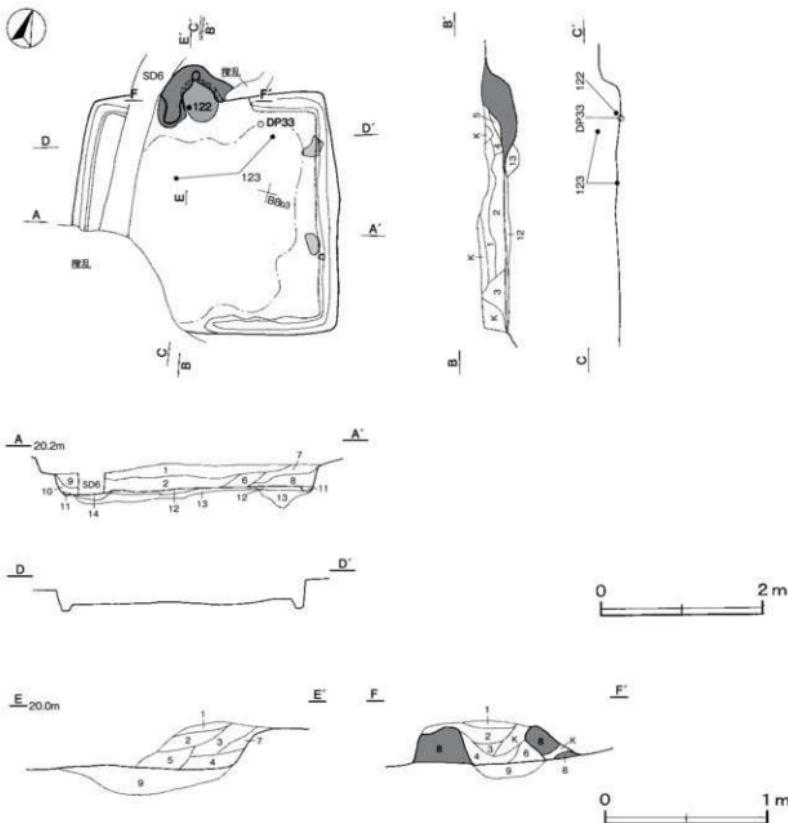
規模と形状 長軸3.26m、短軸2.98mの方形で、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は16~24cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く広い範囲が踏み固められているが、南東部は重複しているため不明である。壁下には、縦溝が巡っている。貼床は、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物を含む黒褐色土を4~8cmほど埋めて構築されている。東部の壁際の床面上に焼土塊を確認したが、床面は赤変していない。

北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで78cmで、燃焼部幅は42cmである。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第8層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、焼土ブロックなどを含んだ第9層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に38cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

#### 遺土層解説

1 暗褐色 色 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	5 黒褐色 焃土ブロック中量
2 暗褐色 色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子微量	6 にふい黄褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
3 にふい黄褐色 焃土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	7 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
4 にふい黄褐色 焃土ブロック中量、ローム粒子微量	8 黄褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量



第77図 第26号住居跡実測図

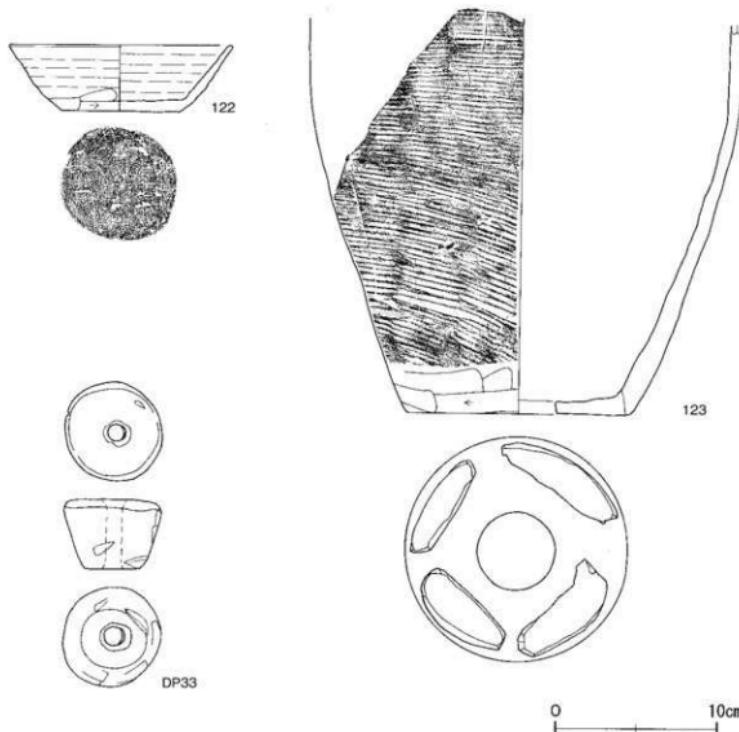
**覆土** 11層に分層できる。ロームブロックを含む層が多いが、周囲から流れ込んだ状況を示していることが自然堆積である。第12～14層は、貼床の構築土である。

**土層解説**

1 黒 極 色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	8 鮎 極 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 鮎 極 色 ロームブロック微量	9 にふい黒褐色 ロームブロック中量
3 黒 極 色 ロームブロック少量	10 鮎 極 色 ローム粒子微量
4 鮎 極 色 焼土粒子・炭化粒子微量	11 鮎 極 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 にふい黒褐色 ローム粒子・砂質粘土粒子微量	12 黒 極 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量
6 黒 極 色 焼土粒子微量	13 鮎 極 色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
7 鮎 極 色 ロームブロック微量	14 黒 極 色 ロームブロック微量

**遺物出土状況** 土師器片34点(坏3, 壺類31), 須恵器片17点(坏9, 壺5, 壺3), 土製品1点(紡錘車)が北部を中心に出土している。DP33は北部の床面, 122は竈の覆土下層からそれぞれ出土しており, 廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。123は, 中央部の床面と北東部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 時期は, 出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第78図 第26号住居跡出土遺物実測図

## 第 26 号住居跡出土遺物観察表（第 78 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 国	被成	手 法 の 特 殊 ほ か	出土位置	備 考
122	須恵器	环	13.5	4.1	7.2	長石・石英・雲母	灰青褐色	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	発覆土下層	85% PL24
123	須恵器	瓶	-	(24.2)	13.8	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部外周斜位の平行削き 下端ヘラ削り 5孔式 内面ヘラナダ	発覆土上層	40% PL25
番号	器 様	法	厚さ	孔径	底面	材 質			特 徵	出土位置	備 考
DP33	切削車	60	4.3	12	116.2	土 (長石・石英)	側面ヘラ削り 一方向からの穿孔			床面	PL29

## 第 27 号住居跡（第 79・80 図）

位置 調査区東部の C7g5 区、標高 195 m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 382 m、短軸 362 m の方形で、主軸方向は N - 13° - W である。壁高は 34 ~ 44 cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。北部を除き、壁下には壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロックを含む暗褐色土とにぶい黄褐色土を 7 ~ 14 cm ほど埋めて構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 104 cm で、燃焼部幅は 45 cm である。袖部は、床面上に砂質粘土ブロックを主体とする第 6 層を積み上げて構築されている。左袖部の内側に角柱状の切石（砂岩）と土師器甕が補強材として使用されている。火床部は床面と同じ高さで、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 58 cm 掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

### 遺土層解説

1 砂 壁 色	ローム粒子・焼土粒子微量	5 植物赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量
2 砂 壁 色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	6 砂 黄 色	砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック少量
3 にぶい黄褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量		
4 砂 赤 色	焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量		

ピット 2 か所。P 1 は深さ 21 cm で、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 2 は深さ 32 cm で、南壁際位置しており、性格不明である。

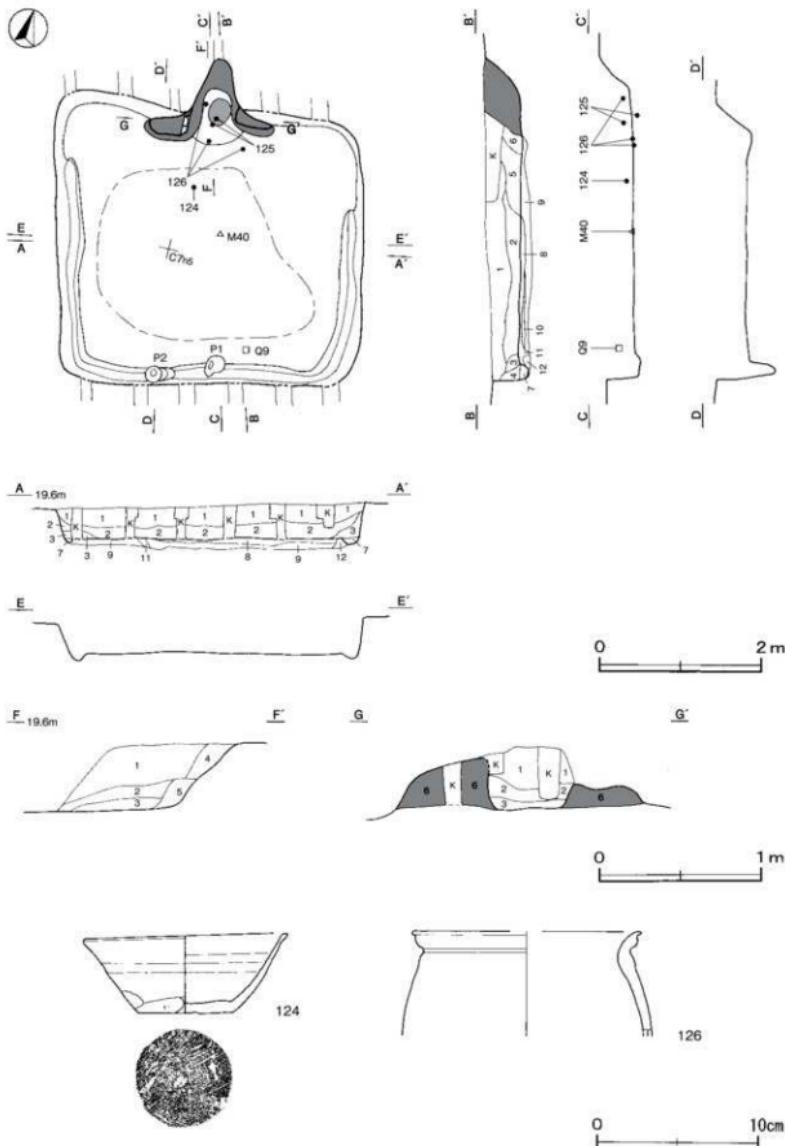
覆土 7 層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。第 8 ~ 12 層は、貼床の構築土である。

### 土層解説

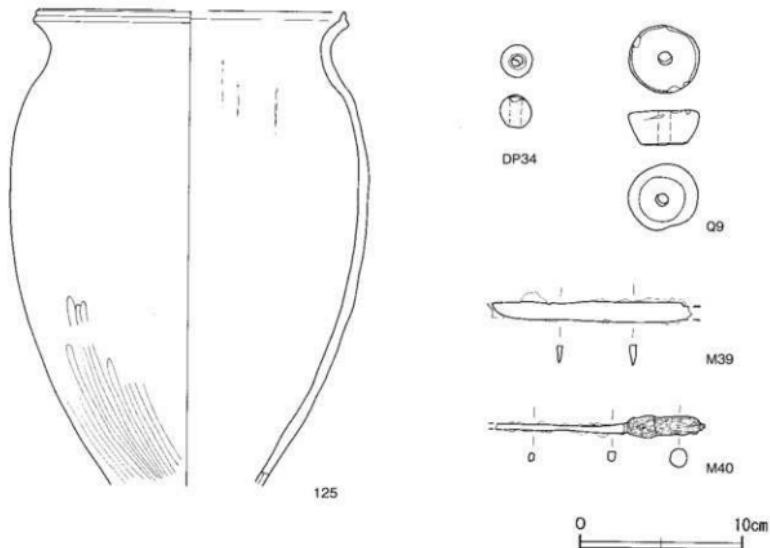
1 砂 壁 色	ローム粒子・焼土粒子微量	7 砂 壁 色	ローム粒子微量
2 砂 壁 色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	8 砂 壁 色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
3 にぶい黄褐色	ロームブロック中量	9 にぶい黄褐色	ロームブロック微量
4 砂 壁 色	ロームブロック少量	10 砂 壁 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 砂 壁 色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	11 砂 壁 色	ローム粒子微量
6 砂 壁 色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量	12 砂 壁 色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片 105 点（甕類 104、小形甕 1）、須恵器片 54 点（环 26、高台付环 1、蓋 2、甕類 24、瓶 1）、土製品 1 点（土玉）、石製品 1 点（筋鉢車）、鉄製品 2 点（刀子、鉤ヶ）が散在した状態で出土している。また、流れ込んだ繩文土器片 8 点（深鉢）も出土している。M 40 は中央部の床面、124 は中央部の覆土下層、Q 9 は南部の覆土中層からそれぞれ出土している。125 は竈の補強材として転用されていたものである。126 は、竈の火床部と覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。DP34・M 39 は、覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第79図 第27号住居跡・出土遺物実測図



第 80 図 第 27 号住居跡出土遺物実測図

第 27 号住居跡出土遺物観察表 (第 79・80 図)

番号	種 别	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 殊 は が	出土位置	備 考
I24	留忠器	环	12.4	5.0	5.9	良石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	70% PL24
I25	土師器	釜	[18.8]	(29.2)	-	良石・石英・雲母	棕	普通	体部外表面底のヘラ削き 内面ヘラナデ	覆火床部・下層	20%
I26	土師器	小形釜	[14.2]	(6.5)	-	良石・石英・雲母	にぶい棕	普通	外・内面ナデ	覆火床部・下層	20%
番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材 質	特 殊			出土位置	備 考
DP34	土玉	20	1.9	0.8	6.40	土(良石・石英)	ナデ	一方向からの穿孔		覆土中	PL29
番号	器種	深	厚さ	孔径	重量	材 質	特 殊			出土位置	備 考
Q 9	紡錘車	4.1	2.1	0.8	45.1	燧灰岩	両面研磨	一方向からの穿孔		覆土下層	PL30
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 殊			出土位置	備 考
M 39	刀子	(12.3)	1.2	0.4	(33.2)	鐵	茎部欠損 両側 両部断面三角形			覆土中	PL31
M 40	鉤	(13.0)	1.1	1.1	(11.6)	鐵	解説部・軸部欠損 断面長方形 痴部本質残存			床面	PL32

表6 平安時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設				覆土	主な出土遺物	時 期	備 考 重複関係 (古→新)
								柱穴の入口	ビット	壁・床	堅穴				
4	D 3e0	方 形	N - 9° - W	3.84 × 3.70	44 ~ 56	平坦	-	3	-	-	壁 2	-	自然 土師器、須恵器、土製品、石製品	9世紀中葉	
5	D 4e5	長方形	N - 5° - W	4.74 × 3.94	46 ~ 56	平坦	全周	-	1	-	壁 1	-	自然 土師器、須恵器、土製品、石製品	9世紀前葉	
9	D 4e9	方 形	N - 13° - W	4.90 × 4.28	50 ~ 62	平坦	全周	4	1	2	壁 1	-	自然 土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品	9世紀前葉	SL28 → 本跡
10	D 4e8	方 形	N - 10° - W	3.50 × 3.20	38 ~ 54	平坦	-	-	-	-	壁 1	-	人為 土師器、須恵器、石製品	9世紀中葉	
11	D 4e0	不整形方	N - 31° - W	4.06 × 3.92	15 ~ 40	平坦	全周	-	-	-	壁 1	-	自然 土師器、須恵器、石製品、土製品	9世紀中葉	本跡 → SK47
14	C 4e0	方 形	N - 24° - W	4.48 × 4.36	58 ~ 67	平坦	{全周}	4	1	5	壁 1	-	自然 土師器、須恵器、土製品、石製品	9世紀前葉	SK70 - 71
16	C 5e3	方 形	N - 6° - W	4.22 × 4.14	45	平坦	全周	-	1	-	壁 1	-	自然 土師器、須恵器、石製品	9世紀中葉	
17	C 6e8	方 形	N - 27° - W	3.32 × 3.30	25 ~ 31	平坦	全周	-	-	-	壁 1	-	人為 土師器、須恵器、石製品	9世紀前葉	
26	B 8e2	方 形	N - 17° - W	3.26 × 2.96	16 ~ 24	平坦	{全周}	-	-	-	壁 1	-	自然 土師器、須恵器、土製品	9世紀前葉	本跡 → SD6
27	C 7e5	方 形	N - 13° - W	3.82 × 3.62	34 ~ 44	平坦	{全周}	-	1	1	壁 1	-	自然 土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品	9世紀中葉	

## (2) 掘立柱建物跡

## 第2号掘立柱建物跡 (第81・82図)

位置 調査区中央部のD5e4区、標高 19.8 m の台地平坦部に位置している。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向N - 27° - Wの南北棟である。規模は、桁行・梁行ともに4.20 mで、面積は17.64m<sup>2</sup>である。柱間寸法は桁行、梁行ともに2.1 m (7尺) の等間隔の配置である。柱筋は、ほぼ描っている。

柱穴 8か所。平面形は円形または楕円形で、長径60~76cm、短径44~68cmである。深さは50~77cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。第1層は柱痕跡、第2~5層は埋土、第6~9層は柱抜き取り後の覆土である。

## 土層解説 (各柱穴共通)

1 黒褐色	ローム粒子微量	6 細褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 細褐色	ロームブロック中量	7 細褐色	ローム粒子、炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子多量	8 細褐色	他土ブロック・白色粘土ブロック中量
4 黒褐色	ローム粒子少量	9 明褐色	白色粘土ブロック中量
5 細褐色	ロームブロック少量		

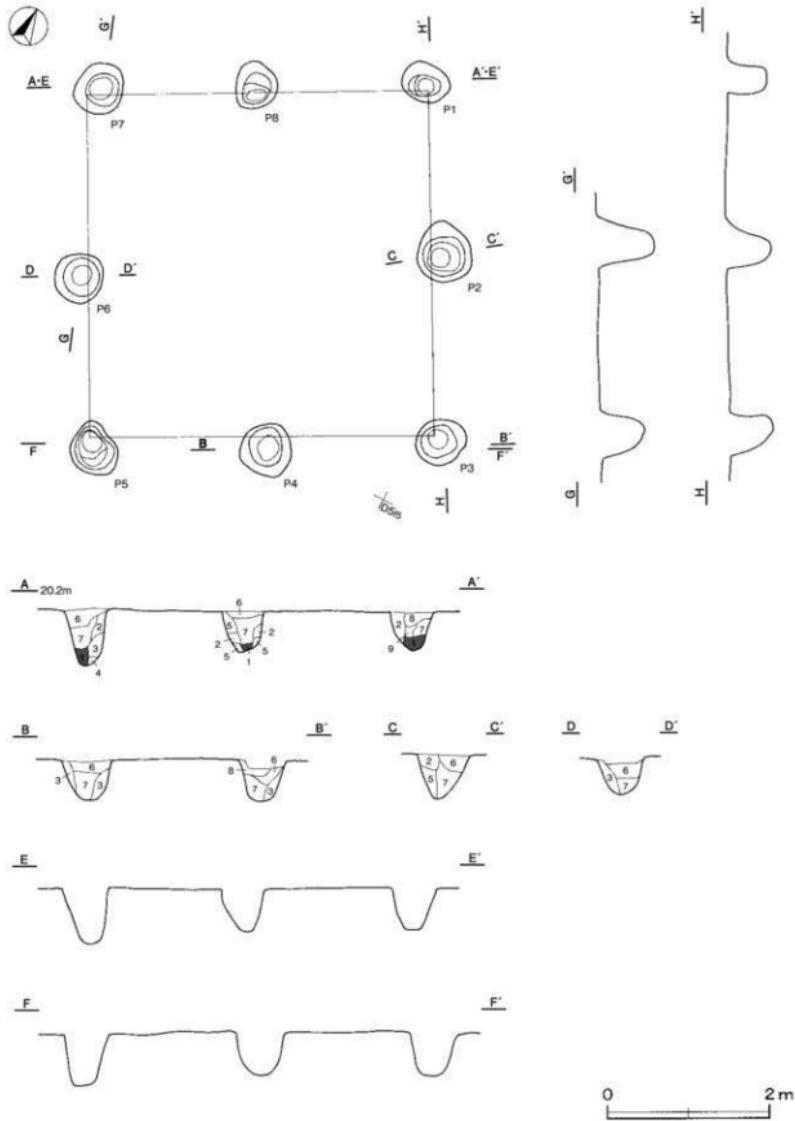
遺物出土状況 土師器片2点(甕)、須恵器片5点(甕2、甕3)、石器1点(砥石)がP 3とP 6を除くピットから出土している。127・TP13は、P 4の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前半と推定される。

## 第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第82図)

番号	種 别	基 標	口徑	器高	底溝	胎 土	色 調	燒成	手 法 の 特 徴 は か	出 土 位 置	備 考
127	須恵器	甕	-	(32) [68]	砥石・石裏・雲母	灰白	普通	底部刃軸ヘラ切り削り残す箇所ナメ		P 4 覆土中	20%

番号	種 別	基 標	始 土	色 調	手 法 の 特 徴 は か	出 土 位 置	備 考
TP13	須恵器	甕	砥石	灰	体部外表面の平行帯・内面同心四文の当て札痕	P 4 覆土中	PL27



第81図 第2号掘立柱建物跡実測図



第82図 第2号掘立柱建物跡出土遺物実測図

### 第3号掘立柱建物跡（第83図）

位置 調査区中央部のD5a5区、標高 19.7 m の台地平坦部に位置している。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の個柱建物跡で、桁行方向 N - 23° - W の南北棟である。規模は、桁行・梁行ともに 5.10 m で、面積は 26.01 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は、桁行が北妻から 2.7 m (9尺) · 2.4 m (8尺)、梁行は西妻から北平が 2.4 m (8尺) · 2.7 m (9尺)、南平が 3.0 m (10尺) · 2.1 m (7尺) である。柱筋は、不揃いである。

**柱穴** 8か所。平面形は円形または楕円形で、長径 42 ~ 86 cm、短径 38 ~ 58 cm である。深さは 50 ~ 92 cm で、掘方の断面形は、逆台形またはU字形である。第1層は柱抜き取り痕、第2 ~ 4層は埋土、第5 ~ 8層は柱抜き取り後の覆土である。

#### 土層解説（各柱穴共通）

1 黒褐色 ローム粒子微量	5 緑褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 緑褐色 ロームブロック少量	6 緑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
3 緑褐色 ロームブロック少量、他土粒子微量	7 にふい青褐色 ローム粒子・他土粒子少量
4 にふい青褐色 ロームブロック中量	8 緑褐色 ローム粒子少量

**遺物出土状況** 土器器片3点(甕)、須恵器片2点(壺)がP1 ~ P4の覆土中から出土しているが、細片のため図示できない。

**所見** 出土土器が細片のため時期の判断は困難であるが、覆土中から出土している須恵器壺の様相から9世紀前半と推定される。

### 第4号掘立柱建物跡（第84図）

位置 調査区中央部のD5b2区、標高 19.8 m の台地平坦部に位置している。

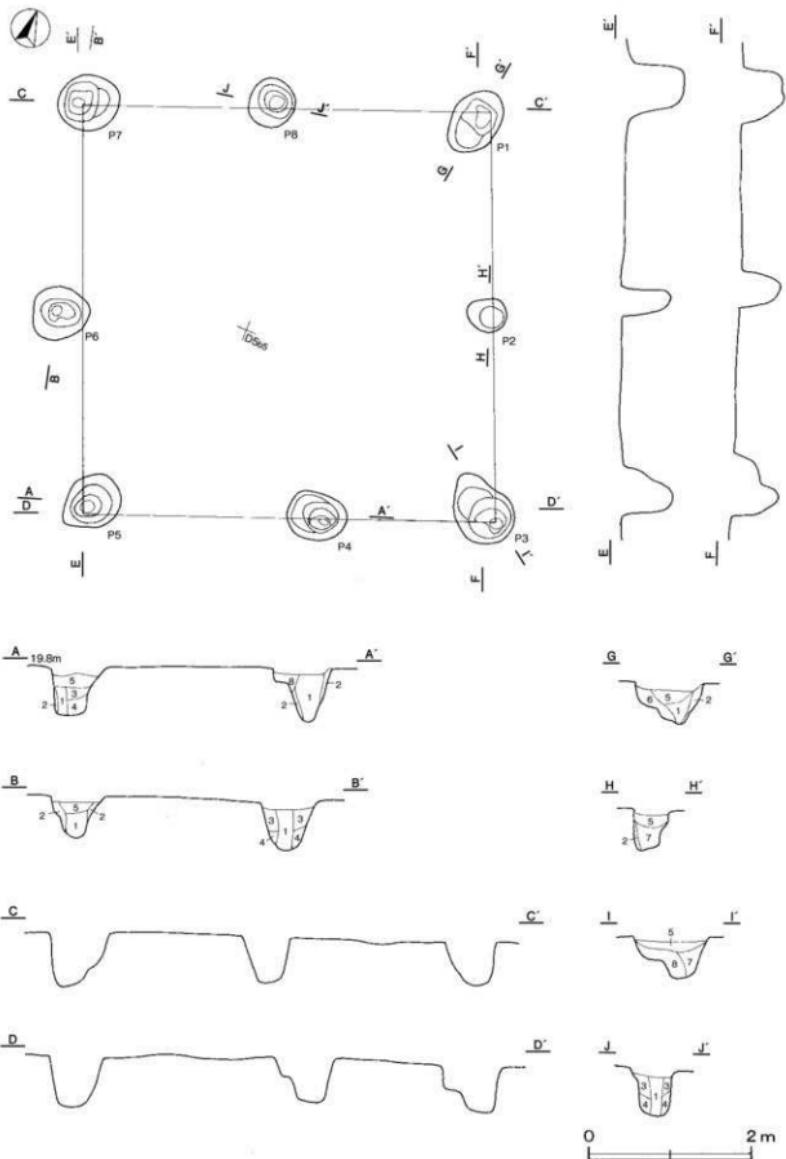
規模と構造 桁行2間、梁行2間の個柱建物跡で、桁行方向 N - 28° - W の南北棟である。規模は、桁行・梁行ともに 3.90 m で、面積は 15.21 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は、桁行が北妻から 1.8 m (6尺) · 2.1 m (7尺) で、梁行は西妻から北平が 1.8 m (6尺) · 2.1 m (7尺)、南平が 2.4 m (8尺) · 1.5 m (5尺) である。柱筋は、ほぼ揃っている。

**柱穴** 8か所。平面形は円形または楕円形で、長径 29 ~ 62 cm、短径 25 ~ 57 cm である。深さは 14 ~ 88 cm で、掘方の断面形はU字形である。第1層は柱抜き取り痕、第2・3層は埋土、第4~6層は柱抜き取り後の覆土である。

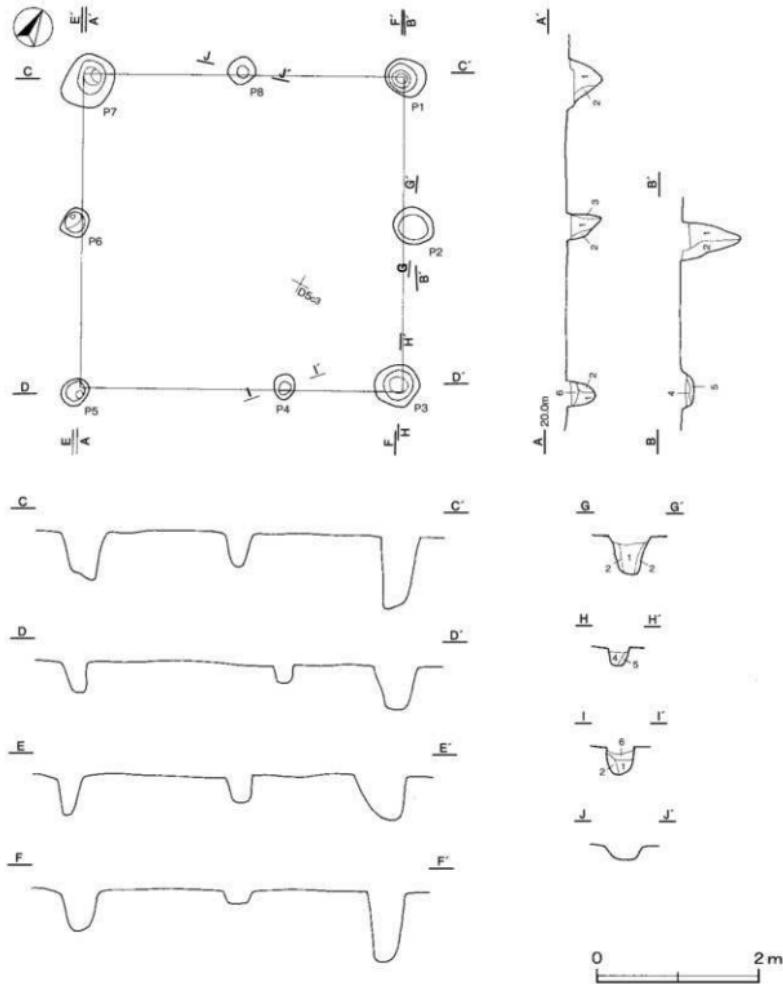
#### 土層解説（各柱穴共通）

1 黒褐色 ローム粒子微量	4 緑褐色 ローム粒子微量
2 緑褐色 ロームブロック・炭化粒子少量	5 にふい青褐色 ロームブロック少量
3 緑褐色 ロームブロック少量	6 緑褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

**所見** 出土土器がなく、時期の判断は困難であるが、南東 10 m に位置する第2号掘立柱建物跡と桁行方向がほぼ一致することから、同時期に存在していたと推測される。時期は、9世紀前半と推定される。



第83図 第3号掘立柱建物跡実測図



第84図 第4号掘立柱建物跡実測図

#### 第5号掘立柱建物跡（第85図）

位置 調査区中央部のD5a8区、標高19.7mの台地平坦部に位置している。

規模と構造 衍行2間、梁行2間の側柱建物跡で、衍行方向N-18°-Wの南北棟である。規模は、衍行4.20m、梁行が390mで、面積は16.38m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、衍行が2.1m（7尺）の等間隔で、梁行は西妻から北

平が2.1m(7尺)・1.8m(6尺), 南平が1.8m(6尺)・2.1m(7尺)である。柱筋は、不揃いである。

**柱穴** 8か所。平面形は円形または梢円形で、長径27~39cm, 短径27cmである。深さは15~62cmで、掘方の断面形はU字形である。第1層は埋土、第2~5層は柱抜き取り後の覆土である。

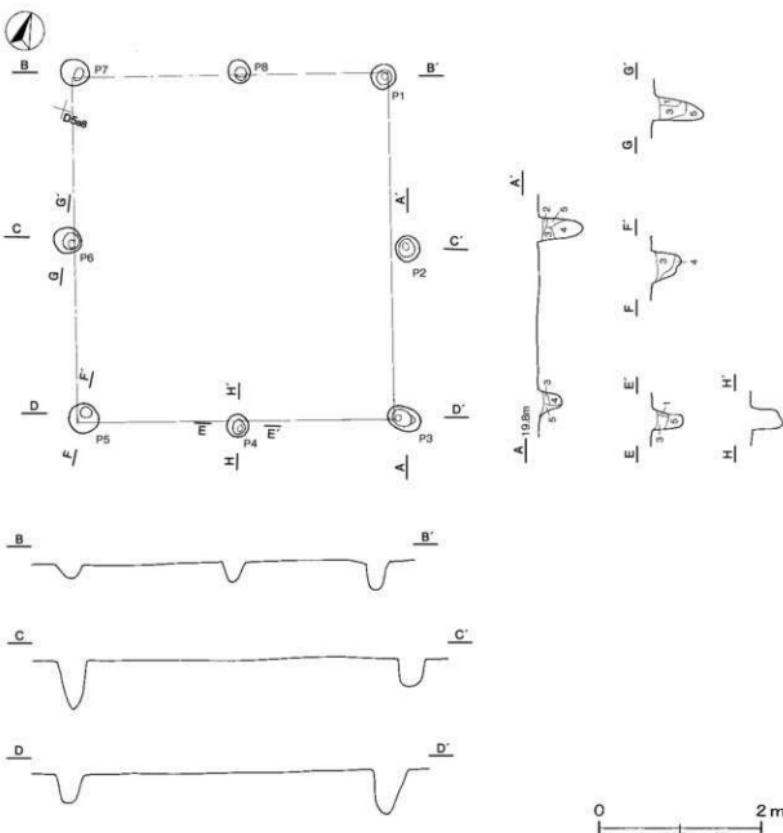
**土層解説 (各柱穴共通)**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量  
2 暗褐色 ローム粒子少量  
3 暗褐色 ロームブロック少量

- 4 暗褐色 ロームブロック中量  
5 暗褐色 ローム粒子中量

**遺物出土状況** 須恵器片1点(蓋)が、P8から出土しているが、細片のため図示できない。

**所見** 出土土器が細片のため時期の判断は困難であるが、覆土中から出土している須恵器蓋の様相から9世紀前半と推定される。



第85図 第5号掘立柱建物跡実測図

### 第10号掘立柱建物跡（第86図）

位置 調査区東部のB9i3区、標高19.9mの台地平坦部に位置している。

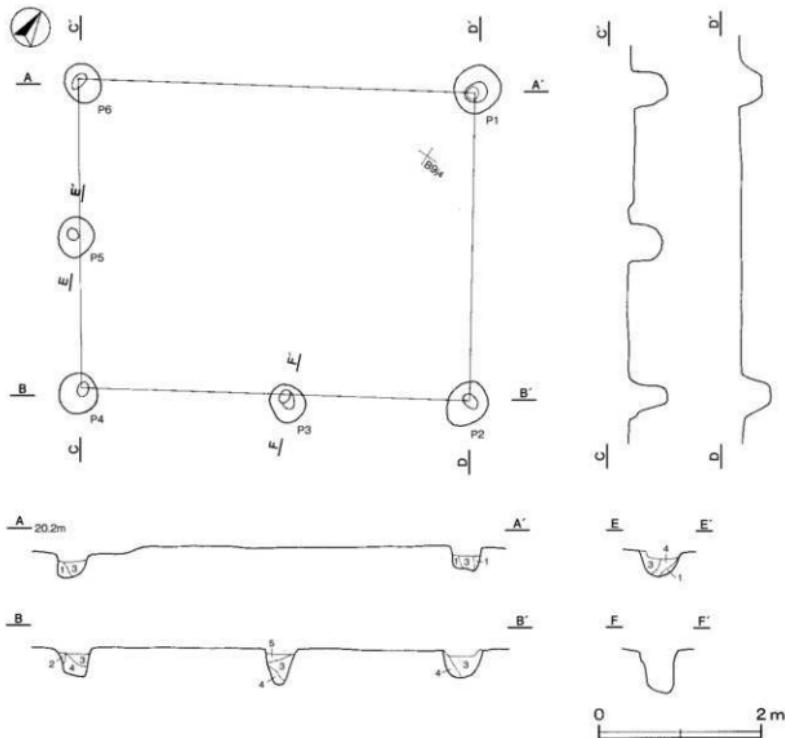
規模と構造 柱行2間、梁行2間の側柱建物跡で、柱行方向N-58°-Eの東西棟である。規模は、柱行4.80m、梁行3.90mで、面積は18.72m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、柱行が2.4m(8尺)の等間隔で、梁行が北妻から2.1m(7尺)・1.8m(6尺)である。柱筋は、ほぼ描っている。

柱穴 6か所。平面形は円形で、長径46~58cm、短径44~56cmである。深さは35~54cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。第1・2層は埋土、第3~5層は柱抜き取り後の覆土である。

#### 土層解説（各柱穴共通）

- |                          |                        |
|--------------------------|------------------------|
| 1 細 色 ロームブロック多量          | 4 細 細 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 細 色 ロームブロック中量          | 5 細 細 色 ロームブロック中量      |
| 3 黒 細 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |                        |

遺物出土状況 土師器片2点（坏）、須恵器片5点（坏3、蓋2）がP3~P5の覆土中から出土しているが、細片のため図示できない。



第86図 第10号掘立柱建物跡実測図

**所見** 出土土器が細片のため時期の判断は困難であるが、覆土中から出土している須恵器蓋の様相から9世紀前半と推定される。

表7 平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	施行方向	柱間数		規格		柱間寸法		柱穴			主な出土遺物	時間	備考
			幅×奥 (mm)	幅×奥 (m)	(m)	幅間 (m)	奥間 (m)	構造	柱穴数	平面形	深さ (cm)			
2	D 5d7	N - 27° - W	2 × 2	420 × 420	17.64	2.10	2.10	圓柱	8	円形・楕円形	50 - 70	土師器、須恵器	9世紀前半	
3	D 5a5	N - 23° - W	2 × 2	510 × 510	26.01	2.4 - 2.7	2.1 - 3.0	圓柱	8	円形・楕円形	30 - 92	土師器、須恵器	9世紀前半	
4	D 5b2	N - 28° - W	2 × 2	390 × 390	15.21	1.8 - 2.1	1.5 - 2.4	圓柱	8	円形・楕円形	14 - 86		9世紀前半	
5	D 5a8	N - 18° - W	2 × 2	420 × 390	16.38	2.10	1.8 - 2.1	圓柱	8	円形・楕円形	15 - 62	須恵器	9世紀前半	
10	C 8a3	N - 58° - E	2 × 2	480 × 390	18.72	2.40	1.8 - 2.1	圓柱	6	円形	35 - 54	土師器、須恵器	9世紀前半	

### (3) 土坑

#### 第4号土坑（第87図）

**位置** 調査区西部のD3c2区、標高19.3mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径2.10m、短径1.81mの楕円形で、長径方向はN-83°-Eである。深さは45cmで、底面は皿状である。壁は、緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 6層に分層できる。各層にロームブロック・粒子を含んでいるが、周囲から流れ込んだ状況を示したことから自然堆積である。

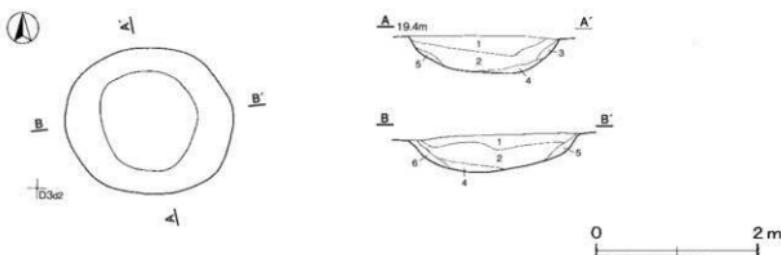
#### 土層解説

1	暗	褐色	ローム粒子・炭化粒子中量、他土粒子微量	4	暗	褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・他土粒子少量
2	暗	褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、他土粒子微量	5	褐	色	ローム粒子多量、他土粒子・炭化粒子微量
3	暗	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	6	暗	褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片1点(甕)、須恵器片4点(坏3、蓋1)が出土している。細片のため図示できない。

また、流れ込んだ縄文土器片1点(深鉢)と混入した陶器片1点(碗)も出土している。

**所見** 出土土器が細片のため時期の確定は困難であるが、覆土中から出土している須恵器坏と蓋の様相から9世紀代と推定される。



第87図 第4号土坑実測図

### 第36号土坑（第88図）

位置 調査区中央部のC44区、標高19.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.41m、短径0.36mの橢円形で、長径方向はN-12°-Wである。深さは57cmで、底面は圓状である。壁は、外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。

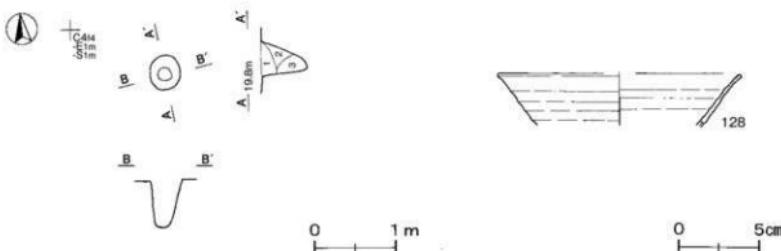
#### 土層解説

1 帯 褐色 ロームブロック中量、砂質粘土粒子微量  
2 帯 黄褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

3 帯 褐色 砂質粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片3点（甕）、須恵器片3点（坏1、蓋2）が出土している。128は、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前半と推定される。



第88図 第36号土坑・出土遺物実測図

### 第36号土坑出土遺物観察表（第88図）

番号	種別	器種	口径	基高	通体	胎土	色調	塊成	手 法 の 特徴 ほ か	出土位置	備考
128	須恵器	坏	[14.7]	(3.2)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	ロクロ目弱い	覆土中	10%

### 第41号土坑（第89図）

位置 調査区中央部のD47区、標高19.8mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸1.35m、短軸1.13mの隅丸方形で、長軸方向はN-23°-Wである。深さは30cmで、底面は平坦である。壁は、外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。

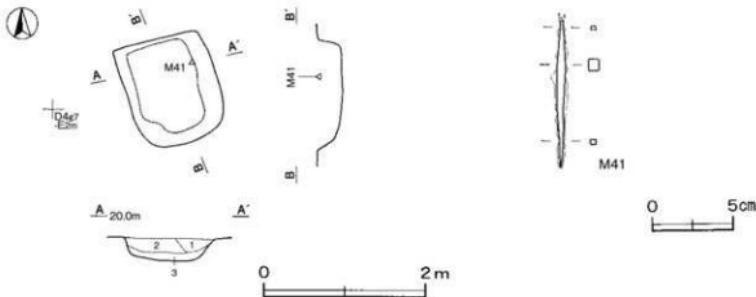
#### 土層解説

1 帯 褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量  
2 帯 黄褐色 烧土ブロック・ローム粒子微量

3 帯 褐色 ローム粒子中量、燒土粒子微量

遺物出土状況 土師器片7点（坏1、甕6）、須恵器片2点（坏）、鉄製品1点（棒状鉄製品）が出土している。また、混入した陶器片1点（碗）も出土している。M41は、覆土上層から出土している。

所見 出土土器が細片のため時期の確定は困難であるが、覆土中から出土している須恵器坏の様相から9世紀代と推定される。



第89図 第41号土坑・出土遺物実測図

第41号土坑出土遺物観察表（第89図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
							横径	縦径	断面形状		
M-41	漆灰陶盤器	(93)	06	07	(990)	鉄	断面方形			覆土上層	PL32

表8 平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規格		底面	壁面	覆土	未な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
4	D 3e2	N - 83° - E	楕円形	2.10 × 1.81	45	皿状	磚製	自然	土器器、須恵器	重複開発(古→新)
36	C 4 44	N - 12° - W	楕円形	0.41 × 0.36	57	皿状	外輪	人為	土器器、須恵器	
41	D 4 47	N - 23° - W	楕丸形	1.35 × 1.13	30	平坦	外輪	自然	土器器、須恵器、金銅製品	

#### 4 中世の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、掘立柱建物跡2棟、方形堅穴遺構1基、井戸跡1基、土坑1基である。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

##### （1）掘立柱建物跡

###### 第7号掘立柱建物跡（第90図）

位置 調査区中央部のC 6g6区、標高19.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3・4号溝、第53号土坑、第4号ピット群のP 2・P 6に掘り込まれている。

規模と構造 梁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡で、梁行方向N - 88° - Wの東西棟である。規模は、梁行4.20m、東梁行3.90m・西梁行3.60mで、面積は15.75m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、梁行が2.1m（7尺）の等間隔で、梁行が北妻から1.8m（6尺）・2.1m（7尺）である。柱筋は、ほぼ揃っている。

柱穴 7か所。平面形は円形または楕円形で、長径23～42cm、短径21～34cmである。深さは40～70cmで、掘方の断面形はU字形またはV字形である。第1層は柱抜き取り痕、第2・3層は埋土、第4層は柱抜き取

り後の覆土である。

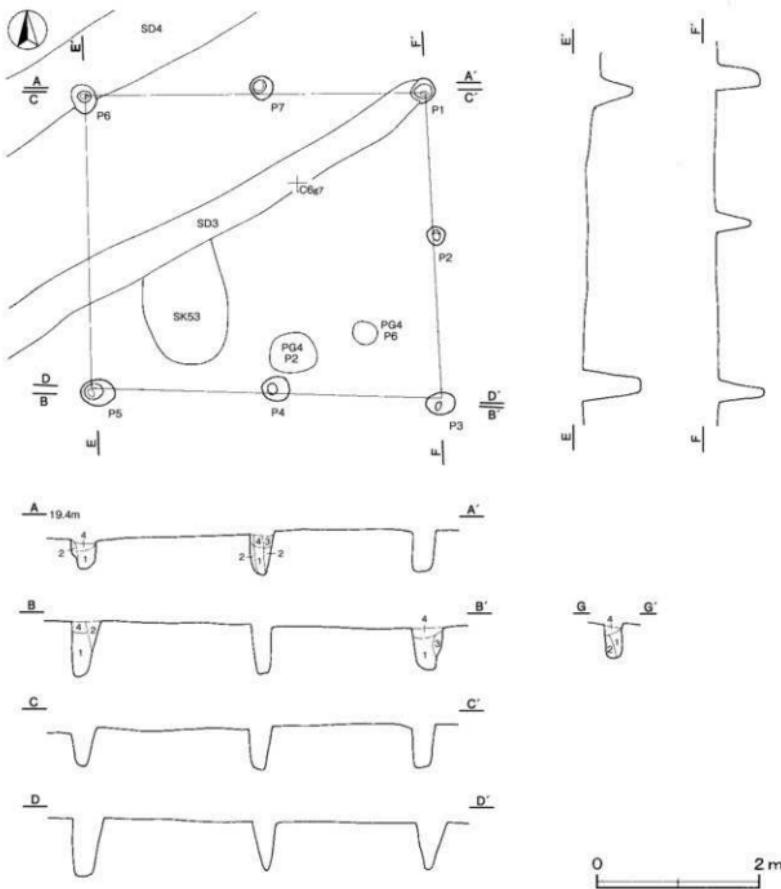
土層解説（各柱穴共通）

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量  
2 に赤い鉄色 ロームブロック中量

- 3 黄褐色 ロームブロック中量  
4 褐褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 須恵器片 1 点（壺）が P1 から出土しているが、細片のため図示できない。

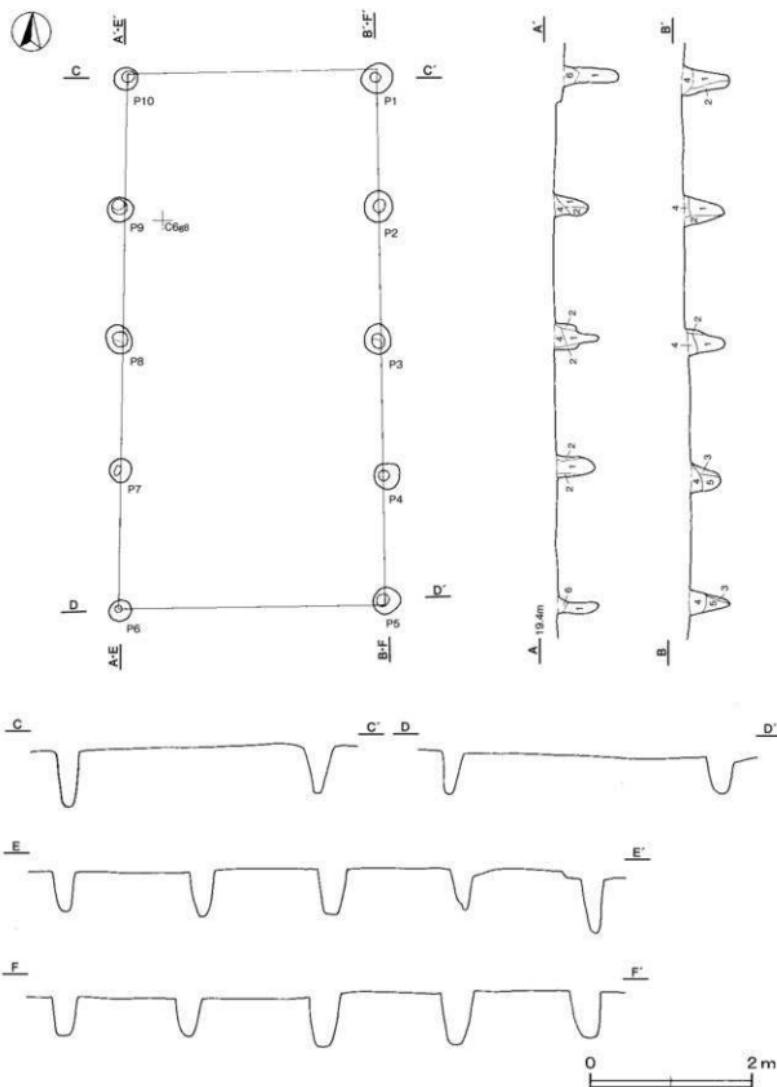
所見 出土土器が細片のため時期の判断は困難であるが、柱穴の規模や形態から中世以降と考えられる。



第 90 図 第 7 号掘立柱建物跡実測図

第8号掘立柱建物跡（第91図）

位置 調査区中央部のC 6g8 区、標高 19.3 m の台地平坦部に位置している。



第91図 第8号掘立柱建物跡実測図

**規模と構造** 桁行4間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向N-2°-Wの南北棟である。規模は、桁行6.60m、北梁行3.00m・南梁行3.30mで、面積は20.79m<sup>2</sup>である。桁行の柱間寸法は、北妻から東平が1.8m(6尺)・1.8m(6尺)・1.5m(5尺)・1.5m(5尺)、西平が1.8m(6尺)・1.5m(5尺)・1.5m(5尺)・1.8m(6尺)である。柱筋は、ほぼ揃っている。

**柱穴** 10か所。平面形は円形または楕円形で、長径25~40cm、短径24~35cmである。深さは46~70cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。第1層は柱抜き取り痕、第2・3層は埋土、第4~6層は柱抜き取り後の覆土である。

#### 土層解説(各柱穴共通)

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量	4 褐色 ローム粒子微量
2 喜褐色 ロームブロック少量	5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
3 にふい黄褐色 ロームブロック少量	6 褐色 ローム粒子・砂質粘土粒子微量

**遺物出土状況** 繩文土器片1点(深鉢)、土器器片1点(甕)がP2・P8から出土しているが、細片のため図示できない。

**所見** 出土土器が細片のため時期の確定は困難であるが、柱穴の規模や形態から中世以降と考えられる。

表9 中世掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数	渠幅	面積	柱間寸法	柱穴			主な出土遺物	時間	備考 重複関係(古→新)
							桁×渠(間)	渠×渠(m)	渠(m)			
7	C6g6	N-88°-W	2×2	420×390	16.38	210	18~21	楕柱	7	円形・楕円形 40~70	須恵器	中世 本跡→SD3・4. SK53 PG4 P2・6
8	C6g6	N-2°-W	4×1	660×330	21.78	15~18	30~33	楕柱	10	円形・楕円形 46~70	土器片	中世

#### (2) 方形竪穴遺構

##### 第1号方形竪穴遺構(第92図)

**位置** 調査区東部のC6g4区、標高193mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸2.74m、短軸2.60mの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。底面は平坦である。南壁際中央部の底面には、砂質粘土がスロープ状に貼られている。壁高は50~62cmで、ほぼ直立している。

**ピット** 2か所。P1は深さ34cm、P2は深さ27cmで、主軸方向と直交して、2.4mの間隔で壁際際に位置していることから柱穴と考えられる。

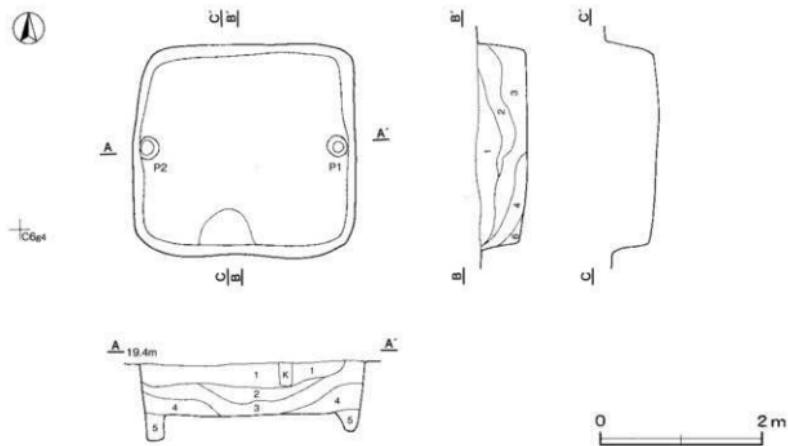
**覆土** 5層に分層できる。各層にロームブロック・粒子を含んでいるが、周囲から流れ込んだ状況を示したことから自然堆積である。第6層は、スロープの構築土である。

#### 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量	4 にふい黄褐色 ロームブロック・砂質粘土粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック中量	5 喜褐色 ロームブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量	6 褐色 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子微量

**遺物出土状況** 土器器片、須恵器器片各1点が出土しているが、細片のため図示できない。

**所見** 時期は、伴う遺物が出土していないため明確ではないが、規模と形状から中世と考えられる。



第92図 第1号方形竪穴遺構実測図

(3) 井戸跡

第4号井戸跡 (第93・94図)

位置 調査区中央部のC4h4区、標高19.7mの台地平坦部に位置している。

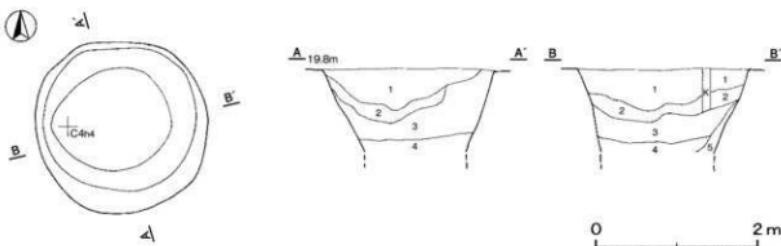
規模と構造 径2.14mの円形で、漏斗状に掘り込まれている。深さ1.04mほどで、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 5層に分層できる。全体的にレンズ状に堆積しているが、ロームブロックや粘土ブロックを含んでいる層が多いことから、廃施設後に少しづつ埋め戻されたものとみられる。

土層解説

1 黒 細 色	ロームブロック・粘土ブロック多量、焼土ブロック少量	4 暗 細 色	ローム粒子微量
2 黒 細 色	焼土粒子・粘土粒子微量	5 にふい黄褐色	ロームブロック少量
3 暗 細 色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量		

遺物出土状況 土師器片34点(甕),須恵器片26点(环14,甕12),土師質土器片1点(小皿),磁器片1点(碗)。



第93図 第4号井戸跡実測図

土製品1点（支脚）が出土している。129・TP14は、覆土中から出土している。いずれも埋め戻された際の混入とみられる。

**所見** 形状から素掘りの井戸とみられる。時期は、出土土器から中世と推定される。



第94図 第4号井戸跡出土遺物実測図

第4号井戸跡出土遺物観察表（第94図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	塊成	手法の特徴ほか	出土状況	備考
129	土師質土器	小皿	[58]	1.8	3.0	長石・石英・赤色 灰化	にぶい橙	普通	体底下端手持ちヘラ削り 成組田字切り	覆土中	40%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土状況	備考
TP14	頸部器	壺	長石・石英	暗灰黒	体部外側腹位の平行引き 内面同心四文の当て具痕	覆土中	PL25

#### (4) 土坑

第65号土坑（第95・96図）

**位置** 調査区東部のB-8j9区、標高20.1mの台地平坦部に位置している。

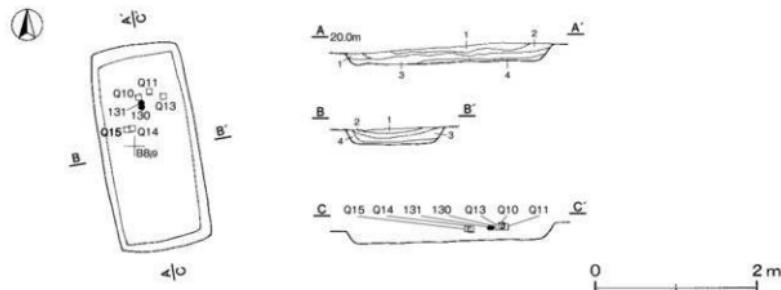
**規模と形状** 長軸2.57m、短軸1.23mの長方形で、長軸方向はN-8°-Wである。深さは20cmで、底面は平坦である。壁は、外傾して立ち上がりっている。

**覆土** 4層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 細 褐 色 ロームブロック・細砂微量
- 2 細 褐 色 細砂多量、焼土粒子微量

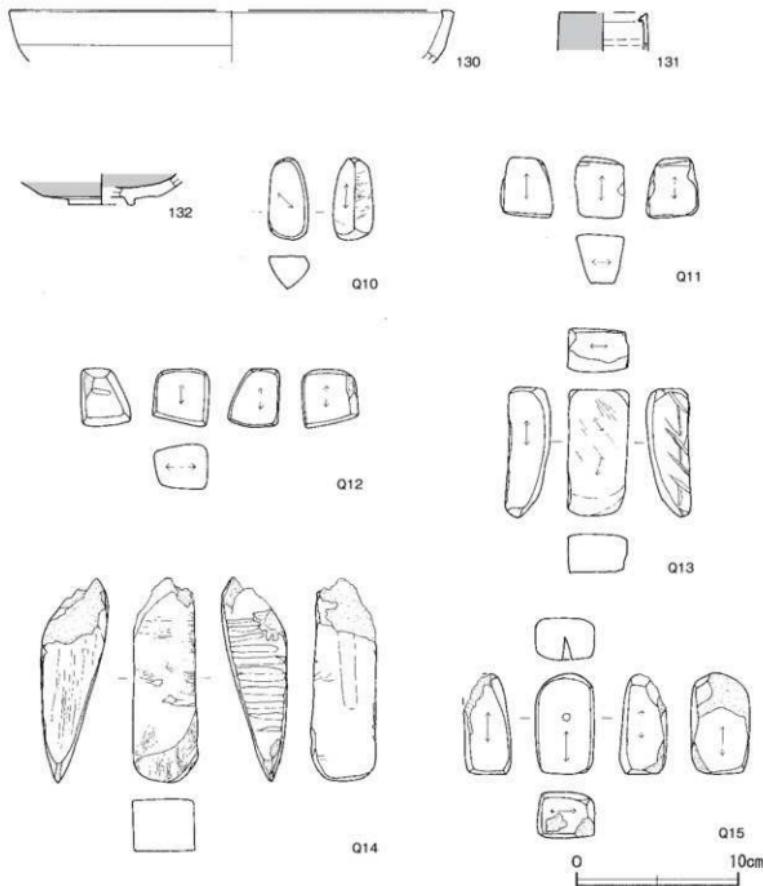
- 3 細 褐 色 塵化物多量、焼土ブロック少量
- 4 細 褐 色 ローム粒子微量



第95図 第65号土坑実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片 13 点（鉢）、石器 6 点（砥石）のほか、流れ込んだ土師器片 3 点（壺 1、甕類 2）、混入した陶器片 1 点（碗）、磁器片 5 点（碗 4、瓶 1）が出土している。130・131・Q 10・Q 11・Q 13 は北部、Q 14・Q 15 は中央部の覆土上層から出土している。132・Q 12 は覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から中世と推定される。



第 96 図 第 65 号土坑出土遺物実測図

第 65 号土坑出土遺物観察表（第 96 図）

番号	種 別	器種	口径	深高	底形	胎 土	色 調	塊成	手 法 の 特 徴 は か	出土状況	備 考
130	土師質土器	鉢	[27.2]	(3.2)	一	灰白・石英・赤色 粒子	橙	普通	口縁部内ナメ	覆土上層	5%
131	磁器	瓶	[54]	(2.3)	一	磁砂	灰青褐色	良好	透明感 外面施釉	覆土上層	5%
132	陶器	瓶	-	(3.9)	[4.0]	磁砂	にふい質感	普通	透明感 外・内面施釉	覆土中	10%

番号	器 様	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 訴	出土状況	備 考
Q 10	砾石	5.0	2.5	2.0	27.6	砾灰岩	底面3面のうち1面に条状の研磨面有り	覆土上層	PL30
Q 11	砾石	3.7	3.0	3.2	51.0	砾灰岩	底面4面 他は鏡面	覆土上層	PL30
Q 12	砾石	3.5	3.5	3.1	54.8	砾灰岩	底面4面 他は鏡面	覆土中	PL30
Q 13	砾石	8.0	3.3	2.8	128.9	砾灰岩	底面4面のうち1面に溝状の研磨面有り 他は鏡面	覆土上層	PL30
Q 14	砾石	12.4	4.0	3.8	236.0	砾灰岩	底面4面のうち1面に溝状の研磨面有り	覆土上層	PL30
Q 15	砾石	6.2	3.6	2.9	87.3	砾灰岩	底面5面 一方向からの穿孔、剥げ砾石未製品	覆土上層	PL30

## 5 その他の遺構と遺物

伴う遺物が出土していないことなどから時期を決定できない遺構として、井戸跡3基、溝跡12条、土坑45基、ピット群5か所が存在する。以下、これらの遺構のうち特徴的ないくつかについては文章で記述し、それ以外の遺構については実測図と一覧表を掲載する。

### （1）井戸跡

#### 第1号井戸跡（第97図）

位置 調査区東部のC717区、標高197mの台地平坦部に位置している。

規模と構造 確認面は推定径3.20mの円形で、確認面から0.67mまでは漏斗状に、それより下部は径2.20mほどの円筒状に掘り込まれている。深さ1.35mほどで、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

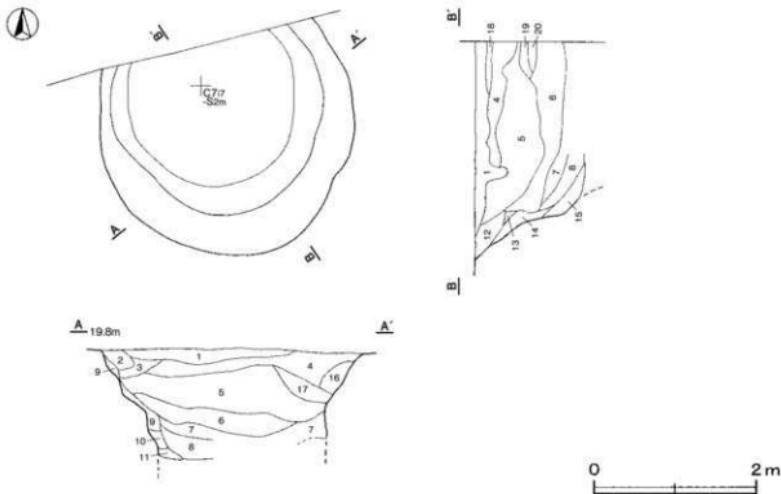
覆土 8層に分層できる。全体的にレンズ状に堆積しているが、ロームブロックや粘土ブロックを含んでいる層が多いことから、廃絶後に少しずつ埋め戻されたものとみられる。第9～20層は表込めの層である。

#### 土層解説

1 黒 橙 色 ロームブロック中量、粘土粒子微量	11 黄 橙 色 粘土ブロック多量
2 橙 色 ロームブロック多量、粘土ブロック中量	12 橙 色 ロームブロック多量、粘土ブロック少量、粘土粒子微量
3 黑 橙 色 ローム粒子中量、炭化粒子、粘土粒子微量	13 明黄 橙 色 粘土ブロック多量
4 黑 橙 色 ロームブロック多量、粘土ブロック少量	14 橙 橙 色 ローム粒子多量
5 黑 橙 色 ロームブロック、粘土ブロック微量	15 黑 橙 色 粘土ブロック・ローム粒子中量、砂粒少量
6 黑 橙 色 ロームブロック多量、粘土ブロック中量	16 にふい質褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量
7 黑 橙 色 粘粒少量、ローム粒子微量	17 黑 橙 色 ロームブロック少量、粘土ブロック微量
8 暗 橙 色 ロームブロック、砂粒中量、粘土粒子微量	18 黑 橙 色 粘土ブロック・ローム粒子微量
9 橙 色 ローム粒子多量、粘土粒子微量	19 黑 橙 色 ローム粒子微量
10 黑 橙 色 粘粒少量、ローム粒子、粘土粒子微量	20 明黄 橙 色 粘土ブロック中量

遺物出土状況 繩文土器片5点（深鉢）、土師器片3点（壺）、須恵器片2点（壺）が出土しているが、細片のため図示できない。いずれも埋め戻された際の混入とみられる。

所見 時期は、覆土が埋め戻されており、出土遺物が混入であることから不明である。



第97図 第1号井戸跡実測図

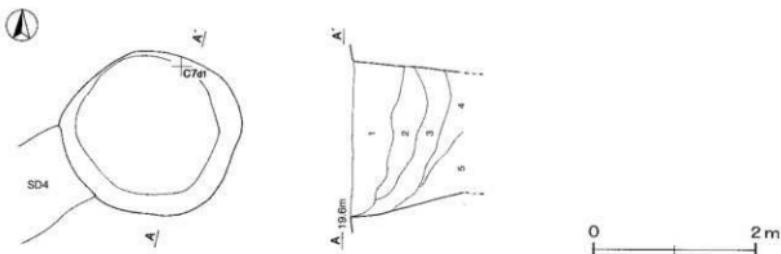
#### 第2号井戸跡（第98図）

**位置** 調査区東部のC 6d0区、標高19.5mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第4号溝に掘り込まれている。

**規模と構造** 長径2.23m、短径2.00mの楕円形で、円筒状に掘り込まれている。深さ1.37mほどで、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

**覆土** 5層に分層できる。レンズ状に堆積しているが、ロームブロックや粘土ブロックを含んでいる層が多いことから、廃絶後に少しづつ埋め戻されたものとみられる。



第98図 第2号井戸跡実測図

**土層解説**

1 黒 梶 色	白色粘土ブロック中量。燒土ブロック少量。ローム粒子微量	4 緩 梶 色	ロームブロック少量、白色粘土ブロック微量
2 に bei 黄褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子中量。燒土ブロック・白粘土ブロック少量	5 黒 梶 色	白色粘土ブロック少量。ロームブロック・燒土ブロック微量
3 黑 梶 色	白色粘土ブロック中量。ロームブロック・砂質粘土粒子少量		

**所見** 覆土が埋め戻されているが、出土遺物が無いことから、時期は不明である。

**第3号井戸跡（第99図）**

**位置** 調査区東部のC 8bl 区、標高 20.0 m の台地平坦部に位置している。

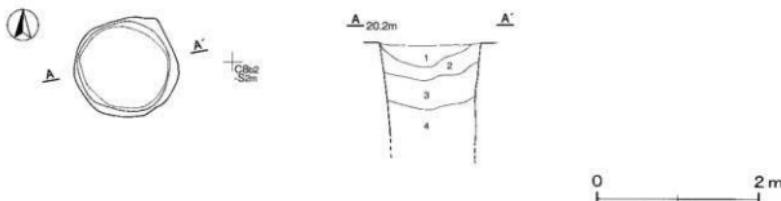
**規模と構造** 径 1.25 m の円形、円筒状に掘り込まれている。深さ 1.24 m ほどで、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

**覆土** 4 層に分層できる。レンズ状に堆積しているが、各層にロームブロックが含まれていることから、廃絶後に少しづつ埋め戻されたものとみられる。

**土層解説**

1 黒 梶 色	ロームブロック少量、燒土粒子微量	3 緩 梶 色	ロームブロック多量、燒土粒子微量
2 緩 梶 色	ロームブロック多量	4 緩 梶 色	ロームブロック中量

**所見** 覆土が埋め戻されているが、出土遺物が無いことから、時期は不明である。



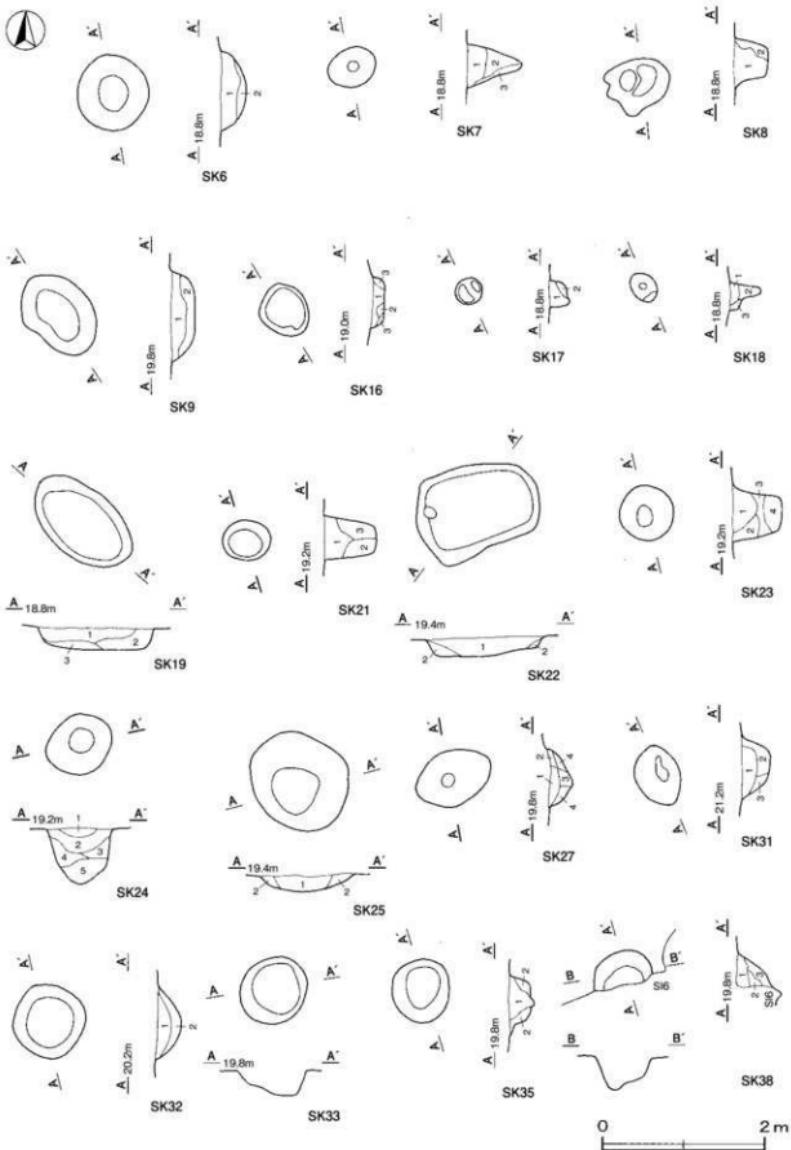
第99図 第3号井戸跡実測図

表10 その他の井戸跡一覧表

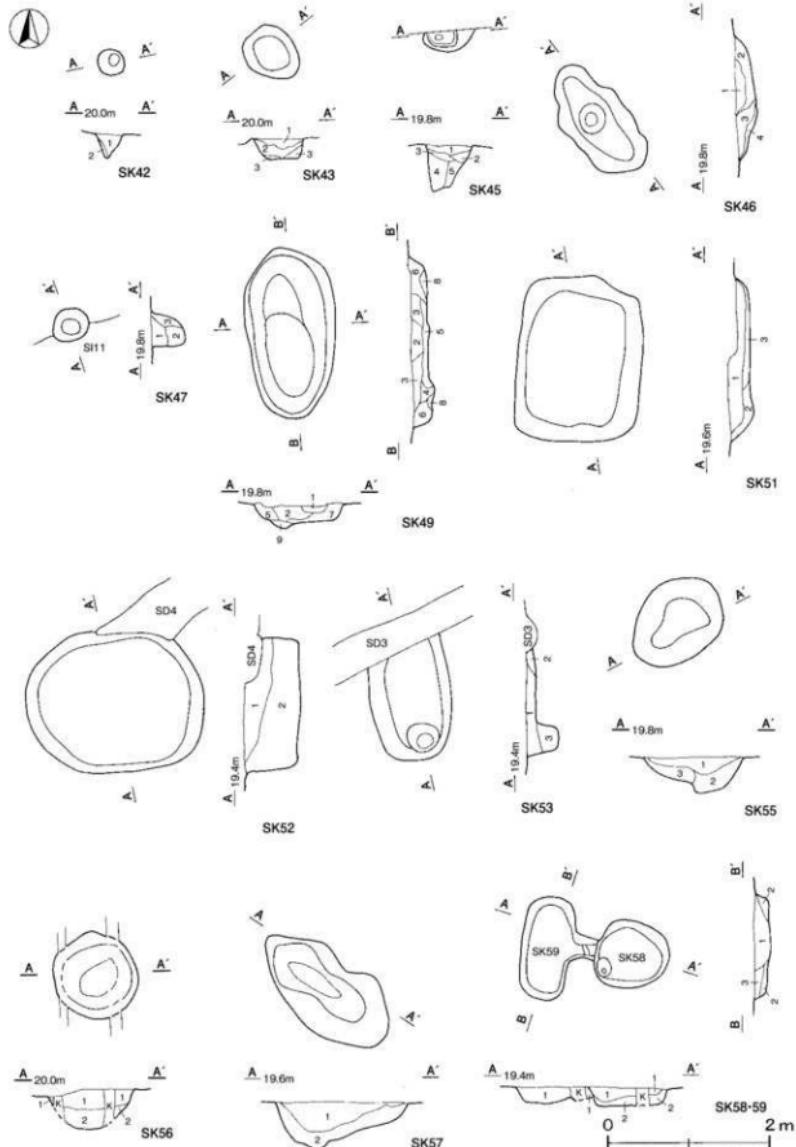
番号	位置	長径方向	平面形	規 格		断面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	C 7.7	-	円 形	3.20 × (2.90)	(135)	断面状 圓筒状	不明	人為	焼土層、土細層、埴造層	重複開削(古→新)
2	C 6.60	-	椭円形	2.23 × 2.00	(137)	円筒状	不明	人為		本跡→SD4
3	C 8bl	-	円 形	1.25 × 1.21	(124)	円筒状	不明	人為		

**(2) 土坑（第100～102図）**

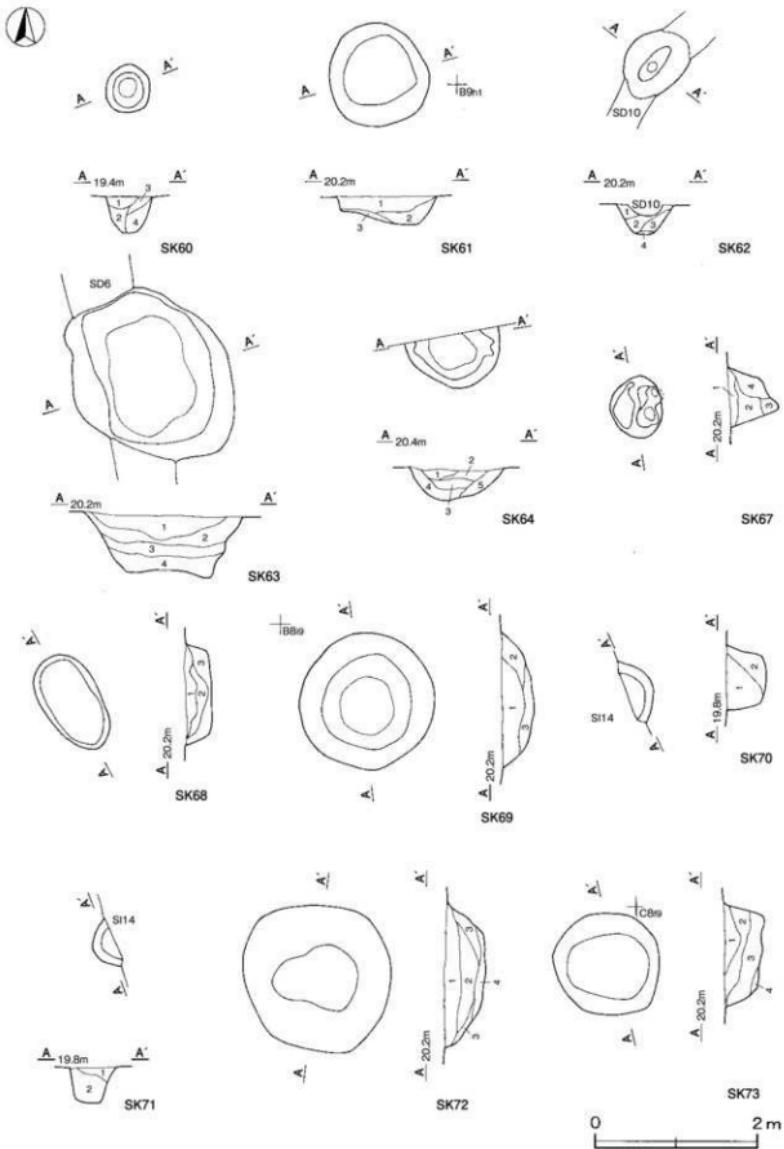
今回の調査で、性格や時期ともに不明な土坑45基が確認されている。これらの土坑については、規模・形状等について実測図と土層解説、一覧表を掲載するにとどめる。



第100図 その他の土坑実測図（1）



第101図 その他の土坑実測図（2）



第102図 その他の土坑実測図（3）

#### 第6号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 灰化粒子中量。燒土粒子少量、ローム粒子微量
- 2 黑 褐 色 ロームブロック中量。灰化粒子少量

#### 第7号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 ロームブロック中量
- 2 褐 褐 色 ロームブロック少量。燒土粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック中量

#### 第8号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 ロームブロック多量。灰化粒子微量
- 2 黑 褐 色 ロームブロック少量。灰化粒子微量

#### 第9号土坑土層解説

- 1 黑 褐 色 ローム粒子・灰化粒子少量
- 2 黑 褐 色 ロームブロック中量。灰化粒子微量

#### 第16号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 烧土ブロック・灰化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 黑 褐 色 ロームブロック少量
- 3 褐 色 ロームブロック少量

#### 第17号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 ロームブロック少量。灰化粒子微量
- 2 にふい黄褐色 ロームブロック中量。燒土粒子微量

#### 第18号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 ローム粒子微量
- 2 褐 褐 色 ロームブロック少量。燒土粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック中量

#### 第19号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 ロームブロック少量。灰化粒子微量
- 2 にふい黄褐色 ローム粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック少量

#### 第21号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 ロームブロック中量。燒土粒子・灰化粒子微量
- 2 黑 褐 色 ローム粒子少量
- 3 黑 褐 色 ロームブロック中量

#### 第22号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 ロームブロック少量。灰化粒子微量
- 2 褐 褐 色 ローム粒子多量。灰化粒子微量

#### 第23号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 ロームブロック中量。灰化粒子微量
- 2 黑 褐 色 ロームブロック少量
- 3 褐 褐 色 ロームブロック中量
- 4 黑 褐 色 ロームブロック微量

#### 第24号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 ローム粒子微量
- 2 褐 褐 色 ロームブロック多量。灰化粒子微量
- 3 黑 褐 色 ロームブロック中量。燒土粒子・灰化粒子微量
- 4 黑 褐 色 ロームブロック中量。灰化粒子微量
- 5 褐 褐 色 ロームブロック微量

#### 第25号土坑土層解説

- 1 黑 褐 色 灰化粒子少量。燒土粒子・灰化粒子微量
- 2 にふい黄褐色 ロームブロック少量

#### 第27号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 ロームブロック少量。燒土粒子・灰化粒子微量
- 2 褐 褐 色 ロームブロック中量
- 3 褐 褐 色 ロームブロック・灰化粒子微量
- 4 褐 色 ローム粒子多量。燒土粒子微量

#### 第31号土坑土層解説

- 1 褐 褐 色 ロームブロック少量
- 2 褐 褐 色 ローム粒子中量
- 3 褐 褐 色 ロームブロック中量

#### 第32号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・燒土粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子微量

#### 第35号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・燒土粒子微量
- 2 にふい黄褐色 ロームブロック少量

#### 第38号土坑土層解説

- 1 黑 褐 色 烧土ブロック・灰化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 にふい黄褐色 ロームブロック少量
- 3 褐 色 ローム粒子微量

#### 第42号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック微量

#### 第43号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 にふい黄褐色 ローム粒子微量

#### 第45号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 褐 色 ローム粒子多量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック少量。灰化粒子微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子微量

#### 第46号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 烧土粒子中量、ローム粒子・灰化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量。灰化粒子微量
- 3 黑 褐 色 ローム粒子少量。燒土粒子・灰化粒子微量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子多量

#### 第47号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量。燒土粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック微量

#### 第49号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 5 褐 色 ロームブロック中量
- 6 褐 色 ロームブロック多量
- 7 褐 色 ローム粒子多量
- 8 褐 色 ローム粒子中量
- 9 明 褐 色 ローム粒子微量

#### 第51号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量。燒土ブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 3 にふい黄褐色 ロームブロック少量

#### 第52号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量。灰化粒子微量
- 2 にふい黄褐色 ロームブロック・灰化粒子中量、燒土粒子微量

#### 第53号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量。燒土粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 3 黑 褐 色 ローム粒子・燒土粒子微量

#### 第55号土坑土層解説

- 1 黑 褐 色 ローム粒子中量。灰化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子中量。灰化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子多量。灰化粒子微量

#### 第56号土坑土層解説

- 1 黑 褐 色 ロームブロック・燒土粒子・灰化粒子微量
- 2 黑 褐 色 ロームブロック中量。灰化粒子微量

**第 57 号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子微量  
2 噴褐色 ロームプロック少量

**第 58 号土坑土層解説**

- 1 噴褐色 ロームプロック中量、燒土粒子微量  
2 噴褐色 ロームプロック少量

**第 59 号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 燃土プロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量  
2 噴褐色 ロームプロック少量  
3 に赤い黄褐色 ロームプロック少量

**第 60 号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 燃土プロック・ローム粒子微量  
2 黒褐色 炭化粒子微量  
3 噴褐色 ロームプロック少量、燒土粒子・粘土粒子微量  
4 噴褐色 ローム粒子微量

**第 61 号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームプロック中量、炭化粒子少量  
2 黑褐色 ロームプロック少量  
3 に赤い黄褐色 ロームプロック多量

**第 62 号土坑土層解説**

- 1 噴褐色 ローム粒子多量  
2 噴褐色 ロームプロック少量  
3 噴褐色 ローム粒子少量  
4 噴褐色 ロームプロック少量

**第 63 号土坑土層解説**

- 1 噴褐色 ロームプロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量  
2 噴褐色 ロームプロック中量  
3 噴褐色 ロームプロック・焼土プロック・炭化粒子微量  
4 に赤い黄褐色 ロームプロック中量

**第 64 号土坑土層解説**

- 1 噴褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量  
2 噴褐色 ロームプロック中量、炭化粒子微量  
3 噴褐色 ローム粒子微量  
4 黑褐色 ロームプロック・炭化粒子少量  
5 噴褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

**第 67 号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子微量、燒土粒子・炭化粒子微量  
2 噴褐色 ロームプロック少量、炭化粒子微量  
3 黑褐色 ローム粒子微量  
4 噴褐色 ローム粒子多量

**第 68 号土坑土層解説**

- 1 噴褐色 ロームプロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量  
2 黑褐色 炭化物中量、ローム粒子少量、燒土粒子微量  
3 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、燒土粒子微量

**第 69 号土坑土層解説**

- 1 噴褐色 ローム粒子・炭化粒子少量  
2 噴褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量  
3 黑褐色 炭化物中量、ローム粒子少量、燒土粒子微量

**第 70 号土坑土層解説**

- 1 噴褐色 ローム粒子少量、燒土粒子微量  
2 に赤い黄褐色 ロームプロック中量、燒土粒子微量

**第 71 号土坑土層解説**

- 1 に赤い黄褐色 ロームプロック中量  
2 噴褐色 ローム粒子微量

**第 72 号土坑土層解説**

- 1 噴褐色 ロームプロック中量  
2 噴褐色 ロームプロック少量、炭化粒子微量  
3 黑褐色 ロームプロック少量、炭化粒子微量  
4 噴褐色 ロームプロック多量

**第 73 号土坑土層解説**

- 1 噴褐色 ロームプロック多量  
2 黑褐色 ロームプロック中量、炭化粒子微量  
3 噴褐色 ロームプロック多量、炭化粒子微量  
4 噴褐色 ローム粒子・燒土粒子微量

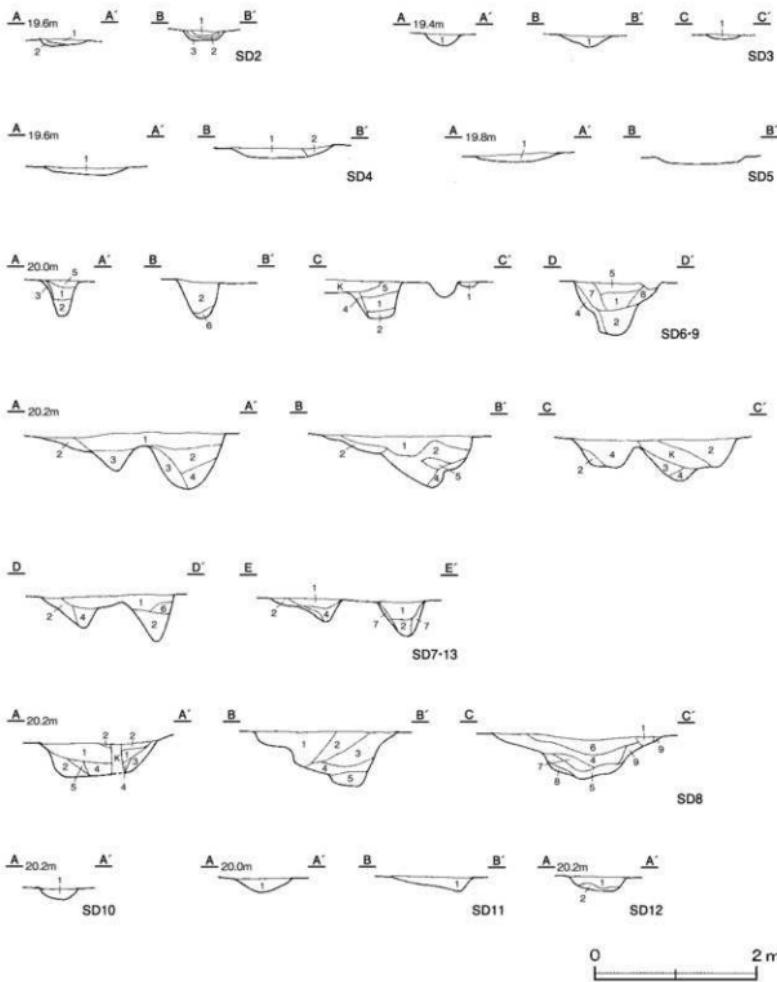
表 11 その他の土坑一覧表

番号	位置	長辺方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考 重複開発(古→新)
				長辺×短辺(m)	深さ(cm)					
6	D 2.3	—	円形	0.96 × 0.88	32	直状	礫目	人為		
7	D 2.14	N - 58° - E	椭円形	0.60 × 0.49	68	V字状	外傾	人為		
8	D 2.15	N - 71° - E	不整椭円形	0.80 × 0.70	40	平坦	外傾	人為		
9	D 2.14	N - 34° - W	椭円形	1.14 × 0.82	30	平坦	礫目	人為		
16	D 2.65	N - 28° - W	椭円形	0.66 × 0.60	16	平坦	礫目	自然		
17	D 2.66	N - 28° - E	椭円形	0.36 × 0.30	22	平坦	垂直	自然		
18	D 2.65	N - 47° - W	椭円形	0.38 × 0.30	38	U字状	外傾	人為		
19	D 2.67	N - 49° - W	椭円形	1.44 × 0.84	27	平坦	外傾	人為		
21	D 3.62	N - 82° - E	楕丸状方形	0.62 × 0.52	64	平坦	外傾	人為		
22	D 3.64	N - 72° - E	楕丸状方形	1.52 × 1.10	21	平坦	礫目	自然	土器	
23	D 3.62	N - 13° - W	椭円形	0.74 × 0.66	60	平坦	外傾	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複關係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
24	D 3 b3	N - 23° - E	楕円形	0.66 × 0.74	68	U字状	外縁	人為		
25	C 2 b0	N - 34° - E	楕円形	1.30 × 1.20	21	直状	縫合	人為		
27	D 3 b9	N - 65° - E	楕円形	0.98 × 0.68	28	直状	縫合	人為	土器器	
31	C 4 i6	N - 18° - W	楕円形	0.76 × 0.32	34	平頭	縫合	人為	土器器	
32	C 4 g6	-	円 形	0.90 × 0.90	30	直状	縫合	自然	土器器	
33	D 4 b7	N - 41° - E	楕円形	0.87 × 0.29	30	有段	縫合	自然	量器	
35	C 4 i4	N - 8° - E	楕円形	0.78 × 0.69	30	平頭	縫合	平頭	土器器、量器	
38	D 4 d5	N - 12° - W	〔楕円形〕	0.72 × (0.42)	43	直状	外縁	自然	土器器、量器	S16 → 本跡
42	D 4 b7	-	円 形	0.34 × 0.32	31	V字状	外縁	人為		
43	D 5 e2	N - 45° - W	楕円形	0.72 × 0.62	26	平頭	外縁	自然		
45	D 6 b4	N - 29° - E	〔楕円形〕	1.64 × (0.26)	56	U字状	縫合	人為	土器器、量器	
46	D 6 b5	N - 35° - W	不要指円形	1.54 × 0.80	25	直状	縫合	人為		
47	D 4 b0	N - 52° - E	楕円形	0.68 × 0.42	42	U字状	垂直	人為		SII1 → 本跡
49	C 4 c0	N - 4° - W	楕円形	2.10 × 1.10	28	平頭	外縁	人為	土器器	
51	C 6 g3	N - 5° - E	隔壁長方形	2.05 × 1.54	30	平頭	縫合	自然		
52	C 6 g5	N - 85° - E	楕円形	2.24 × 1.75	69	平頭	外縁	人為	織文土器、土器器、量器	本跡 → SD4
53	C 6 g6	N - 7° - W	〔楕円形〕	(1.34) × 1.03	14 - 40	平頭	縫合	人為		SB7 → 本跡 → SD3
55	C 5 d0	N - 36° - E	楕円形	1.22 × 0.98	46	直状	縫合	自然		
56	C 5 j4	-	円 形	1.08 × 1.02	50	直状	縫合	自然		
57	C 6 e3	N - 49° - W	不要指円形	1.90 × 0.96	57	直状	縫合	自然	土器器	
58	C 6 i5	-	円 形	0.90 × 0.82	24	平頭	外縁	自然	量器	SK59 → 本跡
59	C 6 i5	N - 8° - E	楕円形	1.29 × 0.61	19	平頭	外縁	人為		本跡 → SK38
60	C 6 h5	-	円 形	0.59 × 0.54	46	U字状	外縁	人為		
61	B 8 g0	-	円 形	1.20 × 1.22	35	平頭	縫合	人為		
62	B 9 g5	N - 42° - E	楕円形	1.00 × 0.71	34	直状	縫合	人為		本跡 → SD10
63	C 8 a3	N - 43° - E	楕円形	2.40 × 2.00	68 - 76	平頭	縫合	自然	土器器、量器	本跡 → SD6
64	B 8 i5	-	〔円 形〕	1.13 × (0.62)	40	直状	縫合	自然		
67	B 8 i0	N - 2° - W	楕円形	0.76 × 0.65	60	U字状	外縁	自然		
68	B 8 i9	N - 30° - W	楕円形	1.26 × 0.70	32	平頭	外縁	自然		
69	B 8 i9	-	円 形	1.72 × 1.66	40	直状	縫合	自然	土器器	
70	D 4 j1	-	〔円 形〕	0.28 × (0.34)	50	平頭	外縁	人為		SII4
71	D 4 a0	-	〔円 形〕	0.62 × (0.30)	44	平頭	外縁	人為		SII4
72	B 9 h3	-	円 形	1.96 × 1.86	53	直状	縫合	人為	土器器、量器	
73	C 8 i8	-	円 形	1.38 × 1.28	51	平頭	外縁	人為		

(3) 溝跡（第103図）

今回の調査で、性格や時期ともに不明な溝跡12条が確認されている。いずれも伴う遺物の出土がなく、性格も不明である。ここでは土層断面図と土層解説を掲載し、平面図は遺構全体図に示す。



第103図 その他の溝跡実測図

**第2号溝跡土層解説**

- 1 黒 細 色 ロームブロック少量
- 2 にふい黄褐色 ロームブロック中量。炭化粒子微量
- 3 細 色 ローム粒子微量

**第3号溝跡土層解説**

- 1 細 細 色 ロームブロック少量

**第4号溝跡土層解説**

- 1 黒 細 色 ロームブロック中量。粘土粒子少量
- 2 広 黄 細 色 粘土粒子多量

**第5号溝跡土層解説**

- 1 細 細 細 色 ロームブロック少量

**第6号溝跡土層解説**

- 1 黒 細 色 ロームブロック少量
- 2 黒 細 色 ロームブロック中量。燒土粒子微量
- 3 細 細 色 ロームブロック少量
- 4 にふい黄褐色 ローム粒子微量
- 5 細 細 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 細 細 色 ローム粒子少量
- 7 にふい黄褐色 ロームブロック・燒土粒子微量
- 8 細 色 ロームブロック中量

**第7号溝跡土層解説**

- 1 細 細 色 ロームブロック中量
- 2 細 色 ロームブロック中量
- 3 細 細 色 ロームブロック少量。炭化粒子微量
- 4 細 色 ローム粒子微量

**第8号溝跡土層解説**

- 1 細 細 色 ロームブロック中量。粘土粒子微量
- 2 細 細 色 ロームブロック少量。炭化粒子微量
- 3 にふい黄褐色 ロームブロック中量。粘土粒子微量
- 4 黒 細 色 ロームブロック少量
- 5 細 色 ロームブロック中量
- 6 黑 細 色 ローム粒子少量
- 7 細 細 色 ロームブロック中量。炭化粒子・粘土粒子微量
- 8 細 細 色 ローム粒子微量
- 9 にふい黄褐色 ロームブロック中量。燒土粒子微量

**第9号溝跡土層解説**

- 1 黒 細 色 ロームブロック微量

**第10号溝跡土層解説**

- 1 黒 細 色 ロームブロック・砂粒微量

**第11号溝跡土層解説**

- 1 細 細 色 ロームブロック多量。炭化粒子微量

**第12号溝跡土層解説**

- 1 細 細 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 細 色 ローム粒子多量

**第13号溝跡土層解説**

- 1 細 細 色 ロームブロック中量
- 2 黒 細 色 ロームブロック中量。炭化粒子微量
- 3 にふい黄褐色 ロームブロック中量
- 4 細 細 色 ローム粒子微量
- 5 細 色 ロームブロック中量
- 6 にふい黄褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 7 にふい黄褐色 ロームブロック少量

表12 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方 向	形 状	規 模				断面	覆土	壁面	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)					
2	D 6 al C 6 i4	N - 58° - E	直線	16.30	0.66 - 0.84	0.18 - 0.66	12	逆台形	自然	織錦		
3	C 6 i5 C 6 i7	N - 63° - E	直線	10.84	0.34 - 0.64	0.10 - 0.30	14	逆台形	自然	織錦 縞文土器、土加器、直巻器	SD7, SK33 →本跡	
4	D 6 g5 C 6 g6	N - 60° - E	直線	23.40	0.59 ~ 1.56	0.15 ~ 0.55	12	逆台形	人為	織錦 縞文土器、土加器、直巻器	SB7, SE2, SK32 →本跡	
5	C 5 g4 C 5 g6	N - 62° - E	直線	7.69	0.68 - 1.50	0.54 - 1.31	10	逆台形	人為	織錦 土加器、直巻器	SB9 →本跡	
6	B 8 g2 C 8 g5	N - 75° - E	直線	43.20	0.38 ~ 1.08	0.10 ~ 0.35	46	U字状	人為	外輪 土加器、直巻器	SI24・26, SD7・8, SK63 →本跡	
7	C 8 g5 C 8 g8	N - 70° - E N - 157° - S	逆L字状	24.10	0.60 ~ 1.30	0.06 ~ 0.12	48	U字状	人為	織錦 縞文土器、土加器、直巻器	本跡 → SD13	
8	C 7 g9 C 8 c3	N - 89° - E	直線	19.72	1.10 ~ 2.20	0.52 - 1.40	68	逆台形	人為	織錦 土加器、直巻器、陶器	SD23 →本跡 → SD9	
9	B 8 i3 C 8 c5	N - 75° - E	直線	17.26	0.20 ~ 0.36	0.06 ~ 0.14	8	逆台形	自然	織錦	SD8 →本跡	
10	B 9 g6 B 9 g6	N - 40° - E	直線	8.48	0.42 ~ 0.90	0.14 ~ 0.47	38	直床	自然	外輪 土加器、直巻器	SD25, SK62 →本跡	
11	C 9 i3 C 9 i5	N - 92° - E	直線	8.50	0.62 ~ 1.02	0.12 ~ 0.30	18	逆台形	自然	織錦		
12	B 9 i5 C 9 i5	N - 7° - E	直線	10.56	0.42 ~ 0.84	0.10 ~ 0.26	18	逆台形	自然	織錦		
13	C 8 e5 C 8 g8	N - 70° - E N - 155° - S	逆L字状	24.10	0.46 ~ 1.00	0.06 ~ 1.40	64	U字状	自然	織錦	SD7 →本跡	

#### (4) ピット群

今回の調査で、5か所のピット群が確認された。いずれも建物跡を想定できるような配置ではなく、時期も不明である。ここでは、ピット群ごとに計測表と平面図を掲載する。なお、各ピット群の平面図で掲載できないピットは、遺構全体図に示す。

##### 第1号ピット群（第104図）

**位置** 調査区西部のD3g1～D3g6区にかけての東西24m、南北4mの範囲から、柱穴状のピット6か所を確認した。

**規模** 平面形は長径31～51cm、短径26～50cmの円形あるいは楕円形で、深さは11～50cmである。

**所見** 分布状況から建物跡は想定できない。出土遺物がなく、時期・性格ともに不明である。

表13 第1号ピット群ピット計測表

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)			ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)				
			長軸(径)	短軸(径)	深さ				長軸(径)	短軸(径)	深さ		
1	D3g1	楕円形	31	×	26	50	4	D3g5	[円 形]	50	×	(28)	11
2	D3g1	円 形	37	×	36	46	5	D3g6	楕円形	48	×	38	44
3	D3g5	円 形	51	×	50	29	6	D3g6	楕円形	32	×	26	36

##### 第2号ピット群（第105図）

**位置** 調査区中央部のC3j9～C4h6区にかけての東西30m、南北22mの範囲から、柱穴状のピット7か所を確認した。

**規模** 平面形は長径33～47cm、短径27～47cmの円形あるいは楕円形で、深さは24～48cmである。

**所見** 分布状況から建物跡は想定できない。出土遺物がなく、時期・性格ともに不明である。

表14 第2号ピット群ピット計測表

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)			ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)				
			長軸(径)	短軸(径)	深さ				長軸(径)	短軸(径)	深さ		
1	C4j6	円 形	46	×	44	40	5	C4j3	楕円形	33	×	27	40
2	C3j0	円 形	38	×	37	48	6	C4j4	楕円形	43	×	38	28
3	C3j9	円 形	37	×	35	29	7	D3e0	円 形	47	×	47	40
4	C4j3	円 形	45	×	41	24							

##### 第3号ピット群（第106図）

**位置** 調査区中央部のC5g2～D5e5区にかけての東西22m、南北36mの範囲から、柱穴状のピット26か所を確認した。

**規模** 平面形は長径26～72cm、短径25～56cmの円形あるいは楕円形で、深さは15～75cmである。

**所見** 分布状況から建物跡は想定できない。出土遺物がなく、時期・性格ともに不明である。

表15 第3号ピット群ピット計測表

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸 (径) × 短軸 (径)		深さ
1	C 5g2	円 形	5.5 × 5.5		3.3
2	C 5g2	円 形	5.7 × 5.6		2.4
3	C 5g2	円 形	3.5 × 3.4		4.6
4	C 5g2	橢円形	3.7 × 2.6		4.0
5	C 5g3	橢円形	4.6 × 3.3		5.4
6	C 5g3	円 形	3.7 × 3.6		2.5
7	C 5h1	橢円形	5.6 × 3.2		5.5
8	C 5h4	橢円形	4.5 × 2.8		3.5
9	C 5h4	円 形	3.6 × 3.4		1.9
10	C 5h4	橢円形	4.3 × 3.5		4.8
11	C 5h5	橢円形	3.7 × 2.9		5.0
12	C 5h4	橢円形	3.4 × 3.0		1.5
13	C 5h4	橢円形	4.0 × 3.0		3.3

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸 (径) × 短軸 (径)		深さ
14	C 5i2	橢円形	3.6 × 3.0		3.0
15	C 5i3	不整橢円形	7.2 × 5.6		3.6
16	C 5j5	円 形	2.6 × 2.5		1.8
17	C 5j5	円 形	4.2 × 3.9		3.0
18	C 5j5	円 形	2.8 × 2.7		2.2
19	C 5j6	円 形	3.3 × 3.2		2.5
20	D 5a6	円 形	3.7 × 3.5		5.8
21	D 5a6	円 形	3.0 × 2.8		2.0
22	D 5a5	円 形	4.5 × 4.4		6.6
23	D 5a5	橢円形	5.0 × 4.4		4.3
24	D 5a5	円 形	3.7 × 3.5		7.5
25	D 5a6	橢円形	4.3 × 3.8		4.7
26	D 5a6	橢円形	4.1 × 2.9		4.7

## 第4号ピット群 (第 107 図)

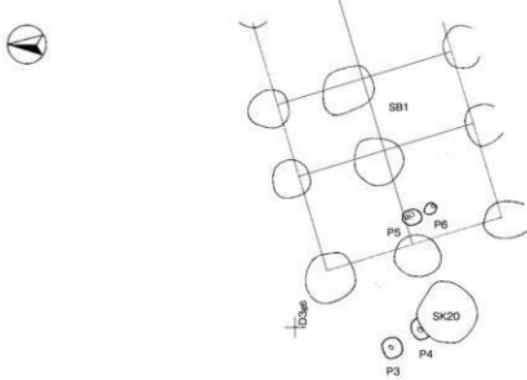
位置 調査区中央部のC 6f3 ~ C 7d2 区にかけての東西 37 m, 南北 22 m の範囲から、柱穴状のピット 10か所を確認した。

規模 平面形は長径 26 ~ 59 cm, 短径 25 ~ 50 cm の円形あるいは橢円形で、深さは 18 ~ 47 cm である。

所見 分布状況から建物跡は想定できない。出土遺物がなく、時期・性格とともに不明である。

表16 第4号ピット群ピット計測表

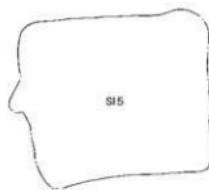
ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸 (径) × 短軸 (径)		深さ
1	C 7d2	円 形	3.5 × 3.4		2.6
2	C 6i8	円 形	2.9 × 2.8		1.8
3	C 6i7	円 形	3.4 × 3.1		2.7
4	C 6i7	円 形	2.6 × 2.5		3.3
5	C 6i7	円 形	3.2 × 3.0		3.6
6	C 6g7	橢円形	3.0 × 2.7		3.8
7	C 6g7	橢円形	3.7 × 3.2		3.0
8	C 6g6	橢円形	5.8 × 5.0		3.3
9	C 6i3	円 形	3.6 × 3.3		4.0
10	C 6i6	橢円形	5.9 × 3.6		4.7



第104図 第1号ピット群実測図



+  
D45



SI5

○  
P4  
○  
P6  
○  
P5

+  
D451

○  
P2

○  
P3

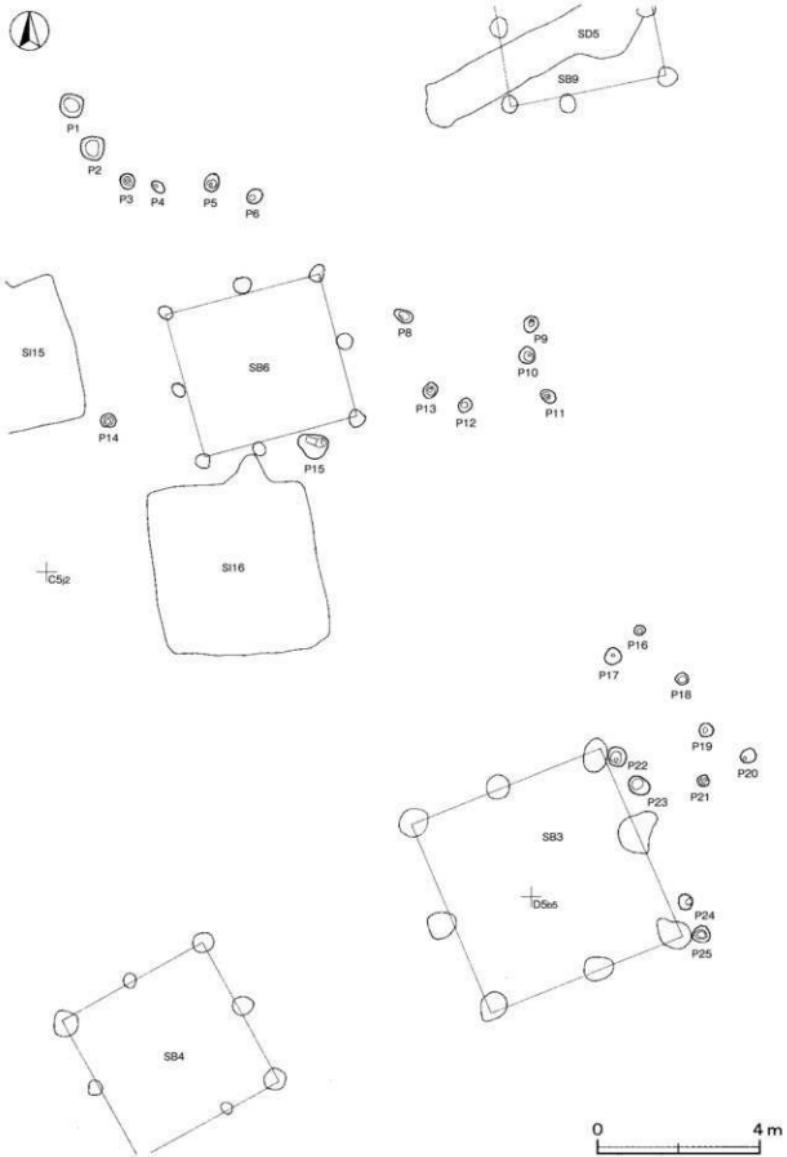
○  
P7



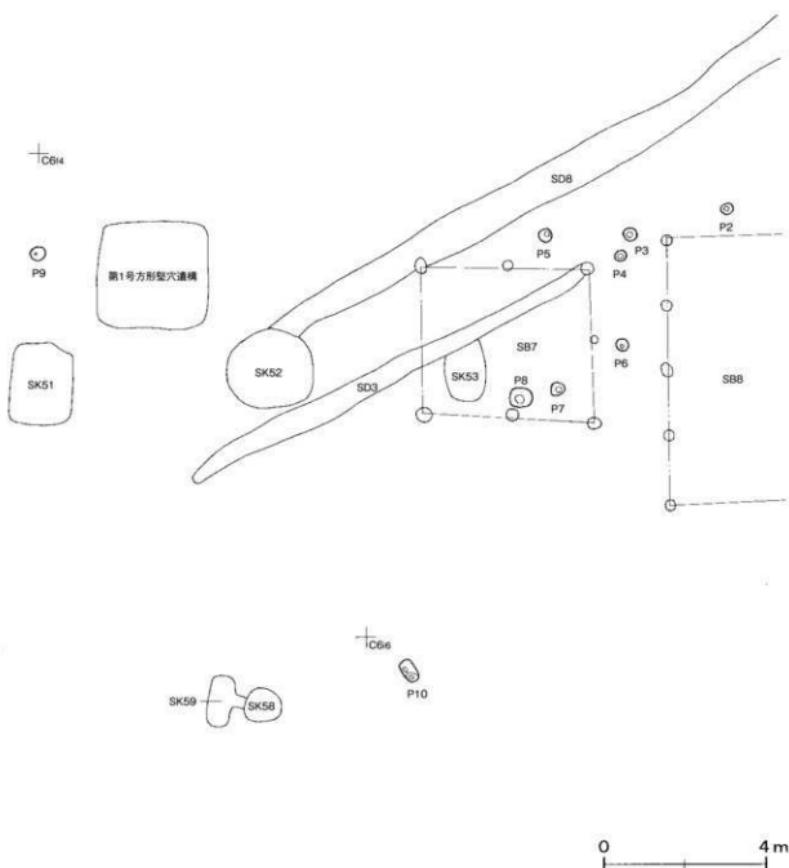
SI4

0 4 m

第105図 第2号ピット群実測図



第106図 第3号ピット群実測図



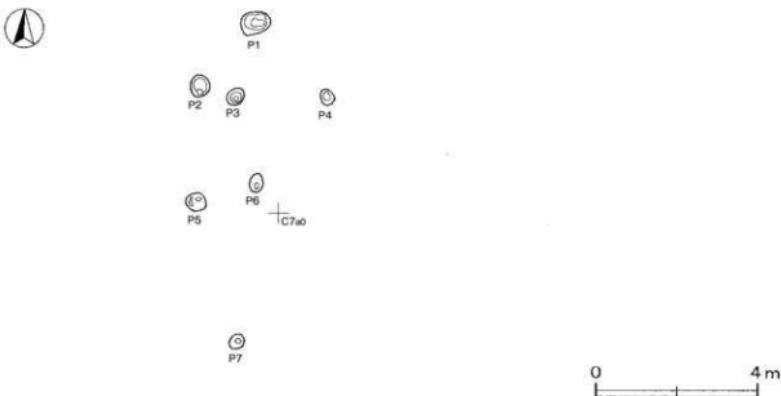
第107図 第4号ピット群実測図

### 第5号ピット群（第108図）

**位置** 調査区東部のB7i9～B7b9区にかけての東西6m、南北12mの範囲から、柱穴状のピット7か所を確認した。

**規模** 平面形は長径37～73cm、短径34～57cmの円形あるいは楕円形で、深さは28～66cmである。

**所見** 分布状況から建物は想定できない。出土遺物がなく、時期・性格ともに不明である。



第108図 第5号ピット群実測図

表17 第5号ピット群ピット計測表

ピット番号	位置	形状	規 模 (m)		
			長軸(径) ×	短軸(径)	深さ
1	B7i9	楕円形	7.3	×	5.7
2	B7j9	円 形	5.0	×	5.0
3	B7j9	円 形	4.2	×	3.9
4	B7j0	楕円形	4.1	×	3.6
					3.1

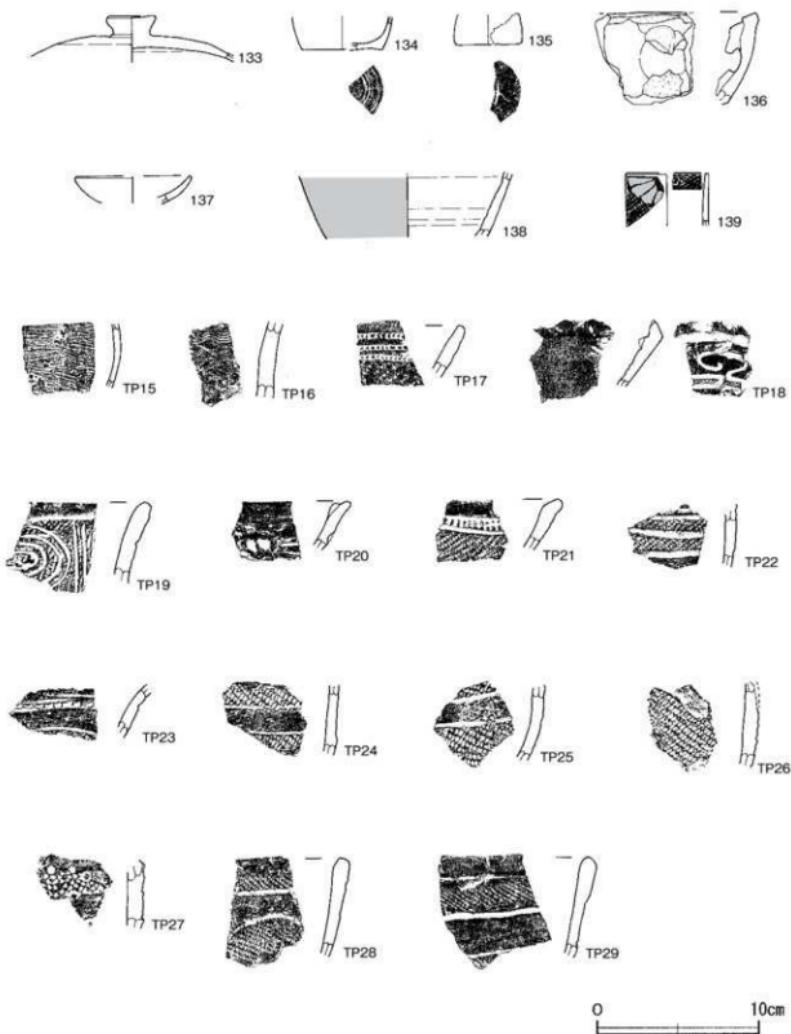
ピット番号	位置	形状	規 模 (m)		
			長軸(径) ×	短軸(径)	深さ
5	B7j9	円 形	4.7	×	4.5
6	B7j9	楕円形	4.5	×	3.4
7	C7a0	円 形	3.7	×	3.5
					5.1

表18 ピット群一覧表

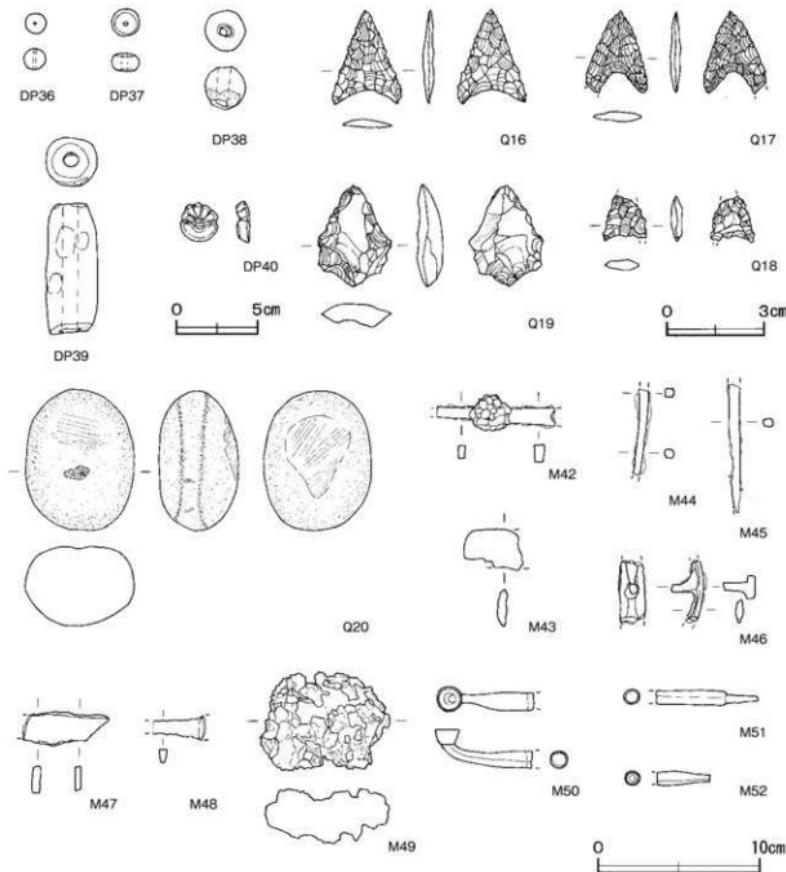
番号	位 置	柱穴(長さの単位はすべてcm)					出土遺物	時 期	備 考 (重複関係 古→新)
		柱穴	平面形	長径(軸)	短径(軸)	深さ			
1	D3g1～D3g6	6	円形・楕円形	31～51	26～50	11～50	—	—	SII → 本跡
2	C3j9～C4j6	7	円形・楕円形	33～47	27～47	24～48	—	—	
3	C5g2～D5e5	26	円形・楕円形	26～72	25～56	15～75	—	—	
4	C6j3～C7d2	10	円形・楕円形	26～59	25～50	18～47	—	—	SII → 本跡
5	B7i9～B7j0	7	円形・楕円形	37～73	34～57	28～66	—	—	

(5) 遺構外出土遺物（第109・110図）

今回の調査で、出土した繩文土器・土師器・須恵器・土師質土器・陶器・磁器・土製品・石器・鉄製品等の遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第109図 遺構外出土遺物実測図（1）

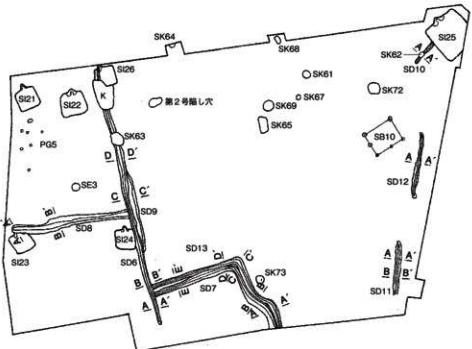
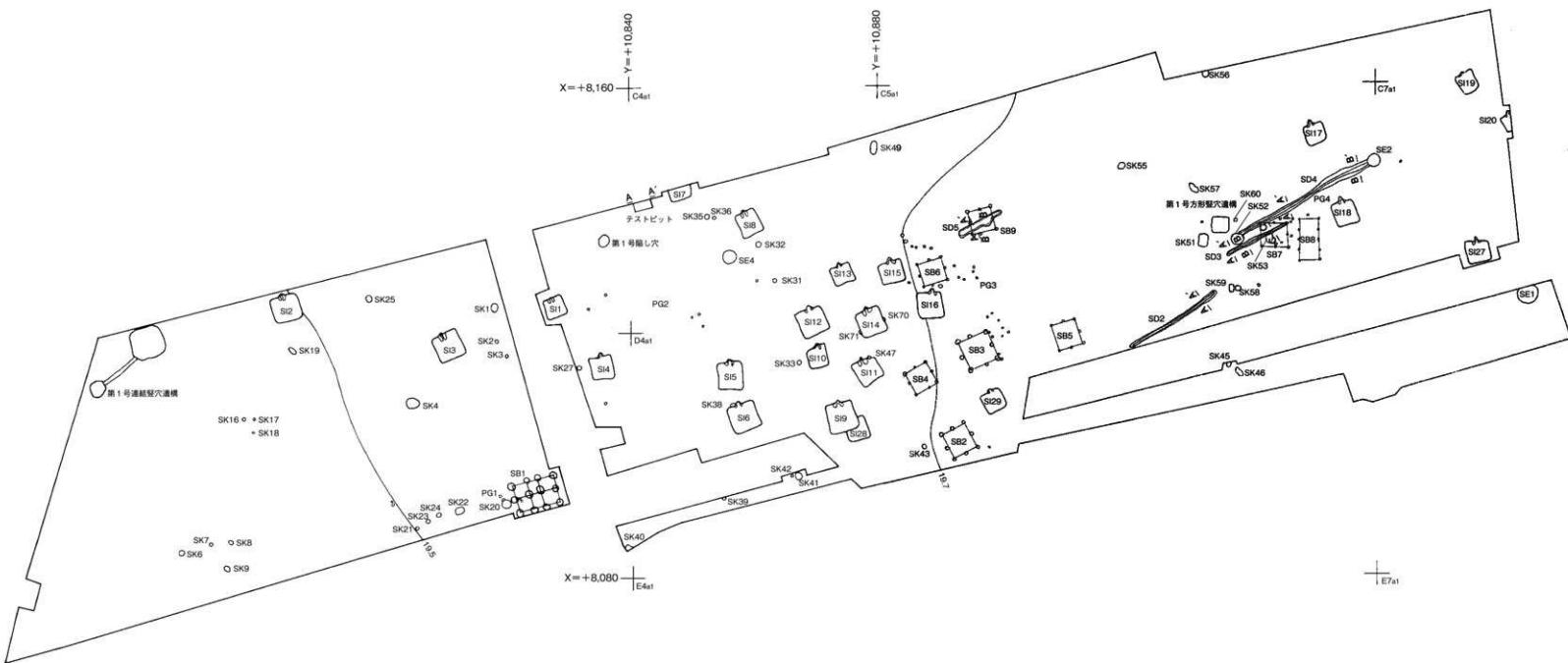


第110図 遺構外出土遺物実測図（2）

遺構外出土遺物観察表（第109・110図）

番号	種 别	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	燒成	手 法 の 特 徴 ほ か	胎土位置	備 考
133	用具部	釜	-	(2.9)	-	黄石・石英	黄灰	良好	天井部回転ヘラ削り	S67 覆土中	20%
134	用具部	短腹甌	-	(2.1)	[4.8]	黄石・石英	灰	普通	底部削りヘラ削り	表土	5%
135	土師器	手挽土器	-	(1.9)	[4.0]	黄石・石英	灰	普通	全体外側ナギ	表土	20%
136	土師質土器	内耳甌	-	(3.6)	-	黄石・石英・雲母・ 赤色粒子	に赤い貴重	普通	耳部組り付け	表土	10%
137	陶器	甌	[7.0]	(1.7)	-	礫砂	暗赤褐色	良好	底輪・外・内面施釉	S330 覆土中	10%
138	陶器	鉢	-	(4.1)	-	礫砂	に赤い貴重	良好	透明釉 外面施釉	S38 覆土中	5%
139	磁器	筒型高台	[4.9]	(3.0)	-	礫砂	灰白	緻密	染め付け 菊花文	S128 覆土中	5%

番号	種別	器種	地 土	色 調	手法の特徴はか	出土位置	備考		
TP15	土器部	壺	長石・石英・雲母	に高い櫛	底部外側ハサウエ調整	SH12 蓋土中	PL27		
TP16	領走器	壺	長石・石英	黄灰	側面抜工具による4条1単位の波状文	表土	PL28		
TP17	礎文土器	漆跡	長石・石英・雲母	に高い櫛	半乾竹籠による3条の舟形文	表土	PL27		
TP18	礎文土器	漆跡	長石・石英・雲母	櫛	外周磨消 内面刺突文 曲線沈縮文による区画	表土	PL27		
TP19	礎文土器	漆跡	長石・石英・雲母	に高い櫛	風呂・窓状の沈縮文で磨消区画を区画	表土	PL27		
TP20	礎文土器	漆跡	長石・石英・雲母	に高い櫛	ボタン状の付付文	SI 6 蓋土中	PL27		
TP21	礎文土器	漆跡	長石・石英・赤色粒子	明るめ	口縁部分下に舟形文 地文に單詰繩文 LR を施す	SD5 蓋土中	PL27		
TP22	礎文土器	漆跡	長石・石英	に高い櫛	地文に單詰繩文 RL を施す 3条の平行沈縮	SD2 蓋土中	PL27		
TP23	礎文土器	漆跡	長石・石英	黄灰	押立文 2条の沈縮	SI 8 蓋土中	PL27		
TP24	礎文土器	漆跡	長石・石英	に高い垂直	地文に單詰繩文 RL を施す 磨消平行沈縮文	SI 8 蓋土中	PL27		
TP25	礎文土器	漆跡	長石・石英・雲母	櫛	地文に單詰繩文 RL を施す 磨消平行沈縮文	SI 14 蓋土中	PL27		
TP26	礎文土器	漆跡	長石・石英・雲母	に高い黄粗	斜倚の羽状模文	SI 1 蓋土中	PL27		
TP27	礎文土器	漆跡	長石・石英・雲母	櫛	円形刺突文 不定方向の角押文	SD3 蓋土中	PL27		
TP28	礎文土器	漆跡	長石・石英	櫛	地文に單詰繩文 RL を施す 磨消平行沈縮文	SE7 蓋土中	PL27		
TP29	礎文土器	漆跡	長石・石英・雲母	に高い櫛	单詰繩文 LR を堀跡 2条の平行沈縮	SKD2 蓋土中	PL27		
番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP06	土玉	1.3	1.2	0.2	1.7	土(長石・石英)	ナデ	表土	PL29
DP07	土玉	1.7	1.1	0.4	3.3	土(長石・石英)	ナデ	表土	PL29
DP08	土玉	2.6	2.5	0.8	(14.1)	土(長石・石英)	ナデ 鹿部欠損	表土	PL29
DP09	管状土器	8.0	2.9	0.9	(73.7)	土(長石・石英)	ナデ 鹿部一部欠損	表土	PL29
DP10	泥面子	2.4	0.7	-	3.18	土(長石・石英)	海セ	表土	PL29
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 16	繩	2.8	2.0	0.4	126	チャート	両面押立摩擦 四基無茎繩	表土	PL30
Q 17	繩	(2.5)	1.9	0.3	(1.16)	チャート	端部欠損 両面押立摩擦 四基無茎繩	第1号 sond壁 穴道構造上中	PL30
Q 18	繩	(1.4)	1.3	0.3	(0.50)	黒曜石	先端部欠損 両面押立摩擦 四基無茎繩	SH13 蓋土中	PL30
Q 19	繩	3.1	2.2	0.8	4.96	チャート	両面押立摩擦 凸基有茎繩 未製作	表土	PL30
Q 20	磨石	8.6	6.8	4.9	430	安山岩	泡痕2小所 凹痕1小所	SI 9 蓋土中	PL30
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 42	刀子×	(7.3)	1.1	0.7	(25.8)	鉄	端部欠損 斜面長方形	表土	
M 43	刀子+	(3.7)	2.5	0.6	(32.7)	鉄	茎部・柄部欠損	表土	
M 44	刀子	(5.3)	0.6	0.5	(7.25)	鉄	頭部部・茎部欠損 斜面長方形	表土	
M 45	刀子+	(8.0)	0.7	0.5	(10.2)	鉄	頭部欠損 斜面長方形	表土	
M 46	五體	(3.9)	1.5	2.0	(15.7)	鉄	端部欠損	表土	
M 47	不明洪製品	(5.2)	2.0	0.5	(37.1)	鉄	断面長方形	表土	
M 48	刀子	(3.2)	1.5	0.4	(4.66)	鉄	刃部・茎部欠損 刃部断面三角形	表土	
M 49	梳状器	8.0	6.0	3.1	162.9	鉄	端部一部欠損 多くの気孔	表土	
M 50	櫛管	(6.0)	1.5	1.0	(8.10)	鋼	端部部 大崩落 15cm	表土	PL32
M 51	櫛管	(6.3)	1.0	0.8	11付(0.4)	鋼	端口部 斜面段段有り	表土	PL32
M 52	櫛管	(3.5)	1.0	0.9	11付(0.5)	鋼	端口部	表土	



第111図 宮原前遺跡遺構全体図

## 第4節 まとめ

### 1はじめに

当遺跡からは、縄文時代の陥し穴、奈良・平安時代の住居跡や掘立柱建物跡、中世の井戸跡などの遺構が確認でき、複合遺跡であることがわかった。遺物は、各遺構に伴う土師器や須恵器とともに、多数の土製品と金属製品も出土している。ここでは、遺跡の中心となる奈良時代から平安時代までの集落の様相について述べるとともに、県内で初めて確認された連結竪穴遺構について若干の考察を加え、まとめとしたい。

### 2各時代の集落様相

当調査区は、東西約320m、南北約120mの範囲で、標高20mのほぼ平坦な台地上にある。ここで取り上げる奈良時代から平安時代の遺構は、竪穴住居跡29軒、掘立柱建物跡8棟、連結竪穴遺構1基、土坑9基である。なお、当遺跡の遺構の時期については、研究論文や報告書等に掲載された土器編年研究<sup>1)</sup>を参考とし、県西地域での発掘調査資料を加味しながら5期に分類した。各期の土器の特徴については、第3節、第112図を参照されたい。

#### 第Ⅰ期（8世紀前葉）

当期は、竪穴住居跡4軒（第2・3・6・8号住居跡）、掘立柱建物跡1棟（第1号掘立柱建物跡）、第1号連結竪穴遺構1基、土坑4基（第1・2・3・20号土坑）が該当する。

出土土器は、土師器と須恵器の比率では2対1で土師器が高いが、須恵器は完形品に近い供膳具が多い。土師器坏は椀形を呈するもので、底部と口縁部の境に稜をもっている。須恵器坏は箱型で、底部は一方向の手持ちヘラ削り調整が施されている。口縁部内面に弦線が巡るものも見られる。鉢は、体部外面に同心円文の叩きが施されたものが見られる。第8号住居跡からは、未焼成の管状土錘がまとまって出土している。当期の鉄器や石器、土製品の道具類の保有率をみると、刀子が3軒から5点で75%、石製紡錘車・砥石がそれぞれ1軒から1点で25%、管状土錘が2軒から39点で50%である。

住居跡は、西部から中央部の標高19mの台地平坦面に、20mの距離をおいて2軒ずつまとまっており、一つの単位集団で集落は形成されている。平面形は80%が方形で、規模は一辺が約4.0～4.5mである。主軸は、N-19°-WからN-23°-Wとほぼ同じ北西方向を向いている。内部構造では、竈の煙道部の掘り込みが28～39cmといずれも浅い。第2号住居跡の竈には、角柱状の切石（砂岩）が補強材として使用されている。当期の切石使用率は25%である。第8号住居跡を除き、主柱穴が確認された。

掘立柱建物跡は、第3号住居跡の南方約22m、第6号住居跡の西方約20mに位置している。東部と南部が調査区域外のため、全容は確定できないが、柱穴の規模や構造から桁行3間、梁行3間の総柱建物と推測できる。2軒の住居跡との位置関係や建物の規模から、集落の倉庫としての機能が想定され郡衙に納める米を保管していた可能性が考えられる。

#### 第Ⅱ期（8世紀中葉）

当期は、竪穴住居跡6軒（第15・19・20・23・25・29号住居跡）が該当する。

出土土器は、煮炊具や貯蔵具では土師器が多いが、供膳具では、須恵器が大部分を占めるようになる。須恵器坏は平底で、体部下端に手持ちヘラ削り、回転ヘラ削り調整が施されている。盤は底部が丸底気

味で、高台は底部と体部の境に付けられ、径が大きい。甕は、体部外面に斜位の平行叩きが見られる。土師器甕は体部中位に最大径をもち、下半に継位のヘラ磨きが施される常総型甕である。第25号住居跡からは、甕の構築材に使用したと考えられる切石が多量に出土した。当期の鉄器や石器、土製品の道具類の保有率をみると、刀子が2軒から3点で33%、土製紡錘車が1軒から3点で17%、管状土錘が3軒から36点で50%である。

住居跡は、中央部と東部の二つの単位集団に分けることができる。平面形は、すべてが方形である。規模は第25号住居跡を除き、一辺が約30~35mで、前段階より小形化する傾向が見られる。第25号住居跡は一辺が6.3mで、当期において最大規模である。主軸は、N-15°-WからN-38°-Wとほぼ同じ北西方向を向いている。内部構造では、甕の煙道部の掘り込みが28~36cmと前段階と同様にいずれも浅い。第15・25号住居跡の甕に角柱状の切石（砂岩）が確認され、第25号住居跡では上部をL字状に加工し、懸架式の焚口部を構築している。当期の切石使用率は、33%である。第25号住居跡を除き、いずれも主柱穴は確認できなかった。

#### 第Ⅲ期（8世紀後葉）

当期は、堅穴住居跡9軒（第1・7・12・13・18・21・22・24・28号住居跡）、掘立柱建物跡2棟（第6・9号掘立柱建物跡）、土坑2基（第39・40号土坑）が該当する。

出土土器は、土師器と須恵器の比率では若干土師器が高いが、供膳具では土師器はほとんど見られず、須恵器が大部分を占めている。須恵器壺は平底で、体部の立ち上がりの外傾が前段階より強くなり、体部下端・底部に手持ちヘラ削り以外に回転ヘラ削り調整も施されている。蓋は、口縁端部が短くつまみ出されている。甕は体部外面に斜位の平行叩きが見られ、肩部の張りが前段階より弱くなる。土師器甕は体部上位に最大径をもち、下半にヘラ削りが施されるものを見られる。第12号住居跡からは灰釉陶器の長頸瓶が、第24号住居跡からは2本が融着した鉄鎌が出土している。当期の鉄器や石器、土製品の道具類の保有率をみると、刀子が2軒から6点で22%、鐵鎌が3軒から3点で33%、鎌が2軒から3点で22%、砥石が2軒から2点で22%、管状土錘が3軒から26点で33%、土製紡錘車・土玉がそれぞれ1軒から1点で11%である。

住居跡は、前段階同様、中央部と東部の二つの単位集団に分けることができ、当地で最大数となる。平面形は87%が方形である。規模は、第12号住居跡を除いて一辺が約3.2~3.6mで、前段階とほぼ同じである。第12号住居跡は一辺が4.6mで、当期において最大規模である。主軸は、第24号住居跡を除いてN-15°-WからN-26°-Wとほぼ同じ北西方向を向いている。内部構造では、甕の煙道部の掘り込みは10~79cmと多様化し、第18号住居跡の甕のみに角柱状の切石が使用されている。当期の切石使用率は、11%である。第12号住居跡を除いて、主柱穴は確認できなかった。第7・18号住居跡は、壁柱穴をもつ建物である。

掘立柱建物跡は、第13号住居跡の東方約10mに第6号、約20mに第9号が配されている。これらは中央部に形成される集落の外周部に位置しており、規模や位置関係から倉庫として機能していたと考えられる。

#### 第Ⅳ期（9世紀前葉）

当期は、堅穴住居跡5軒（第5・9・14・17・26号住居跡）、掘立柱建物跡5棟（第2~5・10号掘立

柱建物跡)、土坑3基(第4・36・41号土坑)が該当する。

出土土器は、前段階と同様、土師器と須恵器の比率では土師器が若干高い。供膳具は須恵器が9割を超えるが、煮炊具は土師器が主体である。須恵器は前段階よりも底径が小さくなり、体部下端・底部の調整は手持ちヘラ削りが主体となる。蓋は、天井部が低くなり扁平になる。甕は、口縁部のつまみ出しが明瞭になる。瓶は体部に斜位の平行叩きが見られ、底部は中央部が円形で周りが木の葉形に穿孔されている。当期の鉄器や石器、土製品の道具類の保有率をみると、刀子が2軒から5点で40%、鎌が1軒から2点で20%、鉄鍬・砥石・土製紡錘車がそれぞれ1軒から1点で20%、管状土錘が3軒から11点で60%である。

住居跡は、前段階と同様、中央部と東部の二つの単位集団に分けることができる。平面形は80%が方形である。規模は中央部のグループは一辺が約45～49mで、前段階より大型化する傾向が見られる。東部のグループは一辺が約3.2～3.3mで、前段階とはほぼ同じである。主軸は、N-5°-WからN-24°-Wとはほぼ同じ北西方向を向いている。内部構造では、竈の煙道部の掘り込みが35～75cmと前段階と同様に多様化し、第5・9号住居跡の竈に角柱状の切石が使用されている。第9号住居跡は、懸架式の焚口部を構築している。当期の切石使用率は、40%である。主柱穴は、第9・14号住居跡で確認できた。

掘立柱建物跡は、中央部と東部の住居跡グループの東側にそれぞれ位置している。集落の外周部にあたり、規模などから倉庫として機能していたと考えられる。

#### 第V期（9世紀中葉）

当期は、竪穴住居跡5軒（第4・10・11・16・27号住居跡）が該当する。

出土土器は、前段階より須恵器の比率が高くなる。供膳具は前段階と同様に須恵器が主体で、わずかに土師器がみられる。煮炊具は、土師器と須恵器の比率が2対1となる。須恵器は、前段階よりもさらに底径が小さくなる。体部下端・底部の調整は手持ちヘラ削りで、体部下端のヘラ削り幅が広くなり、底部は一方向のヘラ削りが主体となる。甕・瓶は、体部に縦位の平行叩き後に横位の平行叩きが施される擬格子状の叩きがみられる。土師器はロクロ成形のものが主体で、内面にヘラ削きや黒色処理が施され、底部は回転糸切りのものがみられる。甕は体部上位に最大径をもち、長胴になる。当期の鉄器や石器、土製品の道具類の保有率をみると、刀子が2軒から2点で40%、鉤・石製紡錘車がそれぞれ1軒から1点で20%、砥石が3軒から3点で60%、管状土錘・土玉がそれぞれ1軒から1点で20%である。第27号住居跡からは解錠部が欠損しているが、基部の木質が残存している鉤が出土している。

住居跡は、前段階と同様、中央部と東部の二つの単位集団で集落が形成される。平面形は、すべて方形である。規模は一辺が3.5～4.2mで、前段階の中央部グループより小型化する傾向が見られる。主軸は、第11号住居跡を除いてN-6°-WからN-13°-Wとはほぼ同じ北西方向を向いている。内部構造では竈の煙道部の掘り込みが31～65cmと前段階と同様に多様化し、第4号住居跡では竈が北壁から北西コーナー部へ作り替えられている。竈の補強材にも変化がみられ、第16号住居跡の竈の袖には須恵器の瓶が使用されており、切石の使用は第27号住居跡のみであった。当期の切石使用率は、20%である。第4号住居跡を除いて主柱穴は確認できなかった。第10・11号住居跡で棚状施設が確認された。

以上のことをもとに、さらに詳しく集落様相を記載する。(第113図参照)

8世紀前葉



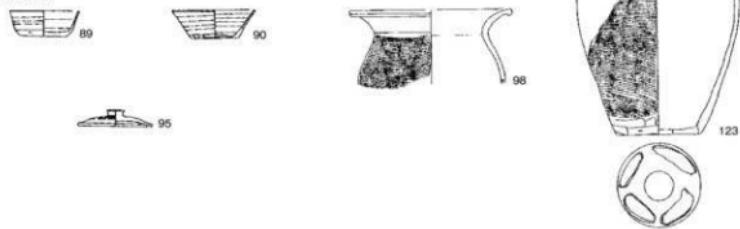
8世紀中葉



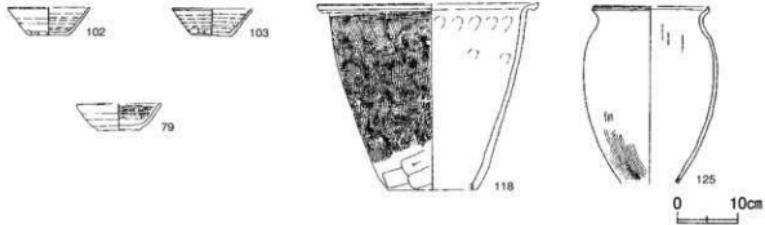
8世紀後葉



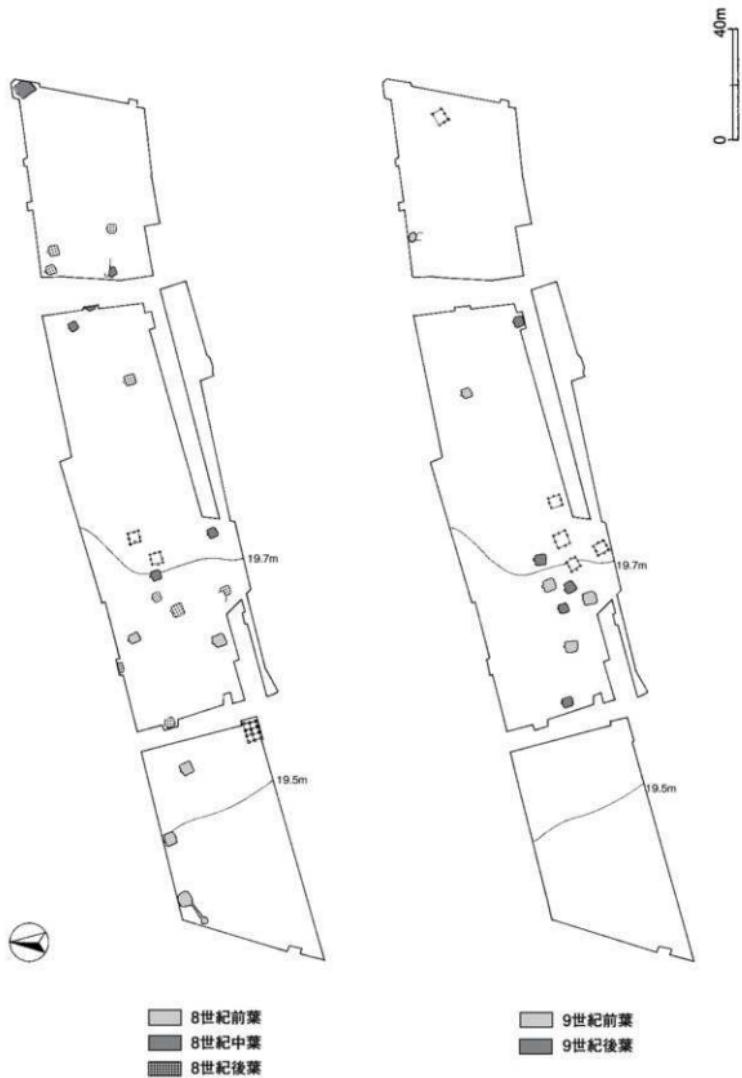
9世紀前葉



9世紀中葉



第112図 宮原前遺跡の土器群



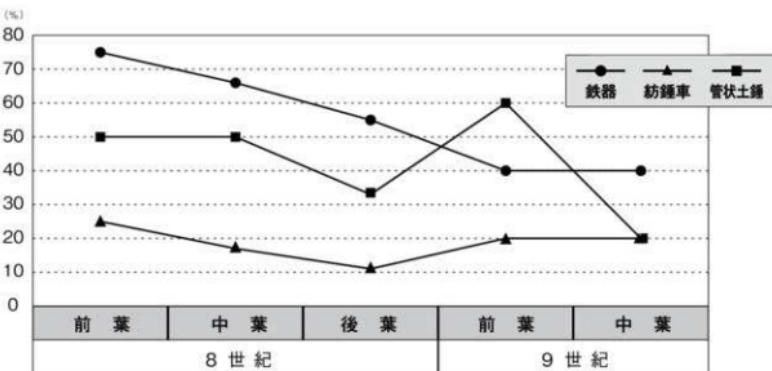
第113図 宮原前遺跡集落変遷図

宮原前遺跡は、谷津田が入り組む標高 20 m の台地中央部に位置し、奈良時代から平安時代中頃に営まれた集落である。

8世紀以前の住居跡が確認されていないことなどから、当遺跡は律令期に計画的に開発された集落と考えられ、律令体制の崩壊とともに終焉を迎えている。8世紀前葉に調査区域の西部に開発された集落が、中葉には二つの単位集団をつくって東部へ移動し、後葉以降はそれを踏襲している。8世紀中葉から9世紀前葉にかけては、各期に集団を統括したと考えられる規模が大きく、出土遺物が多様な住居跡（第 25・12・9 号住居跡）が確認できた。これらの住居跡を中心に、律令体制下の集落内外の夫役に携わっていたと考えられる。集落の中心は、谷津田として使用できそうな谷が複雑に入り組む状況や今回確認された遺構の配置から推察すると、調査区域内の南北に広がっていたと考えられる。調査区域内に、第 1 号掘立柱建物跡と同規模の建物が確認されないことや、第 1 号掘立柱建物跡が南側に延びて 3間 × 3間の総柱建物跡となることも想定できることから、調査区の南側に倉庫群が形成されていたことも考えられる。また谷津田を挟んで約 500 m 北にある大生郷遺跡では、8世紀中葉から後葉と位置づけられる奈良時代の住居跡 6軒が確認されている。<sup>2)</sup> 住居跡の規模と形状や北西方向を向く主軸方向、床の硬化が顕著であること、柱穴を明確に確認できないことなど当遺跡と共通点が多い。完存率の高い須恵器や管状土錐が多く出土していることも同様である。当遺跡の第 25 号住居跡は、8世紀中葉の中心的な住居跡である。大生郷遺跡で確認された住居跡とは約 200 m の位置にあり、第 25 号住居跡を中心とした集落が谷津田を取り巻くように形成されていた可能性も考えられる。

次に道具類の出土遺物について触れる。

管状土錐の保有数は8世紀前葉で39点と最も高く、中葉で36点、後葉で26点と少しずつ減少し、9世紀に入ると前葉で11点、中葉で1点と大幅に減少する。保有割合から推察すると、8世紀代は集落の中心となる住居跡（中葉では第 25 号住居跡、後葉では第 12 号住居跡）が一括で管理を行い、水田経営とともに漁業も盛んに行なわれていたことが考えられる。前葉に比定できる第 8 号住居跡からは、未焼成の管状土錐が多数出土しており、当遺跡において漁労具の生産が行なっていたこともわかる。9世紀代



第 114 図 管状土錐・紡錘車・鉄器保有率

になると、管状土錐の保有が各住居ごとになり、保有数の減少から、漁業に携わる者が減少していったことも考えられる。

紡錘車の保有数は8世紀中葉に3点と最も高く、他は各時期1点ずつである。保有割合は最も高い時期では25%で、4軸に1点というものである。これは、常陸国河内郡内の集落における紡錘車の保有割合<sup>3)</sup>とはほぼ同等で、当跡でも一般集落の中に織維生産が浸透していたことがうかがえる。

鉄器の保有率は8世紀前葉が75%と最も高く、以下、少しづつ減少している。刀子は、22～75%の保有率があり、保有数も含めると各時期安定している。8世紀後葉に比定できる第12号住居跡からは6本出土しており、管状土錐と同様に一括管理がなされていたことが考えられる。鎌は、8世紀後葉と9世紀前葉の2時期のみに保有が確認できた。保有率は8世紀後葉が33%、9世紀前葉が40%である。8世紀後葉は当遺跡において集落が最も栄えた時期であり、人口の増加とともに、食料生産のための道具も新たに導入されたことも考えられる。

当遺跡は律令体制のもと新たに開発が行われ、水田経営と漁業を中心としながら集落が営まれた。律令期の最盛期にあたる8世紀後葉に集落も栄え、律令体制の崩れとともに衰退し、その後終焉を迎えたと考えられる。

### 3 連結堅穴造構について

連結堅穴造構は、調査区域の西部、第2号住居跡の西方約20mに位置している。同様な形状をもつ造構は全国的にもほとんど確認されておらず、性格付けが困難である。時期は異なるが、群馬県の安中市長谷津遺跡では、弥生時代の住居跡と土坑が溝で連結された造構が確認されているが、性格付けがまだされていない。ここでは、当跡で確認された連結堅穴造構の構造面からその性格について推察していきたい。

#### (1) 構造について

堅穴造構Aは擂鉢状の構造で、底面が硬化している。底面の中央には径185cm、深さ37cmの円筒形の掘り込みがあり、いわゆる氷室状土坑の形状に類似している。長軸方向と直交する位置に柱穴が2か所確認されており、堅穴造構Aは上屋構造をもつ施設であると考えられる。南西コーナー部には、白色粘土と砂質粘土がスロープ状に貼られており、堅穴造構Aの掘り込みの深さが119cmであることから、出入り口施設として使用されていたと考えられる。上層にあたる砂質粘土層は、雨天の調査時に雨水の流れで形状が少し崩れた。このことからも堅穴造構Aには、上屋があったことが考えられる。

堅穴造構Bは、中世で多く確認される方形堅穴造構に形状が類似している。底面は平坦で、厚さ8～13cmの白色粘土がほぼ全面に貼られており、粘土貼り土坑としての性格も考えられる。中央部に柱穴の可能性のある深さ32cmのピットを確認したが、造構周辺などにも柱穴らしい掘り込みはなく、上屋構造をもつ施設かどうかは判断しがたい。

堅穴造構Aの南西コーナー部と堅穴造構Bの北壁を連結する溝は、上幅0.51～0.76m、下幅0.44～0.56m、深さは26～32cmで、底面は平坦で硬化しており、人の出入りが考えられる。溝の北西端には堅穴造構Aから続く砂質粘土層が貼られており、堅穴造構Aと一体の造構であることがわかる。底面のレベルはほぼ水平で、溝の周辺には柱穴状の掘り込みは確認できなかった。

## (2) 性格について

建物同士が繋がっているということは、その空間の中での移動が必要であることを示している。外部からの影響を受けないようにすることや移動対象物を速やかに運ぶ必要があったと考えられ、溝を通路として、二つの建物間で物の運搬が行われていたことが推測できる。また、砂質粘土や白色粘土でスロープ状の出入り口を設けているということは、移動対象物が破損しやすく、緩衝材が必要であったことも考えられる。以上のことから氷製造遺構の可能性を考えてみたい。



氷池に氷が張った状態



水を氷室へ納めるライン



氷室への搬入状況

天然氷製造過程（水屋徳治郎、写真提供）

現代の天然氷の製造過程では、氷池から切り出した氷を直通のラインで氷室へ送り保管する方法がとられている。(上写真)古代の氷の製造については、氷池等の発掘事例がないため明らかになってはいないが、「氷室研究の現状と課題」<sup>4)</sup>(中山晋 2001)では、近世遺構である奈良県生駒市俵口町所在の氷池跡を取り上げ、「現代の製氷技術から考えると古代と近世ではそれほど違いがなかったのではないか」と述べている。現代の製氷技術もやや原始的な方法であることを考えると、古代の製造方法や施設にも現在との共通点が多くあると推測できる。当遺構の構造面から考察してみると、竪穴遺構Bが氷池、溝が運搬通路、竪穴遺構Aが氷室の役割を果たしていた可能性が考えられる。竪穴遺構Bは、粘土貼り遺構の様相を呈している。粘土貼り遺構については、「粘土張り墓坑についての一考察」<sup>5)</sup>(吉原作平 1994)の中で、墓坑や流し溜、水溜などの性格付けがなされている。当遺構には、水を溜めていた痕跡は確認できなかつたが、水を通しにくい粘土を底面に貼っている状況から、水溜、氷池としての機能があったことが考えられる。前出の俵口町氷室跡の発掘調査でも氷池内層序に砂とともに粘土層が確認されている。<sup>6)</sup>竪穴遺構Aは、氷室状遺構の様相を呈している。氷室に関しては、「砂田東遺跡・上横田A遺跡」<sup>7)</sup>(中山晋 1996)の中で構造や機能が提唱されており、当遺構は、覆土の理化学分析は行っていないが、形状や構造、覆土の堆積状況など共通する部分が多い。また、氷室状遺構については、「茨城県の大形竪穴状遺構について」<sup>8)</sup>(成島一也 1997)の中で、「茨城県のような温暖な地域で氷ができるのか」という問題点が指摘されてる。古代の気候と現在の気候の対比は困難であるが、過去 2000 年間における日本付近の平均気温の変化はすでに屋久杉の安定炭素同位体の分析結果により明らかにされており、7~8世紀にかけては現在より 1~2℃ 寒冷期で、8~9世紀にかけては 1~2℃ 温暖期であるとされている。<sup>9)</sup>また、「奈良時代前後における疫病流行の研究」<sup>10)</sup>(董科 2010)の中では、統日本紀における疫病の記録から、奈良時代の気温の上昇による疫病の流行が指摘されており、当時の気温が現在より高かったことがうかがえる。日本書記には、奈良県笠置山地の高地ではあるが、その高温期の中でも氷室が一年を通して機能していたとの記述があり、奈良時代において氷の製造・貯蔵が可能であったことを示している。現在の奈良市の平均

気温は14.6℃で、冬には平均気温が4.6℃になる。常総市大生郷町は年間の平均気温が14.7℃で、温暖な地域はあるが、冬には強い赤城風が吹き、平均気温が2.7℃に下がる。発掘調査時には、保護シート上の水溜まりがよく氷結していた。このことからも、当遺跡でも氷を製造することは可能であったと考えられる。

以上のことから、当遺跡で確認された連結竪穴遺構は、氷製造遺構ではないかと考える。できた氷を素早く、そして労力をかけずに保管するという観点から、製造から保管までの作業を一括化できる連結遺構が築造されたものと考える。

#### 4 おわりに

以上、当遺跡の時代ごとの集落様相と連結竪穴遺構の性格について概要を述べてきた。集落概要は調査区が遺跡全体の一部であること、連結竪穴遺構の性格については類例がほとんどないことから推測の域を脱しない部分が多い。今回の報告が、県西地区における集落研究と連結竪穴遺構の性格研究の一助となれば幸いである。当跡の全容については、今後の調査の進展に期待したい。

(註)

- 1) 茂井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器(1)」『研究ノート』創刊号 茨城県教育財團 1992年7月  
白田正子「中根・金田台特定土地地区面整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 中原道路3」『茨城県教育財團文化財調査報告』第170集  
2001年3月
- 2) 稲田義弘「熊の山道路 烏名・福田坪一体型特定土地地区面整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財團文化財調査報告』  
第190集 2002年3月
- 3) 白田正子他「下平坂熊本台道路 萩城一体型特定土地地区面整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財團文化財調査報告』  
第326集 2009年3月
- 4) 中山晋「水室研究の現状と課題」『研究紀要』第9号 財團法人とちぎ生涯学習文化財团埋蔵文化財センター 2001年3月
- 5) 吉原作平「粘土張り墓坑についての一考察—前田村遺跡の粘土張り遺構を取り上げて—」『研究ノート』第3号 茨城県教育財團 1994年6月
- 6) 生駒市教育委員会「佐口町所在水池跡発掘調査」「生駒市埋蔵文化財調査概報」生駒市文化財調査報告第9集 1989年
- 7) 中山晋「砂田東道路・上横田A道路 一般県道宇都宮環状線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第176集  
1996年3月
- 8) 成島一也「茨城県の大形竪穴状遺構について」『研究ノート』第6号 茨城県教育財團 1997年6月
- 9) 北川浩之「尾久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」「歴史と気候」(吉野正敏・安田喜憲編) 朝倉書店 1995年
- 10) 兼科「奈良時代前後における疫病流行の研究」「東アジア文化交渉研究」第3号 関西大学文化交渉学教育研究拠点 2010年3月

## 付 章

### 宮原前遺跡出土土製品の元素分析結果

茨城県工業技術センター窯業指導所

#### 1 試料

試料は茨城県宮原前遺跡から出土した管状土錘（焼成されたものA、未焼成のものB）2種

#### 2 試験内容

試料を振動ミルで微粉碎し、乾燥機で十分に乾燥した。蛍光X線分析試験は、この微粉末を煅焼（1025°C）した後、ガラスピード法により蛍光X線分析装置を用いて定性分析を行った。X線回折試験は、乾燥した微粉末をX線回折装置により分析を行った。なお、試料Cは試料Bを微粉碎した後、電気炉にて加熱処理（800°C）を行ってから分析に供した。

#### 3 結果

蛍光X線分析試験により検出された元素と含有量の表とX線回折試験の図を示し、特徴を記す。

元素名	化学式	試料名	
		A（焼成）	B（未焼成）
珪素	SiO <sub>2</sub>	57.81	56.15
アルミニウム	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	21.16	21.54
鉄	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	6.58	7.24
チタン	TiO <sub>2</sub>	1.15	1.24
マンガン	MnO	0.04	0.04
カルシウム	CaO	1.36	1.08
マグネシウム	MgO	0.65	0.93
カリウム	K <sub>2</sub> O	2.63	2.15
ナトリウム	Na <sub>2</sub> O	1.45	0.97
リン	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.20	0.05
亜鉛	ZnO	n.d.	0.01
ジルコニア	ZrO <sub>2</sub>	0.03	0.02
ニッケル	NiO	0.01	0.02
銅	CuO	0.02	0.02
コバルト	Co <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.03	0.03
強熱減量	LOI	6.88	8.48
合計	total	100	100

表1 強熱減量を考慮した元素分析結果

強熱減量（LOI）は結晶水や有機物に由来し、1025°Cの煅焼による重量減を表す。したがって、試料Aでは作られた当時高温で焼かれているほど、小さい値を示すはずだが、試料Bと大差がない。試料Aが低温で焼かれた可能性が考えられる。

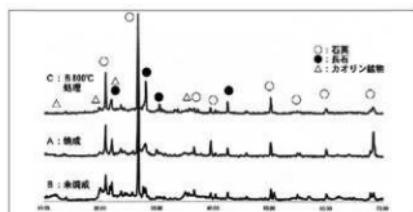


図1 X線回折試験結果

元素名	化学式	試料名	
		A（焼成）	B（未焼成）
珪素	SiO <sub>2</sub>	62.08	61.36
アルミニウム	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	22.72	23.54
鉄	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	7.07	7.91
チタン	TiO <sub>2</sub>	1.24	1.36
マンガン	MnO	0.04	0.04
カルシウム	CaO	1.46	1.18
マグネシウム	MgO	0.69	1.02
カリウム	K <sub>2</sub> O	2.82	2.35
ナトリウム	Na <sub>2</sub> O	1.56	1.06
リン	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.22	0.06
亜鉛	ZnO	n.d.	0.01
ジルコニア	ZrO <sub>2</sub>	0.03	0.02
ニッケル	NiO	0.01	0.02
銅	CuO	0.02	0.02
コバルト	Co <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.03	0.03
強熱減量	LOI	0	0
合計	total	100	100

表2 強熱減量を無視した元素分析結果

X線回折結果からは、主要な構成鉱物は、石英、長石、カオリン鉱物と思われる。横軸の20~23°付近で、試料Bと試料A・Cで若干の違いがある。これは試料Bのカオリン鉱物が結晶水を含んでいるのに対し、試料A・Cが加熱により結晶水を放出し、鉱物変化を起こしていることに由来するものと思われる。

写 真 図 版



宮原前遺跡出土須恵器



第 1 号 住 居 跡  
完 挖 状 況



第 1 号 住 居 跡  
完 挖 状 況



第 2 号 住 居 跡  
遺 物 出 土 状 況

PL. 2



第 2 号 住 居 跡  
完 挖 状 況



第 2 号 住 居 距  
窓 完 挖 状 況



第 3 号 住 居 距  
完 挖 状 況



第3号住居跡  
竪完掘状況



第8号住居跡  
未焼成管状土錘  
出土状況



第8号住居跡  
完掘状況



第8号住居跡  
竪完掘状況



第12号住居跡  
竪完掘状況



第12号住居跡  
竪完掘状況

第13号住居跡  
完掘状況



第15号住居跡  
遺物出土状況



第15号住居跡  
竪完掘状況





第18号住居跡  
完掘状況



第18号住居跡  
竪完掘状況



第21号住居跡  
遺物出土状況

第 21 号 住 居 踪  
完 挖 状 況



第 23 号 住 居 踪  
完 挖 状 況



第 24 号 住 居 踪  
完 挖 状 況





第25号住居跡  
遺物出土状況



第25号住居跡  
完掘状況



第25号住居跡  
竈遺物出土状況



第28号 住居跡  
遺物出土状況



第29号 住居跡  
完掘状況



第1号掘立柱建物跡  
完掘状況



第6号掘立柱建物跡  
完掘状況

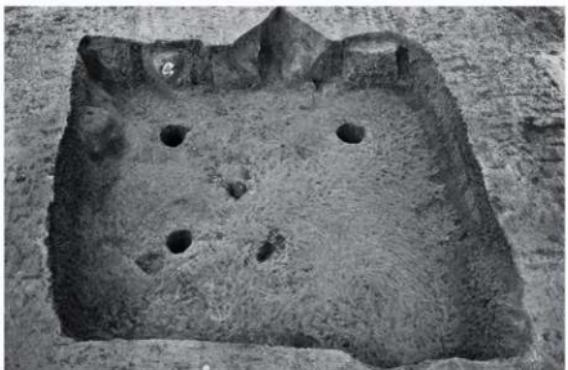


第9号掘立柱建物跡  
第5号溝跡  
完掘状況(東から)



第1号連結竪穴遺構  
完掘状況

第4号住居跡  
完掘状況



第5号住居跡  
遺物出土状況



第5号住居跡  
完掘状況





第5号住居跡  
竪完掘状況



第9号住居跡  
遺物出土状況



第9号住居跡  
完掘状況



第9号住居跡  
完掘状況



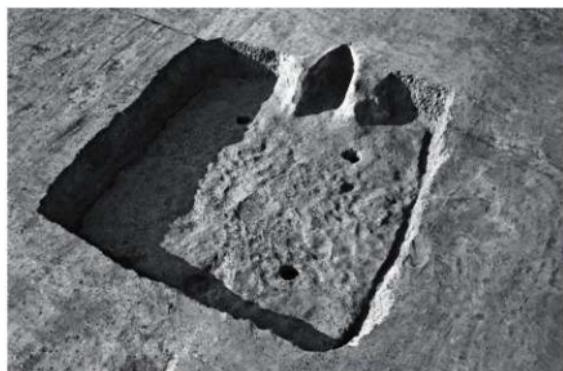
第10号住居跡  
完掘状況



第10号住居跡  
柵状施設  
遺物出土状況



第11号住居跡  
完掘状況



第14号住居跡  
完掘状況



第14号住居跡  
竪完掘状況



第 16 号 住 居 跡  
完 挖 状 況



第 16 号 住 居 跡  
電 完 挖 状 況



第 17 号 住 居 跡  
完 挖 状 況



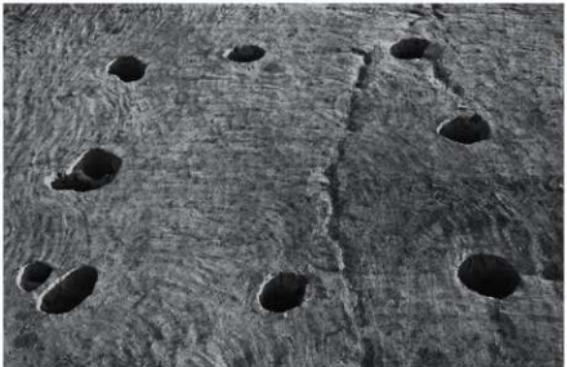
第17号住居跡  
完掘状況



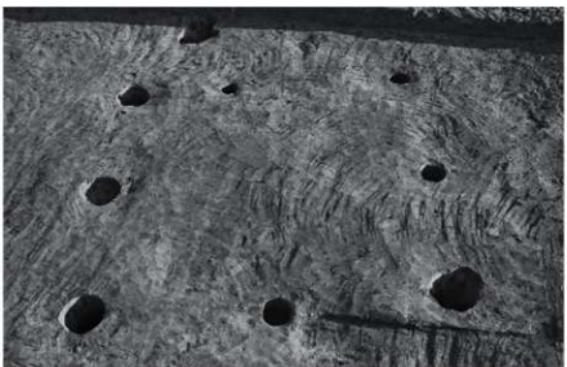
第26号住居跡  
完掘状況



第2号掻立柱建物跡  
完掘状況(北から)



第3号掘立柱建物跡  
完掘状況（北から）



第4号掘立柱建物跡  
完掘状況（北から）



第5号掘立柱建物跡  
完 挖 状 況



第8号掘立柱建物跡  
完掘状況



第1号方形竪穴遺構  
完掘状況(北から)



第4号井戸跡  
完掘状況



SI 1-1



SI 6-12



SI 1-2



SI 6-14



SI 2-5



SI 7-16



SI 2-6



SI 7-17



SI 3-10



SI 7-18

第1·2·3·6·7号住居跡出土遺物

PL 20



SI 7-19



SI 15-31



SI 8-20



SI 18-35



SI 12-21



SI 25-61



SI 12-22



SI 25-62



SI 18-36



SI 23-55

第7·8·12·15·18·23·25号住居跡出土遺物



第2·18·20·21·22·24号住居跡出土遺物



第6・21・23・25号住居跡、第1号掘立柱建物跡出土遺物



SI 4-79



SI 9-89



SI 9-88



SI 9-90



SI 9-91



SI 9-93



SI 9-92



SI 9-94



SI 10-103



SI 10-104

第4·9·10号住居跡出土遺物



SI 16-114



SI 17-119



SI 16-116



SI 26-122



SI 16-117



SI 27-124



SI 10-102



SI 10-105



SI 17-120

第10・16・17・26・27号住居跡出土遺物



SI 5-87



SI 10-107



SI 26-123



SI 16-118

第5·10·16·26号住居跡出土遺物



SI 9-95



SI 9-96



SB9-73



SI 5-82

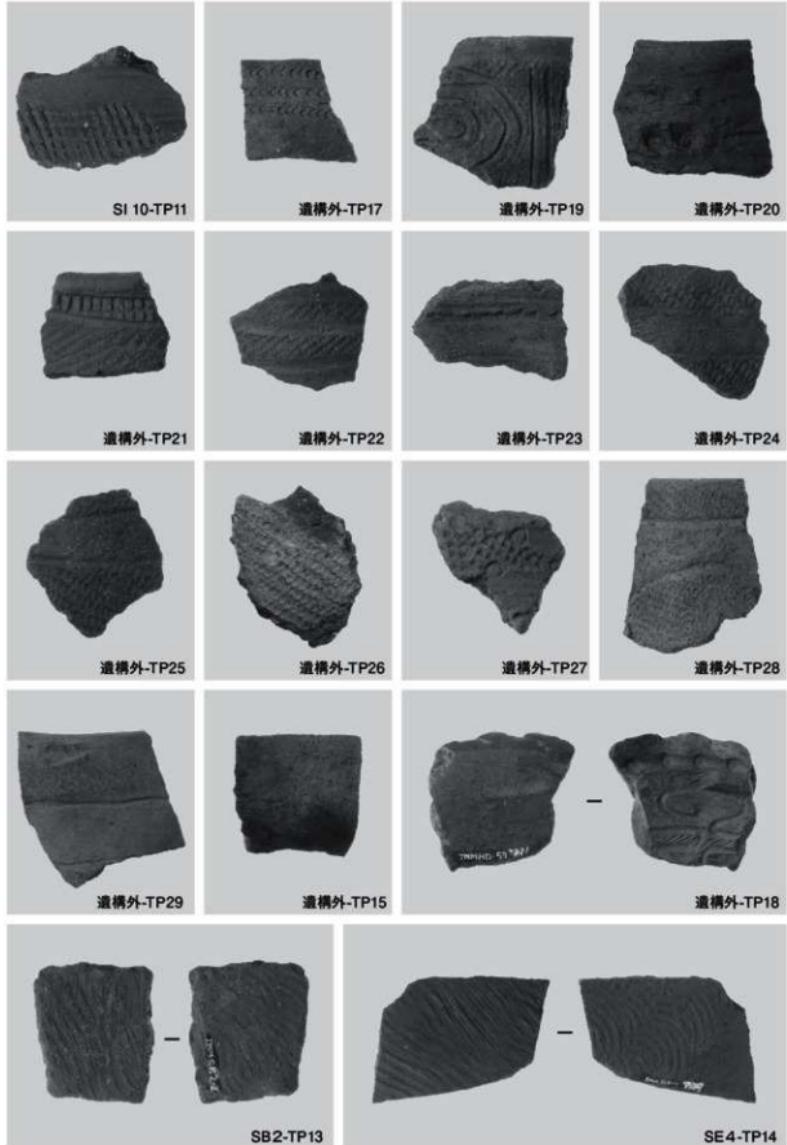


SI 5-86

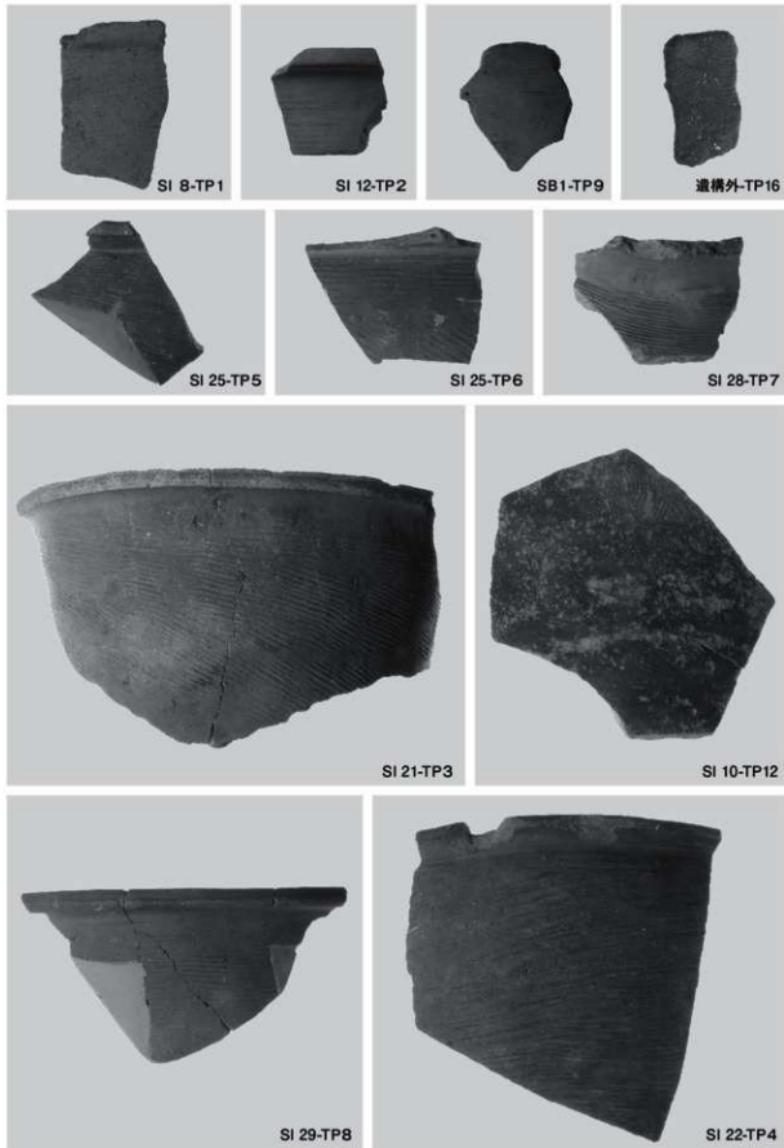


SI 8 管状土錐集合

第5・8・9号住居跡、第9号掘立柱建物跡出土遺物



第10号住居跡、第2号掘立柱建物跡、第4号井戸跡、遺構外出土遺物



第8・10・12・21・22・25・28・29号住居跡、第1号掘立柱建物跡、遺構外出土遺物



第9・21・25・26号住居跡、遺構外出土遺物



第3・12・16・17・27号住居跡、第65号土坑、遺構外出土遺物



第2·6·7·9·12·15·24·27·28号住居跡出土遺物



第3·6·9·12·22·23·24·25·27号住居跡、第1号掘立柱建物跡、第41号土坑、遺構外出土遺物

抄 錄

ふりがな 書名	みやはらまえいせき 宮原前遺跡							
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第335集							
著者名	齋藤和浩							
編集機関	財團法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2011(平成23)年3月23日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
宮原前遺跡	茨城県常総市 天生郷町香取前 5812番地の1ほか	08211 014	36度 4分 23秒	139度 57分 14秒	19 ~ 20m	20090801 ~ 20100131	16,216m <sup>2</sup>	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
宮原前遺跡	集落跡	縄文時代	陥し穴	2基	縄文土器(深鉢)			
		奈良時代	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 連結堅穴遺構 土坑	19軒 3棟 1基 6基	土師器(壺・甕・瓶) 須恵器(壺・高台付壺・双耳壺・盤・鉢・甕・瓶) 土製品(紡錘車・管状土錐) 石器(砥石・紡錘車) 金属製品(刀子・鎌・鑓・鉤)			
		平安時代	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑	10軒 5棟 3基	土師器(壺・甕・瓶) 須恵器(壺・高台付壺・双耳壺・蓋・甕・瓶) 土製品(紡錘車・支脚・管状土錐・土玉) 金属製品(刀子・鎌・鑓・鉤)			
		中世	掘立柱建物跡 方形堅穴遺構 井戸跡 土坑	2棟 1基 1基 1基	土師質土器(小皿) 陶器(碗) 石器(砥石)			
	その他	時期不明	井戸跡 土坑 溝跡 ピット群	3基 45基 12条 5か所	石器(鐵・磨石) 土製品(泥面子) 金属製品(五徳・煙管)			

## 印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows XP  
Professional Version2002ServicePack3  
編集 Adobe Indesign CS4  
図版作成 Adobe Illustrator CS4  
写真調整 Adobe Photoshop CS4  
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000  
図面類 EPSON GT-X750  
使用Font OpenType リュウミンPro・L  
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上  
印 刷 印刷所へは、Adobe Indesign CS4でレイアウトして入稿

### 茨城県教育財團文化財調査報告第335集

#### 宮 原 前 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成23（2011）年 3月17日 印刷

平成23（2011）年 3月23日 発行

発行 財團法人茨城県教育財團  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6387  
H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 山三印刷株式会社  
〒311-4153 水戸市河和田町4433-33  
TEL 029-252-8481